大正二年二月十四日印刷
大正二年二月十七日發行

有朋堂文庫
新古今、新葉和歌集（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

新葉和歌集索引 終

ヨ

ワ

ム

ミ

ナ

テ

ト

ス

このはふりしく（蓬生）　五六七ノ三
このまにふくる　四四七ノ二
このまをいづる　五四九ノ二
このめはるさめ　四〇三ノ一
このわかれぢを　四九一ノ一
このよにとめぬ　六五一ノ三
このよのほかの　六四七ノ二
こはまたいかに　六五四ノ一
こひしさをだに　六四三ノ四
こひしぬとても　五三六ノ四
こひのけぶりは　五一九ノ二
こひのためしは　五一八ノ三
こひをしのびの　五二三ノ一
こほりのしたに　四七五ノ三
こむよまでとは　五三六ノ五
こやによふけて　四三二ノ四
こやのしのやの　五一八ノ四
こよひのよゐの　六〇一ノ四
こよひはさらに　四九五ノ二
こよひやそでを　四三八ノ三
こりさくうめは　六六九ノ五
これぞむかしの（秋）　四五四ノ三
これぞむかしの（跡）　六〇七ノ二
これなむそれと　五三九ノ四
ころさへつきの　四七二ノ三
こをおもふことも　六六〇ノ五
こをおもふみちは　六三四ノ一

サ

さかゆくそのの　六六八ノ三
さかりになれば　四〇五ノ二
さきたるはなの　六一九ノ五
さきてやきみの　五八九ノ二
さくらかざして　五八九ノ四
さくらはしろき　四二〇ノ一
ささぬをつげて　六一六ノ四
さしもくもらぬ　四六六ノ三
さぞなまたれの　五五七ノ三
さそはぬひまも　四一四ノ三
さだかにもみめ　六二二ノ二
さだむとすれど　四九九ノ三
さだめなきよの　六三九ノ三
さてだにありし　五八一ノ四
さてだにくもる　三九六ノ三
さてもいへぢの　四〇七ノ三
さてもむかしの　六四五ノ一
さとのしろべの　五七八ノ六
さとれるひとも　五一六ノ二
さとをもわかず　四五七ノ四
さながらきみに　四八七ノ二
さびしかるべき　六二五ノ二
さびしさたへぬ　六二六ノ四
さむきにつけて　四五八ノ三
さむくひごとに　四六七ノ六
さむればはなの　五一七ノ一
さめてかはらぬ　六三五ノ五
さめぬおもひや　五六四ノ六
さもうかりつる　六〇五ノ一
さやけかるべき　四四六ノ三
さらにおどろく　四八三ノ二
さらにまたたる　四二四ノ二

シ

コ

キ

カ

オ

ウ

イ

をやまだの　五九四ノ一

下句七言

ア

ヲ

ワ

ユ

ヨ

ミ

ヘ

ホ

マ

テ

ト

ナ

チ

ツ

セ

ソ

タ

サ

コ

キ

ウ

新葉和歌集索引（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

井

ヱ

ヲ

新古今和歌集索引　終

ワ

や

フ

ホ

マ

チ

タ

コ

ケ

キ

ク

カ

ウ

イ

下句七言

ア

ヲ

ワ

ヨ

ユ

マ

ミ

テ

チ

ス

ソ

シ

サ

ケ

コ

キ

ク

カ

エ

オ

ウ

イ

新古今和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

被綸言偁。和歌撰集者。源出平城皇都。流至正中聖朝。源流寔繁。修撰世煽而。頃年以來。依有四海風塵之警。久空六義採擇之席。誠是朝庭之缺典。斯道之陵替者歟。爰新葉集衆篇鏤金。毎部飾玉。翡翠之羽毛採而無遺。犀象之牙角抽而必舉。可謂拔萃乎。近代豈特推美出上世乎。叡感之餘所被擬勅撰也者。綸言如此。以此旨可令洩申入。入道中務卿宮給。仍執達如件。

十月十三日

右少辨資茂

謹上　二條少將殿

新葉和歌集終

を御覽じて　　後村上院御製

御祓する八十島かけていましめや浪をさまれる時はみえけり

この御製をうけたまはりて　　從三位國量

君が代のあり數なれやみそぎする八十島ひろき濱のまさごは

題しらず　　後村上院御製

四の海浪もをさまるしるしとて三のたからを身にぞつたふる

九重にいまもますみの鏡こそなほ世をてらすひかりなりけれ

禁中月といふことを　中宮

きみすめば千とせの秋もみかは水くもらぬ月の影やどるなり

みこにおましましける時内裏にて三百首の歌講ぜられけるに寄日祝といふことを　御製

久方の天の岩戸を出でし日やかはらぬかげに世をてらすらむ

前内大臣顯

大空に照る日の本の名もしるし君がみかげはくもらざらなむ

前中納言惟季

住吉の行宮におましましける頃人々いろいろこころばへをつくして風流の破子ども奉りける中に神主國量八十島の祭のかたを作りて奉りける

ひさかたの雲井のどかにてらす日も光を添ふる君が御代かな

同じ年の三月内裏にて風靜見花といふことを講ぜられ侍りける　　民部卿親忠

吹く風ののどかなる世の知られけり花見てくらす雲のうへ人

前左近大將公冬

雲のうへは吹くとも見えぬ春風に花ものどけき色ぞひさしき

前左近中將光實

吹く風もはやをさまりぬことしより千世をかさねよ九重の花

題しらず　　前中納言爲忠

くもりなき露のうてなの月はあれど君がみ影は猶まさりけり

正平廿年內裏三百六十首の歌に題をたまはりて奉りける時秋夜を　　從三位俊文

秋の夜のながき齡に見る月のあきらけき世に逢へるうれしさ

ぜられしとき　前右近大將公冬

千代ふべき花の都にしるべしてみゆきともなへ春のうぐひす

御子におましましける時内裏にて人々題をさぐりて百首の歌つかうまつりける時梅を　御製

いく千代もかはらず匂へ植ゐおきてわが春しらむ庭の梅が枝

正平十一年正月内裏にて梅花久薰といふことを講ぜられける時序奉りて　輿喜左大臣

君がため玉しく庭に植ゐ置きて千代のかざしと匂ふうめが枝

遍照光院入道前太政大臣

春日影のどけき雲のうへなれば梅も千とせの香ににほふなり

冷泉入道前右大臣

いろも香も千世までにほへ百敷やこりさく梅は今さかりなり

前大納言宗房

君がへむ千代をこめてや春來れば御垣の竹もいろのことなる

同十八年正月春竹契久といふことを講ぜられけ

る次に　後村上院御製

九重にたえぬながれをちぎりきてはるもいく世のやどの川竹

今上第二の御子の御乳父の事うけたまはりける

頃百首の歌よみ侍りける中に竹といふことを　前大納言光有

つかへつつ我見はやさむ吳竹のさか行く園の千代のゆくすゑ

太宰帥親王家にて人々題をさぐりて歌よみ侍り

ける中におなじ心を　右近大將長親

この君とわけてぞあふぐ雲井まで生ひのぼるべきそのの吳竹

文中元年正月内裏にて鶯千春友といふことを講

千世をまたかさねてちぎれみゆきして二たびなるる住吉の松

同じ行宮にて太宰帥親王むまれ給ひし頃うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけるに鶴を

權大納言公夏

住吉の松よりすだつ鶴の子の千とせは今日やはじめなるらむ

五百番歌合に

關白左大臣

たまつばきふたたび蔭はあらたまり松は花さく御代の久しき

千首の歌奉りし中に寄椿祝を

中務卿宗良親王

千年までと磨くうてなのたま椿うゑて名だたる宿はこのやど

正平十三年正月内裏にて春竹添色といふ事を講ぜられける時

福恩寺前關白内大臣

よろづよの春をかさぬる九重もわきていろそふ庭のくれたけ

侍りけるに松といふことを　光明臺院入道前關白左大臣

まちにたる君のみゆきにいろそへて老木の松も春やしらまし

同十九年正月内裏にて松有喜色といふことを講ぜられし時　權大納言顯經

君がへむ千とせの春のためしとや二葉の松のみどり添ふらむ

關白家の三百番の歌合に砌下有松といふ事をよめる　右兵衞督成直

この宿の庭にさか行く松が枝はあるじと共によろづよやへむ

祝の歌とてよめる　果尊法親王

たれをかも君よりほかは住吉のまつのよはひを知る人にせむ

正平十五年九月重ねて住吉社に行幸ありて三首の歌講ぜられし時社頭松を　入道前關白左大臣

新葉和歌集　卷第二十

賀　部 歌歎

建德元年正月松契遐年といふ題を講ぜられ侍りし次に

御　製

十かへりの花咲くまでと契るかな我が世の春にあひおひの松

天授七年正月内裏にて春松契久といふ事を講ぜられし時序奉りて

春宮大夫師兼

契りおく今日を千年のはじめにてゆくすゑとほし春のわか松

正平十二年十二月後村上院御方違のため家に行幸侍りける時人々題をさぐりて五十首の歌よみ

よそへつつ思ひやるこそ悲しけれかくやしをれし撫子のはな

かへし　右近大將長親

よそへつつ見ればしをるる我が袖にかけしやさらに撫子の露

世泰親王かくれ給うて如意輪寺にをさめ侍りし
又の年從二位敎子かの寺に籠り侍りけるに夜更
くるままに佛事の聲など松風にたぐひて聞えけ
ればたまはせける　　　　　　　　　御　　　製

松陰をおもひやるこそ悲しけれ千世もといひし君がこころに

御かへし　　　　　　　　　　　　　從　二　位　敎　子

思はずよ松は千年の友ならで絕えぬなげきのかげを見むとは

隆量朝臣身まかりて年へて後高野山に上りて佛
事などしけるついでによみ侍りける　四條贈左大臣

なきをとふ淚の露の玉くしげふたたび濡るるわがたもとかな

右近大將長親いときなき子に後れて侍りし頃し
をれたる撫子につけて遣し侍りし　中務卿宗良親王

などしるしおきたるものを程へて後見せ侍りけるを返し遣すとて顯氏卿の母の許へまをし送りける

遍照光院入道前太政大臣

そのままに忘れむとすれば更にまたなみだもよほす水莖の跡

かへし

左近中將顯氏母

憂きほどはえもかきやらでなかなかに哀や淺きみづぐきの跡

長月の末つ方やまひおもくなりて今は限になりぬるよし申しおこせ侍りし次に

讀人しらず

いかに猶なみだを添へてわけわびむ親にさきだつ道芝のつゆ

かへし

中務卿宗良親王

われこそは荒き風をもふせぎしにひとりや苔の露はらはまし

是を見て次の日の朝つひになくなりにけるとなむ

かの御琵琶のばちに宸筆にて梵字などあそばされてかへさせ給うけるつつみ紙に

後村上院御製

いける世にいかに契りし四の緒のかけ離れてもあられける哉

右近大將長親母

御かへし

思ひきや行末かけし四のをのひきわかれてもあらるべしとは

御醍醐天皇かくれさせ給うて後常にひかせ給ひける御琵琶を御覽じて

新待賢門院

みるままに涙ぞかかる四の緒のゆくすゑ長きねにつたへても

同じ頃かの宸筆のうらに理趣經をかかせ給うておぼしめしつづけさせ給うける

達智門院

いはざりきこの水莖の流れても殘るかたみのあとと見よとは

新待賢門院かくれさせ給うて後御日數の程の事

こととはむ人さへ稀になりにけりわが世の末の程ぞしらるる

妙光寺内大臣一周忌の佛事しける時つかはされける

後村上院御製

世のためもあらましかばと思ふにぞいとど涙の數はそひける

御かへし

右近大將長親母

歎きわびなきをば夢と思ふ身にあらましかばと聞くぞ悲しき

權中納言長賢內よりあづかりおきける夜の鶴といふ御琵琶を身まかりて後返し奉るとて思ひつづけける

雲井までかよはば告げよ夜の鶴のなく音にたぐふ思ありとは

これを聞きて又よみ侍りける

妙光寺內大臣母

ねにたてば我劣らめや夜の鶴の子を思ふことも君ひとりかは

へける　　四條贈左大臣

尋ねきてなきを問ひける水莖のあとさへ苔のしたになりぬる

吉野の行宮におましましける頃御心地例ならざりけるを御風のけなればさだめて早くおこたらせ給はむずらむなど人の申しければ　　後醍醐天皇御製

露の身を草のまくらに置きながら風にはよもと賴むはかなさ

同天皇の御陵にまうで給うてよませ給うける　　新待賢門院

九重のたまのうてなもゆめなれや苔のしたにし君をおもへば

引きつれし百のつかさのひとりだに今はつかへぬ道ぞ悲しき

さびしさもつひのすみかと思ふにはこころぞとまる峯の松風

吉田前内大臣右大辨淸忠など打ちつづき身まかりにける頃おほしめしつづけさせ給うける　　後醍醐天皇御製

いつまでと身を賴めてか聞くたびによその哀と猶おもふらむ

かへし　中務卿宗良親王

いつまでと身を思ふにぞよそに聞く人の哀もかなしかりける

吉田前内大臣身まかりける時頭おろすとてよみ侍りける　源重泰

おくれじと家をば出でぬ同じくは死出の山路も共に越えばや

題しらず　權中納言經高母

空蟬のむなしけぶりの末つひにかくだにとめぬ人の世ぞうき

高野山に上り侍りける時參議成賴が住みける跡など見侍りけるにかの庵室の柱に光俊朝臣が手跡にてふみわくる谷の木の葉のそよ更に見ぬ古の人ぞ戀しきとかきつけて侍りける傍にかきそ

かくて次の日身まかりにけるとなむ

後醍醐天皇かくれさせ給ひける年の冬雪のいたうふりける日によませ給うける　達智門院

いにしへのなみだもかくや呉竹の色かはるまで降れるしら雪

雪ふりける日塔尾の御陵に參りて思ひつづけ侍りける　前大納言光任

思ひきや山路のみ雪ふみ分けてなき跡までもつかふべしとは

題しらず　妙光寺内大臣

哀てふことをあまたに袖ぬれてなきが數そふ世をなげくかな

中院入道一品

なげけとて老の身をこそ殘しけめあるは數々あらずなる世に

法印俊慶身まかりし頃申しおこせ侍りし　四條贈左大臣

この秋の涙をそへてしぐれにし山はいかなるもみぢとか知る

中務卿宗良親王歎く事侍りし神無月の頃常より
もしぐれがちにて物哀に侍りし夕つ方申しおく
り侍りし　　關白左大臣

よそに聞くわれだにほさぬ涙かなおくるる袖は猶やしぐるる

かへし　　中務卿宗良親王

時雨よりなほさだめなく降るものはおくるる親の涙なりけり

下總國に侍りける頃神無月の末つ方病おもくな
りて今はかぎりとおほえけるに思ひつづけ侍り
ける　　文貞公

雲のいろに時雨雪げは見えわかで唯かきくらす今日の空かな

しでの山越えむもしらで都人なほさりともとわれや待つらむ

題しらず　新待賢門院

なき影をさそひて宿れ夜半の月むかしをこふる袖のなみだに

新宣陽門院

むら雲にかくれも果てぬ月見てもまだみぬ影ぞさらに悲しき

千首の歌よませ給うける時懷舊涙を　御製

おもひ出づるむかしの御影かきくもり涙にしづく袖の上の月

後醍醐天皇かくれさせ給ひし頃遠江國伊城にこもりてひまなく侍りしかば參る事もかなはぬよしなど四條贈左大臣の許に申し遣すとて彼の城の紅葉にそへてつかはし侍りし　中務卿宗良親王

思ふにはなほ色あさき紅葉かなそなたの山はいかがしぐるる

かへし　四條贈左大臣

三年までほさぬなみだのふぢごろもこは又いかに染むる袂ぞ

従三位行子身まかりける頃人のとぶらひ侍りければ

遍照光院入道前太政大臣

なき跡のあはれを人の問ふたびに我もなみだの露ぞ落ちそふ

同じ頃彼墓所にまかりて月を見てよみ侍りける

おくり置きし露のありかを來てみれば苔の筵に月ぞやどれる

正平十八年八月十六日莊嚴淨土寺にて御八講などゝ行はれける夜月曇りて侍りければよませ給うける

後村上院御製

秋をへて月やはさのみくもるべき涙かきくるいざよひの空

女の思に侍りける頃月を見てよめる

權中納言經高

なれてみし十とせあまりの秋の月苔の下にもおもひ出づらむ

今日はまたあやめの草に引きかへてうきねぞかかる椎柴の袖

御かへし　　嘉喜門院

思はずよあやめと知らぬ椎柴の袖にうきねのかかるべしとは

新待賢門院かくれさせ給うて後三年まで諒闇の儀にてありけるを御服はてける年の五月五日さうぶにつけて前大納言實爲に給はせける　　後村上院御製

今更にねにこそ立つれ三年まであやめも知らで過ぎし悲しさ

御かへし　　前大納言實爲

菖蒲をもしらで過ぎこし程よりもけふこそ更にねをば添へつれ

妙光寺内大臣身まかりて後三年の服いまだ果さざりけるに又後村上院の素服をたまはりて思ひつづけける　　右近大將長親

四の時ここのかへりになりにけり昨日の夢をおどろかぬまに

後醍醐天皇かくれさせ給うて後御硯の中より葵に二葉かはらぬおなじかざしはなどかかせ給うて入れられたりけるを御覧じて　　新待賢門院

かれつつも二葉かはらぬ草の名をかけ離れぬるわれぞ悲しき

次の年の夏よませ給うける御歌の中に

今年こそいとど待たるれほととぎすしでの山路の事や語ると

金光院入道右大臣身まかりにける頃郭公を聞きてよめる　　妙光寺内大臣母

さらにまたなくねなそへそ時鳥なき人しのぶころのねざめに

後村上院かくれさせ給ひける年の五月五日あやめにつけて奉らせ給うける　　新宣陽門院

みし人のなきが數そふ春を經て花もあだなる世とや知るらむ

二品法親王仁譽

殘なくちるにつけても背かれぬ世のことわりぞ花に知らるる

吉野の行宮にてよませ給うてける御歌の中に

後醍醐天皇御製

あだに散る花をおもひの種としてこの世にとめぬ心なりけり

天授二年三月十一日如意輪寺にて御佛事行はれける時前大僧正賴意の許へ申しつかはし侍りし

中務卿宗良親王

いく春か散りて見すらむつらかりし花もむかしの別ながらにかへし

前大僧正賴意

慕へども見し世の春はうつりきてあだなる花に殘るおもかげ

次の日おのおのまかりあがれ侍りける程懷舊の歌つかうまつりけるをきこしめして

御製

てさならぬ坊舍どももみな煙となりにけれど御陵の花ばかりは昔にかはらず咲きてよろづ哀におぼえ給ひければ一ふさ御文の中にいれて給はせ侍るとて

み吉野は見しにもあらず荒れにけりあだなる花は猶殘れども　中務卿宗良親王

御かへし

今みても思ほゆるかなおくれにし君がみかげや花に添ふらむ

同じ御陵のほとりに櫻を千本植うべきよし思ひ立ちて年々にうゑけるにやうやう花も咲きければよめる　栗田久盛朝臣

植ゑおかば苔の下にもみよしののみゆきの跡を花やのこさむ

寄花無常といへる事を　右近大將長親母

なくを聞きて　中務卿宗良親王

數たらぬなげきになきて我はただ歸りわびたる雁のひとつら

法印俊慶身まかりにける頃前大納言爲定の許より思へただ花咲く春を待ちかねてつらなる枝の枯れしなげきをと申し送りて侍りし返事に

つらなりし枝もあらばと思ひ出でて花咲く春は猶やなげかむ

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見てよませ給うける　新待賢門院

時知らぬなげきの下にいかにしてかはらぬ色に花の咲くらむ

つはもののみだれによりて吉野の行宮をもあらためられて次の年の春塔尾の御陵に詣で給はむとてかの山に登らせ給ひけるに藏王堂をはじめ

おもふ人なしとは聞きつ都鳥いまはなにてふことか問ふべき

住み侍りける寺の梅を後村上院常にめされける
ことを思ひ出でてかくれさせ給うて又の年の春
宣陽門院いまだ一品宮と申しけるにたてまつる
とて　　　　　　　　　　　　後醍醐天皇大納言典侍

春ごとにとはれし君のなさけをば花もさこそは思ひ出づらめ

百首の歌よませ給うける中に春月を　　新宣陽門院

つらかりしやよひの夜半の涙より袖にや月のかすみ初めけむ

信濃國に侍りし頃後村上院まかり上るべきよし
たびたび仰せられしをとにかくにとどこほる事
ありてかくれさせ給うて後吉野の行宮に參りて
又やがてかの國へと思ひ立ち侍りしに歸る雁の

哀傷歌

舊遊零落半歸泉といふことをよみ侍りける　　文貞公

見し人のなかばはかへる泉河おくるるなみもあはれいつまで

後醍醐天皇かくれさせ給ひし頃よみ侍りし　　中務卿宗良親王

おくれじと思ひし道もかひなきはこの世の外の三吉野のやま

前大納言爲定身まかり侍りし頃かの遺跡によみてつかはし侍りし哀傷五十首の歌の中に

別路にありといふなるしでの山越えてかへらぬ旅ぞかなしき

さばかりにつらき渡りを三瀨河かはと見ながらなど歸りこぬ

右大臣家の百首の歌の中に　前中納言實秀

思ひねの夢のただちにかよひきていやはかななる身の昔かな

千首の歌めされし時夢中懷舊　御製

思ひつつぬれば見し世にかへるなり夢路やいつも昔なるらむ

右近大將長親

あはれにぞなき面影もかよひける親のいさめしうたたねの夢

百首の歌の中に　文貞公

夢に夢さても現に見なさばやあるにもあらずうつり行く世を

懷舊の心を　後醍醐天皇御製

物思はで過ぎぬる方の年月はいかにねし夜の夢にかあるらむ

正平十九年三月住吉社に行幸ありて人々百首の歌つかうまつりけるに老後懐舊といふ題を給はりてよみて奉りける

従三位俊文

老いてこそ今おもひではある身なれさても昔のなどや戀しき

往事如夢

前大僧正忠雲

昔思ふうつつやいとど夢ならむ老となり行く身のはかなさに

題しらず

正三位國夏

あやにくに老は寢がたくなりにけり夢路ならでは見えぬ昔を

前大納言光任女

いたづらに過ぎ來しかたは夢なれやうつつに殘る思出もなし

入道前關白左大臣

はかなしな過ぎにしかたの世語を夢と知らでも忍ばるる身は

世語にたれつたふらむ老がみのただ目の前に過ぎしむかしを

下つ總の國におもむき侍りける時栗田口の山莊をすぐとて思ひつづけ侍りける　文貞公

このさとにみゆきせし世の面影ぞけふは涙とともにさきだつ

題しらず　中院入道一品

よしやその折々ごとのおもひでも忘れね今はかかる憂き身に

いかにせむ春のみやまの昔より雲井まで見し世のこひしさを　從三位行義

思ひ出でてなぐさみぬべきいにしへも忍べば老の涙とぞなる　右衞門督維敎

思出とおもはで過ぎしいにしへを忍ぶに今のうさぞ知らるる

二品法親王聖尊

なにとただ袖のみ濡れて忍ぶらむ流るる水のかへり來ぬ世を

後村上院御製

月やあらぬ花やあらぬと歎ききてしのぶ昔ぞ身につもりぬる

懷舊非一といふ事を

わが忍ぶおなじ心の友もがなそのかずかずをいひ出でて見む

延元の頃あづまへ下り侍りし後多くの年月をへて文中三年の冬吉野の行宮に參り侍りしかどもみし世の人もなくよろづ昔思ひ出でらるることのみ多く侍りしに獨懷舊といふことを

中務卿宗良親王

おなじくはともにみし世の人もがな戀しさをだに語り合せむ

千首の歌奉りし時老後懷舊を

いふことをよませ給うける

忘ればや忍ぶも苦しかずかずに思ひ出でてもかへりこぬ世を　上野太守守永親王

懐舊の歌の中に

かくばかり憂きに堪へてもある物をいかで昔を恨みきつらむ　前中納言爲忠

おもひ出づる袖に涙をつつむまでうれしかりしは身の昔かな

昔せし身のあらましのすゑの露かはれば袖のしづくとぞなる

後村上院とりわき御めぐみありし事などしのばしくおもひ出だされさせ給うければよめる　關白左大臣

いまはまた涙になしてつつむかな袖にあまりし君がめぐみを

題しらず　菅原爲基

いかにせむしのぶ昔はかへりこで涙にうかぶ代々のふるごと

れ申されざりしくやしさなど申されて

四の緒の調にそへし松風は聞きしにもあらぬ音にやありける

御かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御製

松に吹く風はむかしの秋ながらなかばの月やおもがはりせし

いかなる時にかありけむ御琵琶をめされけるを

奉らせ給ふとて　　　　　　　　　　　　　　　　　後京極院

おもひやれ塵のみつもる四の緒にはらひもあへずかかる涙を

御かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　後醍醐天皇御製

涙ゆゑなかばの月はくもるともなれて見し世のかげは忘れじ

月前懐舊を　　　　　　　　　　　　　　　　　　後村上院御製

その事とおもはでしもぞ忍ばるる見ぬ世の秋を月やみすらむ

うへのをのこども歌合し侍りける次に思往事と

ち捨てられて年月を送らせ給ひけるに天授三年七月七日内裏にて御遊などありし時御聽聞のため入内ありけるに御樂はてて後御琵琶ばかりにてたびたびすすめ申されしかば小樂どもせうせうひかせ給ひけるに年々の御遊のしきなど只今のやうに思召し出でられて　御製

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの秋おもほゆる嶺の松風

御かへし　嘉喜門院

哀とも君ぞ聞きける今ははや吹き絶えぬべきみねのまつかぜ

次の日夜べのしきなど申されし御返事の次に東大寺の鐘ばかりぞ昔にもかはらぬ心地して思ひいださるる事多う侍りしままに猶しひてものが

初瀬にて世をのがれ侍りし事を後に聞召して内
より其の程の事など仰せられし御返事の次に
中務卿宗良親王

君になど我世はつ瀬の鐘の音のかくなるとだに知せざりけむ

元弘の初つ方世の中みだりがはしく侍りしに思
ひ侘び樣などかへけるよし聞きて瓊子内親王の
許へ申し遣しける
中務卿尊良親王

いかでなほわれも憂世をそむきなむうらやましきは墨染の袖

かへし
瓊子内親王

君は猶そむきな果てそとにかくに定なき世のさだめなければ

題しらず
宣政門院

今ははや水のしらべも忘れにきむすびしままの跡はあれども

嘉喜門院御飾おろさせ給うて後は御琴なども打

すみぞめの袖のなみだのたまたまも思ひ出づるはうき昔かな

祥子内親王

呉竹の憂きふしぶしの積りしぞ世を背くべきはじめなりけり

平惟村朝臣

憂世をば捨てし身なれどかくれがとげに定むべき山蔭ぞなき

世をそむきて後春宮大夫師兼が許へ申しつかはしける

文貞公女

さらに又住みわぶる身を歎くこそ捨てても同じ憂世なりけれ

かへし

春宮大夫師兼

更に又歎くと聞けばかくばかり厭はしき世もすてぞわづらふ

出家の後百首の歌よみ侍りける中に述懐の心を

文貞公

いときなきこの世をかけて捨つる身を獨背くと君や知るらむ

建德二年秋の頃中務卿宗良親王の許へ申し送り侍りし　　式部卿懷良親王

日にそへて遁れむとのみ思ふ身にいとど憂世のこと繁きかな

世をのがれむと思ひ立ちける頃常に居侍りける所のかべに書きつけける　　前大納言信賢

かべの上におふなる草の名を聞くも今いつまでの露の宿りぞ

題しらず　　祥子内親王

山のはになほ入りやらでつれなくもうき世のなかに有明の月

下つ總の國へくだり侍りける道にて三島大明神によみて奉りける歌の中に　　文貞公

契ありて今日はみしまのみたらしにうき影うつす墨染のそで

題しらず　　宣政門院

源　重泰

老となる身をばなげかで行末のあらましをのみ急ぐはかなさ

前參議長資

とにかくに我があらましの變るこそ世の憂き時の心なりけれ

住吉社の三百六十番歌合に雜地儀を　中務卿宗良親王

道しらぬは山しげ山さはるともなほあらましの末はとほさむ

千首の歌奉りし時寄海述懐

いせの海に沈まば沈め身の果よつりのうけなるさまも恨めし

題しらず　大中臣清胤

厭はでもさてややみなむ世のなかの憂き理をおもひ知らずば

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　前大納言宗房

世々をへし我家の名の惜しければ惜しからぬ身を捨てぞかねぬる

中宮

かねてより知られぬものの悲しきはあるにまかする行末の空

五百番歌合に　御製

今こそあれすむべき代々のみやこ鳥わが行末の事や問はまし

題しらず　世泰親王家右京大夫

行末のあらましにのみなぐさめて今の憂世にいとはでぞふる

紀俊長

さてもわが身の思出になにをしていまゆくするの人に語らむ

新宣陽門院

あらましの心のままに見る夢の覺めて變らぬうつつともがな

從三位朝棟

いつまでと思へば身をもなげかぬになにと涙の老をしるらむ

題しらず　権大納言公夏

なには江や蘆間の浪のよるの鶴子を思ふ道はさはらずもがな

　前中納言氏定

さのみなど思ひ知らでは過すらむ憂きは我身に限りける世を

老後述懐を　従三位國量

憂き事にさらでももろきわが涙みづはぐむ身と袖ぬらしつつ

題しらず　前中納言爲忠

玉ゆらも世におき難き白露の消えなば消えねひかりなき身を

　福恩寺前關白内大臣

よしさらばとてもかくても住まれけり憂きに任せて世をば過さむ

　前内大臣隆

よしあしを思ひしらぬぞこの頃のうきに堪へたる心なりける

正平八年内裏千首の歌の中に寄河述懐を　　前中納言爲忠

憂き瀬には沈みもはてじ吉野川よしや世の中なげかざらなむ

同二十年内裏七百首の歌に題を給はりてよみて

奉りけるとき寄筏述懐を　　紀　種　文

河浪のたかきにのぼるみちならでくだす筏もやすからぬ身を

題しらず　　法　印　實　源

よしの川くだす筏のつなで繩ひくひとなしに身をなげきつつ

二品法親王聖尊

飛鳥川淵瀬にはあらぬ世の中のかはるはやすき昨日けふかな

望む事とどこほり侍りける頃よみ侍りける歌の

中に　　右兵衞督成直

此の儘に沈みはてなば水無瀬川ありてかひなき名をや流さむ

百首の歌の中に　入道前右大臣

いかにして伊勢の濱荻吹くかぜの治りにきと四方に知らせむ

建武二年うへのをのこども題を探りて千首の歌つかうまつりける次に　後醍醐天皇御製

身にかへておもふとだにも知らせばや民の心の治めがたさを

正平八年うへのをのこども題をさぐりて千首の歌よみ侍りける次に寄日述懐をよませ給うける　後村上院御製

曇らじと思ふこころよおなじくははや日のもとの光ともなれ

千首の歌めされし時おなじ心を　御製

いかにせむしぐれてわたる冬の日の短きこころ曇りやすさを

寄江述懐

住みやらぬ世のことわりを思ふにも猶濁江のみづからぞ憂き

日に三たび愚なる身をかへりみてつかふる道も我が君のため

正平八年内裏千首の歌の中に寄山述懐を　　前中納言爲忠

きみが代にあへばぞこゆるつかふべき道や位の山路なるらむ

文貞公の例とて三位中將にて左大辨を兼し侍りける除書を見てよめる　　右近大將長親

親の親のためしを見つるわが身かな君の君なる世に仕ふとて

内大臣に任じ侍りける頃内裏にて人々題をさぐりて百番歌合し侍りける時山といふことをよめる　　前内大臣顯

身にあまる御代のひかりに位山くるしかるべき峯は越えにき

關白家の三百番歌合に筆寫人心といへることを

おろかなる程やしられむ水莖の跡をこころのしるべとも見ば

よしつはものどもにめし仰せ侍りしついでに思ひつづけ侍りし

君のため世の爲なにか惜しからむ捨ててかひある命なりせば

正平二十年内裏の三百六十首の中に寄弓述懐　前内大臣隆

きみが爲わがとりきつる梓弓もとのみやこにかへさざらめや

寄車述懐　妙光寺内大臣

今はとて車をかけむよはひまでつかふる道にまよはずもがな

同年内裏七百首の歌の中に寄衣述懐　前大納言光任

命あれば衣をたれしいにしへに立ちかへりてぞ又つかへける

年中行事三百六十首の歌の定考を　前大納言實爲

仕へてしこその日數のそのままに品をさだむる道ぞかしこき

題しらず　入道前右大臣

花鳥のすさびならでは何をして老いぬる身とか人にかたらむ　　従三位俊文

ひきそめしこころのままに梓弓おもひかへさで年も經にけり　　源頼武朝臣

みちの國にすみける頃百首の歌よみ侍りける中に　　前大納言守親王

陸奥のあだちの眞弓取りそめしその世につかぬ名を歎きつつ

あづまの方に久しく侍りてひたすらもののふの道にのみたづさはりつつ征東將軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうに覺えてよみ侍りし　　中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむものとは

同じ頃武藏國へうちこえてこてさし原といふ所におりゐて手分などし侍りし時いさみあるべき

新葉和歌集　卷第十八

雜歌下

題しらず　　中院入道一品

山深く結ぶいほりも荒れぬべし身の憂きよりは世を歎くまに

よみびとしらず

かひなしな人に知られぬ塵の身の山とし高くつもるよはひは

妙光寺内大臣

あはれなり我がもとゆひにおく霜の振分髮はきのふと思ふに

從三位行義

黑髮の霜となるまで長らへて世にありつつもあるかひぞなき

淋しさも聞きなれなばとなぐさめて思ひも入れめ松風のこゑ

元弘元年北長尾の山庄に籠り居侍りけるを世のみだれによりてかしこをも又立ち出でて後よみ侍りける歌の中に

文貞公

いほ結ぶ山の下柴をりをりのあらましに似ぬ身のゆくへかな
思ひかね入りにし山を立ち出でてまよふうき世もただ君の爲

題しらず

よみびとしらず

山深み暫時もかくてありぬやと心みがてらの月日をぞ經る
世のうきに堪へぬ心のままならばなほ山里も住みやうかれむ
住みなれて人目を旅とおもふだにさびしさたへぬ松の風かな

前大僧正忠雲

さびしとて又はなにとかいとふべき尋ねし山の春のあらしを

山家風をよませ給うける

御製

正平八年内裏千首の歌の中に　前右近大將公冬

立ちまじる友をもなにかまつの霧竹のけぶりの山かげのいほ

題しらず　祥子内親王

たち上るけぶりの末をよそに見ばさびしかるべき柴の庵かな

津守國貴

のがれてもまた世は經なむみ山邊の嵐に庵の荒れまくも惜し

紀淑俊

山里はいはねのまくら苔むしろかたしく袖のかわくまもなし

二品法親王源勝

いくとせをかさね來ぬらむ山深み苔のころものあるに任せて

吉野の奥なる山ざとに住み侍りける頃よみける　前參議持房

三芳野の山の彼方のあらましもかかる憂世はかひなかりけり

宮のあたりを過ぎ侍りけるがものにかきつけけるとぞ

百首の歌よませ給うける中に　後村上院御製

つかふべき人やのこると山深み松の戸ざしもなほぞたづねむ

住む人のあるとは餘所に知られつつ煙ぞなびくをちの山もと

題しらず　新宣陽門院

このままにうき世へだてよ山里のふかきとたのむにはの吳竹

右近大將長親母

數ならぬ身をおく山のうもれ水すむもすまぬも知る人ぞなき

述懐の歌の中に　二品法親王聖尊

世を捨つる山より山のおくなくば厭ふ憂身をなにかくさむ

百首の歌よみ侍りける中に　果尊法親王

よの中をそむくとならばうきことの絶えて聞えぬ山里もがな

を今はまして作者に加はるべきにてもあらぬ事
など思ひつづけておなじく書きそへ侍りし

いかなれば身はしもならぬ言の葉の埋もれてのみ聞えざるらむ

家に三百番歌合し侍りける時深山幽居といふ題
をとりて山ふかくすみなれぬ事など思ひつづけ
てよめる

關白左大臣

いとはねどとてもみ山のおくの庵心ひとつをかへて住まばや

天野の行宮にてよみ侍りける歌の中に

前中納言爲忠

君すめば嶺にもをにも家居して深山ながらのみやこなりけり

世に出でばひかりそふべき月影のまだ山ふかき雲のうへかな

これやこの木丸殿と思へども名のらで行けば知るひともなし

この二首の歌は天授六年秋の比修行しける僧のさき山の行

題しらず　前大納言光任

敷島のやまとこと葉の花なくば老のこころをなににそめまし

元弘二年の春中務卿尊良親王もとより歌よみておくりて侍りける返事に　文貞公

かきくらす涙のひまのあらばこそさだかにも見め君が言の葉

前大納言爲定のもとへ千首の歌よみて遣し侍りし時贈従三位爲子の事などおもひ出でて申しつかはし侍りし　中務卿宗良親王

散り果てし柞の杜の名殘とも知らるばかりのことの葉もがな

續後拾遺集撰ばれし時は名字につきていささか子細ありて作者にもれ侍りしを世の中あらたまりて後風雅集などとて撰集の事あるよし聞えし

述懐の歌の中に　　坂上頼澄

なにごとを思ふとはなき老が身のこころにかかるわかの浦浪

五百番歌合に　　右兵衛督成直

和歌の浦の玉を磨ける人なみに藻屑ばかりをかきや置くべき

中務卿宗良親王人々にすすめてよませ侍りし住吉社の三百六十番歌合に雑儀をよめる　　權中納言實興

わかの浦やかかるしるべを待ち見ても及ばぬ浪にぬるる袖哉

百首の歌よませ給うて前大納言爲定のもとへつかはされける中に　　後村上院御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦に磨ける玉を拾ふ世もがな

愚なることばの花もむかしより吹きつたへたる風にまかせむ

すなほなる昔にかへれたねとなる人のこころのやまと言の葉

人の心ばえなどつくりて出されたりけるを左大
臣の許へつかはさるべきよしさたありければま
かでざまに女房の中へ申し侍りける　妙光寺内大臣
こと浦にその舟寄すなさくら人あかぬ色をば明日かへりみむ
磯舟を
よひのまは磯の浪分けこぐ舟の沖に出でたるあまのいさり火
題しらず　従三位俊文
代々の跡に名をのみつりてかひなきは寄邊も知らぬ和歌の浦船
祭主隆昌
いにしへの跡を殘さばことの葉を吹きもつたへよ和歌の浦風
中原重綱
玉ひろふ數にもれなば老の浪あはれかひなき名をやながさむ

前中納言爲忠

住吉のおまへのおきのしほあひにうかび出でたる淡路島やま

名に高き難波の浪の立ちかへりいくたびみつと人にかたらむ

權中納言經高母

行きて見しむかしは遠きみちのくも思ひいづればちかの鹽竈

住吉社の三百六十番歌合に雜地儀

土御門入道前右大臣

松島やをしまの浪にこと問はむ立ちかへるべき時もありやと

百首の御歌の中に

後村上院御製

磯の浪よせてかへれば岩ほにも咲きたる花の散るかとぞ見る

後村上院住吉の行宮におましましける時御あそびなどありて上達部殿上人におほみき給はせ侍りしに新宣陽門院いまだ一品宮と申しけるが櫻

ゆふしほや磯山かけて滿ちぬらむ浪間にみゆる松のむらだち

眺望の心をよめる　坂上賴澄

和田の原入日も見えず暮れはててとよはたぐもにかかる白浪

前左近中將顯氏母

わたのはら雲と浪とのへだてにはほのかに見ゆる淡路しま山

正平二十年十二月うへのをのこども題をさぐりて七百首の歌つかうまつりける時名所島を　後村上院御製

こころあてにそこと著し淡路島まだ見ぬ人は雲かとやみむ

眺望春といふことを

朝日かげさすがなみまにあらはれて霞めばきゆる淡路島やま

題しらず　前大納言宗房

よひのまや雲のいづくにあり明の月にぞ見ゆるあはぢしま山

神さぶるいよの湯桁のそれならでわが老らくも數ぞ知られぬ　冷泉入道前右大臣

題しらず

いのちあれば三代につかふる名もとまつ六十の今の關の藤川

五百番歌合に　民部卿光資

つかへ來ておこたらぬ身の名をだにも後までとめよ關の藤川

題しらず　後村上院御製

龜の尾のたきの白絲いく代へて末まですめるながれなるらむ

千首の歌奉りし時山眺望を　中務卿宗良親王

信濃路や見つつわがこし淺間山雲はけぶりのよそめなりけり

海眺望

いほざきや松原しづむなみまより山は富士のね雲もかからず

住吉社の三百六十番歌合に　前大僧正賴意

名所山といふことよませ給うける　　後村上院御製

年ふれば思ひぞ出づるよしの山まだふるさとの名や殘るらむ

百首の歌よませ給うける中に

我代にはささぬ關路と思はばやあけよと告げて鳥はなくとも　　冷泉入道前右大臣

關鷄をよめる

をさまれる世に逢坂の關の戸は明けながらこそ鳥も鳴きけれ　　權大納言公夏

わが君の世にあふ坂の關の戸はささぬを告げて鳥や鳴くらむ　　右近大將長親母

住吉社の三百六十番歌合に雜地儀といふを人にかはりてよめる

いそがれぬ五十(いそぢ)の坂も越えにけりおいはなこその關守もがな　　前大納言季繼

名所の歌よみ侍りける中に伊豫の湯を

題しらず　　新待賢門院

呉竹のいくよもあらじもの故に身の憂きふしは歎かずもがな

入道前右大臣

憂節（うきふし）のなきにはあらず呉竹の世をばさすがに捨てぬばかりぞ

中務卿尊良親王

うちなびく窓の呉竹とにかくに世の憂きふしのしげき頃かな

山人のとるや杣木のかくばかり苦しき世にもひくこころかな

家に七百首の歌よみけるとき隱士出山といふことを　　妙光寺内大臣

はなを待つ春のみやこに出でにけり入りにし月の商（あき）の山びと

五百番歌合に　　二品法親王仁譽

三吉野の山の奥には入りぬればなほ世を祈る名をばのがれず

し奏し侍りけるほど松風涼しく吹きければ思ひつゞける　前大僧正賴意

植ゑおきし昔やかねてちぎりけむ今日のみゆきをまつ風の聲

題しらず　中務卿宗良親王家京極

植ゑ置きし二葉の松の深みどり木高かるべきかげぞ待たるる

妙光寺内大臣の家に百首の歌よみ侍りけるとき窗前栽竹といふことをよみて遣しける　前大納言實爲

すなほなるその一ふしもならふやと植ゑてや見まし窓の吳竹

うへのをのこども題をさぐりて百番の歌合し侍りしに宗良親王判者つかうまつるべきよし仰せられし時竹といふ題にてよませ給うける　御製

かきすつる言の葉なれど吳竹のそのふの風にまかせてぞ見る

せ給うける　　　　　　　　　　　　　後村上院御製

言の葉も及ばぬ松の木蔭かなうべもこころある神やうゑけむ

同じ時人々題を探りて百首の歌つかうまつりける

中に名所松といふことをよみ侍りける　前大納言光任

ふりにたる姿とのみやすみの江の老木の松もわれを見るらむ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　津守國久

すみのえの峰にふりぬる松みればすぎし昔も目にちかきかな

　　　　　　　　　　　　　　　　　　權中納言經高

住吉のきしなる草にならはずば松もみし世やおもひ出づらむ

元弘三年六月後醍醐天皇隱岐國より還幸の次に

勅願によりてまづ東寺へ行幸ありける時松子坊

にてこの松の事など御たづねありければ事のよ

中務卿尊良親王

さらでだに涙こぼるる夕暮にねなうちそへそいりあひのかね

民部卿光資

薄暮松風といふことをよみ侍りける

松の葉のいつともわかぬ風のおともげに淋しきは夕なりけり

中務卿宗良親王

百首の歌よみ侍りし中に

いざとだにいふ人なくて數ならぬみつの小島の松はふりにき

正平二十四年の春吉野の行宮におましましける

を年月をへて後又彼山に行幸ありける頃名所松

といふ事をよませ給うける

中宮

契あればまたみ吉野のみねの松まつらむとだに思はざりしを

住吉社のかんたちに行幸ありて浦のかた御覽ぜ

られけるに松の姿などたぐひなかりければよま

世をのがれて後百首の歌よみ侍りける時曉を　文貞公

いまよりは佛の道にいそぐかなつかへ馴れにし鳥のはつ音を

夕を

いにしへはいかが聞きみし身をせむる入相の鐘の夕暮のそら

題しらず　右近大將長親母

何ならぬ草木の色もあはれなりおもひある身の夕ぐれのそら

吉野に侍りける頃その寺のならひにて安居中には未だ晝よりいりあひをつきけるを聞きてよめる　よみ人しらず

日は暮れぬと思ふならひの山陰はげに急ぎけりいりあひの鐘

題しらず　左大辨時長

泊瀬やま檜原吹きしく風の音にたぐひてひびくいりあひの鐘

新葉和歌集　卷第十七

雜歌中

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に曉を　中務卿尊良親王

鳥の音の驚かさずばよとともに思ふさまなるゆめも見てまし

題しらず　後村上院御製

とりのねに驚かされてあかつきの寐覺しづかに世を思ふかな

前大納言宗房

いつよりか驚ろかされし鳥の音をねざめの床に待ちて聞くらむ

五百番歌合に　二品法親王仁譽

怠らぬあかつきおきの身になれて鳥の初音は待つとしもなし

神樂の心をよめる　右衛門督維数

代々をへて仕へし道の跡しあらばしるべともなれ其駒のこゑ

暦術などならひつたへ侍りける時見行草の第四段の進退といふ所にてよみ侍りける　前内大臣顯

年浪の進みしりぞく事もあらじながるる月日みちしかへずば

むべしこそ雪も深けれなべて世のうれへの雲の空にみちつつ

歎く事侍りける頃山里に住み侍りけるに雪の降りける日思ひつづけける　妙光寺内大臣母

跡をだに世にとどめじと思ふ身の雪には人のなど待たるらむ

題しらず　後村上院御製

わが末の代々にわするなあしがらやはこねの雪を分けし心は

正平二十年内裏四季の歌合に　前大納言光任

君が代にひとりふり行くわが身かな集めし雪の跡はなけれど

寄雪述懐といふ心を　右近大將長親

代々の跡とおもふばかりに集めきてわれも年ふるまどの白雪

兵部卿親王家の百首の歌に同じ心を　民部卿光資

あつめよと教へし人はむかしにていたづらにふる庭のしら雪

しのばるる昔のわかの浦千鳥あとはかはらぬ音をも聞くかな

冬の歌の中に　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權中納言經高母

思ひ出でてたれか形見の濱千鳥これぞむかしの跡とだにみむ

花山院贈太政大臣百首の歌よみて送りたりける

返事に　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中務卿尊良親王

戀しさもいかにせよとて和歌の浦に馴れし千鳥の跡をみすらむ

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　文貞公

君だにも戀ふなる和歌の友千鳥いかに音をなく恨みとか知る

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　後醍醐天皇御製

うづもるる身をば歎かずなべて世の曇るぞつらきけさの初雪

待ちなれし跡はよそなる山のおくに身もうづもるる庭の白雪

文貞公

夜な夜なのなぐさめなりし月だにも待ちどほになる夕暮の空

寒庭霜といへる心をよみ侍りける　遍照光院入道前太政大臣

庭は荒れてあだなる草の戸ざし哉よなよな霜の結ぶばかりは

題しらず　冷泉入道前右大臣

年をへていただく霜の蓬生にかげすさまじく更くるつきかな

中務卿尊良親王

住みなれぬいたやの軒のひまもりて霜夜の月の影ぞさむけき

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に冬月

わが庵はとさの山風さゆる夜にのきもる月もかげこほるなり

百首の中に　文貞公

夢ならでまたやは見むとかなしきは豐のあかりの夜半の月影

正平十八年内裏千首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

吉田前内大臣

暮れて行くけふの名殘も惜まれずさもうかりつる秋ぞと思へば

紀淑俊

あさぢふの露の名殘もまだひぬにはや置きそふる庭のはつ霜

百首の歌の中に谷落葉を

中務卿尊良親王

谷蔭につもる木の葉のそれならでわが身くちぬと歎く頃かな

正平二十年内裏七百首の歌に杜時雨

妙光寺内大臣

かしは木のもりの梢の夕時雨身をいたづらにふるさずもがな

元弘元年百首の歌よみ侍りける中に

中務卿尊良親王

世の憂さを空にもしるや神無月ことわり過ぎて降る時雨かな

題しらず

後醍醐天皇御製

まだ馴れぬ板屋ののきの村時雨おとを聞くにもぬるる袖かな

いにしへは露わけわびし蟲のねを尋ねぬ草のまくらにぞ聞く

題しらず　前大納言定平

あはれなり八十(やそぢ)あまりのおいが身に涙をそへてよわる蟲の音

年中行事百首の御歌の中に御燈を　後村上院御製

長月やけふみか月も光そへてほしにたむくる夜半のともしび

題しらず　平惟材朝臣

物ごとの秋のあはれぞまさりける老のいのちのながき月のそら

思の外なる所に侍りける時從三位師子いたう思ひ歎くよしを聞きてよめる　文貞公

かげよわる柞の紅葉いかならむ木のした道のあれ果てしより

題しらず　後醍醐天皇御製

秋ごとのならひと思ひし露時雨ことしは袖の上にぞありける

忘られぬ雲井の秋のむかしまでおもかげさそふ夜半の月かな

題しらず　　　中務卿尊良親王

めぐりあひておなじ雲井に眺めばやあかでわかれし九重の月

百首の歌よみ侍りける中に月を　　　右近大將長親母

世にすめばさらぬ別のあさあけにいよいよ惜しき月の影かな

元弘元年八月俄に比叡の山に行幸なりぬとて後

山にのぼりたりけるに湖上の有明ことに面白く

侍りければ　　　文貞公

思ふことなくてぞ見ましほのぼのと有明の月の志賀のうら波

おなじ頃のことにやありけむある野原の中にて

夜をあかしけるに秋の末つ方なれば蟲の聲々き

ほひなく聞きて思ひつづけ侍りける

入道前關白左大臣

住みわぶる世はうぢ川の網代木にいさよふ月も影更けにけり

中務卿尊良親王

かくばかり世はうぢ川の早き瀨に暫しも月のいかで住むらむ

身はかくて沈みはつとも和歌の浦に名をだに照せ秋の夜の月

前中納言爲忠

五百番歌合に

和歌の浦や松の木のまの夜半の月心つくさで身をてらさばや

入道前關白左大臣

やどるとて月は知るらむわがそでに昔を忍ぶなみだありとは

正平二十年內裏四季の歌合に

前左近大將公冬

ありしにもあらぬうき身の秋の空面がはりして月や見るらむ

春宮にて人々五十番歌合し侍りける時

權中納言經高母

秋の田のほさかの駒を引きつれて治れる代のかひもあるかな

信濃國に住み侍りし頃駒迎の心を　中務卿宗良親王

みやこへと急ぐを聞けば秋をへて雲井に待ちしもちづきの駒

嘉喜門院女御と申しける頃八月十五夜家に十五番歌合し侍りける時禁中月といふことをよみ侍りける　福恩寺前關白内大臣

おなじくは秋の宮居に澄みのほるひかりをそへよ雲の上の月

護持僧に加はりて後八月十五夜月を見てよみ侍りける　二品法親王仁譽

わが名をも君の光にあらはしてこよひの夜居の月ぞさやけき

題しらず　遍照光院入道前太政大臣

おほかたの月だに空に曇らずば我が身の秋よさもあらばあれ

松間月を　二品法親王源勝

松かげをたよりにすめる山人はいつも木の間の月や見るらむ

山家月をよめる　光明臺院入道關白左大臣

山かげに庵をなにかむすびけむ月待つよひは住みうきものを

題しらず　治部卿經方

ひとりすむ深山がくれの柴の庵に秋をかさねてみつる月かな

簷月をよみ侍りける　右近大將長親母

影しあればさながら袖に亂れけり月もる軒のしのぶもぢずり

年中行事三百六十首の歌の中に釋奠を　妙光寺内大臣

から人のむかしの影をうつしきてあふげば高きあきの夜の月

同じき百首の御歌の中に牽穗坂御馬といふことをよませ給うける　後村上院御製

集めねどねぬ夜の窓に飛ぶ螢こころをてらすひかりともがな

夏雜物といふことをよめる　　從三位行子

ともしびのかげは殘りてあくる夜の窓に消ゆるは螢なりけり

土佐國にて百首の歌よみ侍りけるに杜蟬を　　中務卿尊良親王

せめてげに杜の空蟬もろ聲に鳴きてもかひのある世なりせば

下總の國にて七夕七首の歌よみ侍りける中に　　文　貞　公

そむく身は梶の七葉も書き絶えてけふ手に取らぬ草の上の露

棚機にけふこそひとりかこつらめはねをならべしふるき契を

萩移袖といふことを　　二品法親王仁譽

秋はぎのはなにはすらじ墨染のいまひとしほと思ふたもとを

秋の歌の中に　　京極贈左大臣

うれへある老のたもとの露けさはむかしにまさる秋の夕ぐれ

中務卿宗良親王

老いらくの道はほかにもあるものをうたて門さす八重葎かな

年中行事百首の歌の中に獻醴酒といふことをよませ給うける　後村上院御製

いかにして一夜ばかりの竹の葉にみきといふ名を殘しそめけむ

夏夜といふことを　御製

ひところに明くる夜ならば曉のゆふつけ鳥はいかが鳴くらむ

五百番歌合に

集めては國の光となりやせむ我がまどてらす夜半のほたるは

關白家の三百番歌合に螢過窓といふことを　前内大臣顯

あつめしも今は昔のわが窓をなほ過ぎがてに飛ぶほたるかな

さまかへて後螢を見てよめる　祥子内親王

御かへし　妙光寺内大臣

橘のかげ踏むけふのあやめ草ながきためしのめぐみをぞ知る

芳野の行宮にて五月雨晴間なかりける頃雨師の社へ止雨の奉幣使など奉られける頃おぼしめしつゞけさせ給うける　後醍醐天皇御製

この里は丹生の川上ほどちかしいのらば晴れよさみだれの空

百首の歌の中に五月雨を　中務卿尊良親王

さらば身のうきせもかはれ飛鳥川なみだくははる五月雨の頃

正平二十年内裏七百首の歌の中に舟中五月雨を　妙光寺内大臣

日かずふるみつの泊のさみだれに月まち戀ひてあかすふな人

夏の歌の中に　冷泉入道前右大臣

夏草のことしげかりしさがの山おもひぞ出づる千代のふる道

中務卿宗良親王世をのがれて後信濃國に侍りし
頃たまはせ侍りし　御製

郭公そなたの空に通ふならばやよや待てとてことづてましを

御かへし　中務卿宗良親王

いまさらに鳴きても告ぐる時鳥われ世の中をそむく身なれば

百首の歌よみ侍りける中に　冷泉入道前右大臣

つひにわが袖ふれざりしたちばなの木ずゑをならす郭公かな

題しらず　從三位俊文

君が代にわが身ふるえのあやめ草老の浪にぞながきねを引く

妙光寺内大臣右大將に侍りける時五月五日さう
ぶの根につけて給せける　後村上院御製

袖ふるる花たちばなの折をえてかざすあやめは長きためしぞ

百首の歌の中に卯花似月　中務卿宗良親王

よしさらば月とみつるになぐさめむ世は卯の花の籬なりとも

題しらず　後醍醐天皇御製

年をへて哀とぞ見るもろかづら二葉かはらぬおなじかざしは

ひきかけし契かはらであふひ草おなじかざしの末ぞはるけき　二品法親王聖尊

郭公われにかたらへみやこ出でていまだ旅なる友ときくまで　中院入道一品

わすれずばいざかたらはむ時鳥雲井になれし代々のむかしを

古き歌のことばをとりてよみ侍りける歌の中に

いざこととはむといふことを　前中納言爲忠

郭公いざこと問はむ世のうきめ見えぬ山路をなどか出でしと

春の歌の中に　中院入道一品

小山田の苗代みづのひきひきに人のこころのにごる世ぞうき

をとこ山むかしのみゆき思ふにもかざしし花の春ぞわすれぬ

百首の歌よみ侍りける中に山吹を　妙光寺内大臣家中納言

山吹の花もてはやす人もなしあがたの井戸はみやこならねば

題しらず　祥子内親王

ほどもなき月日をそへて歎くかなくれ行く春の暮ふのみかは

元弘二年春百首の歌よみ侍りける中にくるる春

の心を　文貞公

惜みこし春にや今年したはれむ彌生のすゑも待たぬ身ならば

千首の歌奉りし時惜更衣といへることを　中務卿宗良親王

かへすとも人なとがめそおきなさび今年ばかりの花ぞめの袖

望む事侍りける頃雲雀をよめる　源頼武朝臣

道知らばわれにをしへよ夕雲雀やすくもあがる雲のうへかな

春月の心を　權大納言時經

いにしへの面影かよふ雲のうへの月にみし世の春をとはばや

權中納言經高

霞めたゞ春やむかしの形見とて見ればなみだのふるさとの月

荒木田季長

わが袖になみだもいつか春の夜の霞むを月のならひとも見む

前中納言爲忠

世の中にひかりなくてもすむものは霞める月と我となりけり

前大納言守房

霞む夜の月を見るにもくもらじとおもふ心をなほみがきつつ

る又の日花の一枝奉らせ給ひける次に　御製

惜むにもよらぬわかれはうきものと君ゆゑ花や思ひしりけむ

御かへし　嘉喜門院

あかずして別れしままにとどめおきし心や花を誘ひ來ぬらむ

題しらず　源頼爲

いかばかり花には風のまたれまし散らでしにほふ習なりせば

從三位朝棟

あすしらぬ老の命にくらぶれば花はたのみのある日かずかな

滋野宗興

花だにも咲きてとく散る山里にをしまれぬ身のなほや殘らむ

前大納言光任

暮れ難き春の日影もわきて猶なすことも無き身に知られつつ

千首の歌よみ侍りける中に山家花　　　　　　　　　　權中納言經高母

あだし世の色に染まじとのがれ來て身をおく山の花のした庵

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法　印　行　祐

いそのかみふるき都に咲く花はむかしの春やおもひ出づらむ

五百番歌合に　　　　　　　　　　　　　　　　　　　前大僧正賴意

馴れきつる八十（やそぢ）の春もあはれ知れ三代のむかしの花の面かげ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　前大納言光有

思ひきや三代につかへて吉野山くもゐの花になほなれむとは

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　幸子内親王

今もなほかはらぬ花のいろ見てぞなれし雲井の春はこひしき

花の頃嘉喜門院入內ありしに急ぐことありとて

たびたびとどめ申されしかどやがて還御ありけ

ける　　　　　　　　　　　　　　　後村上院御製

花山のはつもとゆひの春の庭わが立ち舞ひしむかし戀ひつつ

延元四年吉野の行宮にて後村上院立坊ありし頃

よみ侍りける　　　　　　　　　　前大僧正頼意

花のいろ鳥のこゑまでときにあふ春の宮居ぞひかりことなる

中納言に侍りける時文章博士を兼ねて准儒の宣

旨をかうぶりける頃家に花の五十首の歌よみけ

るに林花といふことを　　　　　　右近大將長親

おもひきやふでの林の花の香を我が袖にさへうつすべしとは

天授三年の春千首の歌よみて奉りしつつみ紙に

花をさし加へて　　　　　　　　　中務卿宗良親王

一枝の花をぞそへてたてまつるこのことのはに色のなければ

大嶺修行して又の年の春花の歌よみ侍りける中に

二品法親王仁譽

いざさらば花を使にたづね見むまたとたのめしみ吉野のおく

花百首の歌よみ侍りける中に

民部卿光資

ももしきや大内山のさくらばな咲きてや君のみゆき待つらむ

花の歌の中に

中院入道一品

咲きそむる花にしらせじ世の中の人のこころの移りやすさを

千首の歌めされし次に花挿頭といふ事をよませ給うける

御製

をさまらぬ世の人言のしげければ櫻かざしてくらす日もなし

建武の頃花山院を内裏になされて侍りける時御元服ありし事などおぼしめし出でてよませ給う

かへる雁おなじみやこのほどだにもわが玉章を君につてなむ
越の國にすみ侍りけるころ歸雁のなくを聞きて
よめる　讀人しらず
おなじくは散るまでを見て歸る雁はなの都のことかたらなむ
正平七年きさらぎの十日餘芳野に詣でて塔瓦の
御陵など見奉りけるに花はまだ咲かぬ頃にてよ
ろづ物あはれに覺えければ思ひつづけ侍りける　祥子内親王
咲く花のちる別にはあはじとてまだしきほどを尋ねてぞみる
題しらず　參議仲盛
咲き初めて後こそあらめ待つほどは花にもまがへ峯のしら雪
述懐百首の歌讀み侍りける中に　關白左大臣
おのづから慰むやとて世のなかの憂につけても花ぞ待たるる

望む事かなひ侍りける頃よめる　　度會朝英

君が代のはるに逢はずば青柳のいとかく眉はひらけざらまし

正平八年内裏千首の歌の中に門柳を　　冷泉入道前右大臣

いかにして春をも知らぬわが門に植ゑし柳はかげなびくらむ

住吉社三百六十番歌合に　　春宮大夫師兼

春もなほ朝風さむみうぢま山かすみのころもかりぞ鳴くなる

曉歸雁を　　嘉喜門院大藏卿

きぬぎぬの別もかくやしたはれむ有明の月にかへるかりがね

歸雁知春といへる心を　　前大納言實淸

かへるべきとき來ぬとてや故鄕に雲井のかりも春は行くらむ

元弘二年の春かりそめに侍りける所にてよみ侍りける歌の中に歸雁を　　文貞公

うへのをのこども年中行事を題にて三百六十首の歌よみ侍りける次に縣召除目といふことをよませ給うける　後村上院御製

縣見に出で立つ人のいかなれば名國ともにとことしかふらむ

外記政始　前大納言實爲

雲の上をさまる春のまつりごと出でたつ庭にまづ知られつつ

題しらず　權中納言經高母

あし火たき冬ごもりせし難波女もいまは春べと磯菜摘むなり

若菜をよみ侍りける　妙光寺内大臣

我が身はやふる野のさはの忘水おもひでなしに若菜をぞつむ

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　前中納言爲忠

いかにせむをしふる庭にまだ咲かぬ若木の梅の花のおそさを

うぐひすの鳴きていでつるたにかげになほ時しらでのこる山人

文貞公

うれへあれば聞く事厭ふわが身とも知らでやここに鶯の鳴く

元弘二年百首の歌よみ侍りける中にこぞの春内裏にて雪の山つくられて御あそびなどありし事を思ひ出でて春雪をよめる

ももしきや都のふじと見し雪のやまずこひしき春のおもかげ

建武二年内裏千首の歌に題を給はりてよみて奉りけるに春天象を

正三位國夏

なにはとのあけぼの霞む沖つ浪こぎ出づる舟の行方しらずも

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に海邊霞を

中務卿尊良親王

春がすみかすむ浪路はへだつともたよりしらせよ八重の潮風

新葉和歌集　巻第十六

雑歌上

年中行事を題にて人々百首の歌つかうまつりける次に朝拜の心を

後村上院御製

たかみくらとばかりかかげて橿原の宮のむかしもしるき春かな

臨時客

中務卿宗良親王

春はまづくる諸人の代々をへてうたふも絶えぬあをやぎの絲

春の歌の中に

中院入道一品

春をへてあひやどりせしうぐひすも竹の園生に我しのぶらむ

今はよも思ひも出でじ生きて世にありその浦の恨みわぶとも

思ひ出でよ野中の清水そのままにまたかげも見ぬ契なりとも

戀の歌の中に　從二位儀子

ありとだに人に知られぬわすれ水絶えての後も袖はぬれけり

後村上院御製

逢ふ事はさてやま川のあさみこそ袖のみ濡れて憂世なりけれ

右近大將長親母

今ははや逢ふ瀬もよそのみなせ河たれに契のありて行くらむ

讀人しらず

たのまめや我をあき田の露の上にまた稻妻のほのめかすとも

五百番歌合に　源賴武朝臣

さらば又外になりてやいひ初めむありし身とだに忘れはてなば

名所五十首の歌よみ侍りける中に　關白左大臣

わくらばにくる夜を何と歎きけむ絶えける物をささがにの絲

關白家の三百番歌合に　前中納言實秀

かき絶えて通はぬ中となりにけり見したまづさのもじの關守

題しらず　中務卿宗良親王

松に吹くゆふべのかぜはむかしにて桐の葉おつる故郷のあめ

右近大將長親

忘れめやかりほの篠のふしどころさてだにありし夜半の契を

權中納言經高卅

つれなしとひとにはみえじあり果てぬ契にかへし命なりせば

天授二年四月内裏百番歌合の中に　前内大臣顯

長らふる命を今はかこつかな逢ふにしかへばかるるまじやは

正平廿年内裏三百六十首の歌に寄名所戀　右近大將長親

今はまた悔しき程になりにけり恨みざりせば絶えもはてじを　右兵衞督成直

正平廿年内裏七百首の歌の中に寄松蟲戀を

人ははやかよひたえにし蓬生のもとのこころにまつ蟲の鳴く　中務卿尊良親王

百首の歌よみ侍りける中に寄庭戀を

今はまたたがかよひ路となりぬらむ夜な夜なわけし庭の蓬生　關白左大臣

家に三百番歌合しけるとき絶戀を

尋ねても訪はれしことはむかしにて露のみふかき蓬生のやど　妙光寺內大臣

おなじ心を

たづねても跡だに見えば問ふべきにかれ果てぬるか鴫の草莖　冷泉入道前右大臣

題しらず

果はまたかりにも問はず忘らるる我身うづらのねをばなけども　右近大將長親母

妙光寺內大臣家の百首の歌の中に寄蟲戀

須磨の蜑のしほやき衣まどほにも重ねし程はうらみやはせし

従二位理子

いかにせむ我が心のみつきぐさの花色ごろもうらみわびつつ

前中納言爲忠

うらみ侘び身にしむものは言の葉の末野にかかるくずの秋風

五百番歌合に

御製

秋はつる御室のやまの葛かづらうらみしほどの言の葉もなし

題しらず

前大納言實爲

今ははや身のならはしのつらさにて恨むるまでもなき契かな

百首の歌よみ侍りける中に

入道前關白左大臣

終にかく絶えはてけるを中々に恨みてこそはやむべかりけれ

怨絶戀といふ心を

従二位儀子

人ぞ憂き猶身の程をしらぬまは藻に住む蟲のことわりもなく

正平八年内裏千首の歌の中に寄江戀を　前中納言爲忠

難波江の深きうらみをつくしても猶しるしなき我がおもひ哉

恨戀の心を　中務卿宗良親王

しるらめや君がつらさは大淀のうらみてかへる浪をかぞへて

題しらず　讀人しらず

いかにせむいはねば胸にみつ汐のこころのうちにからき恨を

從三位行義

いかにせむ蜑の藻鹽木こりずまのうらみてもなほもゆる思を

相對恨戀の心を　妙光寺内大臣

中空に思ひやけなむ海士の住む里のしるべのけぶりくらべは

題しらず　新宣陽門院

いまはただ身をしるまでの涙にて人のうきには濡れぬ袖かな

中務卿宗良親王家京極

戀しさにつらさはかはるものなれどいはねば同じ涙とやみる

前内大臣隆

さのみやは理しらでうらむべき身のうきにこそ人もつらけれ

後醍醐天皇御製

恨絶戀を

四條贈左大臣

恨みじと思ふこころをやがて又かごとになしてぬるる袖かな

戀の歌の中に

京極贈左大臣

おのづから思ひや知ると怨みしをたよりになして遠ざかる哉

建武二年内裏千首の歌の中に戀動物を

中務卿尊良親王

身の程は思ひしれども世に人のうきにはたへず恨みわびつつ

秋と吹く風のやどりは憂き人のこころなりけり行きて恨みむ　中務卿宗良親王

天授二年内裏百番歌合に恨戀の心を

ありそ海の浦吹く風もよわれかしいひしままなる浪の音かは　文貞公

戀の歌の中に

わがかたに藻鹽たるとも知らでこそこと浦人のみるめかるらむ　右近大將長親母

憂きをしる心のなにとあり初めてつらきたびには袖濡すらむ　權中納言經高

五百番歌合に

數ならぬ身にも恨はあるものをいはばやひとの思ひ知るまで　正三位國夏

題しらず

うべつらく習ひこし身の恨むるはいかばかりなる心とかしる　妙光寺内大臣

題しらず　坂上頼澄

今はただ待たれじものをとばかりにうち歎かるるいり相の鐘

妙光寺内大臣

あぢきなく行くらむ方の空までは思ひも入れじいりあひの鐘

讀人しらず

いつはりもなき世とのみや思ひけむ待たれしころの夕暮の空

從三位周子

問はるべき人もたのまぬ夕ぐれをなに松風のおどろかすらむ

正平十八年九月十三夜内裏にて人々題をさぐりて歌よみ侍りける時寄嵐戀を

冷泉入道前右大臣

いかに寢てあかすとか知る賴めこし契も今はあらし吹く夜を

題しらず　讀人しらず

寄思草戀といへる心を　式部卿惟成親王

枯れねたゞ尾花が下の草の名よ露のよすがもあらずなる身に

右兵衛督成直

あだならむものとはかねて思草葉ずゑの露のかゝるちぎりは

正平八年内裏千首の歌の中に寄月草戀を　前中納言爲忠

うつり行く人のちぎりは月草のはなだの帶のむすび絶えつゝ

寄蓬戀　前大納言實爲

蓬生のもと來しひとはかはらぬにいかにかれ行く契なるらむ

戀の歌の中に　前内大臣隆

かよひこし人の契のすゑつひにかるればしげる庭のよもぎふ

五百番歌合に　右近大將長親

うかりける身のならはしの夕かな入相の鐘にものわすれせで

新葉和歌集　卷第十五

戀歌五

戀の御歌の中に　　　後醍醐天皇御製

我が戀は久米路のはしの中絶えてちぎり空しきかつらぎの神

寄忘草戀を　　　新宣陽門院

かよひこし人はのきばの忘草つゆかかれとはちぎりやはせし

忘草一葉つつみて人の許へつかはすとて　　　讀人しらず

忘らるる身をおなじ名と思はずばなにか軒端の草とうからむ

題しらず　　　前大納言光任女

かれはてし人にはたれか住吉のきしなる草の名ををしへけむ

久戀といふことをよませ給うける　後村上院御製

くらべこしふり分髪のそのままに思ひみだれて年ぞへにける

寄源氏物語戀といふことを　文貞公

玉かづらかけてぞしのぶ夕顔のつゆあかざりし花のかたみに

おも影もかはるやいかにます鏡ひとのこころのよそに移らば
後醍醐天皇御製

忘られば面影かはれますかがみ我ぞあらぬとおもひなしてむ

題しらず
讀人しらず

などつらき心の我にかはるらむ人を見るこそかがみと思ふに

心にもあらではなれ侍りけるをそのままにて年
月もおほく積りにける女の許へ申し遣しける

いかにせむ別は年をへだつれど見しおもかげは身をも離れず

かへし

かくばかりなほ面影はそふものを別るる人に見えけるぞ憂き

題しらず
從三位朝棟

憂き人はありしその夜を限とやおもひさだめておき別れけむ

みるからに猶かきくらす涙かな月にもつらきかげや添ふらむ

戀の歌の中に　兵部卿師成親王

月を見ばさてもこころのなぐさまでうき面影のなに浮ぶらむ

延元三年九月十三夜内裏月三十首の歌の中に　吉田前内大臣

立ちかへりまたこそなげけ面影ののこるかたみの有明のつき

五百首番歟の歌合に　左近大將公長

なにとただ見し面影のうかぶらむ忘らるる身の袖のなみだに　右近大將長親

おもひ出でてこころに忍ぶ面影や人ののこさぬ形見なるらむ

題しらず　前内大臣隆

厭はるるうき身にそひてとほざかる心にも似ぬ人のおもかげ

寄鏡戀を　後村上院御製

面影はくもるのよそになりぬれど月にぞ祈るめぐり逢ふ世を

寄月戀を　　中務卿宗良親王

思ひ出でよ片身はおのがものならぬ雲井のよその山の端の月

月は見るやと申しおこせて侍りける人の返事に　　讀人しらず

これならぬ忘れがたみもあるものを月は眺めじ曇りもぞする

五百番歌合に　　春宮大夫師兼

思ひ出でばたが涙にもくもるらむ契りし月のおなじかたみは

正平二十年閏九月十三夜に内裏にて人々題を探りて月の百首の歌よみ侍りけるに寄月戀　　權大納言公夏

おもかげをさそへば曇る月をしも形見なれとはなど契りけむ

建武元年八月十五夜内裏にて五首の歌よませられけるとき見月增戀といふことをよみ侍りける　　前大納言季繼

うつろはむ後しのべとやなほざりにあらぬ心の色をみせけむ　式部卿惟成親王

かはるともまづ逢ひみむと思ひしや憂にならはぬ心なりけむ

人に給はせける　後醍醐天皇御製

かきながす我が玉づさの言の葉にあらそふものは涙なりけり

元弘二年百首の歌よみ侍りける中に寄雲戀を　中務卿尊良親王

わがなかは八重たつ雲にへだて來て通ふ心やみちまよふらむ

寄風戀

人ははや忘れやすらむおどろかす風のたよりも吹きたゆむ頃

源氏物語の所々をよませ給うける御歌の中に　御製

みるめなきうらみは猶や增るらむ蜑のすさびのとはず語りに

月前祈戀をよませ給うける　後醍醐天皇御製

千首の歌奉りしとき寄鹿戀を　中務卿宗良親王

色變る小萩がもとにうらぶれていつ鹿のねになくと知らせむ

住吉社の三百六十番歌合に　讀人しらず

木にもあらず草にもあらぬ契だにうら枯れて行く人のあき風

戀の歌の中に　前大納言光任女

いとどなほもとこし人や訪はざらむ木の葉ふりしく蓬生の宿

中務卿宗良親王

この暮もとはれむことはよもぎふの末葉の風の秋のはげしさ

權中納言長賢かれがれになりける秋の頃よみ侍りける歌の中に　妙光寺内大臣家中納言

さらぬだにおきどころなき身のうさに秋となかけそ袖の白露

五百番歌合に　權中納言實興

讀人しらず

うつろはむものとぞ誰もしらつゆの言の葉ごとに心おかれし

中宮

つれなくて過ぎこし方の報にやかはるつらさを身に歎くらむ

權大納言

かねてより人のつらさにならはずばかはる心や猶うからまし

權大納言公夏

今ははや變るちぎりのあさ葉野に人もこすげの亂れわびつつ

女の許へつかはしける　讀人しらず

うつろふはわが身ひとりか玉蔓（たまかづら）はふ木あまたの色を知らばや

寄榊戀といふことをよませ給うける　後村上院御製

つらさをばいかにまがへて榊葉のかはらぬ色と頼み初めけむ

従二位儀子

我ばかりなどさめやらでなげくらむ獨やは見しうたたねの夢

題しらず　讀人しらず

夢とだに思ひ定めむかたもなしいかに寢し夜の人のちぎりぞ

右近大將長親母

いかに寢てみえし夢ぞと驚けど思ひあはするあかつきぞなき

妙光寺内大臣家中納言

別路にうかりし鳥のおなじねをいくよ寢覺のとこに聞くらむ

紅葉を折りて人の許へつかはすとて　讀人しらず

かはり行く言の葉にこそいろみえぬ心の秋もまづ知られけれ

題しらず　治部卿經方

かはらじといはせの杜の言の葉よいつより秋の色に染めけむ

幸子内親王

契らずようきを現になし果てて見はてぬ夢になほまよへとは

二品法親王聖尊

ゆめならば又おもひねもありなましうきは一夜の現なりけり

二品法親王源勝

忘らるる隙こそなけれおのづからまどろめば又夢にみえつつ

五百番歌合に　左近大將公長

契りきや見し夜ばかりの現にてゆめにも人のつれなかれとは

前大僧正頼意

逢ひみしは一夜のゆめのなごりにて現につらき年ぞへにける

逢不遇戀を　祥子内親王

ほのかにも見しは夢かと辿られてさめぬ思やうつつなるらむ

歎かじな人目にさはるちぎりにて心のほかの夜がれなりせば

冷泉入道前右大臣

こころ引くかたにはよらで梓弓なほ遠ざかる身のちぎりかな

新待賢門院

するはまたとほざかるべき東路と知らでや越えし逢坂のせき

度會行治

數ならぬみのの中山なかなかにへだて果てなば戀しからじを

百首の歌の中に逢不逢戀を

文貞公

いま更になこその關をあふ坂の山のあなたにたれかすゑけむ

またも見ぬ闇のうつつのかよひぢはなになかなかの戀の浮橋

戀の歌の中に

祥子內親王

面影ぞなほわすられぬあだなりし契はゆめのうちになしても

文中四年うへのをのこども題をさぐりて五十番の歌合し侍りけるついでに稀驚戀といふことを　御製

なにとかはまた木枯のさそふらむ身のみものうき袖の時雨を

千首の歌よませ給うける時寄鷺戀

あしびきの山飛びこえて行く鷺のいや遠ざかる人に戀ひつつ

題しらず　讀人しらず

蘆ねはふ汀がくれのにほ鳥のしたのかよひも絶え果てよとや

上野太守懐邦親王

いとはるる身はくり返しなげかれて絶えぬ思をしづのをだ巻

權中納言經高母

ふみ見しは今ぞくやしき忍ぶ山人のこころのおくのつらさに

右近大將長親母

わたのはら浪間にちがふ早舟の逢ふかとすれば遠ざかりぬる

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて百首の歌よみ侍りけるとき寄遊女戀を

妙光寺内大臣

いかにしてむすびさだめむ浪まくらうきたる舟のよるの契を

寄衣戀といふことをよませ給うける

後村上院御製

須磨の蜑の汐たれ衣かさねても間遠にしあればぬるる袖かな

題しらず

冷泉入道右大臣

たえはてば如何はすまの蜑衣まどほなりとてさのみうらみじ

太宰帥泰成親王

うきながら猶いつはりの言の葉もある世にたゆる命ともがな

讀人しらず

言の葉を頼みしほどのなぐさめも憂きになれてはなき契かな

あひみずば思ひたえてもあるべきにつれなからぬも憂き契哉

依忍難逢戀といふことをよませ給うける　御製

逢ふ事のさはる方にもなれとてや忍べとのみは人のいふらむ

戀の歌の中に　掌侍敦子

もれぬべき身の世語をいかがせむ見しは夢ぞと思ひなしても

中院入道一品

そのままに絶えなばいとどうかるべき一夜の夢を人に語るな

掌侍頼子

いかにせむ蘆間の小舟漕ぎかへりおなじ江ながらさはる契を

中務卿尊良親王

いかにせむ浦のすて舟うき沈みまたあふ事もなみに朽ちなば

春宮大夫師兼

新葉和歌集　巻第十四

戀歌四

家にて人々題をさぐりて千首の歌よみ侍りける中に寄瀬戀といへることを

福恩寺前關白内大臣

いかにして人の契のあさき瀬に落つるなみだの淵となるらむ

遇後悔戀といふことをよませ給うける

中　　宮

汲み初めてあさき契の悔しさをいかにいひてかやまの井の水

題しらず

入道前關白左大臣

飛鳥川あすしらぬ身のはかなくも後の逢ふ瀬をなほ頼むかな

百首の歌よませ給うける中に

後村上院御製

うねの野にたづの一聲なき別れまたも逢ふ身と頼めてぞこし

今はとておき別れぬる袖の露きえずはありとも誰にとはまし

建武二年内裏千首の歌の中に　中務卿尊良親王

けさのまはなほ身をさらぬ面影ぞそへて苦しき形見なりける

百首の歌の中に後朝戀を　文貞公

別れつる面影ながらまどろめばさぞなまたねの夢も見えけむ

歸無書戀といふことを　妙光寺内大臣母

急ぎつるけさのこころの末なれやまだふみも見ぬ道芝のつゆ

五百番歌合に　兵部卿師成親王

別れにしその面影をかたみにていく夜の月をひとり見つらむ

戀の歌の中に　前大納言光任女

きぬぎぬの涙ながらやのこるらむ別れしままの袖のつきかげ

讀人しらず

福恩寺前關白の家にて三十五番歌合し侍りける
時寄月別戀とある心を　　關白左大臣
わすれずばたの別にも思ひ出でよわがきぬぎぬの袖の月かげ
五百番歌合に
心をばあかぬ袂にとどめ置きてかへるともなきあけくれの空
延元三年九月十三夜内裏月三十首の歌の中に月
前別戀　　前大納言實數
月までも思へばつらしなにとしてかかるわかれのあり明の空
いかなる時にか女の許につかはしける　　文貞公
一夜だに悔しと言ひしあかつきのとりかさねつる空の悲しさ
兵部卿親王の家の百首に後朝戀といふことをよ
み侍りける　　民部卿光資

題しらず　新待賢門院

おもひ出でむ人の心はしらねども形見なるべき夜半の月かな

別戀を　中務卿宗良親王

面影の共に立ち出でて別れなば何か身にそふかたみならまし

戀の歌の中に　前中納言忠成

我ぞまづねはなかれける曉のとりをも待たぬひとのわかれに

中務卿尊良親王

わがそでの涙かかりてやきぬぎぬの別にとりの音をば鳴くらむ

讀人しらず

したひ侘び別れもやらぬきぬぎぬに鳥の八聲を重ねてぞ聞く

入道前關白左大臣

小車の別はあまた馴れしかどこのあかつきぞやるかたもなき

五百番歌合に　關白左大臣

あふ事の嬉しきにさへさきだつはうきにも落ちし涙なりけり

正平九年三月内裏にて三首の歌講ぜられける時

忍逢戀を　前大納言實爲

歎きわびなほこそたどれあひ見てもみし夜の夢に似たる現は

延元三年九月十三夜内裏月三十首の歌の中に月

前逢戀　左大辨淸忠

下紐のとくる夜半さへもらさじとおもふ心はむすぼほれつつ

正平十二年内裏にて人々題をさぐりて百首の歌

よみ侍りける中に　從三位周子

まれにあふ夜半の月かげこころせよ傾けばこそ鳥も鳴くなれ

袖の香や形見ならまし小夜衣またかさぬべきちぎりならずば

同じ心を　　前大納言光有

忘るなよ新手枕のそでのつゆとけて寢る夜はまたへだつとも

入道前右大臣

あふことをせめて一夜とおもひこしわが心さへ末ぞとほらぬ

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　　前中納言爲忠

憂にたへて慕へばこそはあひみつれ長かるべきは心なりけり

興國五年七月内裏にて人々の歌つかうまつりし中に　　四條贈左大臣

何事を怨むるとしはなけれども逢ふ夜は袖の濡れまさるかな

文中四年内裏五十番歌合に逢增戀を　　民部卿光資

恨みこしわかむらさきのすり衣かさねてふるき色を見せばや

題しらず　　權大納言公夏

たのめつる人のこころのすゑの松なみこさねどもうき契かな
　住吉社の三百六十番歌合に戀雜物を　讀人しらず
敷き忍ぶとふの菅薦みふにだに君がこぬ夜はわれや寢らるる
　千首の歌奉りし時寄鴛戀　中務卿宗良親王
今夜とてねに行くをしの契だにとけぬつららに結ぼほれつつ
　正平八年內裏千首の歌の中に寄紐戀といへるこころを　前大納言光任
めぐりあふ夜半さへなどか下紐のしたにはとけぬ心なるらむ
　乍臥無實戀といへる心をよめる　妙光寺內大臣
いたづらに枕ばかりをかはしまの外にあふせの名にや流れむ
　百首の歌よみ侍りける中に初逢戀を　前中納言忠成
こよひこそ思ひしりぬれ思ひ死なぬ命を人のちぎりなりとは

住吉社の三百六十番歌合に戀天象　中務卿宗良親王

待ちみては詠むる程の隙もあらじ月ぞこぬ夜のすさびなりける

家にて三百番歌合しけるとき待戀をよめる　關白左大臣

またれつることよひもつひに更けはてて契らむ月や涙とふらむ

おなじ心を　最惠法親王

おのづからさてもとはれば語らまし待つ夜更け行く心盡しを

兵部卿親王家の百首に　權中納言經高

忘れぬやかはるやいかに松の風更けはててとは契らざりしを

題しらず　嘉喜門院

はかなくぞ人のちぎりをたのみける我が僞も知らぬならひに

參るべきよし申しける人のにはかにさはる事ありてまゐらざりければよませ給うける　後醍醐天皇御製

中務卿尊良親王

さりともと賴むに更くる月影をうき人よりもなほやうらみむ

題しらず　前大納言光任

問へかしと心にたのむ夜もすがら來ぬおも影を月にみるかな

右近大將長親

こぬ人の面かげながら更けぬなり我やゆかむのいざよひの月

從三位行義

待ちわびて我やとはむと思へども夫さへ今は夜ぞ更けにける

百首の歌の中に待戀　權中納言經高母

なほざりに賴めおきてし夜半ならば更け行く鐘に待ちや弱らむ

同じ心を　新宣陽門院

さりともと思ふ心もつきはてぬ待つ夜更け行く鐘のひびきに

僞もさのみはよもとおもふこそまたこのくれの賴みなりけれ

題しらず　前大納言光任

待つ人も來べき宵かと山の端の木のまを出づる月にとはばや

五百番歌合に　權大納言具氏

人もまたたのめしままの暮ならば同じこころに月や待つらむ

百首の歌の中に待戀の心を　前內大臣隆

まてといひし程よりもなほ更けぬやと幾度月の影をみつらむ

連夜待思を　中宮

賴めても空しき夜半にならひ來て更け行く月に袖ぬらすかな

元弘三年九月十三夜三首の歌講ぜられし時月前待戀といふことを　後醍醐天皇御製

いとど猶待つ夜更け行くつらささへ慰めかねてみつる月かな

さりともと猶ぞまたるる僞のある世とまではおもひ知れども

五百番歌合に　春宮大夫師兼

こりずまにまた頼まるる夕かな人のまこともも身にはしらねど

源頼武朝臣

頼まじといひてもさすが待たるるや我が僞のゆふべなるらむ

題しらず　源重春朝臣

さりともと我がいつはりのなきままに人の契りを猶頼むかな

中原章言朝臣

いつはりのうきに馴れぬる夕暮も思ひ放たずなど待たるらむ

二品法親王源勝

さりともとおもふ心をちぎりにて又この暮もなほぞまたるる

毎夜待戀といへる心を　嘉喜門院

読人しらず

川岸のまつの心やいかならむちぎりもなみのかけて問はずば

前大納言守親

たのめ來し人に心をおきつなみ高師のはまのまつぞくるしき

寄櫛戀を

御製

夕占（ゆふけ）とふつげの小櫛も引く方に思ひなされて待つぞはかなき

待戀を

妙光寺内大臣

いつはりを待つらむとだに思ひやれいひしばかりの夕暮の空

正平十九年七月七日內裏にて三首の歌講ぜられし時七夕戀といふことを

權中納言長資

いつはりの末こそ知らねたのめつる夕はおなじ星あひのそら

戀の歌の中に

前大納言光任

契久戀といふことを　　讀人しらず
かくばかりたへて待つべき命とも知らでや人の賴めおきけむ

正平十八年内裏百首の歌の中に旅戀を　　妙光寺内大臣
思ひたつこころづくしのゆくするにあれば賴むあふの松原

戀の歌の中に　　上野太守守永親王
いかさまにむすび置きてか岩代のまつとばかりの契なるらむ

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に寄名所戀　　妙光寺内大臣
高砂の松をうき身のいのちにてつれなき中に世をやつくさむ

名所五十首の歌よみ侍りける中に　　關白左大臣
大淀のうらみよとてのちぎりかはまつもつれなの心づくしや

戀の歌の中に　　嘉喜門院大藏卿
住吉のきしかた遠くたのめ來てまつも久しき身のちぎりかな

こむ世には廻り逢ふとも如何せむ契り置きける身ともしらずば

契戀をよみ侍りける　前内大臣顯

行末をたのまずながら契るこそ先いつはりのわが身なりけれ

題しらず　正三位國夏

前の世はしられぬものと知りながら命の後をなほやちぎらむ

中院入道一品

なほざりのことの葉ならばいかがせむ命にかけてたのむ契を

式部卿親王家にて人々題を探りて歌よみ侍りけるとき寄木契戀といふことを　春宮大夫師兼

たのまめや又あひ見むと契るとも人のこころのふたもとの杉

五百番歌合に　前大納言光有

はかなくも猶こそ頼め契りおく人のこころのすゑは知らねど

宵々に行きてぞかへる關守のうち寝るほどのひましなければ

福恩寺前關白内大臣

これやこのくるしき戀のみちならむ行きてとまらぬ逢坂の關

讀人しらず

沼水の今こそふかくちぎるともながれて賴むはてやなからむ

五百番歌合に

民部卿光資

ながらへば變りもやせむ契りおく行末またぬ我が身ともがな

行末をのみ賴ける人に申し遣しける

讀人しらず

待てといはばまつべき物か玉の緒のみぢかき心思ひたえなで

契後世戀といへる心を

中宮

戀ひしなむのちの契もたのまれずあるを見るだにつらき心を

契來世戀といふことをよみ給うける

御製

新葉和歌集　卷第十三

戀歌三

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に寄名所戀と
いふことをよみ侍りける　前内大臣　隆

せめて待つ一夜なりとも逢坂の關こえて聞くとりの音もがな

千首の歌奉りし時寄關戀を　中務卿宗良親王

あづまぢに行きかふ身とはなりしかど知らずよ君に逢坂の關

春宮大夫師兼

よしやその木綿（ゆふ）付鳥（つけどり）も鳴かばなけ我があふ坂の關路ならねば

戀の歌の中に　兵部卿師成親王

つれもなき命と人はいとふとも逢ふにしかへばまたや惜まむ

不逢戀を　新宣陽門院

逢ふ事にかへぬとだにも思はばやただ徒らに戀ひしなむ身を

ここち例ならず侍りていと心ほそうおぼしける

ころ人の許へ申しつかはしける　讀人しらず

いとせめて惜しき此世の名殘かな逢ひ見ぬさきの別と思へば

寄木戀をよませ給うける　　後村上院御製

つひにさてみきとはいはで武隈の松ならぬ身も年ぞ經にける

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて五十首の歌よみ侍りける中に同じ心を　　妙光寺内大臣

つひにさて寢てかたらはぬ世語になり果てぬるかをふの浦梨

同二十年内裏三百六十首の歌の中に寄名所戀を　　左近中將顯氏母

色かへぬときはの山や年ふれどつれなき中のためしなるらむ

關白家の三百番歌合に寄獸戀　　前中納言實秀

いつまでか伏猪のかるもかくばかり憂き中にのみ思ひ亂れむ

寄鴛戀をよめる　　前中納言爲忠

打ちとけぬ人はつらうのとことはにうきねのみなく鴛の獨寐

千首の歌よみ侍りける中に被厭戀　　春宮大夫師兼

ける中に　四條贈左大臣

祈り來し神だにうけぬ身のうさをなにの賴になほしたふらむ

戀の歌の中に　妙光寺內大臣

いのりこしちぎりはいづら神垣のゆふ付鳥のよそのあかつき

讀人しらず

わがいのる千木の片そぎかたからば行合(ゆきあひ)のまの名をも賴まじ

前中納言爲忠

祈れども終になびかでつれなきも憂きもわが身のから崎の松

嘉喜門院大藏卿

思ひつつたへず消えなばあはれとも誰かいはせの杜の下つゆ

住吉社の三百六十番歌合に戀植物　右近大將長親

外ながらみきとばかりをちぎりにてつひにつれなき武隈の松

涙川まくらも床も浮くものを身はいかなればしづみ果つらむ

讀人しらず

思ひねの夢ばかりこそ海となるまくらの上のみるめなりけれ

さりともとおもふ心のうらさへにあはで果つべき身の契かな

せめて唯身を離れ行く我が魂も是なむそれと知られだにせば

祈不逢戀をよませ給うける

後村上院御製

よしさらば思ひ絶えねと祈らばや憂には神もつれなかりけり

題しらず

讀人しらず

はかなくぞ人の心にまかせける祈るにだにもかたき逢ふせを

我ぞいのる人の心のおほぬさをひくてあまたに神はうくなと

ちはやぶる神てふ神もうき人の同じこころになりにけるかな

興國五年七月内裏にて人々題を探りてよみ侍り

つれなさも限あらばと思ふこそなほ身に殘るたのみなりけれ　前內大臣顯

五百番歌合に

辛きにも憂きにも堪へて戀ふる身を猶情なしと人や見るらむ　妙光寺內大臣

題しらず

しひて猶たのみやせましさきの世の契あればぞ思ひ初めけむ　中務卿尊良親王

さりともと行末たのむいのちさへながかるべくもなき契かな　文貞公

ためしなくなげかむための報かなつらさにまけぬ心づよさは　嘉喜門院

行末をなほやたのまむなみだ川ながれて後の逢ふせありやと　二品法親王源勝

むくいとて我つらからば後の世も又や逢ひ見ぬ中となりなむ

讀人しらず

のちの世にこのむくいとてつらからむ我が心さへうき契かな

春宮大夫師兼

戀ひ死ぬといひし後しも辛(つら)ければ人の情まぬ身とは知りにき

右近大將長親母

せめてただ命のほどの戀路にて後の世まではまよはずもがな

入道前右大臣

後の世の報をしらば身を思ふためにもなどかつれなかるらむ

中務卿尊良親王

よしさらば唯つれなかれ戀ひ死なむ報は人の爲にしあらねば

權中納言經高

憂身まづ消えまし物を行く水のあはれとだにも人に聞かれば

題しらず　中務卿宗良親王

我ばかり先戀ひ死なばこむ世にも人を待つまや久しかるべき

坂上頼澄

戀ひしなむ後にや人に知られまし命にかへておもひけりとも

祥子内親王

いかにせむ後の世とだに契らねば戀ひ死ぬとても賴なき身を

天授二年四月内裏にて人々題をさぐりて百番歌合し侍りしとき不逢戀の心を

中務卿宗良親王

身をかへて後を賴まむつれなさも來む世迄とはさすが思はじ

戀の歌の中に　文貞公

身をかへば忘れもぞする同じ世につらき報をいかで知らせむ

歎きわび寢る夜のゆめに見えつるはかへす衣の關もりやなき

不逢戀を　二品法親王聖尊

夢にだに逢ふと見えぬや夜な夜なに返す衣のうらみなるらむ

五百番歌合に　源頼武朝臣

なげきあまり見もせぬ夢を語りても思ふかたには誰か合せむ

權中納言實與

蜑人のたく藻の煙いたづらになびかで絶えむ名こそ惜しけれ

題しらず　大藏卿在仲

たち添はむけぶりとならば君故にをしかるまじき我が命かな

五百番歌合に　權中納言經高

死ぬばかり思ふ心や見えざらむ同じ世にふる我が身なりせば

つれなく侍りける人に遣しける　讀人しらず

思ひやれ獨りかきやる黒髮のとけて寢られぬ小夜のたまくら

讀人しらず

はかなしな我が身に絲のよるの夢あふとはすれど現ならねば

權大納言公夏

逢ふとみる夢路を今はたのみかなせめて現のつらきあまりに

上野太守守永親王

うつつには逢ふ夜もしらず思ひ寢のゆめこそ人の契なりけれ

中務卿宗良親王家京極

戀ひ死ねとするわざならば夢よりも現に一目みゆべきものを

右兵衛督成直

はかなくぞ現になしてしのびける人はゆるさぬ夢のちぎりを

夢中逢戀といへる心をよみ侍りける

妙光寺内大臣家中納言

近くはありながら物など申さまくはなかりける
人の許へ申しつかはしける　　　　讀人しらず

蘆がきのまぢかきほどにかつ見れどうときは人の心なりけり

寄墻戀といへる心を　　　　後村上院御製

へだてける心をしらで蘆垣のまぢかしとのみなにたのみけむ

羇中百首の歌よみ侍りし中に　　　　中務卿宗良親王

今ぞうきおなじみやこの中にては心ばかりのへだてなりしを

戀の歌の中に　　　　前中納言氏定

尋ねてぞ逢はぬもつらきよしさらばよそにや人をみねの帚木（ははきぎ）

祥子内親王

いかにせむしのの小篠のかりにだに逢ふ夜は知らぬ中の契を

權中納言經高母

戀の歌の中に　讀人しらず

色に出でてくるしきものと知りぬれば今より後や淚つつまむ

寄川戀を　新待賢門院

淺き瀨に思ひたえずばなみだ河のちはうき名をなほや流さむ

題しらず　讀人しらず

なみだ川くいの八千度思へども流れし名をばせくかひもなし

正平八年内裏千首の歌の中に寄筏戀　前大僧正賴意

杣川のいかだのとこのみなれ棹なれてもなどか袖はぬるらむ

題しらず　前中納言惟繼

我が中はいた田の橋のいたづらに思ひ渡れどかひやなからむ

二品法親王聖尊

いかにせむおなじ渚のかたしがひ逢はでなるるも契なれども

世にははやながれにけりな名取河するの逢ふ瀬もしらぬ契に

正平廿年うへのをのこども題をさぐりて三百六

十首の歌つかうまつりけるついでに寄名所戀を　後村上院御製

せめてその浮名なりとも名取川あふといふせのなどながるらむ

妙光寺内大臣

うき名のみもる山かげの下紅葉ふりいでぬるか露もしぐれも

戀の歌の中に

かしは木の散るや葉守の神無月たのみしかけももる時雨かな

關白家の三百番歌合に顯戀　右兵衛督成直

音にだに立てじと思ひしあだ浪のあだなる名をも流しつる哉

五百番歌合に　源頼武朝臣

せく袖にあまればやがてながれけり涙の川やうき名なるらむ

新葉和歌集　卷十二

戀歌二

寄名所戀をよみ侍りける　妙光寺内大臣

立つ名のみたかしの蜑のぬれ衣そでまきほさむ浪の間もがな

なき名立ちける頃よめる　讀人しらず

ほしやらでなほやかさねむ草枕ゆふてばかりの露のぬれぬぎ

外にのみいはれの池のねぬなはのねぬなはいかで苦しかるらむ

題しらず　入道前右大臣

いかにせむ忍ぶとすれど音に立てて淺野の雉子隱れなき身を　前大納言宗房

いかにして知るといふらむ歎きわび寢る夜だになき床の枕は

在らざらむこの世の外のうき名まで苔の下にや猶つつまし
前大納言實爲

あひ思ふ心までこそかたからめうき名をせめて洩さずもがな
住吉社の三百六十番歌合に戀動物
中務卿宗良親王

夏苅のあしまにかよふ跡もうしむれゐる鳥の立つ名おもへば
忍戀の心をよみ侍りける
右近大將長親母

せめてその後のうき名は洩すともあひ見むまでとせく泪かな
入道前右大臣

よしさらば泪もせかじ今は世に漏せとてこそつれなかるらむ（め歟）
前中納言實秀

せけばまづ袖に知らるるなみだかな枕ばかりと何おもひけむ
百首の歌よみ侍りける中に寄枕戀
冷泉入道前右大臣

涙川そでのしがらみせきかねばもらさぬ先に身をやしづめむ

題しらず　　冷泉入道前右大臣

人めせく岩間のみづのわきかへりむせぶ心は行くかたもなし

夏戀の心を　　従三位行子

夏草のしげみがしたを行く水のしられぬ戀にむせぶころかな

相互忍戀といふ事をよませ給うける　　御製

これをさへつらき數にやかこたましわれのみ忍ぶ思なりせば

新宣陽門院

さすがまた忍ぶは同じ心とももまだ世にもれぬうき名にぞしる

戀の御歌の中に

いかさまに忍びすぐしてありはてぬ命待つ間の浮名もらさじ

五百番歌合に　　權中納言實興

きみは見よ人はしるなと我が袖にあまる涙をせきぞわづらふ
右近大將長親

誰ゆゑに思ふこころの末なれば君にもつつむなみだなるらむ
建武二年内裏千首の歌の中に
中務卿尊良親王

袖の上によその人目をおもはずばせめて涙のかぎり見てまし
月前戀
妙光寺内大臣

眺めつつ落つる涙といひなさば月の名だてになりぬべきかな
延元三年九月十三夜内裏月三十首の歌の中に
右大辨季光

したもえのおもひの煙空に立たば月の爲さへうきわが身かな
戀の歌の中に
權中納言經高

思ひせくこころにあまる涙川せめてはそでのしたにながれよ
五百番歌合に
源賴武朝臣

しられじなしのぶの浦におくあみの繁き人目を歎きわぶとも

人目を憚りて物などもえ申さざりける人のもとへからうじて文つかはすとて　よみ人しらず

いかにせむしのぶの浦の藻鹽草かきやる浪のひまだにもなし

五百番歌合に　式部卿惟成親王

かくとだにいはせの杜の下露のしられで消えむ事をしぞ思ふ

うへのをのこども題を探りて歌合し侍りける次に忍戀といふ事をよませ給うける　御製

散らすなよこころのおくの忍山そむる木の葉の色ふかくとも

北野社によみて奉りし百首の歌の中に　中務卿宗良親王

いかにせむたきつ涙のしがらみも懸けてせくべき袂ならぬを

戀の歌の中に　よみ人しらず

住吉社の三百六十番歌合に戀地儀を　中務卿宗良親王

身に餘る煙ばかりと思ふなよなきてぞふじのねに立てぬべき

戀の歌の中に　前大納言光任

みにあまるおもひとならばいかがせむ忍ぶに弱る命ともがな

妙光寺内大臣の家の百首の歌の中に忍戀　右近大將長親母

戀ひしなむ後にも人にしられずば忍び果ててもかひやなからむ

題しらず　よみ人しらず

忍ぶるもなほ人知れぬ心かなもらさばかくやくるしかるべき

寄石戀といふ心を　後村上院御製

しらせばや君がかきなす琴の音に松かぜならで通ふこころを

寄浦戀を　冷泉入道前右大臣

知られじな入江がくれの玉かしは沈むばかりの思ひありとも

未言出戀といへる心を　　　　冷泉入道前右大臣

問へかしな袖のみぬれて池水のいひ出でがたき下のこころを

欲言出戀といふことをよみ侍りける　　　　福恩寺前關白內大臣

あぢきなくつつむも苦し言ひ出でてなかなか人の心をも見む

兵部卿親王の家にて人々歌よみ侍りける中に　　　　權中納言經高

いつ出でて後さへ人のつれなくば忍ぶにまさるものや思はむ

百首の歌よませ給うける中に寄煙戀といふことを　　　　後村上院御製

せめて我がおもひのけぶり空にだに立たばぞ人の哀ともみむ

五百番歌合に　　　　關白左大臣

夏がりの葦火のけぶりしたにのみ思ひこがれて立つ空もなし

題しらず　　　　よみ人しらず

しられじな富士の高嶺の雲がくれむせぶ煙はそらに立つとも

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

袖の上にいつより露は亂るらむ戀をしのびのころもへぬまに

正平十一年四月内裏にて三首の歌講ぜられし時初戀を　前大納言實數

くちなしの色ならなくに戀しともいはでぞ人を思ひ初めぬる

戀の歌の中に　前左近大將公冬

見せばやなはつ山あるのすり衣おもひそめぬる色のふかさを

千首の歌侍りし時　權中納言經高

はては又いかにしのぶのすり衣いまだにかかる露のみだれを

家にて百首の歌よみ侍りける時初尋緣戀といふ心をよめる　入道前關白左大臣

むらさきのゆかりの草をとひわびて露分けそむる武藏野の原

戀の御歌の中に　後村上院御製

ひとしれぬわが戀草の七くるま思ひみだれてやるかたもなし

百首の歌よみ侍りける中に初戀　文貞公

人やりの道とはしらぬ戀の山わがこころよりまよひ初めつつ

題しらず　二品法親王聖尊

行末は誰にとはましおもひ入るきのふ今日だにまよふ戀路を

前參議長資

しるべとは我が心をやたのままし人に問ふべき戀路ならねば

住吉社の三百六十番歌合に戀地儀　右近大將長親

おもひ入る心ひとつにまよふかな野にも山にもあらぬ戀路を

戀の歌の中に　前內大臣隆

初尾花ほのかにみつるおもかげの忘られぬよりぬるる袖かな

てつかはしける　右近大將長親

歎きつつひとりやさねむ蘆邊行く鴨の羽がひも霜さゆる夜に

五百番歌合に　春宮大夫師兼

長き夜を音にのみ鳴きて庭つ鳥かけのたれをの亂れわびつつ

戀の歌の中に　前中納言氏定

なつみ川山かげにのみぬる鴨の流れて立たぬうき名ともがな

題しらず　讀人しらず

かがり火のかげには水もぬるまねど人を鵜舟ぞ浪にこがるる

鷺のゐるゐるぐひにかへる仇浪もおり立ちてこそ淺しとは知れ

荒ちをのかるやの先にたける猪も人の憂にぞ身をば捨つなる

千首の歌よみ侍りけるとき寄雉戀といふことを　權中納言經高母

狩人の入野のきぎすつまごひに忍ばれぬ音はわれも立てつつ

煙立ちもゆとは見ゆる富士の峯も下にこがるる思ひならねば
同じ心をよみ侍りける　前中納言爲忠
わがおもひ淺間の嶽にあらぬ身の戀のけぶりは人なとがめそ
寄玉戀といふことを　中務卿尊良親王
わがこころ千々にくだけて散る玉は物思ふときの涙なりけり
建武二年内裏千首の歌の中に
風にのみ任する舟のかぢをたえつひによるべもしらぬ戀かな
正平八年内裏千首の歌の中に寄潟戀を　前大僧正頼意
滿つしほもさすが干潟はあるものを袖の涙のかわくまぞなき
寄池戀　前大納言實清
池水のしたに朽ちなばねぬなはのねぬ夜苦しきものは思はじ
關白家の三百番歌合に寄鳥戀といふことをよみ

思川ながるる水のあはれともいふ人なしに消えかへりつつ

吹く風の便はありと聞くものを雲路なればやふみ見ざるらむ

古の茅渟のますらをなかりせば戀のためしにわれぞならまし

百首の歌よませ給うける中に寄屋戀といふことを　後村上院御製

人知れずものをぞ思ふ津の國のこやのしの屋の隙もなきまで

寄木戀を　中務卿尊良親王

蜑のたくうらの藻汐木われなれやからき思にもえこがれつつ

題しらず　上野太守守永親王

すく藻たく難波のこやの夕煙立つ名もしらず身をこがすかな

前左近中將光實

いつもただ空にのみしてうきくものまよふ心を知る人ぞなき

千首の歌めされし時寄煙戀を　御製

新葉和歌集　巻第十一

戀歌一

題知らず　　讀人しらず

たれゆゑに富士の煙も立たずなり淺間の嶽ももゆるとか知る

ふじのねや絶えぬおもひの夕煙きえなでさのみ何くゆるらむ

夕ぐれはまだ見ぬ人をこふるがなくものはたてを面影にして

浦にすむおもひやなぞと声の屋の絶えぬ煙をとふひとのなき

みさごゐるあら磯浪もかくばかり心ひとつにさわがれやする

わがこころつたの細江を漕ぐ舟の君にぞよせし浦がくれても

戀といへばあだなる浪のたはれ島戯れにくきまでにかけつつ

八歳へし浪のまくらのよるの夢さむれば花のうてななりけり

涌出品

八百日ゆく濱の眞砂のかず知らず悟れる人もありけるものを

五十展轉隨喜の心をよめる　最惠法親王

法の花いく山風にさそはれてここまでもなほにほひ來ぬらむ

法花經品々歌を人のすすめ侍りし中に序品入於深山思惟佛道の心を　中務卿宗良親王

山深み尋ね入りてぞまよひなきほとけの道は知るべかりける

方便品其智慧門難解難入を

入りがたき草の戸ざしも秋風の吹きはらふにぞ月は澄みける

五百弟子品不覺内衣裏有無價寶珠

いにしへもかけし衣の玉をなどうらめづらしくいま思ふらむ

提婆品皆逢見彼龍女成佛

わたつ海のあしまの浪をわけ來ても五のさはりなきぞ嬉しき

屬纍品如世尊勑當具奉行

末の世をおもふほとけの勑なれば我らが爲ぞいともかしこき

法花經廿八品歌よみ侍りける中に提婆品の心を　中院入道一品

秋の月いでて程なき影ながら明日のひかりをなほのこすかな

一念不生前後際斷といふ心をよみ侍りける　前大納言定平

切れて後またも續かぬ白絲のそのふしぶしはさもあらばあれ

五戒歌とて人のすすめ侍りし中に不偸盗戒の心を　中務卿宗良親王

わたつ海のふかきむくいを知るならば思ひ立ためや沖つ白波

不飮酒戒

盃のうき世に廻る身を受けてわれからさめぬまよひとぞ聞く

千首の歌よみ侍りける中に不自讃毀他戒を　春宮大夫師兼

我をのみふかきになして杣川や人をあさせにいかがくださむ

如是性といふことをよませ給うける　御製

ながき夜の闇路のくもは晴れぬとももとの光はありあけの月

色にそむ心の花の散りてこそもとのさとりのねにかへりぬれ

緣覺界の心をよみ侍りける

中務卿宗良親王

ながめつる花も紅葉もちり絕えてこころの色ぞいまは空しき

二乘を

右近大將長親

かひなしな人をわたさぬ法の舟うき世の岸を漕ぎはなれても

三光國師入滅の時よみ侍りける

妙光寺內大臣

あま小舟のりしる人はさきだちつくるしき海をたれか渡さむ

世をのがれて後保安寺に住みける頃その寺の長老かくれ侍りければよみ侍りける

祥子內親王

殘りゐておもふも悲し法の道たづねしときはおくれやはせし

無明微薄智惠持者如徒初日月光垂闇々垂晝といふ事をよめる

最惠法親王

思ひやる嵯峨野の春の雪にもや消えけるつみの程は見ゆらむ

御かへし　妙光寺内大臣

をしむなよ法のむしろの春の雪消ゆらむ罪のためしなりせば

題しらず　二品法親王源勝

高野山あかつき遠くまつの戸にひかりをのこす法のともしび

前大僧正賴意

傳へこし法のともしびかかげてやあきらけき世を猶祈らまし

寄水釋教といへる心を　二品法親王仁譽

濁るなと世をこそ祈れ底ふかき三井の淸水を汲み初めしより

千首の歌よませ給うける時大日を　御製

六の塵あまねくてらす光こそ三世につねなるさとりなりけれ

上野太守守永親王

めされけるに奉りければ

後村上院御製

わがたのむ西のはやしの梅のはな御法の花のたねかとぞ見る

御かへし

後醍醐天皇大納言典侍

頼みける君がめぐみの色そへてみのりの花はなほぞさかえむ

後村上院第三年の御佛事の次によみ置かせ給うける短冊をつがれてうらに宸筆にて御經かかせ給うたりける供養の導師つかうまつるとて思ひつづけ侍りける

前大僧正頼意

かき置きしむかしの春の言の葉に御法の花をけふはそへつつ

正平廿一年二月十七日莊嚴淨土寺にて御八講おこなはれける日雪いたう降りて侍りければ妙光寺内大臣のもとへ遣されける

後村上院御製

新葉和歌集　巻第十

釋教歌

正平廿年五月四天王寺金堂造立してやがて供養の導師つとめ給へるに昔この寺にて天台座主明雲拜堂しける時遺身舍利を禮して常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名殘をみるぞうれしきとよみ侍りける事を思ひ出でてよめる

前大僧正忠雲

我が世まで消えぬけぶりの名殘ともみるぞ昔の跡はうれしき

後醍醐天皇の大納言典侍さまかへて後住吉の西林院といふ所に住み侍りける時かの寺の梅花を

祈り置くこころの闇もいつはれて雲井にすまむ月を見るべき

題しらず　　従三位俊文

身にあまる恵を老いてみしめ繩ながきよはひは神やうけけむ

諏訪の大明神に法樂し侍りし千首の歌の中に　　中務卿宗良親王

あらたなる諏訪の祭のみかり人しかもありける神のちかひか

諏訪の海や氷を踏みてわたる世も神し守らばあやふからめや

百首の歌よませ給うける中に寄社祝を　　後村上院御製

行末を思ふも久し天つやしろくにつやしろのあらむかぎりは

わすれじよわするな神も月雪の夜半にたむくるまつ風のこゑ

百首の歌よませ給うける中に日吉を　後村上院御製

おしなべて照らさぬ方やなかるらむ頼む日吉の神のひかりは

元弘元年神無月の頃日吉社に歌あまたよみて奉りし中に　中務卿宗良親王

如何にせむたのむ日吉の神無月てらさぬかげの袖のしぐれを

金峯山野際の社に參籠しけるに梅花の咲きたるを見てよみ侍りける　前大僧正頼意

きさらぎのをりを忘れぬ神がきに今日のたむけと匂ふ梅が香

延元の頃子もりの社へ參らせ給うて御祈願の事ありける次に思ひつづけさせ給うける　新待賢門院

名にしおふ神のちかひのそのままに心の闇をてらせとぞ思ふ

君をいのる道にいそげば神垣にはやときつげて鷄(とり)も鳴くなり

従三位國量

菖蒲草けふはみしめに引きそへて君と神とのめぐみをぞ知る

正平十五年十月住吉社に行幸ありて神主國量正下の四位に敍せられける時思召しつづけさせ給うける

後村上院御製

位山こえてもさらにおもひしれ神もひかりを添ふる世ぞとは

従二位衡立願の事ありて同じき社のかんだちにて箏の祕曲を手向け侍りける時忍びて詣で給うけるをりしも松風すごく響きあひて月雪の光さへたぐひなく侍りければ思ひつづけさせ給うける

新宣陽門院

年中行事百首の御歌の中におなじ心を　後村上院御製

きさらぎや雪間を分けし春日野におくしも月も神まつるなり

正平二十年内裏七百首の歌の中に社頭暮といふことを　妙光寺内大臣

春日山しぐれもはてぬ夕づく日ふたたびてらす影かとぞ見る

神木入洛のよし聞えし年の秋よみ侍りける　權大納言公夏

神もまたことしの秋はたびねしておもひ出づらし春日野の月

天授二年の秋千首の歌よませ給うける中に三輪を　御製

いつかさて祈るしるしをみわの山今年もなかばすぎ立てる門

年中行事三百六十首の歌の中に廣瀨龍田祭　妙光寺内大臣

ゆふかけてつかひも今日ぞ立田山やまぢを遠み夜やこゆらむ

題しらず　津守國貴

代々をへて流れたえせぬ石清水すめるも神のちかひなるらし
和泉國萬代別宮に參籠し侍りける時よめる　二品法親王源勝
民やすく國をさまれといのるかな人のひとより我が君のため
年中行事を題にて人々百首の歌つかうまつりける次に賀茂祭を　後村上院御製
あふひ草神もあはれは懸け添へよよそにみあれの賀茂の瑞籬
正平二十年内裏三百六十首の歌の中に神祇を　前中納言忠成
行幸せし賀茂の川浪いにしへに立ちかへれとや神も待つらむ
同八年内裏千首の歌の中に平野　中院入道一品
むかし見し平野に立てるあや杉のすぎにけりとて我な忘れそ
元弘三年立后の屛風に春日祭　後醍醐天皇御製
立ちよらばつかさづかさもこころせよ藤の鳥居のはなの下陰

跡たれし神代ひさしきいすず川きよきながれぞ今も絶えせぬ

大中臣爲量朝臣

神代よりながれ久しくつかへきて絶えじとぞ思ふいすず川浪

中院入道一品

石淸水きよきながれをたのむより濁らじとこそ思ひ初めしか

入道前右大臣

いは淸水濁れる末の世なりとも神のこころはさぞな澄むらし

千首の歌よませ給うける時石淸水を　御製

なにとかくにごり行く世ぞ石淸水ひとの國とは神もおもはじ

同じ心を　後村上院御製

神もまたあはれと思へ石淸水木がくれて我がすめるこころを

權大納言季修

神風や御舟よすらしおきつ浪たのみをかけて伊勢のはまべに

河月をよませ給うける　後醍醐天皇御製

照し見よみもすそ川にすむ月もにごらぬ浪のそこのこころを

野宮に久しく侍りける頃夢の告ありて太神宮へ

百首の歌よみて奉りける中に　祥子内親王

いすず川たのむ心はにごらぬをなど渡る瀬のなほよどむらむ

正平十八年内裏にて人々名所百首の歌つかうま

つりける時鈴鹿川といふことをよみ侍りける　妙光寺内大臣

神もまたあはれはかけよ鈴鹿がは八十瀬をかけしあとの白浪

千首の歌よみ侍りしに伊勢を　中務卿宗良親王

いすず川その人浪にかけずともただよふ水のあはれとは見よ

題しらず　藤原有氏朝臣

兵部卿親王の家にて庚申七百首の歌よみ侍りける中に

右兵衛督成直

神路やま出づる月日や君が代をよるひる守るひかりなるらむ

延元三年秋後村上院かさねて陸奥の國へ下らせましましけるにいく程なく御舟伊勢國篠島といふ所へ著きたるよし聞えしかば勅使として參りたりけるにこのたび大風なのめならずして御供なりける舟どもおほく損じけるを同じ風のまぎれに御舟ばかりはこと故なくこの國へしもつかせ給ふ事しかしながら太神宮の御はからひたるよし神づかさどもよろこび申しければやがてこのよし奏し侍りける次に

前大僧正賴意

新葉和歌集 卷第九

神祇歌

題しらず　前中納言爲忠

神風やのどかなる世としら露の玉ぐしの葉のえだもならさず

野宮より退下の後雪を見て　祥子内親王

忘れめや神のい垣のさかきばにゆふかけ添へし雪のあけぼの

題しらず　從三位隆基

おきゐつつ君をいのれば神垣にこころ通はぬあかつきもなし

從三位家行

神垣のみむろのさかきさしそへて君をときはとなほ祈るかな

後醍醐天皇御製

吹く風のたより待つまをかごとにておなじ入江にとまる舟人

讀人しらず

伊勢の海や浪たかき浦の泊り舟おぼろげにやは夢をだにみし

幸子内親王

ふねとむる浦路の浪のうきまくら定むとすれど見る夢もなし

後醍醐天皇御製

忘れめやよるべもなみの荒磯を御舟のうへにとめしこころは

この御歌は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ給ひける時源長年御むかへに參りて船上山といふ所へなし奉りける程の忠ためしなかりし事などしろしおかせましましける物の奥にかきそへさせ給ひけるとぞ

下おきける同じもじなき歌　文貞公

東路やとこよのほかに旅寢してうき身はさぞな思ふゆくする
夢のよに今日うまれきて悔しさも一方ならず身を恥づるころ

信濃より木曾路をはるばると上りけるにいぬ山といふ所より鳴海の浦へ出で侍りけるとて思ひ續けける　讀人しらず

やまぢよりいそべの里にけふは來てうらめづらしき旅衣かな
鳴海潟しほのみちひのたびごとに道ふみかふるうらの旅びと

題しらず　前中納言爲忠

しほがまのうら悲しかる舟出かな霧のまがきの島がくれして

前内大臣隆

夜な夜なの月をしるべに漕ぐ舟はあけ行く浪や泊りなるらむ

後醍醐天皇吉野の行宮におましましけるころ歌めされけるに月前旅　法眼湛助

あくがるゝ心を月にさきだててみやこにかへる道いそぐなり

題しらず　大藏卿在仲

故鄉に立ちかへるとも今はまたむかしをかたる友やなからむ

右衞門督忠顯

みやこ思ふ夢路や今の寢覺までいくあかつきの隔て來ぬらむ

羇中百首の歌よみ侍りしに　中務卿宗良親王

きかざりし嵐をさむみ旅ごろもこゝのかさねの中ぞこひしき

旅の心を　權大納言時經

君ゆゑと思はざりせばいかばかりかゝる旅寢も猶うからまし

下つ總の國に侍りける時三十一首の歌よみて上

これまではなほも都のちかければおなじ空なる月をこそ見れ

ながむるをおなじ空ぞと知らせばや故郷人もつきは見るらむ

中院入道一品

いく里の月にこころをつくすらむ都のあきを見ずなりしより

後村上院御製

都をもおなじひかりとおもはずば旅寢の月をたへて見ましや

月爲羇中友といふことを　前中納言爲忠

みやこより伴ふ月のなかりせばなぐさめがたき旅寢ならまし

月前露といふことをよませ給うける　後醍醐天皇御製

影やどす月さへいまはなれにけりみやこにかはる袖のしら露

千首の歌の中に　中務卿宗良親王

忘れずよ一夜ふせやの月のかげなほそのはらの旅ごこちして

讀人しらず

都にて何かゆふべはうかりしと宿とひかぬるこころにぞ問ふ

三善頼衡朝臣

くさまくら夕山風のさむければこよひは更に寢むかたもなし

右近大將長親母

小笹原つゆしく床のかりまくらふしうき夜半は夢もむすばず

中務卿宗良親王

まくらゆふ野原の草の露の上にかりねあらそふ月のかげかな

後はまた旅寢や月に思ひ出でむ今はみやこのかたみなれども

下總國にて月を見てよみ侍りける

文　貞　公

故鄕のおなじ空とはおもひ出でじかたみの月の曇りもぞする

題しらず

後醍醐天皇御製

濃路へかかり侍りけるがさながら富士の麓を行き廻りけるに山の姿いづかたよりもたぐひなく見えければ　讀人しらず

北になしみなみになして今日いくか富士の麓を廻りきぬらむ

百首の御歌の中に　後村上院御製

いくかかは富士の高峯を見て行かむ分くる裾野の道變るとも

大峯修行の事を思ひ出でてよめる　二品法親王仁譽

岩根ふみかさなる嶺に日數へてすず分けし道ぞ今もわすれぬ

題しらず　前中納言惟繼

とまるべき宿をば知らず今日の日のくるるを道の限にぞ行く

藤原行房朝臣

行きとまる里の名ごとにかはるかなゆふべは同じ夕なれども

され侍りけるとき尾張國より都なる人のもとへ
申しつかはしける　　　　　　　文貞公
今日まではありと聞きてもたのむなよなほ行末も知らぬ命に
墨田川のほとりにてよみ侍りける
こと問ひていざさはここにすみだ川鳥の名聞くも都なりけり
同じ頃あづまにおもむき侍りけるに逢坂の關を
越ゆとて思ひつづけ侍りける　　　　權中納言具行
かへるべき道しなければこれやこの行くをかぎりの逢坂の關
瀬田の橋をすぐるとて
けふのみと思ふわが身の夢の世にわたるもつらし瀬田の長橋
駿河の國より信濃へこえける時うきしまが原を
過ぎて車がへしといふ所より甲斐國に入りて信

新葉和歌集　卷第八

羇旅歌

題しらず　讀人しらず

旅寐してわかるる嶺のあかつきを横雲のみとひとや見るらむ

旅の空うきたつ雲やわれならむ道もやどりもあらし吹くころ

權大納言具氏

わけ來つる跡さへ今はしら雲のへだつる方やしづかなるらむ

藤原行房朝臣

かへり見る都のかたも雲閉ぢてなほとほざかる五月雨のそら、

元弘二年世のみだれによりて下つ總の國にうつ

元要上人入唐しける時思ひつづけ侍りける　右近大將長親母

いとせめて老いぬる身こそ悲しけれこの別路を限りと思へば

道にて世をそむきけるよし聞召しければこの春千首の歌の中に今年ばかりの花染の袖とよみたりし事などおぼしめし出でらるるよし仰せられしついでに

御製

わするなよ木曾のあさ衣やつるともおなじ吉野の花染のそで

元弘二年百首の歌よみて中務卿尊良親王のもとへつかはしけるつつみ紙にかきつけ侍りける

文貞公

かたみとてのこす水茎あとたゆる忘れぬ中のめぐりあふまで

文貞公あづまの方へ赴き侍りける時おなじやうに下りける人々道にてあまたうせ侍りけるよしつたへ聞きてよめる

妙光寺内大臣母

廻りあふちぎりならずばなかなかに憂を見はてぬ命ともがな

身をいかにするがの海の沖つ浪よるべなしとて立ち放れなば

信濃の國にても又年月をおくり侍りしに行宮の御しきもおぼつかなく思ひ給へしかばあからさまに吉野に參りてやがて下り侍らむとせし時内裏にて人々百番歌合し侍りしに旅の心を

老の浪また立ちわかれいな舟ののぼればくだる旅のくるしさ

かくておもひの外にとどまり侍りしを又さりがたき事ありて次の年の冬信濃へ思ひたち侍りしとき申し送り侍りし

春宮大夫師兼

最上川またいな舟の下る瀨をしばしばかりもいかでとどめむ

かへし

中務卿宗良親王

我を世に下し果てずばいな舟のまた上る瀨もなどかなからむ

例ならぬよしなど仰せられし次に　後村上院御製

廻りあはむたのみぞしらぬ命だにあらばと思ふ程のはかなさ

御かへし　中務卿宗良親王

廻りあはむ頼みあるべき君が代に獨老いぬる身をいかにせむ

おなじころ中務卿宗良親王のもとへ申しおくり侍りし　遍照光院入道前太政大臣

日にむかひ月にわすれぬ心をばただなかぞらに思ひやらなむ

駿河國にすみ侍りしも猶いささかはばかる事ありて信濃國に越えむとせし時かの國にありける藤原貞長といふものなど夜もすがら名殘惜み侍りしにいでざまに常に居侍りし所の柱にかきつけ侍りし　中務卿宗良親王

又たきものを遣してこれをたかばかならず夢になむ見ゆべきよしを申し送りてつつみ紙にかきつけ侍りける

文貞公

なれなれし夜半のうつり香わすれずば煙にそはむ面影もがな

後にこれをたきて寢ける夜はかならず夢に見えけりとなむ

尾張國を過ぐるとて都なる人の許へ申しつかはしける

海山をみるそらもなし我が心さながらきみにそへて來しかば

年久しくなれさせ給うける人の遠き所に侍りける秋の頃月を御覽じて

中宮

思ひ出づる同じながめの空とだにしられぬ月の影ぞかひなき

中務卿宗良親王あづまに住み侍りしころ御心地

べき事は知らねどかきそへ侍りし

末までもおなじやどりの道ならば我いきうしと思はましやは

讚岐國松山といふ所に（の脱歟）つきて月日を送り侍りしに入道大納言爲世もとより松山は心つくしにありとても名をのみ聞きて見ぬぞ悲しきと申しおくりて侍りし返事に

おもひやる心づくしもかひなきに人まつ山とよしやきかれじ

あづまの方へ下り侍りける時きぬを女の許へつかはすとて　文貞公

里のあまのしほなれごろも忍べとてからき別の形見にぞやる

かへし　妙光寺内大臣母

里の海士の汐なれ衣とどめても長らへばこそかたみとも見め

露わけぬ人もや袖をぬらすらむとまるは行くを惜むなみだに
人をわかるとてよめる　讀人しらず
これに猶まさるわかれもありやせむ旅はまたくる道と思へば
元弘二年三月とほき方に赴かむ事も只けふあす
ばかりになり侍りしに雨さへ降りくらしていと
ど心ほそさもたぐひなく覺え侍りしかば
中務卿宗良親王
憂きほどはさのみ泪のあらばこそわが袖ぬらせよそのむら雨
うちいでといふ所にとどまり侍りしに尊良親王
よべこの所にしもとまりけるよし聞くに何とな
くかたはらなるかべを見ればともなりける爲明
卿が筆にていとせめてうき人やりの道ながら同
じやどりと聞くぞうれしきとあるを見て又みる

新葉和歌集　巻第七

離別歌

家に百首の歌よみ侍りけるに遣唐使餞といふことを

妙光寺内大臣

吹きかへてまた日の本のしるべせよもろこし舟のぬさの追風

齋宮群行の心をよませ給うける

後村上院御製

わかれつる袖にかけけり鈴鹿がは八十瀬のたきにおつる白玉

源氏物語の所々をよませ給うける御歌の中に

御製

おひ出でし磯の姫松ひきわかれあさき根ざしにぬるる袖かな

百首の歌よみ侍りし中に離別を

中務卿宗良親王

なに事をなすともなくてあすか風いたづらに又暮るる年かな

祥子内親王

何をして過ぎつるかたの月日ぞとさらにおどろく年の暮かな

山あゐの色をかさぬる今宵だにおほみの袖やかはらざるらむ

元弘三年立后月次の屛風に五節を　後醍醐天皇御製

そでかへす天つ少女も思ひ出づや吉野の宮のむかしがたりを

百首の歌よませ給うける中に豐明節會の心を　後村上院御製

豐のあかり天つ少女の袖までも代々の跡をばかへしてぞ見む

神樂をよみ侍りける　冷泉入道前右大臣

忘れずよ雲井にさゆる六の緒のしらべを添へし星のひかりは

題しらず　中院入道一品

歎きつつくれ行く年を世に經ればいそぐとや人のみるらむ

二品法親王聖尊

人ごとにいそぐを見ても數ならぬ身にはのどけき年の暮かな

果尊法親王

かくしつつ世にふるかひはなけれども跡をばつけつ關の白雪

五百番歌合に　　入道前關白左大臣

絶えざらむ跡をしぞおもふ身にははや二たび越えし關の白雪

千首の歌奉りし時　　中務卿宗良親王

大原や雪ふりつみてみちもなし今日はな燒きそ嶺のすみがま

題しらず　　前中納言爲忠

はしたかのかりばの鳥のおち草を吹きなみだりそ野邊の夕風

　　入道前右大臣

狩衣ひもゆふぐれにならしばや枯葉がするにあらし吹くなり

正平二十年内裏にて人々年中行事を題にて三百六十首の歌よみ侍りける時題を給はりてよみ奉りけるに豐明節會を　　從三位國量

神垣や三室のやまのさかき葉にゆふ懸けそへて降れる白ゆき　前大納言光任

降る雪の埋みのこすや富士のねのいつとも分かぬ煙なるらむ　前内大臣顯

關白家の三百番歌合に遠郷雪を

見わたせば里はありともしら雪のつもるがうへに立つ煙かな　右兵衛督成直

五百番歌合に

かきくらし降れど波にはかつ消えてつもれるかたや雪の白濱　妙光寺内大臣

正平二十年内裏四季の歌合に

湊こすしほかぜさむしかるもかくいなのば山の雪のあけぼの　中務卿宗良親王

住吉社の三百六十番歌合に

ふる雪のつもるにぞ知るうき島の浪にも松のぬれぬものとは　福恩寺前關白内大臣

家に千首の歌よみ侍りける中に關雪

雪ふかきふもとを見てぞ歸りにし山には道もたえぬと思へば

題しらず　後村上院御製

誰かまたこよひも友をたづぬらむ月と雪とのおなじひかりに

入道前關白左大臣

花鳥のなれし名殘もわすれぬにつきと雪とをみよしののやま

住吉の行宮におましましける頃うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりける次に松雪といふ事をよませ給うける

後村上院御製

とし寒きためしはたれもならぶらむ松につもりのうらの白雪

正平二十年内裏四季の歌合に　權大納言顯經

いろかへぬ杉は下枝にあらはれて梢ばかりをうづむしらゆき

題しらず　前參議持房

天授二年内裏百番歌合に　中務卿宗良親王
山たかみ我のみふりてさびしきは人もすさめぬ雪のあさあけ
遠き國に侍りける頃百首の歌よみ侍りけるに雪朝　中務卿尊良親王
今朝は又とひ來る人もありなましかからぬ宿の雪とおもはば
題しらず　二品法親王仁譽
跡いとふやどとや見えむ今日いくかとはれぬ庭につもる白雪
入道前右大臣
よしさらば厭ふになして問ふ人のあとをもまたじにはの白雪
元弘二年百首の歌の中に　文貞公
つかふとてまづ踏みわけし九重の雲井のにはの雪のあけぼの
雪降り侍りし日山里なる人の許よりなどや問はぬと申しおこせて侍りし返事に　讀人しらず

る中に名所雪を　右兵衛督成直

吹きおろすあらしの音もたかしまのみほの松山雪降りにけり

百首の歌よみ侍りける中に雪を　中院入道一品

まきもくの山にや雪のつもるらむあなしの檜原風しをるなり

雪似花といふことを　後村上院御製

春も見しおなじこずゑとなりにけり匂はぬ花の雪のあけぼの

天授二年内裏百番歌合に　権中納言經高

冬がれのこずゑの雪のあさぼらけ青葉まじらぬ花かとぞ見る

題しらず　二品法親王仁譽

春のいろに洩れし檜原もおしなべて雪のはな咲く小泊瀬の山

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

うづもるるひびきもさびし泊瀬山いりあひの鐘にふれる白雪

里よりはしぐるとみつる山の端にゆきをのこして晴るる浮雲

初雪見參の心を　後村上院御製

名を問へばつかさづかさも心して雲居にしるきけさのはつ雪

百首の歌の中に雪　冷泉入道前右大臣

ふりそむる御垣の雪はあさけれどつかへてしるき跡や殘らむ

題しらず　源頼武朝臣

通ひつる夢路はあともなかりけり寢てのあさけの庭のしら雪

住吉社の三百六十番歌合に冬植物　讀人しらず

冬草のおのがさまざまなほ見えて積らぬほどの雪ぞさびしき

嶺雪をよませ給うける　御製

みよしのは風さえくれて雲間よりみゆる高峰に雪は降りつつ

仁譽法親王の家にて人々三十首の歌よみ侍りけ

臥し佗びぬ霜寒き夜の床はあれて袖にはげしき山おろしの風

住吉社三百六十番歌合に冬地儀をよみ侍りける　二品法親王源勝

山川はちる紅葉ばにせかれてやよどむ方よりかつこほるらむ

題しらず　右近大將長親母

冴ゆる日は岩まの水も行きなやみこほりの下に道もとむなり

關白左大臣

さえくらしなごの入江はつらゝゐてかぜにながれぬ蜑の捨舟

二品法親王聖尊

よる氷魚のいろも分れず白妙に雪降りかかる宇治のあじろ木

五百番歌合に　式部卿惟成親王

冴えくらす雪げのくもを便にてまづふりそむる玉あられかな

千首の歌たてまつりし時山雪　關白左大臣

曉の寢ざめの千鳥なれをしぞあはれとはおもふ友なしにして

題しらず　讀人しらず

沖邊にもよらぬ玉藻のとことはに浮きてきこゆる水鳥のこゑ

太宰帥泰成親王

風さむみよどの澤みづこほるらしつねよりまさる蘆鴨のこゑ

上野太守懷邦親王

こやの池の玉藻のとこや氷るらむうきねの鴨の聲さわぐなり

池水鳥といふことをよませ給うける　御製

池水のふかきちぎりも知らるるは羽をならぶるをしのもろ聲

冬の歌の中に　中務卿尊良親王

おのづからまどろむ程にこほるなり涙ひまなきしきたへの袖

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に　後醍醐天皇御製

沖つなみたかしのはまの濱風に夜やさむからし千鳥鳴くなり

五百番歌合に　　　　　　　　　　前内大臣顯

風吹けば浪も岩根をこゆるぎのいそ立ちならし千鳥鳴くなり

題しらず　　　　　　　　　　　　二品法親王聖尊

そらにのみ聲はきこえて浦風のあらいそなみにたつ千鳥かな

文中四年内裏五十番歌合に寒夜千鳥　　　　關白左大臣

夜もすがら汐風さえてささ島のいそこす浪に立つちどりかな

題しらず　　　　　　　　　　　　後村上院御製

いにしへの跡みる和歌の浦千鳥及ばぬかたに音をのみぞ鳴く

正平十六年内裏三十首の歌の中に千鳥を　　　　冷泉入道前右大臣

眞菅たきちかの河風ふけぬとやしば鳴く千鳥こゑぞさびしき

千首の歌奉りし時曉千鳥　　　　　春宮大夫師兼

なには江やみぎはの蘆のよもすがらむすべる霜をはらふ浦風

關白家の三百番歌合に港寒蘆　前内大臣顯

湊入のしほやこしけむおく霜のまたつゆとなる蘆のむらだち

題しらず　二品法親王聖尊

色かへぬときはの杜は木の葉ちる頃さへ月のもるとしもなし

百首の御歌の中に　後村上院御製

影こほる霜夜の月ぞ秋を置きて時こそあれとさやけかりける

正平十六年内裏にて人々題をさぐりて百首の歌

志賀の浦や月すみわたるさざ浪の夜はすがらに千鳥鳴くなり

よみ侍りける時曉千鳥を　藤原伊實

さえわたる霜夜の月のありあけに友呼ぶ千鳥こゑきこゆなり

住吉社の三百六十番歌合に冬動物　左近大將公長

風さむみ朝日ももらぬ山陰にしもながら散る木々のもみぢ葉
關白左大臣
けさのまに散りける程もあらはれて霜こそおかねにはの紅葉
正平二十年内裏三百六十首の歌の中に殘菊帶霜　前大納言實爲
咲きそめし秋と見るまで白菊のうつろふいろをうづむ霜かな
家に百首の歌よみ侍りける中に　右大臣
あだにみし露のゆかりの草葉さへ置き迷ふ霜の下に枯れつつ
題しらず　後村上院御製
花にみし野邊の千草は霜置きておなじ枯葉となりにけらしも
前中納言爲忠
朝な朝な霜置く山のをかべなる刈田のおもにかるるいなぐき
江寒蘆をよませ給うける　嘉喜門院

あすか風いたづらに散るもみぢかな都をとほみみる人やなき
權大納言具氏

散りぬれば秋のこずゑの面影もいまはあらしの山のもみぢ葉
前中納言實秀

なべてみな殘らぬ山の木の葉かな吹きと吹きぬる四方の嵐に
度會盛行

梢をばさそひつくしてやまかぜの落葉に殘るおとのさびしさ
最惠法親王

みむろ山深き谷さへ埋もれてあさくなるまで散る木の葉かな
谷落葉といふことをよませ給うける
後村上院御製

山人のあとさへ見えずなりにけり木の葉ふりしくたにの下道
千首の歌めされし時朝落葉
御製

権中納言經高

嵐吹くのきの板間のうづもれて木の葉にもらぬむら時雨かな

冬の歌の中に

二品法親王聖尊

染むるより契りや置きし紅葉のちらばともにとふる時雨かな

五百番歌合に

關白左大臣

散りかかるよその木の葉の時雨にやつれなき松も色變るらむ

建武二年内裏千首の歌に題をたまはりてよみて

奉りけるに冬植物を

正三位國夏

もみぢ葉をさそふとすれど神無月かぜにぞ秋の色はのこれる

題しらず

冷泉入道前右大臣

ちれば又行方しられぬ木の葉かなとはばや誘ふ風のやどりを

前中納言爲忠

冬の歌の中に　　従三位朝棟

音づれて過ぎぬと聞けば槇の屋にまた廻りきてふる時雨かな

前内大臣隆

ふきまよふ嵐につけてうき雲のゆくへさだめずふる時雨かな

住吉社の三百六十番歌合に冬天象　　権大納言顯經

吹きまよふ嵐にさわぐうきぐものはや一方はしぐれてぞ行く

百首の御歌の中に　　後村上院御製

聞くたびに驚かされてねぬる夜の夢をはかなみふる時雨かな

住吉社の三百六十番歌合に冬天象　　讀人しらず

神無月われぞおもひのほかにふる時雨はなべてこのごろの空

前中納言光有

かみなづき嵐につるる木の葉さへちりかひ曇り空ぞしぐるる

夜や寒き時雨やしげきあかつきの寢覺ぞ冬のはじめなりける

木葉ふりしぐるる雲の立ちまよふ山の端みれば冬は來にけり　從三位行義

題しらず

秋だにもしぐれしものを今朝よりはことわりなりや村雲の空　入道前右大臣

この頃のねざめはもののかなしきに曉ばかりしぐれずもがな　嘉喜門院

あしびきの山かきくもり神無月けふもいくたび時雨ふるらむ　中院入道一品

山里に住みける頃よみ侍りける

いほりさす宿はみ山のかげなれば寒く日ごとにふる時雨かな　權中納言經高母

千首の歌の中に

吹きおくる嵐のすゑのうき雲やとをちの里にまたしぐるらむ

新葉和歌集　卷第六

冬歌

越の國に侍りし頃羇中百首の歌よみて都なる人のもとへつかはし侍りし中に初冬を　中務卿宗良親王

都にもしぐれやすらむこしぢには雪こそ冬のはじめなりけれ

住吉社の三百六十番歌合に冬天象　土御門入道前右大臣

かねて聞く日數ならずば定めなきしぐれを冬と賴まざらまし

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　冷泉入道右大臣

冬來ぬとけさは伊吹の嶺に生ふるさしも曇らぬ空ぞしぐるる

初冬の心をよませ給うける　後村上院御製

したひえぬ袖のなみだに暮れてゆく秋はとまらでのこる白露

建武二年内裏千首の歌の中に九月盡を　　中務卿尊良親王

さりともと猶や慕はむ今日にのみ限らぬ秋のわかれなりとは

染めつくす秋の紅葉のにしきもて手向にあけるる神なびのもり

正平八年内裏千首の歌の中に山紅葉を　前中納言爲忠

嵯峨の山もみぢのにしきたちきてむ千世の古道いそぐ御幸に

題しらず　權中納言經高母

まさ木ちるおとぞ淋しき夕暮のあらしにきほふ秋のむらさめ

從三位行義

紅葉せぬこずゑを杉のしるしにて秋やとはまし三輪の山もと

正平十七年内裏百首の歌の中に　權大納言公夏

もみぢちる山のすそ野の花薄くれなゐくくるなみかとぞ見る

暮秋霜といふことをよみ侍りける　春宮大夫師兼

長月や末野のしものあさぼらけいまだに秋のおもかげはなし

題しらず　前内大臣隆

るついでに秋植物といふ事をよませ給うける　　後醍醐天皇御製

立田山みねのにしきも中たえぬ松をのこして染むるもみぢ葉

題しらず　　冷泉入道前右大臣

朝な朝なしぐれぬかたも嵐山みねにもをにも染むるもみぢ葉

五百番歌合に　　源頼武朝臣

しぐれ行く磯山かげの下紅葉いくしほまでとさして染むらむ

中宮女御にておましましける頃紅葉の枝を奉らせ給ひたりければ　　嘉喜門院

君がはや秋のみやるに移るべきほどを紅葉のいろにこそ知れ

御かへし中宮にかはり奉りてよませ給うける　　御製

ちらでなほ千歳の秋も色そへよはこやの山のみねのもみぢ葉

紅葉をよめる　　右近大將長親母

延元三年九月十三夜内裏三十首の歌の中に月前紅葉　右大辨清忠

照りまさる月の桂にならふらししぐれぬさきの秋のもみぢば

題しらず　前左近大將公冬

そめ殘す木末にぞなほ秋の色のいたりいたらぬ程も見えける

嶺紅葉をよませ給うける　中宮

み吉野の青根が嶺は名のみして時雨にうつる木々のもみぢ葉

千首の歌奉りし時簷紅葉　右近大將長親

荻の葉のたよりもつらきあらしかな軒端のこずゑ色かはる頃

百首の御歌の中に松間紅葉を　後村上院御製

枝かはす松はつれなき木の間より紅葉や秋のいろを見すらむ

建武二年人々題をさぐりて千首つかうまつりけ

菊花といへることをよませ給うける　後醍醐天皇御製

うつろはぬ色こそ見ゆれ白菊のはなと月とのおなじまがきに

岸邊の菊といふことを　最惠法親王

ぬれてほすひまやなからむ浪かかる岸のいはねの白菊のはな

妙光寺内大臣の家の百首に　權中納言長賢

雁なきてさむきゆふべの山陰に木の葉いろどるあき風ぞふく

秋の歌の中に　文貞公

風さむみあきたけ行けば露霜のふるの山邊はいろづきにけり

度會通詮

はつ時雨ふりにけらしも外山なる柞のこずゑいろづきにけり

妙光寺内大臣

高妙のまつの木の間のはつもみぢ尾上の秋はいつしぐれけむ

月の歌の中に　　前左近中將光實

淺茅生やかれ行く小野のしもの上になほ影やどす有明のつき

思ふ事侍りける頃秋霜をよめる　　中務卿尊良親王

うきものと身をしら露やこぼるらむたもとにむすぶ秋の初霜

秋霜の心をよみ侍りける　　右近大將長親母

いかにしてかがみの影のふりぬらむけふぞ今年の秋のはつ霜

吉野の行宮におましましける頃栽菊といふことをよませ給うける　　後村上院御製

移しうゑば山路の菊も今年よりはやここのへの色に咲きなむ

年中行事三百六十首の歌の中に重陽宴を　　權中納言長賢

百敷やそでをつらぬるもろ人のとる手もにほふ菊のさかづき

元弘三年九月十三夜三首の歌講ぜられし時月前

元弘三年九月十三夜三首の歌講ぜられし時月前擣衣といふことを　後醍醐天皇御製

聞きわびぬはつき長月ながき夜のつきの夜寒にころもうつ聲

延元三年九月十三夜内裏月三十首の歌の中に月前雁　前大納言光任

長月のつきも夜さむになるなべに空にも雲のころもかりがね

同じ心を　妙光寺内大臣

はつ霜のおくての稻葉かりぞ鳴くよさむの月のあけがたの空

題しらず　權大納言公夏

秋の夜のありあけの空になるままに山の端かへて出づる月影

五百番歌合に　式部卿惟成親王

夜もすがら吹きつる風やたゆむらむ村雲かかるありあけの月

聞きなるるちぎりもつらし衣うつ民の伏屋にのきをならべて

羇中百首の歌よみ侍りし中に　中務卿宗良親王

みやこには風のつてにもまれなりし砧の音をまくらにぞ聞く

秋の歌の中に　前内大臣隆

里人の袖にかさねて置く霜のさむきにつけて打つころもかな

日前宮に奉りける五十首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

山里は夜寒かさねておく霜のみのしろごろもいまや打つらむ

關白家の三百番歌合に待人擣衣といふことをよ

みてつかはしける　右近大將長親

待ち出づる月は夜寒のありあけにいひしばかりと打つ衣かな

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に故鄕擣衣　僧正慈靜

みしあきの月に問はばや故鄕の人はかはらでころも打つやと

延元三年九月十三夜內裏月三十首の歌の中に月前擣衣　　　前大僧正信聰

秋風も夜さむになれば月かげの更くるまでうつ麻のさごろも

住吉社の三百六十番歌合に秋雜物　　　讀人しらず

しらぬいせをの蜑のすてごろも秋なりけりと浪や打つらむ

題しらず　　　幸子內親王

すまの蜑の袖の秋風更くる夜に汐たれごろも打ちもたゆまず

　　　太宰帥泰成親王

おしなべて夜さむに秋やなりぬらむ里をもわかずうつ衣かな

　　　京極贈左大臣

ねざめして夜寒をわぶる人もあらば聞けとや賤が衣擣つらむ

遠き國に侍りける頃聞擣衣といへる心をよめる　　　中務卿尊良親王

月前蟲といふことをよませ給うける　後醍醐天皇御製

ねに立てて蟲も鳴くなり身一つの浮世を月にかこつと思へば

題しらず　四條贈左大臣

秋さればさらでも袖やつゆけきと蟲の音聞かぬ夕ぐれもがな

二品法親王源勝

なく蟲のこゑを尋ねて分け行けば草むらごとに露ぞみだるる

千首の歌奉りしとき聞蟲　中務卿宗良親王

床はあれてたが秋ならぬ蟲の音をふるき枕のしたに聞くかな

松蟲の鳴きけるを聞きてよませ給うける　嘉喜門院

常磐なる名にはならはで松蟲の夜な夜な霜にこゑの枯れ行く

秋の歌の中に　坂上頼澄

むしの音もよわりにけりな露霜の夜寒は老の身にもかぎらず

文貞公女

西にのみ行くとは見えずむら雲の絶間にいそぐあきの夜の月

文貞公

浮雲ののこらぬ空にすむ月は行くとも見えで夜半ぞ更けぬる

後醍醐天皇御製

幾秋をおくりむかへていたづらに老となるまで月を見つらむ

妙光寺内大臣

ながめても我が世ふけぬと悲しきは四十[よそぢ]にかかる山の端の月

二品法親王仁譽

山ふかきかぎりとおもふみ吉野をなほ奥ありと月は入りけり

延元三年九月十三夜うへのをのこども題をさぐりて月の三十首の歌つかうまつりけるついでに

権中納言經高母

しら露のおくての山田からで見む稲葉おしなみ月やどりけり

前大納言光任

月やなほわが身は知らぬいにしへの秋をも見する鏡なるらむ

正三位國夏

いさやその變らぬ影はしらねどもこれぞむかしの秋の夜の月

夜更くるまで月を見てよみ侍りける

光明臺院入道前關白左大臣

わが袖にやどるたよりとなりにけり月のためには落ちぬ涙も

千首の歌奉りし時夜月を

春宮大夫師兼

世の中のうけくにあきの月をみて涙くもらぬ夜半ぞすくなき

題しらず

妙光寺内大臣

さのみやは更けては露の置きそはむ月に涙の落つるなりけり

千首の歌奉りし時同じ心を　　關白左大臣

月だにも軒のしのぶをもりかねてすまずなりぬる秋のふる郷

題しらず　　前中納言爲忠

つゆむすぶ袖をころもの關路とやそら行く月も影とどむらむ

貞子内親王

秋かぜの吹けばかつちる淺茅生のつゆを尋ねてやどる月かげ

住吉社の三百六十番歌合に　　讀人しらず

山ふかみ月もやどりをかるもかく臥猪のとこのつゆの下くさ

題しらず　　新宣陽門院

しきたへの枕もうとくなりにけり月になれ行く秋の夜な夜な

中院入道一品

かくてなどすまざりけると山里の月みる秋のこころにぞ問ふ

あかしがたくまなき月にさそはれて浦づたひ行くあきの舟人　津守國久

須磨の蜑の袖にくまなき夜半の月雲のころもや間遠なるらむ　新宣陽門院

難波江やあしの浦かぜ更くる夜に月の御舟はさはらでぞ行く

正平十六年九月十三夜内裏にて人々題をさぐりて歌よみ侍りける時江上月を　冷泉入道前右大臣

またやみむ松吹く風もすみのえや名だかき月の秋のこよひを

月移河水といふことを　兵部卿師成親王

吉野河いはこすなみにかげ見れば月もくだくる夜半の秋かぜ

故郷月といへることを　權大納言公夏

荒れにける志賀のみやこの秋風にひとりや月の宮木もるらむ

いふ所に住み侍りし頃九月十三夜月いとあかか
りしに申し送り侍りし　關白左大臣
おもかげも見しにはいかにかはるらむ姨捨ならぬ山の端の月
かへし　中務卿宗良親王
身のゆくへなぐさめかねし心にはをばすて山の月も憂かりき
野月を　讀人しらず
分けきつる野原の萩をえだながらうつしてすれる袖の月かげ
月の歌の中に　妙光寺内大臣
しほがまの浦のけぶりもたゆむ夜に月のくまなきうき島の松
渡月をよませ給うける　後村上院御製
明石がたとわたる月の影更けて雲ものこらぬあきのうらかぜ
題しらず　從三位行義

雨後月といへることを讀み侍りける　輿喜左大臣

心なきものとはいはじ雨はれて月にかからぬ夜半のうきぐも

水邊月といふことをよめる　前中納言氏定

あきかぜや八重たつ雲をはらふらむ横川のみづにすめる月影

住吉社の三百六十番歌合に　前左近中將光實

葛城やたかまの月のかげ更けてくもぞよそなるみねの秋かぜ

民部卿光資

をばすての山のあらしに雲きえて月すみわたるさらしなの里

姨捨山ちかく住み侍りし頃夜更くるまで月を見て思ひつづけ侍りし　中務卿宗良親王

これにますみやこの苞はなきものをいざといはばや姨捨の月

中務卿宗良親王信濃國より上りて河內國山田と

新葉和歌集　卷第五

秋歌下

五百番歌合に　　關白左大臣

澄みのぼる雲井の月にいとふかな衞士のたく火の夜半の煙を

延元三年九月十三夜うへのをのこども題をさぐりて月の三十首の歌つかうまつりけるついでに

月前雲といへる心をよませ給うける　　後醍醐天皇御製

わきてなほ今宵ぞつらき夜半の雲月には厭ふならひなれども

月前霧　　吉田前内大臣

月影や山の端とほくなりぬらむふもとの霧は立ちもおよばず

りける時月といふことをよませ給うける　後醍醐天皇御製

みる人のこころもなどかすまざらむ空にくもらぬ秋の夜の月

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に禁中月を　妙光寺内大臣

見る人のこころのくまも晴るるまで猶すみまされ雲の上の月

中務卿宗良親王あづまに侍りし頃住吉の行宮より

たまはせ侍りし　後村上院御製

年を經るひなのすまひの秋はあれど月は都とおもひやらなむ

御かへし　中務卿宗良親王

いかにせむつきも都とひかりそふ君すみの江の秋のゆかしさ

月ははや山のはつかに出でそめて松のあなたに影ぞやすらふ

題しらず　新待賢門院

いでぬより光ばかりをさき立てて木の間に更くる秋の夜の月

貞子内親王

雲はるる遠山まつの木の間よりこころつくさで出づる月かげ

五百番歌合に　前大納言光有

あきかぜに雲ものこらぬ山の端の梢をわけて出づるつきかげ

月の歌の中に　祥子内親王

はるかなるふもとをこめて立つ霧の上より出づる山の端の月

中務卿宗良親王

秋かぜにまよふ村雲もりかねてつらきところやおほぞらの月

建武二年人々題をさぐりて千首の歌つかうまつ

一木まづきりのたえまに見え初めて風にかず添ふうらの松原　御製

千首の歌よませ給うける時夕月

夕かぜの雲吹きはらふなかぞらに出でて夜をまつ月の影かな　入道前右大臣

月の歌の中に

出でそむる夕の影に知られけりさやけかるべきあきの夜の月　冷泉入道前右大臣

よそにたつ雲をもはらへ夕月夜うつろふ山のみねのあきかぜ　中院入道一品

待つもうし山のあなたの里人となりてぞ月は見るべかりける　二品法親王仁譽

山の端のあらはれわたる程よりはしばしやすらふ月の影かな　權中納言實興

關白家の三百歌合に山月初昇といふことを

松風のおとはきこえてたかさごの尾上をこむるあきの夕ぐれ

正平二十年内裏七百首の歌の中に霧底筏を　　妙光寺内大臣

筏おろすさほの川かぜ吹きぬらし浮きてながるる秋のゆふ霧

賀名生の行宮にて人々歌よみ侍りける中に　　冷泉入道前右大臣

わすれめや御垣にちかき丹生河のながれに浮きてくだる秋霧

秋の歌の中に　　紀　種　文

難波がた入江も見えず立ちこめて霧よりいづる秋のふなびと　　從三位國量

住吉のおきをふかめて立つ霧にしづみいでぬる淡路しまやま

五百番歌合に　　前大納言光有

もしほ燒く煙のすゑも見えそめて空より晴るる浦のあさぎり

題しらず　　後村上院御製

あふ事はかたののみ野のさを鹿や淀のわたりの月に鳴くらむ

右大臣

有明のそらになるまできこゆなり月影したふさをしかのこゑ

讀人しらず

あきやまの木蔭しぐれてなく鹿のおのれもそむる聲の色かな

從三位行義

村雨のすぎ行くくもはさか越えて阿部の田のもに秋風ぞふく

中院入道一品

誰かはと思ふものから故郷のたより待たるる初雁のこゑ

五百番歌合に　御製

風はやみしぐるる雲もたえだえに亂れてわたる雁のひとつら

題しらず　左大辨時長

秋の歌の中に
　右近大將長親母

あきかぜの吹かぬたえまは白露の玉のをながき糸すすきかな

五百番歌合に
　入道前關白左大臣

おく山の松吹くかぜにたぐひ來て軒端にちかきさをしかの聲

朝鹿を
　御製

小倉やまみねの朝露立ちならしおもひつきせぬさを鹿のこゑ

秋の歌の中に
　文貞公女

聞く人も袖ぞぬれける秋の野の露分けて鳴くさをしかのこゑ

興國五年内裏にて人々題をさぐりて歌よみ侍りける時夜鹿を
　民部卿親忠

夜もすがらおのが涙にくもるとも知らでや鹿の月に鳴くらむ

題しらず
　菅原爲基

前大納言守房

萩の戸の花もいろそふしら露に千代のかず見る玉しきのには

原萩をよみ侍りける　前中納言爲忠

むらさきは一もとならで秋はぎの花もいろこき武藏野のはら

關白家の三百番歌合に萩欲移といふことを　前中納言實秀

置く露もうつろはむとや秋はぎの下葉をかけて色かはり行く

萩欲散といふ心をよませ給うける　後村上院御製

萩が花うつろふいろに高砂のをのへの風は吹かずもあらなむ

建武二年内裏千首の歌の中に薄を　中務卿尊良親王

とまるべき宿をばさてもいづくとて野邊の尾花の人招くらむ

千首の歌よませ給うける中に岡薄を　御製

ゆふ風になびくをかべの花すすき入口をかへす袖かとぞ見る

中に故鄕露　　　　　　　　　　　福恩寺前關白內大臣

夜な夜なのつゆのやどりになりにけり淺茅が原と荒るる故鄕

住吉社三百六十番歌合に秋植物を　　　　　讀人しらず

桐の葉もただやは落つるわが淚おなじくささそへ秋のゆふかぜ

秋雨をよませ給うける　　　　　　　　　後村上院御製

おとづるる桐の落葉もまがふらしあはれな添へそあきの村雨

題不知　　　　　　　　　　　　　　　　新待賢門院

花はまだ片枝ばかりに咲き初めて露のみしげき庭のをぎはら

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　嘉喜門院

萩がえに置けらむつゆの白玉をはらはで見せよ野邊の秋かぜ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　後村上院御製

にしきかと見るだにあるを秋萩の花にむすべる露のしらたま

うき秋のかぜのやどりとなるたびに植ゑてくやしき庭の荻原

秋の歌の中に　中務卿宗良親王

そよとのみ庭のをぎはら吹く風にこぬ人賴むやどぞさびしき

讀人しらず

夕暮はよきてとおもふ荻の葉にあやにくに吹く風のおとかな

秋夕の心を　掌侍賴子

あはれてふならひに添へて身をあきの夕は袖に露ぞひまなき

入道前右大臣

津の國のなにはの事とわかねどもうらかなしきは秋の夕ぐれ

源重春朝臣

こころなき尾花が袖も露ぞおく秋はいかなるゆふべなるらむ

家にて人々題をさぐりて千首の歌よみ侍りける

正平十三年内裏七夕七首の歌の中に七夕後朝を

遍照光院入道前太政大臣

天の河けさしらなみの立ち歸り年のわたりをまたや待つらむ

おなじ心を

幸子内親王

たちかへりわたるもつらし七夕のけさはうき世の天の河なみ

荻をよみ侍りける

前内大臣隆

吹く風はまだ身にしまで荻の葉のおとばかりなる秋の夕ぐれ

閑居秋風といふことを

新宣陽門院

訪ふ人もなきやどからのさびしさを秋ぞと告ぐる荻の上かぜ

題しらず

冷泉入道前右大臣

心からまた植ゑおきて荻の葉にこぞもうかりし風を聞くかな

千首の歌奉りし時庭荻といふことを

權中納言經高

暮れ行かばあふ瀨にわたせ天の河水かげ草のつゆのたまはし

題しらず　妙光寺内大臣

暮をまつみづかげぐさの露の間に千年の秋をふるなみだかな

讀人しらず

待ちえつるなみだのひまの秋かぜにこよひや袖を星あひの空

興國五年七月七日内裏にて人々歌つかうまつりける中に　四條贈左大臣

今年より君にしちぎれ雲のうへに二つの星のゆきあひのそら

五百番歌合に　權中納言實興

まどほなるちぎりながらも秋を經てぬる夜數そふ星あひの空

題しらず　前中納言氏定

七夕のあまのはごろもきても又かへるうらみの數やかさねむ

關白家の三百番歌合に薄未出穗といふことをよめる

前内大臣顯

かぜ吹けば露ちる小野のしの薄穗にこそ出でね秋は來にけり

建武二年内裏千首の歌の中に

中務卿尊良親王

いつしかも吹けば身にしむ荻の葉の風を便にあきは來にけり

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に荻知秋といふことを

從三位儀子

秋來ぬとたれか知らまし下荻のすゑこす風のおとに立てずば

同十三年七夕七首の歌講ぜられし時待七夕といふことをよませ給うける

後村上院御製

いつはりのなきためしをや契り置きて待ち習ひけむ星合の空

七夕橋

冷泉入道前右大臣

源氏の物語の言葉にてよませ給うける御歌の中に

中宮

都にやまだ入り立たぬ秋ならむおとはの山はかぜぞ身にしむ

秋の御歌の中に

新待賢門院

けさははや荻の上葉におと立てて昨日にもにぬ秋のはつかぜ

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて百首の歌よみ侍りける時初秋の心を

福恩寺前關白内大臣

住吉の松にすずしく聞き初めつゝあき來るかたのおきつしほ風

兵部卿親王の家にて百首の歌よみ侍りける中に

民部卿光資

こころなき伊勢をの蜑も潮風の身にしむよりや秋を知るらむ

海邊初秋を

中務卿宗良親王

浪によるみるめに秋はなけれども松におとそふ浦かぜぞ吹く

新葉和歌集　卷第四

秋歌上

千首の歌奉りし時立秋風をよめる　　中務卿宗良親王

淺茅生の小野の篠原かぜそよぎ人知るらめやあき立ちぬとは

題しらず　　前中納言爲忠

夏と秋と行合(ゆきあひ)のわせのほのぼのと明くる門田の風ぞ身にしむ

千首の歌奉りし時初秋曉を　　右近大將長親

あかつきの寐覺の床に露ぞおくまくらもいまや秋を知るらむ

春宮大夫師兼

今よりのねざめの床のあはれまでかねて知らるる秋のはつ風

たがみそぎ夕浪かけて川の瀨の麻の葉ながしかぜぞすずしき

せきとむる岩井の淸水そこきよみ夏のよそなる松のしたかげ

樹上蟬といへる心を　　前中納言實秀

山もとの柳のこずゑうちなびき風にしたがふせみのもろごゑ

夕立をよませ給うける　　後村上院御製

なるかみの音は雲井にたかさごの松風ながら過ぐるゆふだち

題しらず　　前參議持房

いかばかり槇の下つゆみだるらむ夕立すぐるかぜのなごりに

正三位國夏

空はなほくもりかねたるなつの日に山をはなれぬ夕立のくも

五百番歌合に　　入道前關白左大臣

ふるほどは結びもあへで夕立のみちの草葉にしげきつゆかな

住吉社三百六十番歌合に夏雜物　　讀人しらず

春日野や霜に朽ちにし冬草のまたもえ出でて飛ぶほたるかな

題しらず　妙光寺内大臣

汝もまたおもひに燃えてかげろふの小野の淺茅に飛ぶ螢かな

百首の歌よみ侍りける中に螢　右大臣

飛ぶ螢もえずばいかで身に餘るおもひ有りとも外にしらまし

おなじ心を　前中納言爲忠

もえあまる葦のしのびのおもひ故こやに夜更けてとぶ螢かな

納涼の心を　新宣陽門院

夏の日の入りぬる磯の松が根にゆふなみかけて風ぞすずしき

五百番歌合に　右近大將長親

しげりあふさくらが下の夕すずみ春はうかりし風ぞ待たるる

內裏五十番歌合に　左近大將公長

明けぬるかはやかげうすし夏衣かとりのうらのみじか夜の月
前大納言光任

夏暁月を
難波潟あしのかりねの夢さめて袖にすずしきみじかよのつき
後村上院御製

百首の歌よませ給うける中に螢を
夏がりの玉江の蘆のよもすがら待ち出づる月はありあけの空
後村上院御製

題しらず
月夜にはあらそひかねてむばたまの闇ぞ螢のひかりなりける
讀人しらず

水邊螢をよませ給うける
あしまゆく野澤の螢たえだえにひかり見えさす夕やみのそら
後村上院御製

千首の歌よみ侍りける中に野螢といふことを
夏草のしげみが下のうもれ水ありと知らせて行くほたるかな
春宮大夫師兼

夏の歌の中に　権大納言公夏

風そよぐならのはがくれ影見えてくもるも涼し夏の夜のつき

文貞公

やまのはにかすみも霧も立ちそはぬ月のさかりは夏の夜の空

千首の歌奉りし時夏月易明といへることをよみ侍りける　關白左大臣

山の端のつらさを知らで夏の夜はなかぞらにのみ殘る月かな

題しらず　二品法親王聖尊

ときしらぬ山こそあらめ夏の夜の月さへこほる富士の川なみ

後醍醐天皇御製

短夜の月をばめでじあぢきなくかたぶきやすき影もうらめし

妙光寺內大臣

みやこだに淋しかりしを雲はれぬ吉野のおくの五月雨のころ

信濃國に侍りし頃都なる人の許へ申しつかはし

侍りし　　中務卿宗良親王

思ひやれ木曾のみかさも雲閉づる山のこなたの五月雨のころ

五百番歌合に　　權中納言經高

昔たれはなたちばなに忍べとて袖の香ながらうつし植ゑけむ

題しらず　　前中納言爲忠

しげりあふ信太の杜の下草は千枝のこずゑになほまさりけり

關白家の三百番歌合に夏草深といふことを　　權中納言實興

ふみ分けしその通路もいまさらにまよふ夏野のふかくさの里

夏草を　　後醍醐天皇御製

茂るともにはの夏草よしさらばかくてやあきの花を待たまし

五月雨はみかさぞまさる山川のあさせしら浪たどるばかりに

正平八年内裏千首の歌の中に瀧五月雨を　前中納言爲忠

うちはへてさらす日もなし布引の瀧のしら絲のさみだれの頃

おなじ心を　冷泉入道前右大臣

五月雨ににごりて落つる瀧のうへの御舟の山は雲ぞかかれる

山五月雨といふことを　前内大臣隆

しげりあふ木末は雲にうづもれて山の端見えぬ五月雨のころ

題しらず　權中納言經高母

君があたりいくへの雲かへだつらむ伊駒の山の五月雨のころ

吉野の行宮にてうへのをのこども題をさぐりて

歌よみ侍りけるついでに五月雨といふことをよ

ませ給うける　後醍醐天皇御製

わきてわが頼む心のふかきえに引ける菖蒲のねとは知らなむ

御かへし　中務卿宗良親王

ふかきえも今日ぞかひある菖蒲ぐさ君が心にひくとおもへば

羇中百首の歌よみ侍りしに菖蒲を

菖蒲ひくこよひばかりやおもひやる都も草のまくらなるらむ

題しらず　上野太守守永親王

うづもれし苔の下水おと立てていはねを越ゆる五月雨のころ

讀人しらず

山川やおとそふ浪の岩こすげはずゑもしたにさみだれのころ

前大納言守親

まこもかる人こそ見えね山城のよどのわたりの五月雨のころ

百首の御歌の中に五月雨を　後村上院御製

吉野の行宮にて百首の歌よませ給うける中に聞郭公といふことを　　中宮

聞きなるるやまほととぎすこの頃の都の人ははつね待つらむ

住吉社三百六十番歌合に夏動物　　讀人しらず

鳥の音のなべて聞えぬ山にしも汝は鳴きけるほととぎすかな

雨中郭公といふ心を

郭公なれをまたずば五月雨のやみを夜よしとおもはましやは

題しらず　　嘉喜門院

足曳のやま立ちはなれほととぎすおのが五月は里なれにけり

前中納言爲忠

時鳥己がさつきのくれはどりあやめも知らぬときと鳴くなり

五月五日菖蒲の根につけてたまはせ侍りし　　新待賢門院

題しらず　　妙光寺内大臣

誰になほしのぶのさとの郭公あかつきふかきくもに鳴くらむ

正平二十年内裏四季の歌合に

なきぬべきけしきの杜の村雨に忍びもあへぬほとゝぎすかな

聞郭公といふことを　　前大納言季繼

鳴きすてゝ行くかたしらぬ時鳥やよや待てともえこそ慕はね

正平二年内裏千首の歌の中に夜郭公　　前大納言光任

この里はまだ夜深きにほとゝぎすなきてや人の寢覺まつらむ

內裏百番歌合に　　中務卿宗良親王

八聲なけ寢覺のそらのほとゝぎすゆふつけ鳥の同じたぐひに

曙郭公といふ心を　　妙光寺大臣

ほのぼのとあくる外山の横雲になきて別るゝほとゝぎすかな

關白家の三百番歌合に郭公幽といふことをよみてつかはしける　右近大將長親

ほのかなる闇のうつつの一聲は夢にまさらぬほととぎすかな

正平十二年内裏五首の歌の中に曉郭公を　冷泉入道前右大臣

ひところゑの名殘ありあけの月かげにさらに待たるる郭公かな

寢覺郭公といふことを　前中納言忠成

一聲はまたもや聞くとほととぎす寢覺のままに明す夜半かな

新宣陽門院

ひと聲はそれかあらぬかほととぎす同じ寢覺の人に問はばや

うへのをのこども題をさぐりて百番歌合し侍りけるついでに郭公を　御製

ほのかなる寢覺のそらの時鳥それとも聞かじ待つ身ならずば

建武二年内裏千首の歌の中に夏動物を　　中務卿尊良親王

時鳥なきつとかたる人しあれば今日を初音といかがたのまむ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正三位國夏

またれてぞいまも鳴くなる時鳥身はならはしの去年のふる聲

夏の歌の中に　　　　　　　　　　　　　　前大納言光任

時鳥なきてやすらへ待ちわびしこころづくしをわれも語らむ

天授二年内裏百番の歌合に時鳥を　　　　　民部卿光資

聞きてこそいとど待たるれ時鳥はつ音ばかりとなに思ひけむ

おなじ心を　　　　　　　　　　　　　　　従三位親文

いづかたになほも待つらむ時鳥なきていまきのをかの初音を

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　上野太守守永親王

ほのかなる一聲なれどほととぎすまた聞く人のあらば頼まむ

ける中に 右兵衛督成直
さとわかぬ光にならへほとゝぎすおなじ山路を月に出でなば
天授二年内裏百番歌合に 關白左大臣
ほとゝぎす心つくさで山里の憂きにかへたるひところもがな
五百番歌合に 前大納言實爲
つひによも忍びは果てじ時鳥こゝろつくさではつね聞かせよ
題しらず 中院入道一品
うたゝねの夢には聞きつ郭公おもひあはするひところもがな
讀人しらず
降らぬ夜のこゝろは知りつほとゝぎす今よりなかめ村雨の空
太宰帥泰成親王
よそにはや鳴くとは聞きついまはよも待つ夜かさねじ山時鳥

足曳の山ほとゝぎすいづこにか木がくれてのみ五月待つらむ　権大納言

待郭公といふことを

郭公待つ夜かさなるおもひ寝の夢にさへなどつれなかるらむ　上野太守懐邦親王

一聲もをしほの山のほとゝぎす神代もかくやつれなかりけむ　冷泉入道前右大臣

夜をかさねつれなしとても郭公またではいかがありあけの空　前中納言氏定

千首の歌奉りし時月前時鳥といふことを

つれなさのほどを知らせてありあけの月にもなかぬ時鳥かな　春宮大夫師兼

兵部卿親王の家にて人々五十首の歌よみはべり

忍ぶべき初音なりともほとゝぎす雲間の月にものわすれせよ

百首の歌よみ侍りし中に　中務卿宗良親王

春わけし跡にしをりを殘しおきてさくらはしるき夏木立かな

新樹を　前大僧正頼意

花にみしきのふの春の面影もいつしかかはるなつこだちかな

題しらず　貞子内親王

卯の花の咲きての後に見ゆる哉こころありけるしづが垣ほは

正平二十年内裏三百六十首の歌に漸待郭公と

いへる心を　前内大臣隆

今よりや寢ぬ夜かさねてほととぎす忍ぶる頃の初音またまし

同八年内裏千首の歌の中に　前中納言爲忠

み山より出づるをぞ待つほととぎすゆふべの月の光ならねど

百首の歌よみ侍りける中に　權中納言長賢

新葉和歌集　巻第三

夏歌

百首の歌よみ侍りける中に　冷泉入道前右大臣

もゝしきやけふ宮人はあかざりし花のかとりの白がさねせり

更衣惜春といへる心を　中宮

いつしかとたちはかふれど夏衣こゝろにのこる春のいろかな

建武二年内裏千首の歌の中に　中務卿尊良親王

夏衣たつ日にかぎる花ぞめのそでのわかれぞしたふかひなき

五百番歌合に　御製

おしなべて山も青葉になりにけり花見し春はきのふと思ふに

千首の歌奉りし時春欲暮といへる心を　春宮大夫師兼

花はちり月はありあけになる頃の春のわかれぞいはむ方なき

暮春花といふことをよませ給うける　嘉喜門院

ふく風のめに見ぬかたに誘はれて花とともにや春の行くらむ

暮春藤を　新宣陽門院

明日までも猶咲きかかれ藤の花春のゆかりのけふぞとも見む

春の御歌の中に　新宣陽門院

花散れるみづの流をせきとめて春をもかへせ小田のますらを

山吹をよめる　冷泉入道前右大臣

よしの河ゆふなみかけて行く春のかへらぬいろを見する山吹

彌生の末つ方妙光寺内大臣信賢卿など誘ひて住の江の藤見侍りける折しもかしこにまかりあひて侍りけるに歸りて後申しつかはしける　前大僧正頼意

すみのえの松もさか行く色見えてつらなる枝にかかる藤なみ

百首の歌よみ侍りける中に藤を　文貞公

世々かけて絶えじとぞおもふ春の日の光にあたる北の藤なみ

暮春の心をよませ給うける　後村上院御製

浪こゆと見えしは花のさかりにて春の日數はすゑのまつやま

かへし　春宮大夫師兼

尋ね見ぬ身のおこたりと櫻花ちると聞くにぞおどろかれぬる

杜花といふことを　右近大將長親

あらしふく梢は春もなくなりておのれ花咲くもりのしたくさ

五百番歌合に　權中納言實興

花ははや散りすぎにける梢にもつらきなごりの山かぜぞ吹く

春の歌の中に　右近大將長親母

ひかりなき谷には春もおそざくら外の散りなむ後や見るべき

曲水宴を　妙光寺内大臣

廻りあふ今日はやよひのみかは水名に流れたる後のさかづき

路苗代といふことを　權大納言公夏

玉ほこのみちあるときは苗代の水もこころにまかせてぞひく

ありへての後をばしらず櫻ばな散りてぞ人にうきめ見えける
花雪　中務卿宗良親王
つらければ花とも見せじよしやただ今日こぬ庭のあすの白雪
題しらず　前内大臣隆
あらし吹く梢ばかりは散りそめてまだ深からぬ花のしらゆき
五百番歌合に　權大納言具氏
枝よりはあだに散るとも木のもとにしばしは殘れ花のしら雪
落花の心を　兵部卿師成親王
このもとに散りしく花を吹きたててふたたび匂ふ春の山かぜ
彌生の頃散りすぎたる花を折りて春宮大夫師兼
のもとへつかはすとて　中務卿宗良親王
花咲かばとふべき春の宮人を散るまであやなすごしつるかな

月のこる嶺のこずゑは明けやらで風にわかるる花のよこぐも

二品法親王聖尊

題しらず

吉野河たきつみなわのいろそへて音せぬ浪と散るさくらかな

中務卿宗良親王

建武二年内裏千首の歌の中に

吹く風のつらさにのみはなさじとや誘はぬ暇も花の散るらむ

右近大將長親

花の歌の中に

たかさごの尾上の雲は晴れにけりまがひし花も今や散るらむ

嘉喜門院

嵐吹き花ちるころは世のうきめ見えぬ山路もかひなかりけり

前大納言光有

五百番歌合に

うつりゆく日數につけて散る花のつらさを添ふるはるの山風

御製

千首の歌めされしついでに落花の心を

こころさへあらぬ梢にうつるかなひと木の花の色かはるより

冷泉入道前右大臣

今ははや我が身ふり行く春をおきて移ろふ花を惜むはかなさ

前内大臣隆

いく春かうつろふ花のいろにのみ心を染めてをしみ來ぬらむ

嘉喜門院

櫻ばな咲きてとく散る習ひこそ我が身の春のものおもひなれ

關白左大臣

さくらばな故郷人は問はずとも散らばちれとはいかが思はむ

讀人しらず

をしめただ散りなむ後はあくた川それとも見えじもとの白浪

千首の歌奉りしとき嶺花を　右近大將長親

いかにしておいの心をなぐさめむ絶えて櫻の咲かぬ世ならば

従三位俊文

花をだにさだかに見ばや物ごとに霞むは老のならひなりとも

千首の歌奉りしとき野花を

中務卿宗良親王

嵐吹く野守がいほの花ざかりいまいくかとか出でて見るらむ

春の歌の中に

中院入道一品

まだ咲かぬ梢あればとたのまずばうつろふ花や猶憂からまし

五百番歌合に

民部卿光資

うつろはばいかにせむとか山櫻あだなる花にあひ見初めけむ

前内大臣顯

吉野川いはもと櫻うつろへば散らでもはなのなみや立つらむ

花の歌の中に

前中納言爲忠

遠き所に侍りける頃よみ侍りける歌の中に禁中花を

中務卿宗良親王

またや見むなれし御垣も思ひやるほどは雲非の花のさかりを

正平八年うへのをのこども題をさぐりて千首の歌つかうまつりけるついでに同じ心を

後村上院御製

あひ思はば見ざらんものか百敷のはなも千歳の春のさかりを

花の歌の中に

讀人しらず

花をなほしる人にせむ高砂のまつはむかしの香にもにほはず

天授二年内裏にて人々題をさぐりて百番歌合し侍りし時花を

中務卿宗良親王

櫻花あかれやはせぬ六十(むそぢ)あまりながめなれぬる老のこころに

題しらず

中院入道一品

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に栽花といふことを　前中納言實秀

うつし植ゑて君が御階の花ざかり久しかれとや風ものどけき

中納言中將より左大將にうつり侍りける頃家に百首の歌よみける中に花を　右大臣

立ちなるる御階のさくら咲きにけりかはらぬ袖ににほふ春風

大將はなれて侍りける次の年の春内裏にて人々題をさぐりて百首の歌よみ侍りけるに禁中花といふことを　前左近大將公冬

春までとたのめしものを今は身のよそにみはしの花の下かげ

百首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

身のよそに立ち別れても戀しきは御階の花のむかしなりけり

故郷の八本のさくら思ひ出でよ我がみし春はむかしなりとも

延元四年春あづまより上り侍りて思の外によしが脫歟野の行宮に日數を經侍りし時前大納言爲定もとよりかへるさをはやいそがなむ名にしおふ山の櫻は心とむともと申し送り侍りし返事に

中務卿宗良親王

ふるさとは戀しくとてもみ吉野の花の盛りをいかで見すてむ

禁中花といふことをよめる

春宮大夫師兼

九重のくものうへなる花なればまたまがふべき色やなからむ

千首の歌めされしついでに見花といふことを

御製

吹くかぜもをさまる春の花ざかりあかぬ心にまかせてぞ見る

おなじ心を

冷泉入道前右大臣

時しあれば嵐のかぜも吹かぬ世にけふこそ櫻のどかには見れ

過ぎがてに手折るさくらの一枝をなほ九重にいろそへて見よ

五百番歌合に　入道前關白左大臣

わすれじなまた出でぬとも吉野山なれてみとせの花の下かげ

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされしついでに山花といふことをよませ給うける　御製

我が宿とたのまずながら吉野やま花になれぬる春もいくとせ

同じ行宮にてよませ給うける御歌の中に　後村上院御製

おのづから故鄕人のことづてもありけるものを花のさかりは

文中四年内裏五十番歌合に山家花を　權中納言經高

やまざとに絕えてさくらのなくばこそ花に都の春もしのばめ

花山院の八本かかりの花を思ひやりてよみ侍りける　右近大將長親

いざ櫻かざしにささむ烏羽玉のわがくろ髪のしもかくるやと

住吉社三百六十番歌合に春植物　讀人しらず

山ざくら散るまで見ては家づとに折るべき枝の花やなからむ

扇の繪に春の山にこれかれ立ちやすらひて花の枝かざしたる所を人のよませ侍りしかばかきつけ侍りし　中務卿宗良親王

誰が爲にしひては花を手折るらむさても家路の急がれぬかな

五百番歌合に　二品法親王仁譽

吉野山みねの岩かどふみならし花のためにも身をばをしまず

吉野に詣で給ひけるに講堂の花の夕ばえおもしろかりければ折らせて内へ奉らせ給ひけるついでに　新待賢門院

この山の花のあるじとなりにけりまだ庵しむる人しなければ
前中納言爲忠

あすも來むやま櫻戸に入日さす柴のいほりのはなのゆふばえ
關白左大臣

夕花を

入日さす山のたかねのさくら花とよはた雲のいろに染めつつ
冷泉入道前右大臣

初瀬山いりあひの鐘も打ちわびぬあかで暮れぬる花の名殘に
前中納言忠成

題しらず

梓弓はるの日くらし見てもなほかへるは惜しき花のかげかな
入道前右大臣

心をやとめて歸らむいまいくか見ても飽くべき花のいろかは
前大納言光任

正平八年内裏千首の歌の中に花挿頭

をしほ山神代も聞かぬくれなゐのうす花ざくら今さかりなり

花の御歌の中に　後村上院御製

しばしこそ雲とも見つれ山ざくらさかりになれば匂ふ春かぜ

朝花を　福恩寺前關白內大臣

山の端にあさゐる雲やみ吉野のたかねの花のさかりなるらむ

題しらず　入道前右大臣

白雲にまがふもつらし山ざくら花はたぐひもあらじと思へば

後村上院の御時四季の歌合せられし時花を　右兵衞督成直

立ちわたるかすみのひまにあらはれぬ山また山の花のしら雲

花の歌の中に　二品法親王聖尊

風にたぐふ花のにほひはやまかくす春の霞もへだてざりけり

權中納言經高

花の御歌の中に　後村上院御製

よしのやま花もときえて咲きにけり都のつとに今やかたらむ

咲きぬべき片枝にうつる心かなかつ見る花もめかれせぬまに　前内大臣隆

正平二十年内裏七百首の歌の中に瀧花

朝日さすみねの霞のたえまよりにほひそへたる山ざくらかな　右兵衛督成直

やまざくら咲きにしのちはみ吉野の瀧の白沫も花かとぞみる

花の歌の中に　入道前右大臣

暮れぬなり名に流れたるみ吉野の瀧のいとなく花を見るまに

しがのうらの浪の花こそ影うつす比良のたかねの櫻なりけれ　前大納言光任

正平八年内裏千首の歌の中に社頭花　前中納言爲忠

新葉和歌集　巻第二

春歌下

題しらず　後醍醐天皇御製

今はよも枝にこもれる花もあらじ木の芽はるさめ時をしる頃

吉野の行宮におましましける時雲井の櫻とて世尊寺のほとりにありける花の咲きたるを御覽じてよませ給うける

ここにても雲井の櫻咲きにけりただかりそめの宿とおもふじ

春の歌の中に　中院入道一品

吉野山くもゐのさくら君が代に逢ふべき春やちぎりおきけむ

つらからむ後をば知らず尋ね行く花のしるべに風を待つかな

花の歌の中に　　福恩寺前關白内大臣

おしならべまだ咲かぬまは尋ねてもみらくすくなき山櫻かな

海邊花といふことを　　妙光寺内大臣

さくらばな咲きにけらしな濱松のおよばぬ枝にかかるしら浪

さき初むる花やまがふと白雲にこころをかけぬ山の端もなし

後村上院御製

なほざりに待つ身なりせば嶺の雲懸るを花と見てややみなむ

二品法親王源勝（深イ）

かつらぎやよそに待たるる花の色のそながらあらぬ嶺の白雲

正平二十年内裏三百六十首の歌に題を給はりて

よみて奉りけるに尋花といふことを

從三位國量

咲きぬべき枝をしをりに今日はして明日も外山の花や尋ねむ

後村上院吉野の行宮におましましける頃よみ侍

りける歌の中に

祥子内親王

名にしおふ花のたよりにことよせて尋ねやせましみ吉野の山

五百番歌合に

前内大臣顯

待つほどのこころづくしや山櫻花にもの思ふはじめなるらむ

前内大臣隆

咲きやらぬ日數ながらもこのごろは待つになぐさむ山櫻かな

日前宮によみて奉りける五十首歌の中に

冷泉入道前右大臣

咲かぬよりまづ面影を先立てて待つ日かさなる山ざくらかな

題しらず

從三位儀子

年をへて待つはくるしき山櫻こころつくさぬはるに逢はばや

貞子内親王

待ちわぶる心ははなになりぬれど木末におそき山ざくらかな

前大納言季繼

咲きやらぬ花をまつちの山の端に雲だに懸れまがへても見む

上野太守守永親王

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に　冷泉入道前右大臣

はてはまた聲もかすかに成りにけり空にきえ行く雁のひとつら

中務卿宗良親王人々にすすめてよませ侍りし住

吉社三百六十番歌合に春動物　權大納言顯經

さすがまた花にこしぢや忘るらむかへりもやらぬ春の雁がね

百首の歌よみ侍りける中に　前大納言光任

雪げこそなほのこるらめ吉野山はな待ちどほにかかるしら雲

花の百首の歌よみ侍りける中に　民部卿光資

春といへばやがて待たるる心こそこぞみし花の名殘なりけれ

待花といふ心をよませ給うける　中宮

惜しきかないたづらにのみながめして花まつ程に移る日數は

春の歌の中に　遍照光院入道前太政大臣

侍りけるとき歸雁を　右大臣

足引のやま越えくれて行く雁はかすみのすゑに宿やとふらむ

おなじ心を　嘉喜門院

いきうしと思はぬ旅のそらなれや人やりならぬ春のかりがね

中務卿宗良親王

歸る雁なに急ぐらむおもひでもなきふるさとの山としらずや

五百番歌合に　御製

春はまたわが住むかたにかへるなり蘆屋の海士の衣かりがね

春の歌の中に　前中納言爲忠

湊いりのあしの朽葉の霜のうへに群れゐるし雁も立ち歸るなり

妙光寺内大臣

霞立つゆふべの空のうすずみにすゑはかきけつ雁のたまづさ

越の國にすみ侍りし頃爾中百首の歌よみて都なる人の許へつかはし侍りし中に

中務卿宗良親王

やどからに霞むとのみや歎かれむみやこの春の月見ざりせば

百首の歌の中に

冷泉入道前右大臣

さても身の春や昔に變るらむありしにもあらずかすむ月かな

題しらず

中院入道一品

いかにせむさらでも霞む月かげの老のなみだの袖にくもらば

幸子内親王

我が袖にわきてや月の霞むらむ問はばやよその春のならひを

權中納言實興

さのみやはかすみ果つべき春の月むかし思はぬ袖にやどらば

入道前關白の家にて題をさぐりて百首の歌よみ

しけるに庵春雨を　前中納言實秀

山の端はかすみ隔てててつれづれのながめに暮るる草の庵かな

千首の歌奉りしとき山春月を　權中納言經高

いかばかり山のあなたもかすむらむ曇りて出づる春の夜の月

春の御歌の中に　後醍醐天皇御製

いかにして霞のひまの月を見むさてだに曇るならひなりやと

中宮

むば玉の夜のみかすむならひならば月にうらみや春は殘らむ

正平二十年内裏三百六十首の歌の中に禁中春月　前左近大將公冬

百敷や衞士のたく火のけぶりさへかすみそへたる春の夜の月

五百番歌合に　前内大臣顯

しほがまの煙になるるうら人はかすむも知らで月やみるらむ

よみ侍りける時柳を　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権大納言公夏

青柳のみどりうつろふ川の瀬になびく玉藻もかずや添ふらむ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　妙光寺内大臣

はる風にけづりもやらぬかみなびの三室のきしの青柳のいと

正平八年内裏千首の歌の中に春駒を　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中院入道一品

野邊とほみ春の心ぞつながれぬうかべる雲のあとを見るにも

同二十年内裏にて人々題をさぐりて三百六十首

の歌よみ侍りけるとき遊絲を　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　右兵衞督成直

ありとだに今こそみゆれ春の日の光にあたる野邊のいとゆふ

千首の歌めされしついでに春海を　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御製

里のあまのそでの浦風のどかにていさりにくだす春の夕なぎ

關白左大臣右大臣に侍りける時家に三百番歌合

吹きやめばよそにのきばの梅が香をしばし袂にやどすはる風

今上いまだ御子におましましける時家に侍りける梅の花を折りて奉るとて

福恩寺前關白内大臣

いとはやも分きて手折らば春の宮に木高くにほへ宿の梅が枝

御かへし

御製

春の宮に木高くにほふ花ならばわきてやみましやどの梅が枝

千首の歌奉りし中に

中務卿宗良親王

かざせども老はかくさで梅の花いとどかしらの雪と見えつつ

春宮にて人々題をさぐりて百五十番歌合し侍りける時梅散後得客（得イ）といふことを

關白左大臣

更にまたあらしぞつらき梅が枝の花ゆゑ待ちし人にとはれて

正平十六年内裏にて人々題をさぐりて百首の歌

木の下はそこともも見えで春の夜のかすめる月に梅が香ぞする

梅薫風といふことをよませ給うける　　後村上院御製

にほふなり木のもとしらぬ梅が香のたよりとなれる春の夕風

題しらず　　後醍醐天皇御製

梅の花よそのかきねのにほひをも木の下風のたよりにぞ知る

文中四年内裏五十番歌合に簷梅薫風といふ事を　　式部卿惟成親王

こぬ人もさそふばかりに匂ひけり軒端のうめの花のしたかぜ

題しらず　　讀人しらず

吹く風のたよりばかりの梅が香をうはの空にや尋ね行くべき

五百番歌合に　　前大納言實爲

匂ひくる風をしるべにたづねばや梅咲くやどの花のあるじを

春の歌の中に　　最恵法親王

またもあらじと見えし富士のねの霞の底にいつなりにけむ

浦霞を　　中宮

さほ姫の袖師の浦のあさがすみたちかさねても見ゆる春かな

文中四年内裏にて人々題をさぐりて五十番歌合し侍りけるとき海邊霞といふことを　　關白左大臣

なにはめがこやの蘆火のゆふ煙なほ立てそへてかすむ春かな

天授元年内裏にて人々五百番歌合し侍りける時　　春宮大夫師兼

きよみがたかすみや深くなりぬらむ遠ざかり行くみほの浦松

正平二十年内裏にて人々題をさぐりて七百首の歌よみ侍りける中に野霞といふことを　　前大納言光有

草の原みどりをこめて武藏野やかぎりも知らずかすむ春かな

夜梅といふことを　　新宣陽門院

消えそむる雪まを分けて生ひ出づる野邊の若菜も今や摘むらむ

前大納言宗房

都人いとまありてやけふもまた鳥羽田のおもに若菜つむらむ

入道前右大臣

くるるまで若菜はつまじ高島やかち野の原はやどもならじを

題しらず

讀人しらず

立ちわたるかすみのしたの白雪は山の端ながら空に消えつつ

山霞といふことを

右近大將長親

春來ても川風さむしみかの原たつやかすみのころもかせやま

日前宮によみて奉りける五十首の歌の中に

冷泉入道前右大臣

はるくれば霞をかけてかつらぎや山の尾上ぞとほざかり行く

題しらず

入道前右大臣

おのづからながき日影も吳竹のねぐらにうつるうぐひすの聲

題しらず　中務卿宗良親王

うぐひすの飛火の野邊の初聲にたれさそはれて若菜つむらむ

正平二十年内裏にて人々年中行事を題にて三百六十首の歌よみ侍りける時獻若菜といふ事をよみ侍りける　前内大臣隆

千世までの春をつみてや君が爲けふたてまつる若菜なるらむ

百首の歌よませ給うける中に　後村上院御製

この里は山澤ゑぐを摘みそめて野べの雪間もまたぬなりけり

題しらず　後醍醐天皇御製

春日山をのへの雪も消えにけりふもとの野邊の若菜つまなむ

太宰帥泰成親王

百首の歌よませ給うけるに春雪を　後村上院御製

かつ消えて庭にはあともなかりけり空にみだるる松のあわ雪

春の歌の中に　妙光寺内大臣

岩根にはつもると見れど瀧つ瀬に落ちては水のあわ雪ぞふる

冷泉入道前右大臣

いとはやも谷の古巣を出でそめて人に待たれぬうぐひすの聲

正平八年内裏にて人々題を探りて千首の歌よみ侍りけるとき初鶯を　福恩寺前關白内大臣

なれもまづたにの戸出でて君が代に逢へるをときと鶯ぞなく

春の歌の中に　讀人しらず

春來れば花にうつろふうぐひすの心のいろぞねには知らるる

竹鶯といへる心を　後村上院御製

百首の歌よみ侍りける中に　冷泉入道前右大臣

ここのへの都に春や立ちぬらむあまつ雲井の今朝はかすめる

建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首の歌よみ侍りける中に春天象を　中務卿尊良親王

花鳥の色にも音にもさき立ちて時知るものはかすみなりけり

右大臣に侍りけるとき家に三百番歌合し侍りけるに溪餘寒といへる心を　關白左大臣

さえかへり又こそ谷にこほりぬれ高峯にとくる雪のしたみづ

題しらず　前中納言爲忠

つれもなき梢の雪も消えそめてしづくににごる松のしたみづ

松下殘雪といふ事をよみ侍りける　春宮大夫師兼

風さむみなにをか春といはしろや雪だに解けぬ松のしたかげ

新葉和歌集　巻第一

春歌上

たつ春の心をよませ給うける　　後村上院御製

出づる日に春の光はあらはれてとし立ちかへるあまのかぐ山

千首の歌よみ侍りし中に立春關を　　中務卿宗良親王

關守のうちぬるひまに年越えて春は來にけりあふさかのやま

うへのをのこども題を探りて百首の歌つかうまつりけるついでに立春氷といふ事をよませ給うける　　御製

かぜわたる池の氷もとけ初めてうち出づる浪に春や立つらむ

めつつ露ゆき霜きたりて、濱千鳥の跡たゆる事なく、あめながくつち久しくして、神代の風はるかにあふがざらめかも、

べらぎのおほん光をいはひたてまつるにいたるまで、心うちにうごき、言葉ほかにあらはれて、六くさのすがたにかなひ、一ふしのとるべきあるをばこれをすつる事なしといへども、四方の海のなみのさわぎも、こよろぎのいそとせにおよべれば、家々の言の葉風にちり、浦々のもしほ草かきもらせるたぐひも又なきにあらざるべし。そもそもかくえらびあつむる事も、ただ園のうちのわづかなることわざなれば、あめのしたひろきもてあそびものとならむ事はおもひよるべきにあらぬを、はからざるにいま勅撰になずらふべきよしのみことのりをかうぶりて、老のさいはひ望にこえ、よろこびのなみだ袂にあまれり。これによりてところどころあらためなほして、弘和元年十二月三日これを奏す。おほよそこの道にたづさはらむ人は、いよいよ難波津の深きこころをさとり、この時にあへらむともがらは、あまねく敷島の道ある御代にほこりて、春の花のさかゆるたのしみを四の時にきはめ、秋の夜のながき名を萬のとしにとど

としはいそとせのあひだ、かりの宮にしたがひつかうまつりて、折にふれ時につけつつ、いひあらはせることの葉どもを、玉のうてな金のとのより、かはらのまどなはのとぼそのうちにいたるまで、人をもちてことをすてずえらびさだむるところ、千うた四ももちあまりはたまき、名づけて新葉和歌集といへり。花をたづね郭公をまち月をながめ雪をもてあそぶよりはじめて、花の都にわかれををしみ、草の枕にふるさとをこひ、五十鈴川石清水のながれをくみては、光をやはらげて塵にまじはるちかひをたふとび、鶴のはやし鹿の園の跡をたづねては、まよひをのぞきてさとりをひらくむねをこひねがふ。あるはかたいとのあひ見ぬ戀に思ひみだれ、あるは呉竹のうきふししげき世をなげきても恨をかこち思をのべ、えぶのさかひの常ならぬことわりをかなしみ、また百敷のうちにしては、雨露の惠をほどこし、やしまのほかまでも浪風の音しづかにして、むしろ田の鶴のよはひにあらそひ、住吉の松の千年をたもたせ給ふべきす

こなはれしかど、ひとたびは治まりひとたびは亂るる世のことわりなればにや、つひに又むかし唐に江をわたりけむ世のためしにさへなりにたれど、ちはやぶる神代より、國をつたふるしるしとなれる三種のたからをも、うけ傳へましまし、やまともろこしにつけて、もろもろの道をもおこし行はせたまふおほんまつりごとなりければ、伊勢の海の玉も光ことに、淺香山のことの葉も色ふかきなむおほくつもりにたれど、いたづらに集めえらばるる事もなかりけるぞ、ぬひものをきてよるゆくたぐひになむありける。ここに吳竹のその人數につらなりても、三代の御門につかへ、和歌の浦の道にたづさひては、ななそぢのしほにもみちぬるうへ、勝つことを千里の外にさだめしむかしは、野邊のくさことしげきにもまぎれき、心を三の衣の色にそめぬるいまは、あしまの舟のさはるべきふしもなければ、かつは老のこころをもなぐさめ、かつは末の世までものこさむため、上元弘のはじめより下弘和のいまにいたるまで、世は三つぎ、

新葉和歌集序

あめつちひらけはじめしより、葦原の代々にかはらず、世ををさめ民をなでこころざしをいひ心をなぐさむるなかだちとして、我が國にありとしある人、あまねくもてあそび、さかりにひろまれるは、ただこの歌の道ならし。これによりて、ならの葉の名におふみかどの御時より、正中のかしこがりしおほん世にいたるまで、撰びあつめらるるあと、十あまり七たびになむなれりける。そのあひだ、家々に集めおけるたぐひ又その數を知らざるべし。しかあるを、元弘のはじめ、秋津洲のうち浪のおとしづかならず、春日野のほとりとぶ火のかげしばしば見えしかど、ほどなくみだれたるを治めて、ただしきにかへされしのちは、雲の上のまつりごと更にふるきあとにかへり、あめのしたの民、かさねてあまねき御惠をたのしみて、あしきをたひらげそむくをうつ道までひとつにすべお

新古今和歌集終

卷第五　秋歌下

題しらず　　惠慶法師

高砂のをのへに立てる鹿の音にことのほかにも濡るる袖かな

在妻こふる下深山邊上

卷第二　春下

太神宮に百首の歌奉りし中に　　太上天皇

いかにせむ世にふるながめしばの戸に移ろふ花の春の暮がた

在赤人春雨はいたくな降そ下

異本

巻第二　春歌下

題しらず　中納言家持

古里にはなは散りつつみ吉野の山のさくらはまださかずなり（りイ）

在春雨下花の香に上

題しらず　赤人

こひしくばかたみにせむと我が宿にうゑし藤浪今さかりなり

在足曳下かくてこそ上

巻第三　夏歌

時鳥の心をよみ侍りける　顯昭法師

ほととぎす昔をかけて思へとや老のねざめにひとこゑぞする

在有明下過ぎにけり上

西行法師をよび侍りけるにまかるべきよしは申しながらまうで來で月のあかかりけるに門の前を通ると聞きてよみて遣はしける　待賢門院堀河

西へ行くしるべとおもふ月影の空だのめこそかひなかりけれ

かへし　西行法師

たちいらで雲間をわけし月影は待たぬけしきや空にみえけむ

人の身まかりける後結縁經供養しけるに即往生安樂世界の心をよめる　瞻西上人

昔見し月のひかりをしるべにてこよひや君がにしへ行くらむ

勸心をよみ侍りける　西行法師

闇はれてこころのそらにすむ月は西の山邊やちかくなるらむ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

百首の歌の中に毎日晨朝入諸定の心を　式子内親王

しづかなる曉ごとに見わたせばまだふかき夜の夢ぞかなしき

發心和歌集の歌普門品種々諸惡趣　選子内親王

逢ふことを何處にてとか契るべき憂身の行かむ方を知らねば

五百弟子品の心を　僧都源信

たまかけし衣のうらをかへしてぞおろかなりける心をば知る

維摩經十喩の中に此身如夢といへる心を　赤染衛門

夢やゆめ現や夢とわかぬかないかなる世にかさめむとすらむ

二月十五日の暮方に伊勢大輔がもとへ遣しける　相模

つねよりも今日の煙のたよりにや西をはるかに思ひやるらむ

かへし　伊勢大輔

けふはいとど涙にくれぬ西の山おもひいる日の影をながめて

入道前關白の家に十如是の歌よませ侍りけるに

如是報　　　　　　　　　　　　　二條院讃岐

うきもなほ昔のゆゑと思はずばいかにこの世を恨み果てまし

待賢門院中納言人々に勸めて廿八品の歌よませ

侍りけるに序品廣度諸衆生其數無有量の心を　　　　　　皇太后宮大夫俊成

渡すべきかずもかぎらぬ橋ばしら如何に立てける誓なるらむ

美福門院の極樂六時讃の繪に書かるべき歌奉る

べきよし侍りけるによみ侍りける時に大衆法を

聞きて彌歡喜瞻仰せむ

いまぞこれ入日をみても思ひこし彌陀のみくにの夕暮のそら

曉至りて浪の聲金の岸によするほど

いにしへの尾上のかねに似たるかな岸打つ浪のあかつきの聲

聞名欲往生　寂然法師

おとに聞く君がりいつかいきの松まつらむものを心づくしに

心懷戀慕偈仰於佛

別れにしそのおもかげのこひしきに夢にし見えよ山の端の月

十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒

わたつ海の深きに沈むいさりせでたもつかひある法を求めよ

不偸盜戒

浮草のひと葉なりとも磯がくれおもひなかけそ沖つしらなみ

不邪婬戒

さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ

不酤酒戒

花のもと露のなさけはほどもあらじゑひなすすめそ春の山風

栴檀香風悅可衆心

ふく風に花たちばなやにほふらむ昔おぼゆる今日のそらかな

作是教已復至他國

やみふかき木の下ごとに契りおきて朝たつきりの跡の露けさ

此日已過命卽衰滅

けふ過ぎぬ命もしかとおどろかす入相のかねの聲ぞかなしき

悲鳴呦咽痛戀本群

草深きかりばの小野を立ち出でて友まどはせる鹿ぞ鳴くなる　素覺法師

弃恩入無爲

背かずば何れの世にか廻り逢ひて思ひけりとも人に知られむ　寂然法師

合會有別離

あひみても嶺にわかるる白雲のかかるこの世の厭はしきかな　源季廣

底清く心のみづをすまさずばいかがさとりのはちすをも見む

勸持品　正三位經家

さらずとて幾世もあらじいざやさは法にかへたる命と思はむ

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を　寂蓮法師

深き夜のまどうつ雨に音せぬはうき世を軒のしのぶなりけり

五百弟子品内祕菩薩行の心を　前大僧正慈圓

いにしへの鹿なく野邊のいほりにも心の月はくもらざりけり

人々勸めて法文百首の歌よみ侍りけるに二乘但空智如螢火　寂然法師

道のべの螢ばかりをしるべにてひとりぞ出づるゆふやみの空

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲はれてむなしき空にすみながらうき世のなかをめぐる月影

いづくにも我が法ならぬ法やあると空吹く風にとへど答へぬ

化城喩品化作大城郭

思ふなようき世の中を出で果てて宿る奥にもやどはありけり

分別功德品或住不退地

鷲の山けふきく法のみちならでかへらぬ宿に行くひとぞなき

普門品心念不空過

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの雲

水渚常不滿といふ心を　　崇德院御歌

おしなべて憂身はさこそなるみ潟みちひる汐の變るのみかは

先照高山

朝日さすみねのつづきはめぐめどもまだ霜ふかし谷のかげ草

家に百首歌よみ侍りける時五智の心を妙觀察智　入道前關白太政大臣

色にのみそみし心のくやしきをむなしと説ける法のうれしさ

攝政太政大臣の家の百首の歌に十樂の心をよみ侍りけるに聖衆來迎樂　寂蓮法師

紫のくもぢにさそふ琴の音にうき世をはらふみねのまつかぜ

蓮花初開樂

これやこのうき世の外の春ならむ花の戸ぼそのあけぼのの空

快樂不退樂

春秋もかぎらぬ花に置く露はおくれさきだつうらみやはある

引接結緣樂

立ちかへり苦しき海におくあみもふかきえにこそ心ひくらめ

法華經二十八品の歌よみ侍りけるに方便品唯有一乘法の心を　前大僧正慈圓

見せ侍りければ夢の中にかへしすと覺えける歌

谷川のながれし淸く澄みぬればくまなき月のかげもうかびぬ

述懷の歌の中に　　前大僧正慈圓

ねがはくはしばし闇路にやすらひてかかげやせまし法の燈火

とく御法きくの白露夜はおきてつとめて消えむ事をしぞ思ふ

極樂へまだ我が心ゆきつかずひつじのあゆみしばしとどまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を　　權僧正公胤

我がこころなほはれやらぬ秋霧にほのかに見ゆるあり明の月

家に百首の歌よみ侍りける時十界の心をよみ侍りけるに緣覺の心を　　攝政太政大臣

おく山にひとりうき世はさとりにき常なき色を風にながめて

心經の心をよめる　　小侍從

天王寺の龜井の水を御覽じて　上東門院

濁なき龜井の水をむすびあげてこころの塵をすすぎつるかな

法華經二十八品の歌人々によませ侍りけるに提婆品の心を　法性寺入道前關白太政大臣

わたつ海の底よりきつる程もなく此身ながらに身をぞ極むる

勸持品の心を　大納言齊信

かずならぬ命はなにかをしからむ法とく程をしのぶばかりぞ

五月ばかりに雲林院の菩提講に詣でてよみ侍りける　肥後

紫の雲のはやしを見わたせばのりにあふちのはな咲きにけり

涅槃經讀み侍りける時夢にちる花に池の氷も解けぬなり花吹きちらす春の夜の空とかきて人の

比叡山中堂建立の時　　傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛だちわが立つ杣に冥加あらせたまへ

入唐の時の歌　　智證大師

法の舟さして行く身ぞもろもろのかみも佛もわれをみそなへ

菩提寺の講堂の柱に蟲のくひたる歌

しるべあるときにだに行け極樂の道にまどへる世のなかの人

みたけの笙の岩屋に籠りてよめる　　日藏上人

寂寞のこけの岩戸のしづけきになみだの雨のふらぬ日ぞなき

臨終正念ならむことを思ひてよめる　　法圓上人

南無阿彌陀佛の御手にかくる絲のをはりみだれぬ心ともがな

題しらず　　僧都源信

我だにもまづ極樂にうまれなば知るも知らぬも皆むかへてむ

新古今和歌集　卷第二十

釋敎歌

猶たのめしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは

何か思ふなにかはなげく世の中はただ朝顔の花のうへのつゆ

此の歌は淸水觀音の御歌となむいひつたへたる

智緣上人伯耆の大山に參りて出でなむとしける曉夢にみえける歌

やま深く年ふる我もあるものをいづちか月のいでて行くらむ

難波のみつの寺にて葦の葉のそよぐを聞きて　行基菩薩

葦そよぐ鹽瀨の浪のいつまでかうき世の中にうかびわたらむ

ある所の屏風の繪に十一月神祭る家の前に馬に
のりて人のゆく所を　　大中臣能宣朝臣
榊葉の霜うちはらひかれずのみすめとぞいのる神のみまへに
延喜の御時屏風に夏神樂の心をよみ侍りける　　貫之
河やしろしのに折りはへほす衣いかにほせばか七日ひざらむ

いはしろの神は知るらむしるべせよ頼むうき世のゆめの行末　太上天皇

熊野の本宮燒けて年の内に遷宮侍りしに參りて

契あればうれしきかかる折にあひぬ忘るな神もゆく末のそら　太上天皇

加賀守にて侍りける時白山に詣でたりけるを思ひ出でて日吉の客人の宮にてよみ侍りける

年經ともこしの白山わすれずばかしらの雪をあはれとも見よ　左京大輔顯輔

一品聰子内親王住吉にまうでて人々歌よみ侍りけるによめる

すみよしの濱松が枝に風吹けば波のしらゆふかけぬ間ぞなき　藤原通經

奉幣使に住吉に參りて昔住みけるとまりのあれたりけるをよみ侍りける

住よしと思ひし宿はあれにけり神のしるしをまつとせしまに　津守有基

御覧じて　白河院御歌

咲きにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらに知らるる

熊野に參りて奉り侍りし　太上天皇

岩にむす苔ふみならすみ熊野の山のかひあるゆくすゑもがな

新宮に詣づとて熊野川にて

熊野川くだす早瀬のみなれざをさすがみなれぬ浪のかよひ路

白河院熊野にまうで給へりけるに御供の人々鹽屋の王子にて歌よみ侍りけるに　徳大寺左大臣

立ちのぼるしほやの煙うら風になびくを神のこころともがな

熊野へ詣で侍りしに岩代の王子に人々の名など書きつけさせてしばし侍りしに拜殿のなげしに書きつけ侍りし歌　讀人しらず

千世までも心して吹けもみぢ葉を神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院の障子に小鹽の山かきたる所　前大僧正慈圓

をしほ山神のしるしをまつの葉に契りし色はかへるものかは

日吉社に奉りける歌の中に二宮を

やはらぐる影ぞふもとにくもりなきもとの光は峰にすめども

述懐の心を

わが頼む七のやしろのゆふだすきかけても六の道にかへすな

おしなべて日吉のかげはくもらぬに涙あやしき昨日けふかな

もろ人のねがひをみつの濱風にこころすずしきしでの音かな

北野によみて奉りける

さめぬれば思ひあはせて音をぞなく心づくしのいにしへの夢

熊野へ詣で給ひける道に花のさかりなりけるを

鴨社の歌合とて人々よみ侍りけるに月を　鴨　長　明

石川やせみの小河のきよければ月もながれをたづねてぞすむ

辨に侍りける時春日祭に下りて周防内侍につか

はしける　中　納　言　資　仲

萬代をいのりぞかくるゆふだすき春日のやまの嶺のあらしに

文治六年女御入内の屛風に春日祭　入道前關白太政大臣

けふまつる神のこころやなびくらむしでに波立つさほの河風

家に百首の歌よみ侍りける時神祇の心を　皇太后宮大夫俊成

あめの下みかさの山の蔭ならで賴むかたなき身とは知らずや

春日野のおどろの道のうもれ水すゑだに神のしるしあらはせ

大原野の祭に參りて周防内侍につかはしける　藤　原　伊　家

み侍りける　皇太后宮大夫俊成
月さゆるみたらし川にかげ見えて氷にすれるやまあゐのそで
社頭雪といふ心をよみ侍りける　按察使公通
ゆふしでの風にみだるる音さえて庭しろたへに雪ぞつもれる
十首の歌合の中に神祇をよめる　前大僧正慈圓
君をいのる心のいろを人とはばただすの宮のあけのたまがき
みあれに參りて社の司おのおの葵をかけけるに
よめる　賀茂重保
跡たれし神にあふひのなかりせば何に賴みをかけてすぎまし
社司ども貴布禰に參りて雨乞し侍りけるついで
によめる　賀茂幸平
おほみ田のうるほふばかりせきかけてゐせきに落せ河上の神

五十首の歌奉りし時　　越　前

かみかぜややま田のはらの榊葉に心のしめを懸けぬ日ぞなき

社頭納涼といふことを　　大中臣明親

五十鈴川そらやまだきに秋の聲したついはねの松のゆふかぜ

香椎の宮の杉をよみ侍る　　讀人しらず

ちはやぶる香椎の宮のあや杉は神の御衣木(みそぎ)に立てるなりけり

八幡宮の權官にて年久しかりけることを恨みて

御神樂の夜參りて榊に結びつけ侍りける　　法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれどもかみに心をかけぬ間ぞなき

賀茂に參りて　　周防内侍

年をへて憂き影をのみみたらしの變る世もなき身を如何(いかに)せむ

文治六年女御入内の屛風に臨時祭かける所をよ

かみぢ山月さやかなるちかひありて天の下をば照すなりけり

伊勢の月讀の社に參りて月を見てよめる

さやかなるわしの高嶺の雲居よりかげやはらぐる月よみの森

神祇の歌とてよめる　前大僧正慈圓

やはらぐる光にあまるかげなれや五十鈴河原のあきの夜の月

公卿勅使にてかへり侍りける壹志(いちし)のむまやにて

よみ侍りける　中院入道右大臣

立ちかへり又もみまくのほしきかな御裳濯(みもすそ)川の瀬々のしら波

入道前關白の家の百首の歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

神風や五十鈴の川のみやばしら幾千世すめと立てはじめけむ

俊惠法師

かみかぜや玉串の葉を取りかざし內外(うちと)の宮に君をこそいのれ

同じ時外宮にてよみ侍りける　　藤原定家朝臣

契ありて今日みや川の木綿かづら長き世までもかけて賴まむ

公繼卿公卿勅使にて太神宮に詣でて歸り上り侍りけるに齋宮の女房の中より申し送りける　　讀人しらず

うれしさも哀もいかにこたへましふる里人に問はれましかば

かへし　　春宮權大夫公繼

神風や五十鈴川なみかずしらずすむべき御代にまた歸り來む

太神宮の歌の中に　　太上天皇

ながめばや神路のやまに雲消えてゆふべの空を出でむ月かげ

神風やとよみてぐらになびくしでかけてあふぐといふも畏し

題しらず　　西行法師

宮ばしらしたつ岩根にしきたててつゆも曇らぬ日の御影かな

久方のあめの八重雲ふりわけてくだりし君をわれぞむかへし
玉依姫　三統理平
とびかけるあまのいは舟たづねてぞ秋津島には宮はじめける
賀茂の社午日うたひ侍りける歌
やまとかもうみに嵐の西吹けばいづれのうらに御舟つながむ
神樂をよみ侍りける　紀貫之
おく霜にいろもかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらむ
臨時祭をよめる
宮人のすれる衣にゆふだすきかけてこころをたれによすらむ
大將に侍りける時勅使にて太神宮に詣でてよみ侍りける　攝政太政大臣
神風やみもすそ川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな

われ頼む人いたづらになしはてば又雲わけてのぼるばかりぞ
賀茂の御歌となむ

鏡にもかげみたらしの水のおもにうつるばかりの心とを知れ
これまた賀茂に詣でたる人の夢に見えけるといへり

ありきつつ來つつ見れどもいさぎよき人の心をわれ忘れめや
石淸水の御歌といへり

西の海立つ白波のうへにしてなにすぐすらむかりの此の世を
この歌は稱德天皇の御時和氣淸麿を宇佐宮に奉りたまひける時託宣したまひけるとなむ

延喜六年日本紀竟宴に神日本磐余彦天皇　大江千古

白波にだまより姫のこし事はなぎさやつひのとまりなりけむ
猿田彦　紀淑望

春日へ参るべきよしの夢を見たりけれど後に参らむと思ひてまかり過ぎにけるをかへり侍りけるに託宣したまひけるとなむ

道とほし程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我もわすれじ

この歌はみちのくに住みける人の熊野へ三年詣でむと願を立てて参りて侍りけるがいみじう苦しかりければ今ふたたびをいかにせむと歎きて御前にふしたりける夜の夢にみえけるとなむ

思ふこと身にあまるまでなる瀧のしばしよどむを何恨むらむ

この歌は身のしづめることを歎きてあづまの方へまからむと思ひたちける人熊野の御前に通夜してはべりける夢にみえけるとぞ

もとの明神よみたまひけるとなむ

夜や寒き衣やうすき片そぎの行きあひの間より霜や置くらむ

住吉の御歌となむ

いかばかり年は經ぬとも住の江の松ぞふたたびおひ替りける

この歌はある人の住吉に詣でて人ならばとはましものをすみの江の松はいくたび生ひかはるらむとよみて奉りける御かへしとなむいへる

むつまじと君はしら浪みづ籬の久しき世よりいはひ初めてき

伊勢物語に住吉に行幸の時おほむ神現形したまひてとしるせり

ひと知れず今や今やとちはやぶる神さぶるまで君をこそ待て

この歌は待賢門院堀河大和の方より熊野へ詣で侍りけるに

新古今和歌集　卷第十九

神祇歌

知るらめやけふの子日のひめ小松おいむ末まで榮ゆべしとは

この歌は日吉の社司社頭のうしろの山にまかりて子日して侍りける夜人の夢に見えけるとなむ

なさけなく折る人つらしわが宿のあるじわすれぬ梅の立枝を

この歌は建久二年の春の頃筑紫へまかりけるものの安樂寺の梅を折りて侍りける夜の夢にみえけるとなむ

補陀落のみなみの岸に堂立てていまぞさかえむ北のふぢなみ

この歌は興福寺の南圓堂造りはじめ侍りける時春日の奥の

世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ

千載集撰び侍りける時ふるき人々の歌をみて　皇太后宮大夫俊成

行くすゑはわれをもしのぶ人やあらむ昔をおもふ心ならひに

崇德院に百首の歌奉りける無常歌

世の中を思ひつらねてながむればむなしきそらに消ゆる白雲

百首の歌に　式子内親王

くるるまも待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり

津の國におはして汀の葦を見給ひて　花山院御歌

津の國のながらふべくもあらぬ哉短き葦のよにこそありけれ

題しらず　中務卿具平親王

風はやみ荻の葉ごとにおく露のおくれ先だつほどのはかなさ

蟬丸

秋風になびくあさぢのすゑごとにおく白露のあはれ世のなか

憂世をば出づる日ごとに厭へどもいつかは月のいる方をみむ
西行法師

なさけありし昔のみ猶忍ばれて長らへまうき世にもふるかな
清輔朝臣

長らへばまた此の頃やしのばれむうしと見し世ぞ今は戀しき

寂蓮法師人々すすめて百首の歌よませ侍りける
にいなびて熊野へ詣でける道にて夢に何事も衰
へゆけどこの道こそ世の末にかはらぬものはあ
れなほこの歌よむべきよし別當湛快三位俊成に
申すと見侍りて驚きながらこの歌を急ぎよみい
だしてつかはしけるおくにかきつけ侍りける
西行法師

末の世もこの情のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし

憂身には山田の晩稲おしこめて世をひたすらに恨みわびぬる

年頃修行の心ありけるを捨て難き事侍りて過ぎけるに親などなくなりて心やすく思ひ立ちけるころ障子にかきつけ侍りける　山田法師

賤の男の朝な朝なにこりつむるしばしの程もありがたの世や

題しらず　寂蓮法師

数ならぬ身はなき物になしはてつ誰が爲にかは世をも恨みむ

法橋行遍

たのみありていま行末をまつ人やすぐる月日を歎かざるらむ

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　源師光

長らへて生けるをいかにもどかまし憂身の程をよそに思はば

題しらず　八條院高倉

如何すべき世にあらばこそ世をも捨ててあなうの世やと更に思はめ
なに事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとはしき

入道前關白太政大臣

昔よりはなれがたきは憂世かなかたみにしのぶ中ならねども

歎くこと侍りける頃大峰に籠るとて同行どももかたへは京へ歸りねなど申してよみ侍りける

大僧正行尊

思ひ出でて若も尋ぬる人もあらばありとないひそ定なき世に

題しらず

數ならぬ身を何故に恨みけむとてもかくてもすごしける世を

百首の歌奉りしに

前大僧正慈圓

いつか我み山の里のさびしきにあるじとなりて人に問はれむ

題しらず

俊頼朝臣

病かぎりに覺えけるとき定家朝臣中將轉任の事

申すとて民部卿範光が許につかはしける　　皇太后宮大夫俊成

小笹原かぜまつ露の消えやらでこのひとふしを思ひ置くかな

題しらず　　前大僧正慈圓

世の中を今はのこころつくからに過ぎにし方ぞいとど戀しき

世をいとふ心のふかくなるままに過ぐる月日をうち數へつつ

ひと方に思ひとりにし心にはなほそむかるる身をいかにせむ

何ゆゑにこの世を深くいとふぞと人の問へかしやすく答へむ

思ふべき我が後の世は有るか無きか無ければこそは此世には住め

西行法師

世を厭ふ名をだにもさは留め置きて數ならぬ身の思出にせむ

身のうさを思ひ知らでややみなまし背く習のなき世なりせば

あはれと見て　　　　　　　　　　　　　　僧正遍昭

さゝがにの空にすがくもおなじごと全き宿にも幾世かはへむ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　西宮前左大臣

ひかり待つ枝にかかれる露の命消えはてねとや春のつれなき

野分したるあしたにをさなき人をだにとはざりける人に　　赤染衛門

あらく吹く風はいかにと宮城野のこ萩がうへを人のとへかし

和泉式部道貞にわすられて後ほどなく敦道親王に通ふと聞きてつかはしける

うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　和泉式部

秋風はすごく吹けども葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ

題しらず

垂乳根の諫めしものをつれづれと眺むるをだに問ふ人もなし

熊野へまゐりて大峰へ入らむとて年頃やしなひ

立てて侍りけるめのとの許に遣しける　　大僧正行尊

哀とてはぐくみたてしいにしへは世を背けとも思はざりけむ

百首の歌奉りし時　　土御門内大臣

位山あとをたづねてのぼれども子を思ふ道になほまよひぬる

百首の歌よみ侍りけるに懐舊の歌　　皇太后宮大夫俊成

むかしだに昔と思ひし垂乳根のなほ戀しきぞはかなかりける

述懐百首の歌よみ侍りけるに　　俊頼朝臣

蜘蛛のいとかかりける身の程をおもへば夢のここちこそすれ

夕暮にくものいとはかなげに巣がくを常よりも

和泉式部

夕ぐれは雲のけしきを見るからにながめじと思ふ心こそつけ

西行法師

暮れぬめり幾日をかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくづくとして

皇太后宮大夫俊成

あかつきの心を

待たれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらば聞かむとすらむ

式子内親王

百首の歌に

曉とつげのまくらをそばだてて聞くもかなしきかねの音かな

あかつきのゆふつけどりぞ哀なる長きねむりを思ふまくらに

和泉式部

尼にならむと思ひ立ちけるを人のとめはべりければ

かくばかりうきを忍びて長らへば是よりまさる物をこそ思へ

秋雨を　　中務卿具平親王

ながめつつ我が思ふ事はひぐらしに軒の雫の絶ゆるよもなし

題しらず　　大中臣能宣朝臣

水ぐきの中にのこれる瀧のこゑ(おとイ)いとしもさむき秋のこゑかな

題しらず　　小野小町

木がらしの風にもみぢて(ちらでイ)人知れずうき言の葉のつもる頃かな

述懐百首の歌よみ侍りけるとき紅葉を　　皇太后宮大夫俊成

あらし吹く峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我が涙かな

題しらず　　崇德院御歌

うたたねは荻吹くかぜに驚けどながき夢路ぞさむるときなき

宮內卿

竹の葉に風ふきよわる夕ぐれの(にイ)もののあはれは秋としもなし

臨時の祭の舞人にて諸共にはべりけるをともに
四位して後祭の日遣しける　實方朝臣
衣手のやまゐの水にかげ見えしなほそのかみの春ぞこひしき
かへし　藤原通信朝臣
いにしへの山ゐの衣なかりせば忘らるゝ路となりやしなまし
後冷泉院の御時大嘗會に日蔭のくみ緒して實基
朝臣の許につかはすとて先帝の御時思ひ出でて
そへていひつかはしける　加賀左衞門
たちながらきてだに見せよ小忌衣あかぬ昔のわすれがたみに
秋夜聞蛬といふ題をよめと人々に仰せられてお
ほとのごもりける朝にその歌を御覽じて　天暦御歌
あきの夜の曉がたのきりぎりす人づてならで聞かましものを

松の木の燒けたるを見て　性空上人

千年ふる松だにくゆる世の中に今日ともしらで送るわれかな

題しらず　源俊賴朝臣

數ならで世にすみの江の澪標（みをつくし）いつをまつともなき身なりけり

皇太后宮大夫俊成

うきながら久しくぞ世を過ぎにける哀やかけしすみよしの松

春日の社の歌合に松風といふことを　藤原家隆朝臣

春日山たにの埋木朽ちぬともきみに告げこせみねのまつかぜ

宜秋門院丹後

なにとなく聞けばなみだぞこぼれぬる苔の袂に通ふまつかぜ

さうしに葦手長歌などかきておくに　女御徽子女王

みな人のそむき果てぬる世の中にふるの社の身をいかにせむ

人知れずそなたをしのぶ心をばかたぶく月にたぐへてぞやる

前大僧正慈圓ふみにては思ふ程の事も申し盡しがたきよし申し遣して侍りける返事に　前右大將頼朝

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬかき盡してよつぼの碑

世の中常なき頃　大江嘉言

今日までは人を歎きて暮れにけりいつ身の上にならむとすらむ

題しらず　清愼公

道芝の露にあらそふ我が身かな何れかまづは消えむとすらむ

皇嘉門院

何とかや壁に生ふなる草の名よそれにもたぐふ我身なりけり

權中納言資實

こしかたをさながら夢になしつれば覺むる現のなきぞ悲しき

西行法師

何處(いづく)にも住まれずば唯すまであらむ柴の庵のしばしなる世に

月のゆく山に心を送り入れてやみなるあとの身をいかにせむ

五十首の歌の中に　前大僧正慈圓

思ふことなどとふ人もなかるらむあふげば空に月ぞさやけき

いかにして今まで世にはあり明のつきせぬものをいとふ心は

西行法師山里より罷り出でて昔出家し侍りしそ

の月日にあたりて侍るなど申したりける返事に　八條院高倉

うき世出でし月日の影のめぐり來て變らぬ道をまた照すらむ

太神宮の歌合に　太上天皇

おほぞらに契るおもひの年もへぬ月日もうけよゆくすゑの空

前大僧都全眞西國の方に侍りけるに遣しける　承仁親王

けるに
河舟ののぼりわづらふ綱手繩くるしくてのみ世をわたるかな
題しらず　大僧都（正イ）覺辨
老らくの月日はいとどはやせ川かへらぬ浪にぬるるそでかな
よみて侍りける百首の歌を源家長が許に見せに
つかはしける奥に書きつけて侍りける　藤原行能
かきながす言の葉をだに沈むなよ身こそかくてもやま川の水
身の望かなひ侍らで社のまじらひもせで籠りゐ
て侍りける（もイ）に葵を見てよめる　鴨長明
見ればまづいとど涙ぞもろ葛（かづら）いかにちぎりてかけはなれ（るらイ）けむ
題しらず　源季景
同じくはあれないにしへ思出のなければとても忍ばずもなし

世を捨つる心は猶ぞなかりける［もイ］うきをうしとは思ひしれども

述懷の心をよみ侍りける　左近中將公衡

すてやらぬ我が身ぞつらきさりともと思ふ心に道をまかせて

題しらず　讀人しらず

うきながらあればある世に故鄕の夢をうつつに覺［さま］しかねつつ［もイ］

源　師光

憂きながらなほ惜まるる命かな後の世とてもたのみなければ

賀茂季保

さりともとたのむ心も行く末も思へば知らぬ世にまかすらむ

荒木田長延

つくづくと思へばやすき世の中を心となげく我が身なりけり

入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍り　刑部卿賴輔

雅經

君が代に逢へるばかりの道はあれど身をば賴まずゆく末の空

皇太后宮大夫俊成女

をしむとも淚に月もこころからなれぬる袖にあきをうらみて

千五百番歌合に

攝政太政大臣

浮き沈み來む世はさてもいかにぞと心に問ひて答へかねぬる

題しらず

我ながら心のはてをしらぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき

おしかへし物を思ふは苦しきに知らず顏にて世をや過ぎまし

五十首の歌よみ侍りけるに述懷の心を

守覺法親王

長らへて世に住むかひはなけれども憂にかへたる命なりけり

權中納言兼宗

いたづらに過ぎにしことや歎かれむうけがたき身の夕暮の空
打絶えて世にふる身にはあらねどもあらぬ筋にも罪ぞ悲しき

和歌所にて述懐の心を

山里にちぎりし庵やあれぬらむ待たれむとだに思はざりしを

右衛門督通具

そでにおく露をばつゆと忍べどもなれ行く月や色をしるらむ

定家朝臣

君が代に逢はずばなにを玉の緒の長くとまでは惜まれじ身を

家隆朝臣

おほかたの秋の寢覺のながき夜も君をぞいのる身を思ふとて
和歌の浦や沖つ潮合に浮び出づるあはれ我身のよるべしらせよ
その山のちぎらぬ月も秋かぜもすすむるそでに露こぼれつつ

思はねど世をそむかむといふ人の同じ數にやわれもなりなむ

西行法師

數ならぬ身をも心のもりがほにうかれてはまた歸り來にけり

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思を

年月をいかで我が身におくりけむ昨日の人も今日はなきよに

うけがたき人の姿にうかび出でてこりずや誰もまた沈むべき

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに

寂蓮法師

背きてもなほ憂きものは世なりけり身を離れたる心ならねば

述懷の心をよめる

前大僧正慈圓

身のうさを思ひしらずばいかがせむ厭ひながらも猶過すかな

なにごとを思ふ人ぞと人問はばこたへぬさきに袖ぞぬるべき

憂しといひて世を一向に背かねば物思ひ知らぬ身とやなりなむ　讀人しらず

そむけどもあめの下をし離れねばいづくにもふる涙なりけり

延喜の御時女藏人内匠白馬節會見侍りけるに車より紅の衣を出しけるを撿非違使のたださむとしければいひつかはしける　女藏人内匠

大空にてるひの色をいさめても天のしたにはたれかすむべき

かくいへりければたださずになりにけり

例ならで太秦に籠り侍りけるに心ほそく覺えければ　周防内侍

かくしつつ夕の雲となりもせばあはれかけても誰かしのばむ

題しらず　前大僧正慈圓

命だに（さへイ）あらば見つべき身のはてをしのばむ人のなきぞ悲しき

例ならぬこと侍りけるに知れりける聖のとぶら
ひにまうで來て侍りければ　大僧正行尊

さだめなき昔がたりを數ふればわが身も數に入りぬべきかな

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

世の中のはれゆく空にふる霜の憂身ばかりぞ置きどころなき

例ならぬこと侍りけるに無動寺にてよみはべり
ける

賴みこし我が古寺の苔の下にいつしか朽ちむ名こそをしけれ

題しらず　大僧正行尊

くり返し我が身のとがを求むれば君もなき世に廻るなりけり

清原元輔

暮かへし　大納言經信

秋風の音せざりせばしらつゆの軒のしのぶにかからましやは

ある所に通ひ侍りけるを朝光大將見かはして夜一夜物語してかへりて又の日　右(左イ)大將濟時

忍草いかなる露かおきつらむ今朝はねもみなあらはれにけり

かへし　左大將朝光

淺茅生をたづねざりせば忍草おもひ置きけむつゆを見ましや

わづらひける人のかく申し侍りける　讀人しらず

長らへむとしも思はぬ露の身のさすがに消えむ事をこそ思へ

かへし　小馬命婦

つゆの身の消えばわれこそ先立ためおくれむものか森の下草

題しらず　和泉式部

あさからぬ心ぞみゆる音羽川せき入れし水のながれならねど

歌奉れと仰せられければ忠岑がなど書き集めて奉りける奥にかきつけける　　壬生忠見

言の葉のなかをなくなく尋ぬれば昔のひとに逢ひみつるかな

遊女の心をよみ侍りける　　藤原爲忠朝臣

獨寢のこよひもあけぬ誰としも頼まばこそは待つもうからめ

大江擧周はじめて殿上許されて草深き庭におりて拜しけるを見侍りて　　赤染衛門

草わけて立ちゐる袖の嬉しさに堪へずなみだの露ぞこぼるる

秋の頃わづらひけるおこたりて度々とぶらひける人につかはしける　　伊勢大輔

うれしさは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋のゆふ暮

大淀のうらにかりほすみるめだに霞にたえてかへる雁がね

最慶法師千載集書きて奉りける包紙に墨をすり

筆を染めつつ年ふれどかき顯せることのはぞな

きと書きつけて侍りける御かへし　後白河院御歌

濱千鳥ふみおく跡のつもりなばかひある浦に逢はざらめやは

上東門院高陽院におはしましけるに行幸侍りて

せきいれたる瀧を御らんじて　後朱雀院御歌

瀧つ瀬に人の心をみることはむかしに今もかはらざりけり

權中納言通俊後拾遺えらび侍りける頃まづ片は

しもゆかしくなど申して侍りければ申し合せて

こそとてまだ清書もせぬ本をつかはし侍りける

を見てかへしつかはすとて　周防内侍

都の外に住み侍りけるる久しう音づれざりける
人につかはしける　女御徽子女王
雲ゐとぶ雁の音近きすまひにもなほ玉章(たまづさ)はかけずやありけむ
亭子院おりゐ給はむとしける秋よみける　伊勢
しらつゆは置きてかはれど百敷のうつろふ秋はものぞ悲しき
殿上はなれ侍りてよみ侍りける　藤原清正
天津風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲居にかへらざるべき
二條院菩提樹院におはしまして後の春昔を思ひ
出でて大納言經信參りて侍りける又の日女房の
申しつかはしける　讀人しらず
いにしへのなれし雲ゐをしのぶとや霞をわけて君たづねけむ
最勝四天王院の障子に大淀かきたる所　藤原定家朝臣

屏風の繪に鹽竈の浦をかきて侍りけるを　一條院皇后宮

いにしへの蜑やけぶりとなりぬらむ人目もみえぬしほ竈の浦

少將高光横川に上りて頭おろし侍りにけるを聞かせ給ひてつかはしける　天曆御歌

都より雲の八重たつおくやまの横川のみづはすみよかるらむ

御かへし　如覺

百敷のうちのみつねにこひしくて雲の八重たつ山はすみうし

世をそむきて小野といふ所に住み侍りける頃業平朝臣雪のいと高う降りつみたるをかきわけてまうで來て夢かとぞ思ふおもひきやとよみ侍りけるに　惟喬親王

ゆめかとも何か思はむ浮世をばそむかざりけむ程ぞくやしき

后に立ち給ひける時冷泉院の后宮の御ひたひを
奉りたまひけるを出家の時返し奉り給ふとて　東三條院

そのかみの玉のかざしをうちかへしいまは衣のうらを賴まむ

かへし　冷泉院太皇太后宮

つきもせぬ光の間にも紛れなで老いて歸れるかみのつれなさ

上東門院出家の後こがねの裝束したるぢんのず
ず銀の筥に入れて梅の枝につけて奉られける　枇杷皇太后宮

かはるらむ衣のいろをおもひやる涙やうらのたまに（とイ）まがはむ

かへし　上東門院

まがふらむ衣の玉にみだれつつなほまださめぬ心地こそすれ

題しらず　和泉式部

潮のまによもの浦々たづぬれど今はわが身のいふかひもなし

いかにせむ身をうき舟の荷を重みつひの泊やいづくなるらむ
人麿

蘆鴨のさわぐ入江の水の江の世にすみがたき我が身なりけり
大中臣能宣朝臣

あしがもの羽風になびく浮草のさだめなき世をたれか頼まむ
なぎさの松といふことをよみ侍りける
源順

老いにけるなぎさの松の深緑しづめるかげをよそにやは見る
山水をむすびてよみ侍りける
能因法師

あしびきの山下水にかげ見れば眉しろたへにわれ老いにけり
尼になりぬと聞きける人に裝束つかはすとて
法成寺入道前攝政太政大臣

なれ見てし花の袂をうちかへし法のころもをたちぞかへつる

鵲

彦星の行きあひを待つかささぎの渡せる橋をわれにかさなむ

浪

ながれ木と立つしら波とやく鹽といづれか辛きわたつみの底

題しらず　讀人しらず

さざなみや比良山風のうみ吹けば釣するあまの袖かへる見ゆ

白波のよする渚に世をつくす海士の子なればやどもさだめず

千五百番歌合に　攝政太政大臣

舟のうち波の下にぞ老いにける蜑のしわざもいとまなの世や

題しらず　前中納言匡房

さすらふる身は定めたる方もなし浮きたる舟の浪にまかせて

增賀上人

霧

霧立ちて照る日の本は見えずとも身は惑はれじよるべありやと

雪

花とちり玉とみえつつあざむけば雪ふるさとぞ夢にみえける

松

おいぬとて松はみどりぞまさりける我が黑かみの雪の寒さに

野

つくしにも紫おふる野邊はあれどなき名悲しぶ人ぞきこえぬ

道

苅萱の關もりにのみ見えつるは人もゆるさぬみちべなりけり

海

うみならずたたへる水の底までも淸きこころは月ぞてらさむ

新古今和歌集　巻十八

雜歌下

山

菅贈太政大臣

足曳のかなたこなたに道はあれど都へいざと言ふひとのなき（ぞイ）

日

天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさしのこるべき

月

月ごとにながると思ひしますす鏡にしの浦にもとまらざりけり

雲

やまわかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見る時はなほ頼まれぬ

ぬしなき宿を　　惠慶法師

いにしへを思ひやりてぞ戀ひわたる荒れたるやどの苔の岩橋

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心　藤原定家朝臣

わくらばに問はれし人も昔にてそれより庭のあとは絶えにき

物へまかるりける道に山人あまた逢へりけるを見て　　赤染衞門

なげきこる身は山ながら過せかしうき世の中になに歸るらむ

題しらず　　人麿

秋されば狩人こゆる立田山たちても居てもものをしぞおもふ

天智天皇御歌

朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつつゆくは誰が子ぞ

住みなれしわが故郷はこのごろや淺茅が原にうづら鳴くらむ

百首の歌よみ侍りけるに　攝政太政大臣

ふる里はあさぢがすゑになり果てて月にのこれる人のおも影

西行法師

これや見し昔住みけむ跡ならむよもぎがつゆに月のかかれる

人の許にまかりてこれかれ松の陰におりゐて遊びけるに　貫之

陰にとてたちかくるれば唐ごろもぬれぬ雨ふる松のこゑかな

西院の邊に早うあひ知れりける人を尋ね侍りけるに菫つみ侍りける女しらぬよし申しければよみ侍りける　能因法師

石上ふりにし人をたづぬれば荒れたるやどにすみれ摘むなり

いかにせむ賤が園生のおくの竹かきこもるともよの中ぞかし

老の後昔を思ひ出で侍りて　祝部成仲

秋來ればむかしをのみぞしのぶ草葉末のつゆに袖ぬらしつつ

題しらず　前大僧正慈圓

をかのべの里のあるじを尋ぬれば人はこたへず山おろしの風

西行法師

ふるはたの岨の立木にゐる鳩の友よぶこゑのすごきゆふぐれ

山かげのかた岡かけてしむる野のさかひに立てるたまのを柳

しげき野をいく一村にわけなしてさらに昔をしのびかへさむ

むかしみし庭の小松に年ふりてあらしの音をこずゑにぞ聞く

三井寺やけて後すみ侍りける坊を思ひやりてよめる　大僧正行尊

など弟子どもの許につかはすとて　加茂重保

けぶりたえてやく人もなき炭竈の跡のなげきを誰かこるらむ

老いて後津の國なる山寺(里イ)にまかり籠れりけるに寂蓮尋ねまかりて侍りけるに庵の樣すみあらしてあはれに見え侍りけるを歸りて後とぶらひ侍りければ　西日法師

八十(やそぢ)あまり西のむかへを待ちかねて住みあらしたる柴の庵ぞ

山家の歌あまたよみ侍りけるに　前大僧正慈圓

山里にとひくる人のことぐさはこの住居こそうらやましけれ

後白河院かくれさせ給ひて後百首の歌に　式子内親王

斧の柄の朽ちし昔は遠けれどありしにもあらぬ世を(にイ)もふる哉

述懷百首の歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

世をそむく山のみなみの松風に苔のころもや夜さむなるらむ

西行法師百首の歌すすめてよませ侍りけるに　藤原家隆朝臣

いつかわれこけの袂につゆおきてしらぬ山路の月を見るべき

百首の歌奉りしに山家の心を　式子内親王

今はわれまつのはしらの杉の庵に閉づべきものを苔ふかき袖

小侍従

しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきおきの墨染のそで

攝政太政大臣

忘れじのひとだにとはぬ山（時イ）路かな櫻はゆきに降りかはれども

五十首の歌奉りしに　藤原雅經

影やどす露のみしげくなり果てて草にやつるるふるさとの月

俊惠法師身まかりて後年頃つかはしけるたき木

題しらず　前大僧正慈圓

山ざとにひとりながめて思ふかな世にすむひとの心づよさを

西行法師

やま里にうき世いとはむ友もがなくやしく過ぎし昔かたらむ

山里はひとこさせじと思はねど問はるることぞ疎くなりゆく

前大僧正慈圓

草の庵をいとひてもまたいかがせむ露の命のかかるかぎりは

都を出でて久しく修業し侍りけるにとふべき人のとはず侍りければ熊野より遣しける　大僧正行尊

わくらばになどかは人のとはざらむ音無川にすむ身なりとも

あひ知れりける人の熊野に籠り侍りけるにつかはしける　安法法師

水上のそらに見ゆるは白雲のたつにまがへるぬのびきのたき　藤原有家朝臣

最勝四天王院の障子に布引の瀧かきたる所

ひさかたの天のをとめがなつごろも雲るにさらす布引のたき　攝政太政大臣

天の河原を過ぐとて

昔きくあまの河原をたづね來てあとなき水をながむばかりぞ　藤原實方朝臣

題しらず

天の川かよふうき木にこととはむ紅葉の橋は散るや散らずや　前中納言匡房

堀河院の御時百首の歌奉りけるに

眞木の板も苔むすばかりなりにけり幾世へぬらむ(かへぬるイ)瀬田の長橋

天暦の御時屛風に國々の所の名をかかせさせ侍りけるに飛鳥川　中務

定なき名には立てれど飛鳥川早くわたりし瀬にこそありけれ

歎くこと侍りける頃　智恩院入道前關白太政大臣

さほ川のながれ久しき身なれども浮世に逢ひて沈みぬるかな

冬の頃大將はなれて歎くこと侍りける明くる年

右大臣になりて奏し侍りける　東三條入道關白太政大臣

かかるせもありける物を宇治川のたえぬばかりも歎きける哉

御かへし　圓融院御歌

昔よりたえせぬ川のすゑなればよどむばかりをなに歎くらむ

題しらず　人麿

もののふの八十うぢ川の網代木にいさよふ波の行へ知らずも

布引の瀧見にまかりて　中納言行平

我が世をばけふかあすかと待つかひの涙の瀧といづれ高けむ

京極前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるに　二條關白内大臣

おもふことおほ原山のすみ竈はいとどなげきの数をこそ積め

題しらず　西行法師

たれ住みてあはれしるらむ山里のあめふりすさぶ夕暮のそら

しをりせでなほ山ふかくわけ入らむうき事きかぬ所ありやと

殷富門院大輔

かざしをる三輪のしげ山かきわけて哀とぞ思ふ杉立てるかど

法輪寺に住み侍りけるに人の詣できて暮れぬと

ていそぎ侍りければ　道命法師

いつとなきをぐらの山の陰をみて暮れぬと人の急ぐなるかな

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒引のひき

わけの使にて參りけるに　定家朝臣

嵯峨のやま千世のふるみち跡とめてまた露わくるもち月の駒

百首の歌奉りし時　二條院讃岐

ながらへてなほ君が代を松山のまつとせしまに年ぞ經にける

山家松といふことを　皇太后宮大夫俊成

今はとてつま木こるべき宿のまつ千世をば君となほ祈るかな

春日社の歌合に松風といへることを　有家朝臣

われながら思ふかものをとばかりに袖にしぐるる庭の松かぜ

山寺に侍りける頃　道命法師

世をそむく所とかきくおく山はもの思ひにぞ入るべかりける

少將井の尼大原より出でたりと聞きてつかはしける　和泉式部

世をそむく方はいづくもありぬべし大原山は住みよかりきや

かへし　少將井尼

けるに庵の戸を閉ぢて人も侍らざりければ歸る

とてかきつけける　　惠慶法師

苫(草イ)の庵さして來つれど君まさでかへるみ山のみちぞ(のイ)つゆけき(さイ)

ひじり後に見てかへし

荒れはてて風もさはらぬ苫(草イ)の庵に我はなくとも露はもりけむ

題しらず　　西行法師

山ふかくさこそ心は通ふともすまであはれは知らむものかは

やまかげにすまぬ心はいかなれや惜まれて入る月もあるよに

山家送年といへる心をよみ侍りける　　寂蓮法師

立ち出でて爪木をり來し片岡のふかき山路となりにけるかな

住吉の歌合に山を　　太上天皇

奧山のおどろがしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

服つかはすとて　　權大納言師氏

おくやまの苔の衣にくらべ見よいづれか露の置きまさるとも

かへし　　如覺

白露のあしたゆふべにおく山のこけのころもは風もさはらず

能宣朝臣大原野に詣でて侍りけるに山里のいとあやしきに住むべくもあらぬさまなる人の侍りければいづこわたりより住むぞなどとひ侍りければ　　讀人しらず

世の中をそむきにとては來しかどもなほうき事はおほ原の里

かへし　　能宣朝臣

身をばかつをしほの山と思ひつついかに定めて人の入りけむ

深き山に住み侍りけるひじりの許に尋ねまかり

千五百番歌合に　右衛門督通具

ひと筋になれなばさてもすぎの庵に夜な夜な變る風の音かな

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心をよめる　有家朝臣

たれかはと思ひ絶えてもまつにのみ音づれてゆく風は恨めし

鳥羽にて歌合し侍りしに山家嵐といふことを　宜秋門院丹後

山里は世の憂きよりも住みわびぬことのほかなるみねの嵐に

百首の歌奉りし時　家隆朝臣

瀧の音松のあらしもなれぬればうち寢るほどの夢は見せけり

題しらず　寂然法師

ことしげき世をのがれにしみ山邊にあらしの風も心して吹け

少將隆光横川にまかりて頭おろし侍りけるに法

風になびくふじの煙の空に消えて行くへもしらぬ我が思かな

五月のつごもりにふじの山の雪白くふれるを見てよみ侍りける　業平朝臣

ときしらぬ山は富士のねいつとてか鹿の子斑に雪のふるらむ

題しらず　在原元方

春秋もしらぬときはのやま里は住む人さへやおもがはりせぬ

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

花ならでただ柴の戸をさして思ふこころのおくもみ吉野の山

題しらず　西行法師

吉野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ

藤原家衡朝臣

いとひてもなほいとはしき世なりけり吉野のおくの秋の夕暮

百首の歌奉りし時海邊の歌　越前

沖つ風よさむになれや田子の浦の蜑の藻鹽火たきまさるらむ

海邊霞といへる心をよみ侍りし　家隆朝臣

見わたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびくしほ竈の浦

太神宮に奉りける百首の歌の中に若菜をよめる　皇太后宮大夫俊成

けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志(いちし)の浦のあまのをとめご

伊勢にまかりける時よめる　西行法師

鈴鹿山浮世を外(よそ)にふり捨てていかになりゆく我が身なるらむ

題しらず　前大僧正慈圓

世のなかを心たかくもいとふかな富士の煙を身のおもひにて

あづまの方へ修業しはべりけるにふじの山をよめる　西行法師

みづの江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松かぜ

海邊の心を　藤原秀能

今さらに住みうしとてもいかがせむなだの鹽屋のゆふ暮の空

むすめの齋宮に具して下り侍りて大淀の浦にみそぎし侍るとて　女御徽子女王

大よどの浦に立つなみかへらずば松のかはらぬ色を見ましや

大貳三位里にいで侍りけるをきこしめして　後冷泉院御歌

まつ人は心ゆくともすみよしのさとにとのみは思はざらなむ

御かへし　大貳三位

住吉の松はまつともおもほえで君が千とせのかげぞこひしき

教長卿名所の歌よませ侍りけるに　祝部成仲

うちよする浪の聲にてしるきかなふきあげの濱の秋のはつ風

須磨の浦のなぎたるあさは目もはるに霞にまがふあまの釣舟

天暦の御時屏風の歌　壬生忠見

秋かぜの關吹きこゆるたびごとに聲うちそふる須磨のうら浪

五十首の歌よみて奉りしに　前大僧正慈圓

すまの關夢をとほさぬ浪のおとを思ひもよらで宿をかりけり

和歌所の歌合に關路秋風といふことを　攝政太政大臣

人住まぬ不破のせき屋の板びさし荒れにしのちはただ秋の風

明石の浦をよめる　源俊頼朝臣

あまをぶね苫ふきかへす浦風にひとりあかしの月をこそ見れ

眺望の心を　寂蓮法師

和歌のうらを松の葉ごしにながむれば木末によする蜑の釣舟

千五百番歌合に　正三位季能

しがの蜑の鹽やく煙風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく

貫　　之

難波女の衣ほすとて刈りてたく葦火のけぶり立たぬ日ぞなき

ながらの橋をよめる

忠　　岑

年ふれば朽ちこそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで

惠慶法師

はるの日のながらの濱に船とめていづれか橋ととへど答へず

後徳大寺左大臣

朽ちにけるながらの橋を來て見ればあしの枯葉に秋風ぞ吹く

題しらず

權中納言定頼

おきつかぜ夜半に吹くらし難波がた曉かけてなみぞよすなる

春須磨の方へまかりてよめる

藤　原　孝　善

新古今和歌集　卷第十七

雜歌中

朱鳥五年九月紀伊國行幸の時　　河島皇子

白浪のはままつが枝の手向草いく世までにかとしの經ぬらむ

題しらず　　式部卿宇合

やましろのいはたの小野の柞(はゝそ)原見つつや君がやま路こゆらむ

在原業平朝臣

蘆の屋の灘の鹽やきいとまなみつげのを櫛もさゝず來にけり

はるる夜の星か河邊の螢かもわが住むかたのあまのたく火か

讀人しらず

つけて申し侍りける

前大納言公任

ほどもなく覺めぬる夢の中なれどその世に似たる花の色かな

かへし

御形宣旨

見し夢をいづれのよぞと思ふ間にをりをわすれぬ花の悲しさ

題しらず

皇太后宮大夫俊成

老いぬともまたも逢はむとゆく年に涙の玉をたむけつるかな

慈覺大師

大方に過ぐる月日をながめしは我が身に年のつもるなりけり

君が代にあふくま川のうもれ木もこほりの下に春をまちけり
　元輔が昔すみはべりける家の傍に清少納言すみ
　けるころ雪いみじう降りてへだての垣もたふれ侍
　りければ申しつかはしける　　赤染衛門
あともなく雪ふるさとは荒れにけりいづれ昔の垣根なるらむ
　御なやみも重くならせたまひて後雪のあしたに　後白河院御歌
露の命消えなましかばかくばかりふる白雪をながめましやは
　雪によせて述懐の心をよめる　皇太后宮大夫俊成
杣山やこずゑにおもる雪折にたへぬなげきの身をくだくらむ
　佛名のあしたけづり花を御覽じて　朱雀院御歌
時過ぎて霜にかれにし花なれど今日はむかしの心ちこそすれ
　花山院おりゐ給ひて又の年御佛名にけづり花に

かへし　前中納言顯長

世のなかにあきはてぬれば都にも今はあらしの音のみぞする

清涼殿の庭に植ゑたまへりける菊を位去り給ひて後おぼしいでて　冷泉院御歌

うつろふは心のほかの秋なればいまはよそにぞきくの上の露

ながつきの頃野の宮に前栽植ゑけるに　源順

たのもしな野の宮人の植うる花しぐるる月にあへずなるとも

題しらず　讀人しらず

山河のいはゆく水もこほりしてひとりくだくる峯のまつかぜ

百首の歌奉りし時　土御門内大臣

朝ごとにみぎはの氷ふみわけて君につかふるみちぞかしこき

最勝四天王院の障子にあふくま川かきたる所　藤原家隆朝臣

やま里に葛はひかかる松がきのひまなくものは秋ぞかなしき

秋の暮に身の老いぬることを歎きてよみはべりける　安法法師

もも年の秋のあらしはすごし來ぬいづれの暮の露と消えなむ

頼綱朝臣津の國の羽束といふ所に侍りける時つかはしける　前中納言匡房

秋果つるはつかの山のさびしきにあり明の月を誰と見るらむ

九月ばかりに薄を崇徳院に奉るとてよめる　大藏卿行宗

花すすき秋の末葉になりぬればことぞともなく露ぞこぼるる

山里に住み侍りける頃嵐はげしきあしたた前中納言顯長が許に遣しける　後德大寺左大臣

夜半にふく嵐につけておもふかな都もかくやあきはさびしき

寄風懷舊といふことを　　左衛門督通光

淺茅生やそでに朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹くあらしかな

皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへる夢の世をわすれがたみの野べの秋風

題しらず　　祝部允仲

白露は置きにけらしな宮城野のもとあらのこ萩末たわむまで

法成寺入道前太政大臣女郎花を折りて歌よむべきよし侍りければ　　紫式部

をみなへし盛の色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

かへし　　法成寺入道前攝政太政大臣

白露はわきてもおかじ（おかまし イ）女郎花こころからにやいろの染むらむ

題しらず　　曾根好忠

といふ心ををのこどもつかうまつりしに　　具親

ながめよと思はでしもやかへるらむ月まつ浪のあまのつり舟

八十に多くあまりて後百首の歌めししによみて

奉りし　　皇太后宮大夫俊成

しめ置きていまやとおもふ秋山の蓬がもとにまつむしの鳴く

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露のゆふ暮

題しらず　　西行法師

雲かかる遠山ばたのあきされば思ひやるだにかなしきものを

五十首の歌人々によませ侍りけるに述懐の心を

よみ侍りける　　守覺法親王

風そよぐ篠のをざさのかりのよを思ふねざめに露ぞこぼるる

八重葎しげれるやどは人もなしまばらに月のかげぞすみける

題しらず　　神祇伯顯仲

鷗ゐるふぢ江のうらのおきつ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ

俊惠法師

なにはがた汐干にあさる葦たづも月かたぶけばこゑの恨むる

和歌所の歌合に海邊月といふことを　　大僧正慈圓

和歌の浦に月のでしほのさすままによる鳴く鶴の聲ぞ悲しき

定家朝臣

藻しほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨のうら人

藤原秀能

明石がたいろなき人のそでを見よすずろに月も宿るものかは

熊野に詣で侍りしついでに切目宿にて海邊眺望

には心ざし深き事はいつばかりよりのことにか
と尋ね侍りければわかく侍りし時西行に久しく
あひともなひて聞き習ひ侍るよし申してそのか
み申しし事など語り侍りて歸りて朝に遣しける

法橋行遍

あやしくぞかへさは月の曇りにし昔がたりに夜や更けにけむ（ぬらイ）

寂超法師

故鄕の宿もる月にこと問はむわれをば知るやむかしすみきと

遍昭寺にて月を見て

平忠盛朝臣

住み來けむむかしの人は影たえて宿もるものはありあけの月

あひ知りて侍りける人の許にまかりたりけるに
その人外に住みていたう荒れたる宿に月のさし
入りて侍りければ

前中納言匡房

長月の有明の頃山里より式子內親王に贈れりける

惟明親王

思ひやれなにをしのぶとなけれども都おほゆるありあけの月

かへし

式子內親王

ありあけの同じながめは君も問へみやこのほかも秋のやま里

春日社の歌合に曉月の心を

攝政太政大臣

天の戶をおしあけがたの雲間より神代の月のかげぞのこれる

右大將忠經

雲をのみつらきものとてあかす夜のつきや梢にをちかたの山

藤原保秀朝臣

入りやらで夜を惜む月のやすらひにほのぼの明くる山の端ぞうき

月あかき夜定家朝臣に逢ひて侍りけるに歌の道

秋をへて月をながむる身となれりいそぢの闇をなに歎くらむ

百首の歌奉りしに　　藤原隆信朝臣

ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月

題しらず　　源光行

こころある人のみ秋の月を見ばなにをうき身(世イ)の思ひ出にせむ

千五百番歌合に　　二條院讃岐

身の憂さに月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもり來る

世を背きなむと思ひ立ちける頃月を見てよめる　　寂超法師

あり明の月よりほかに誰をかはやま路の友とちぎり置くべき

山里にて月の夜都を思ふといへる心をよみ侍りける　　大江嘉言

都なる荒れたるやどにむなしくや月にたづぬる人かへるらむ

思ひきや別れし秋にめぐりあひて又もこの世の月を見むとは

題しらず　　西行法師

つきをみて心うかれしいにしへの秋にも更にめぐり逢ひぬる

夜もすがら月こそ袖にやどりけれむかしの秋を思ひ出づれば

月のいろに心をきよく染めましや都をいでぬ我が身なりせば

すつとならば憂世を厭ふ（いづるイ）しるしあらむ我には曇れ秋の夜の月

更けにける我が身（世イ）の影をおもふまに遙に月のかたぶきにけり

入道親王覺性

ながめして過ぎにしかたを思ふ間に峯よりみねに月は移りぬ

藤原道經

秋の夜のつきに心をなぐさ（にイ）めてうき世に年のつもりぬるかな

五十首の歌めしし時　　前大僧正慈圓

ながめわびぬ柴のあみ戸の明けがたに山のは近くのこる月影

題しらず　花山院御歌

あかつきの月みむとしも思はねど見し人ゆゑに眺められつつ

伊勢大輔

ありあけの月ばかりこそかよひけれ來る人なしの宿の庭にも

和泉式部

すみなれし人かげもせぬわが宿に有明の月はいく夜ともなく

家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけるに　大納言經信

住む人もあるかなきかの宿ならし葦間の月のもるにまかせて

秋の暮に病にしづみて世をのがれ侍りける又の年の秋九月十餘日月くまなく侍りけるによみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

やまざとに月はみるやと人もこず空行く風ぞ木の葉をもとふ

攝政太政大臣大將に侍りし時月の歌五十首よませ侍りけるに

ありあけの月の行方をながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

同じ家の歌合に山月の心をよめる　藤原業淸

山の端を出でてもまつの木の間より心づくしのありあけの月

和歌所の歌合に深山曉月といふことを　鴨長明

よもすがらひとりみ山のまきの葉にくもるもすめる有明の月

熊野に詣で侍りし時奉りし歌の中に　藤原秀能

おく山の木の葉のおつる秋風にたえだえみねの月(雲イ)ぞのこれる

月すめばよものうき雲そらに消えてみ山がくれをゆく嵐かな

山家の心をよみ侍りける　猷圓法師

月は見るやといへりければよめる　源道濟

いたづらに寢てはあかせど諸共に君がこぬ夜の月は見ざりき

夜更くるまでねられず侍りければ月の出づるをながめて　增基法師

天の原はるかにひとり眺むればたもとに月の出でにけるかな

能宣朝臣大和國まつちの山近く住みける女の許に夜更けてまかりて逢はざりけるを恨み侍りければ、　讀人しらず

頼めこし人をまつちの山の端に小夜ふけしかば月も入りにき

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

月見ばといひしばかりの人は來で槇の戸たたくにはの松かぜ

五十首の歌奉りしに山家月の心を　前大僧正慈圓

文治のころほひ百首の歌よみ侍りけるに述懐歌とてよめる

左近中將公衡

心にはわするる時もなかりけり三代のむかしの雲の上のつき

百首の歌奉りける時秋の歌

二條院讃岐

むかし見し雲井をめぐる秋の月いまいくとせか袖にやどらむ

月前述懐といへる心をよめる

藤原經通朝臣

うき身世にながらへばなほ（またイ）思ひ出でよ袂に契るありあけの月

石山に詣で侍りて月を見てよめる（み侍りけるイ）

藤原長能

都にもひとや待つらむ石山のみねにのこれる（こもイ）あきの夜のつき

題しらず

躬恒

淡路にてあはとはるかに見し月のちかきこよひは所がらかも

月のあかかりける夜あひかたらひける人の此頃

八月十五夜和歌所にてをのこども歌つかうまつり侍りしに　民部卿範光

和歌の浦に家の風こそなけれども波ふくいろは月に見えけり

和歌所の歌合に湖上月明といふことを　宜秋門院丹後

よもすがらうら漕ぐ舟はあともなし月ぞのこれるしがの辛崎

題しらず　藤原盛方朝臣

山のはに思ひも入らじ世の中はとてもかくてもありあけの月

永治元年譲位近くなりて夜もすがら月を見てよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

忘れじよわするなとだにいひてまし雲井のつきの心ありせば

崇徳院に百首の歌奉りけるに

いかにして袖にひかりの宿るらむ雲井の月は(のイ)へだて來し身を

題しらず　　藤原爲時

山の端を出でがてにする月待つとねぬ夜のいたく更けにける哉

參議正光朧月夜に忍びて人の許にまかりけるを見あらはして遣しける　　伊勢大輔

浮雲は立ちかくせどもひまもりて空ゆく月の見えもするかな

かへし　　參議正光

うきぐもに隱れてとこそ思ひしかねたくも月の隙もりにける

三井寺にまかりて日頃過ぎて歸らむとしけるに人々なごり惜みてよみ侍りける　　刑部卿範兼

月をなど待たれのみすと思ひけむげに山の端は出でうかりけり

山里に籠り居て侍りけるを人のとひて侍りければ　　法印靜賢

おもひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月

后宮より内にあふぎ奉り給ひけるに　中務

袖のうらなみ吹きかへす秋風にくものうへまで涼しかるらむ

業平朝臣の裝束つかはして侍りけるに　紀有常朝臣

秋やくる露やまがふと思ふまであるは淚のふるにぞありける

早くよりわらは友だちに侍りける人の年頃へて行き逢ひたるほのかにて七月十日頃月にきほひて歸り侍りければ　紫式部

廻り逢ひて見しやそれともわかぬまに雲隱れにし夜半の月かな

みこの宮と申しける時少納言藤原統理年頃なれつかうまつりけるを世を背きぬべきさまに思ひ立ちけるけしきを御覽じて　三條院御歌

月影の山の端わけて隱れなばそむくうきよをわれやながめむ

五月雨はまやの軒端の雨そそぎあまりなるまで濡るる袖かな

題しらず　花山院御歌

獨りぬる宿のとこなつ朝な朝ななみだの露にぬれぬ日ぞなき

贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひける時少將義孝久しく參らざりけるに撫子の花につけてつかはしける　惠子女王

よそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべき撫子の花

月あかく侍りける夜人の螢をつつみて遣したりければ雨降りけるに申し遣しける　和泉式部

おもひあらば今夜の空はとひてまし見えしや月の光なりけむ

題しらず　七條院大納言

思ひあれば露は袂にまがふかと秋のはじめをたれに問はまし

三條院の御時五月五日菖蒲の根をほとゝぎすのかたに作りて梅の枝にすゑて人の奉りて侍りけるをこれを題にて歌つかうまつれと仰せられければ

三條院女藏人左近

梅が枝にをりたがへたる時鳥こゑのあやめもたれかわくべき

五日ばかり物へまかりける道にいと白くくちなしの花咲けりけるをこれは何の花ぞと人にとひ侍りけれど申さざりければ

小　辨

うちわたすをち方人にこと問へば答へぬからにしるき花かな

さみだれ空はれて月あかく侍りけるに

赤染衞門

五月雨のそらだにすめる月かげに涙のあめは晴るる間もなし

述懷百首の歌の中に五月雨

皇太后宮大夫俊成

四月祭の日まで花ちり殘りて侍りける年その花を使の少將のかざしに給ふ葉にかきつけ侍りける

紫式部

神代にはありもやしけむ櫻花けふのかざしに折れるためしは

式子内親王

いつきの昔を思ひ出でて

ほととぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひしそらぞわすれぬ

左衛門督家通中將に侍りける時祭の使にてかんだちにとまりて侍りける曉齋院の女房の中よりつかはしける

讀人しらず

立ち出づるなごりありあけの月影にいとどかたらふ郭公かな

かへし

左衛門督家通

いく千世と限らぬ君の御代なれど猶惜まるる今朝のあけぼの

侍りける時山吹の花を屛風の上よりなげこし給ひて侍りければ　　實方朝臣

八重ながらいろもかはらぬ山吹のなど九重に咲かずなりにし

御かへし　　圓融院御歌

ここのへにあらで八重咲く山吹のいはぬ色をばしる人もなし

五十首の歌奉りし時　　前大僧正慈圓

おのが波に同じ末葉ぞ萎れぬる藤咲く田子のうらめしの身や

世をのがれて後四月一日上東門院太皇太后宮と申しける時衣がへの御裝束奉るとて　　法成寺入道前關白太政大臣

唐衣はなのたもとに脱ぎかへよわれこそはるの色はたちつれ

御かへし　　上東門院

から衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花のいろを見るべき

しら波のこゆらむすゑのまつ山は花とや見ゆるはるの夜の月
おぼつかな霞立つらむたけくまのまつのくまもる春の夜の月

題しらず　法印幸清

世をいとふ吉野のおくの呼子鳥ふかきこころの程やしるらむ

百首の歌奉りし時　前大納言忠良

をりに逢へばこれもさすがに哀なり小田のかはづの夕暮の聲

千五百番歌合に　有家朝臣

春の雨のあまねき御代を頼むかな霜に枯れ行く草葉もらすな

崇德院にて林下春雨といふ事をつかうまつりけるに　八條前太政大臣

すべらぎの木高き蔭にかくれてもなほ春雨にぬれむとぞ思ふ

圓融院位去り給ひし後實方朝臣馬命婦と物語し

見せばやな志賀の辛崎ふもとなるをがらの山の春のけしきを

題しらず

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれ眺めてけりな恨めしの身や

西行法師

世の中を思へばなべて散る花の我身をさてもいづちかもせむ

東山に花見にまかりて侍るとてこれかれ誘ひけるをさしあふ事ありてとどまりて申し遣しける

安法法師

身はとめつ心はおくるやまざくら風のたよりに思ひおこせよ

題しらず

俊頼朝臣

さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかず山梨の花

橘爲仲朝臣みちのおくに侍りけるとき歌あまたつかはしける中に

加賀左衞門

さくら花すぎゆく春の友とてや風のおとせぬ世にもちるらむ

鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて後三條

内大臣に給はせける　　　　　　　鳥羽院御歌

をしめどもつねならぬ世の花なれば今はこのみを西に求めむ

世をのがれてのち百首の歌よみ侍りけるに花の

歌とて　　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

今はわれ吉野のやまの花をこそ宿のものとも見るべかりけれ

入道前關白太政大臣の家の歌合に

春來れば猶この世こそ忍ばるれいつかはかかる花を見るべき

同じ家の百首の歌に

てる月もくものよそにぞ行きめぐる花ぞこの世の光なりける

春のころ大乘院より人に遣しける　　前大僧正慈圓

折る人のそれなるからにあぢきなく見し我宿の花のかぞする

題しらず　藤原高光

見ても又またも見まくのほしかりし花の盛は過ぎやしぬらむ

京極前太政大臣の家に白河院みゆきし給ひて又の日花の歌奉られけるによみ侍りける　堀河左大臣

老いにける白髪も花ももろ共にけふのみゆきに雪とみえけり

後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心ををのこどもつかうまつりけるに　大納言忠家

櫻花をりて見しにも變らぬに散らぬばかりのしるしなりけり　大納言經信

さもあらばあれ暮れ行く春も雲の上に散る事しらぬ花し匂はば

無風散花といふことをよめる　大納言忠教

にし春まで立ちなれけることなど思ひ出でてよみ侍りける　藤原雅經朝臣

なれなれて見しはなごりの春ぞともなどしら河の花のした蔭

建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重櫻盛なりけるを見て枝に結びつけ侍りける　讀人しらず

ふるさとと思ひなはてそ花櫻かかるみゆきに逢ふ世ありけり

籠り居て侍りける頃後德大寺左大臣白河の花見に誘ひければまかりてよみ侍りける　源師光

いさやまだ月日の行くも知らぬ身は花の春ともけふこそは見れ

敦道のみこの許に前大納言公任の白河の家にまかりて又の日みこの遣しける使につけて申し侍りける　和泉式部

折りに來と思ひやすらむ花櫻ありしみゆきのはるを戀ひつつ

高陽院にて花の散るを見てよみ侍りける　　肥後

萬代をふるにかひあるやどなれやみ雪と見えて花ぞちり來る

かへし　　二條關白内大臣

枝ごとの末までにほふ花なれば散るもみ雪と見ゆるなるらむ

近衞づかさにて年久しくなりて後うへのをのこども大内の花見にまかれりけるによめる　　藤原定家朝臣

春を經てみゆきになるる花のかげふりゆく身をも哀とや思ふ

最勝寺の櫻は鞠のかかりにて久しくなりにしを、その木年ふりて風に倒れたる由聞き侍りしかば、をのこどもにおほせてこと木をその跡に移し植ゑさせし時まかりて見侍ればあまたの年々暮れ

つかはしける　　　　　　東三條入道前攝政太政大臣

春霞たなびきわたるをりにこそかかる山邊はかひもありけれ

御かへし　　　　　　　　圓融院御歌

むらさきの雲にもあらで春がすみたなびく山のかひは何ぞも

柳　　　　　　　　　　　菅贈太政大臣

道の邊のくち木の柳はる來ればあはれむかしと忍ばれぞする

題しらず　　　　　　　　清原深養父

昔みし春は昔のはるながら我が身ひとつのあらずもあるかな

堀河院におはしましける頃閑院左大將の家の櫻を折らせにつかはすとて　　　　圓融院御歌

かきごしに見るあだ人の家櫻はなちるばかり行きて折らばや

御かへし　　　　　　　　左大將朝光

延長のころほひ五位藏人に侍りけるをはなれ侍りて朱雀院の承平八年又かへりなりて明くる年むつきに御あそび侍りける日梅の花を折りてよめる

源公忠朝臣

百敷(ももしき)にかはらぬものは梅の花折りてかざせるにほひなりけり

梅の花を見給ひて

花山院御歌

色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅を見はべりて

大貳三位

うめの花なに匂ふらむみる人の色をも香をもわすれぬる世に

東三條院女御におはしましける時圓融院つねに渡り給ひけるを聞き侍りてゆげひの命婦が許に

哀なりむかしの人をおもふには昨日の野邊にみゆきせましや

御かへし　圓融院御歌

ひきかへて野邊の景色は見えしかど昔をこふる松はなかりき

月あかく侍りける夜袖のぬれたりけるを　大僧正行尊

春來ればそでの氷も解けにけりもりくる月のやどるばかりに

鶯を　菅贈太政大臣

谷ふかみ春のひかりのおそければ雪につつめるうぐひすの聲

梅

ふる雪に色まどはせる梅の花うぐひすのみやわきてしのばむ

枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこび申すとて梅を折りて　貞信公

遲くとも終に咲きぬる梅の花たがうゑおきし種にかあるらむ

新古今和歌集　卷第十六

雜歌上

入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍りけるに立春の心を　皇太后宮大夫俊成

年暮れしなみだのつらら解けにけり苔の下にも春や立つらむ

土御門内大臣の家に山家殘雪といふ心をよみ侍りける　藤原有家朝臣

やまかげやさらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむらぎえ

圓融院位さり給ひて後船岡に子日し給ひけるに參りて朝に奉りける　一條左大臣

我がよはひおところへ行けば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ
今よりは逢はじとすれや白妙の我がころも手のかわく時なき
玉櫛笥あけまくをしきあたら夜をころも手かれて獨かもねむ
あふ事をおぼつかなくて過すかな草葉の露のおきかはるまで
秋の田のほむけの風のかたよりに我は物思ふつれなきものを
はし鷹の野もりの鏡えてしがな思ひおもはずよそながら見む
大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみも歸る浪かな
白波は立ち騷ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ
さして行くかたはみなとの浪たかみうらみてかへる蜑の釣舟

久しくなりにける人の許へ　謙徳公

ながき世のつきぬ歎のたえざらばなにに命をかへてわすれむ

題しらず　權中納言敦忠

心にもまかせざりける命もてたのめも置かじつねならぬ世を

藤原元眞

世の憂きも人のつらきも忍ぶるに戀しきにこそ思ひわびぬれ

忍びてかたらひける女の親聞きていさめ侍りければ　參議篁

數ならばかからましやは世の中にいと悲しきは賤のをだまき

題しらず　藤原惟成

ひとならば思ふ心を言ひてましよしやさこそは賤のをだまき

讀人しらず

齋宮女御春の頃まかり出でて久しく參り侍らざりければ　天曆御歌

春行きて秋までとやは思ひけむかりにはあらず契りしものを

題しらず　西宮前左大臣

初雁のはつかに聞きし言づても雲路に絶えてわぶるころかな

五節の頃内にて見侍りける人に又の年つかはしける　藤原惟成

小忌衣去年ばかりこそ馴れざらめけふの日蔭のかけてだにとへ

題しらず　藤原元眞

住吉のこひわすれ草たね絶えてなき世にあへる我ぞかなしき

齋宮女御まゐりけるにいかなる事かありけむ　天曆御歌

水の上のはかなき數もおもほえず深きこころし底にとまれば

齋宮女御につかはしける　天暦御歌

あまの原そこともしらぬ大空におほつかなさを歎きつるかな

御かへし　女御徽子女王

歎くらむ心をそらに見てしがな立つあさ霧に身をやなさまし

題しらず　光孝天皇御歌

逢はずしてふる頃ほひの數多（あまた）あれば遙けき空にながめをぞする

女の外へまかるを聞きて　兵部卿致平親王

おもひやる心もそらにしら雲の出でたつ方を知らせやはせぬ

題しらず　躬恒

雲井よりとほ山鳥のなきて行く聲ほのかなるこひもするかな

辨更衣ひさしく參らざりけるに給はせける　延喜御歌

くもゐなる雁だになきて來る秋になどかは人の音づれもせぬ

逢ふ事のかたみをだにも見てしがな人はたゆとも見つつ忍ばむ
小野小町

わが身こそあらぬかとのみ辿らるれ問ふべき人に忘られしより
能宣朝臣

葛城や久米路にわたす岩橋の絶えにしなかとなりや果てなむ
祭主輔親

今はとも思ひなたえそ野中なる水のながれは行きてたづねむ
伊勢

おもひいづや美濃のを山の一つ松契りしことはいつも忘れず
業平朝臣

出でていにし跡だにいまだ變らぬに誰が通路と今はなるらむ

梅の花香をのみ袖にとどめおきてわが思ふ人は音づれもせぬ

おのづからさこそはあれと思ふまに誠に人のとはずなりぬる

忠盛朝臣かれがれになりて後いかが思ひけむ久しく音づれぬ事を恨めしくやなどいひて侍りければ返事に

前中納言教盛母

習はねば人の問はぬもつらからで悔しきにこそ袖はぬれけれ

題しらず

皇嘉門院尾張

歎かじなおもへば人につらかりしこの世ながらの報なりけり

和泉式部

如何にしていかに此の世にありへばか暫も物を思はざるべき

深養父

嬉しくば忘るる事もありなましつらきぞ長きかたみなりける

素性法師

題しらず　相模

流れ出でむ浮名にしばしよどむかな求めぬ袖に淵はあれども

をとこの久しく音づれざりけるが忘れてかと申し侍りければよめる　馬内侍

つらからば戀しきことは忘れなでそへてはなどかしづ心なき

昔みける人賀茂祭の次第司に出で立ちてなむまかり渡るといひて侍りければ

君しまれみちのゆききを定むらむ過ぎにし人をかつ忘れつつ

年頃絶えにける女の榑といふもの尋ねたりけるにつかはすとて　藤原仲文

花咲かぬ朽木の杣のそまびとの如何なるくれに思ひいづらむ

久しく音せぬ人に　大納言經信母

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

哀なりうたたねにのみ見し夢のながき思ひにむすぼほれなむ

題しらず　定家朝臣

かきやりしその黑髮のすぢごとにうちふすほどは面影ぞたつ

和歌所の歌合に遇不逢戀の心を　皇太后宮大夫俊成

夢かとよ見しおもかげもちぎりしも忘れずながら現ならねば

戀の歌とて　式子内親王

はかなくぞ知らぬ命を歎きこし我がかね言のかはりける世に

辨

過ぎにける世々の契もわすられていとふ憂身の果ぞはかなき

崇德院に百首の歌奉りける時戀の歌　皇太后宮大夫俊成

おもひわび見し面影はさておきて戀せざりけむをりぞ戀しき

盛明親王

春の夜の夢のしるしは辛くとも見しばかりだにあらば賴まむ

女御徽子女王

ぬる夢に現のうさもわすられて思ひなぐさむほどぞはかなき

春の夜女の許にまかりて遣しける　能宣朝臣

かくばかりねで明しつる春の夜にいかにみえつる夢にかありけむ

題しらず　寂蓮法師

なみだ河身もうきぬべき寝覺かなはかなき夢の名殘ばかりに

百首の歌奉りしに　家隆朝臣

あふとみて事ぞともなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや

題しらず　基俊

床近くあなかま夜半のきりぎりす夢にも人の見えもこそすれ

御禊するならの小川のかは風に祈りぞわたるしたに絶えじと

清原深養父

うらみつつ寝る夜の袖のかわかぬは枕のしたに潮や滿つらむ

中納言家持に遣しける

山口女王

葦べより滿ち來る潮のいやましに思ふか君がわすれかねつる

鹽竈のまへにうきたる浮嶋のうきておもひのある世なりけり

題しらず

赤染衛門

いかにねて見えしなるらむ假寢（うたたね）の夢より後はものをこそ思へ

參議篁

うち解けてねぬもの故に夢を見て物思ひまさる頃にもある哉

伊勢

春の夜の夢にありつと見えつれば思ひたえにし人ぞ待たるる

今までに忘れぬ人は世にもあらじ己がさまざま年のへぬれば
玉水を手にむすびてもこころみむぬるくば石の中もたのまじ
山城の井手のたま水てに汲みて頼みしかひもなき世なりけり
君があたり見つつを居らむ伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも
中空に立ちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべき哉
雲のゐる遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつつぞぬる
ひるは來てよるは別るる山鳥のかげみる時ぞ音はなかれける
我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け
人丸
夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも忘れずぞ思ふいもがこころを
なつぐさの露分ごろもきもせぬになどわが袖のかわく時なき
八代女王

涙のみうき出づる蜑の釣竿のながき夜すがら戀ひつつぞぬる

坂上是則

まくらのみ浮くと思ひし涙川いまは我が身のしづむなりけり

讀人しらず

思ほえず袖にみなとの騷ぐかなもろこし舟のよりしばかりに

いもがそでわかれし日より白妙の衣かたしき戀ひつつぞ寢る

逢ふことのなみの下草みがくれてしづ心なくねこそ泣かるれ

浦にたく藻鹽の煙なびかめや四方のかたよりかぜは吹くとも

わするらむと思ふ心のうたがひにありしよりけに物ぞ悲しき

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ戀しき

命をばあだなるものと聞きしかどつらきが爲は長くもある哉

いづ方に行き隱れなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ

みちのくの安達に侍りける女に九月ばかりに遣しける　重之

おもひやるよその村雲しぐれつつあだちの原に紅葉しぬらむ

思ふ事侍りける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける　六條右大臣室

身に近くきにけるものを色かはる秋をばよそに思ひしかども

題しらず　相模

いろかはる萩のした葉を見てもまづ人の心のあきぞ知らるる

稻妻は照さぬ宵もなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ　謙德公

人知れぬ寢覺の涙ふりみちてさもしぐれつる夜半のそらかな　光孝天皇御歌

りてとひて侍りける返事に　藤原長能

あだ言の葉におく霜の消えにしをある物とてや人のとふらむ

藤原惟成に遣しける　讀人しらず

打はへていやは寢らるる宮城野の小萩が下葉色に出でしより

かへし　藤原惟成

萩の葉や露のけしきもうちつけにもとより變る心あるものを

題しらず　花山院御歌

よもすがら消えかへりつる我が身かな涙の露に結ぼほれつつ

久しくまゐらぬ人に　光孝天皇御歌

君がせぬわが手枕はくさなれやなみだの露の夜な夜なぞ置く

御かへし　讀人しらず

露ばかりおくらむ袖は頼まれずなみだの川のたきつ瀬なれば

右衛門督通具

とへかしな尾花がもとの思草しをるる野邊のつゆはいかにと

家に戀の十五首の歌よみ侍りける時に 十首イ

權中納言俊忠

夜の間にもきゆべきものを露霜のいかに忍べと頼めおくらむ

題しらず

道信朝臣

あだなりと思ひしかども君よりはものわすれせぬ袖の上の露

藤原元眞

同じくは我が身も露と消えななむきえなば辛き言の葉もみじ

たのめて侍りける女の後に返りごとをだにせず侍りければかの男にかはりて

和泉式部

今來むといふ言の葉もかれ行くによなよな露の何におくらむ

頼めたる事あとなくなり侍りにける女久しくあ

新古今和歌集　卷第十五

戀歌五

水無瀬の戀の十五首の歌合に　藤原定家朝臣

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむいろの秋風ぞふく　藤原家隆朝臣

おもひいる身は深草のあきの露たのめしすゑや木がらしの風　前大僧正慈圓

野邊の露はいろもなくてやこぼれつる袖より過ぐる荻の上風

題しらず　左近中將公衡

戀ひわびて野邊のつゆとは消えぬとも誰か草葉を哀とや見む

見しひとの面かげとめよ淸見がた袖にせきもる浪のかよひぢ

皇太后宮大夫俊成女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしばかりを待つとせしまに

かよひこしやどの道芝かれがれに跡なき霜のむすぼほれつつ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に尋戀　前大僧正慈圓

こころこそ行くへもしらぬ三輪の山すぎの木末のゆふ暮の空

百首の歌の中に　式子内親王

さりともと待ちし月日もうつりゆく心の花のいろにまかせて

生きてよもあすまで人は辛からじこの夕暮をとはばとへかし

曉戀の心を　前大僧正慈圓

曉のなみだやそらにたぐふらむ袖に落ち來るかねのおとかな

千五百番歌合に　權中納言公經

つくづくと思ひあかしのうら千鳥なみの枕になくなくぞ聞く　定家朝臣

尋ね見るつらき心のおくの海よ汐干のかたの言ふかひもなし

水無瀨の戀の十五首の歌合に　雅經

攝政太政大臣の家の歌合に　　寂蓮法師

來ぬ人をあきのけしきや更けぬらむうらみに弱る松蟲のこゑ

戀の歌とてよみ侍りける

わがこひは庭のむらはぎうら枯れて人をも身をもあきの夕暮　　太上天皇

被忘戀の心を

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつればかはる歎せしまに　　定家朝臣

むせぶとも知らじな心かはら屋にわれのみ消たぬしたの煙は　　家隆朝臣

知られじなおなじ袖にはかよふとも誰がゆふ暮とたのむ秋風　　皇太后宮大夫俊成女

露はらふ寢覺はあきのむかしにて見はてぬ夢に殘るおもかげ

雅經

草枕むすびさだめむかた知らずならはぬ野邊の夢のかよひ路

和歌所の歌合に深山戀といふことを　家隆朝臣

さてもなほ問はれぬ秋のゆふは山雲ふく風もみねに見ゆらむ

藤原秀能

思ひ入るふかき心のたよりまで見しはそれともなき山路かな

題しらず　鴨長明

ながめてもあはれと思へおほかたの空だに悲し秋のゆふぐれ

千五百番歌合に　右衛門督通具

ことの葉のうつりし秋も過ぎぬれば我が身時雨とふる涙かな

定家朝臣

消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森のした露

題しらず　　　　　　　　式子内親王

今はただ心のほかに聞くものを知らずがほなるをぎのうは風

家の歌合に　　　　　　　　攝政太政大臣

いつも聞くものとや人の思ふらむ來ぬ夕ぐれのまつかぜの聲

前大僧正慈圓

心あらば吹かずもあらなむよひよひに人まつやどの庭の松風

和歌所にて歌合し侍りしに逢不遇戀の心を　　　寂蓮法師

里は荒れぬ空しき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く

水無瀨の戀の十五首の歌合に　　　　太上天皇

さとはあれぬ尾上の宮のおのづからまち來し宵も昔なりけり

有家朝臣

物思はでただ大かたの露にだに濡るればぬるる秋のたもとを

宜秋門院丹後

わすれじの言の葉いかになりにけむ頼めしくれは秋風ぞ吹く

家に百首の歌合し侍りけるに　攝政太政大臣

思ひ兼ねうちぬる宵もありなまし吹きだにすさべにはの松風

有家朝臣

さらでだにうらみむとおもふ吾妹子が衣のすそに秋風ぞふく

題しらず　讀人しらず

心にはいつも秋なる寢ざめかな身にしむ風のいく夜ともなく

西行法師

あはれとて問ふ人のなどなかるらむ物おもふ宿の荻のうは風

入道前關白太政大臣の家の歌合に　俊惠法師

わがこひは今をかぎりとゆふまぐれ荻ふく風の音づれて行く

忘れなばいけらむものかと思ひしにそれも叶はぬ此世なりけり

西行法師

疏くなる人をなにとて恨むらむ知られず知らぬ折もありしに

今ぞ知る思ひ出でよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を

土御門内大臣

あひ見しは昔がたりのうつつにてそのかね言を夢になせとや

權中納言公經

哀なるこころの闇のゆかりとも見し夜の夢をたれかさだめむ

右衛門督通具

契りきや飽かぬわかれにつゆおきし曉ばかりかたみなれとは

寂蓮法師

恨みわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕ぐれの空

名殘をば庭の淺茅にとゞめおきて誰ゆゑ君がすみうかれけむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　定家朝臣

忘れずばなれし袖もやこほるらむ寢ぬ夜の床の霜のさむしろ

家隆朝臣

かぜ吹かば嶺に別れむ雲をだに有りし名殘のかたみとも見よ

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

いはざりき今こむまでの空のくも月日へだてゝもの思へとは

千五百番歌合に　家隆朝臣

思ひ出でよ誰がかねごとのすゑならむ昨日の雲のあとの山風

二條院の御時艶書の歌めしけるに　刑部卿範兼

忘れゆく人ゆゑ空をながむればたえだえにこそ雲も見えけれ

題しらず　殷富門院大輔

まつやまと契りし人はつれなくて袖越すなみにのこる月かげ　皇太后宮大夫俊成女

千五百番歌合に

習ひこしたがいつはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生　二條院讃岐

經房卿の家の歌合に久戀を

あとたえて淺茅が末になりにけりたのめしやどの庭のしら露　寂蓮法師

攝政太政大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに

來ぬ人を思ひ絶えたるにはの面の蓬がすゑぞまつにまされる　左衛門督通光

題しらず

尋ねても袖にかくべきかたぞなき深きよもぎの露のかごとを　藤原保季朝臣

形見とてほの踏み分けし跡もなし來しはむかしの庭の荻原　法橋行遍

題しらず　攝政太政大臣

思ひ出でてよなよな月に尋ねずば待てと契りし中や絶えなむ

家隆朝臣

忘るなよ今はこころの變るともなれしその夜のありあけの月

法眼宗圓

そのままにまつの嵐もかはらぬを忘れやしぬる更けし夜の月

藤原秀能

人ぞ憂きたのめぬ月はめぐり來てむかしわすれぬ蓬生のやど

八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを　攝政太政大臣

わくらばに待ちつる宵もふけにけりさやは契りし山の端の月

有家朝臣

來ぬ人をまつとはなくて待つ宵のふけ行く空の月もうらめし

わすらるる身を知る袖の村雨につれなくやまの月は出でけり

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

めぐりあはむ限はいつと知らねども月なへだてそよその浮雲

わがなみだもとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど　　權中納言公經

戀ひわぶる涙や空にくもるらむひかりもかはる閨のつきかげ　　左衛門督通光

いくめぐり空ゆく月もへだてきぬちぎりし中はよそのうき雲　　右衛門督通具

いま來むと契りし事はゆめながら見し夜に似たるあり明の月　　有家朝臣

忘れじと言ひしばかりの名殘とてその夜の月は廻り來にけり

今はとてわかれしほどの月をだに涙にくれてながめやはせし

肥　　後

面影のわすれぬ人によそへつつ入るをぞしたふあきの夜の月

後徳大寺左大臣

うき人の月は何ぞのゆかりぞと思ひながらもうちながめつつ

西　行　法　師

月のみやうはの空なるかたみにて思ひもいでばこころ通はむ
くまもなきをりしも人を思ひ出でて心と月をやつしつるかな
もの思ひてながむる頃の月の色に如何ばかりなる哀そふらむ

八　條　院　高　倉

曇れかしながむるからに悲しきは月におほゆる人のおもかげ

百首の歌の中に

太　上　天　皇

中務

いつとても哀とおもふを寢ぬる夜の月は朧げなくなくぞ見し

躬恒

さらしなの山より外にてる月もなぐさめかねつこのごろの空

讀人しらず

天の戶をおしあけがたの月見ればうき人しもぞ戀しかりける

ほの見えし月をこひしと歸るさの雲路の浪にぬれて來しかな

人に遣しける

紫式部

入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちしよひかな

かへし

讀人しらず

さしてゆく山の端もみなかき曇りこころの空に消えし月かげ

題しらず

藤原經衡

あを柳の絲はかたがたなびくとも思ひそめてむ色はかはらじ

御返し　女御生子

淺みどりふかくもあらぬ青柳はいろかはらじと如何たのまむ

早う物申しける女にかれたる葵をみあれの日つかはしける　實方朝臣

古のあふひと人はとがむともなほそのかみの今日ぞわすれぬ

かへし　讀人しらず

かれにける葵のみこそかなしけれ哀と見ずや賀茂のみづがき

廣幡の御息所につかはしける　天曆御歌

逢ふことをはつかに見えし月影のおぼろげにやは哀とも思ふ

題しらず　伊勢

さらしなやをば捨山のあり明のつきずもものを思ふころかな

御かへし　天暦御歌

いまこむと頼めつつふる言の葉ぞ常磐にみゆる紅葉なりける

女御のしもに侍りけるに遣しける　朱雀院御歌

玉鉾の道ははるかにあらねどもうたて雲居にまどふころかな

御かへし　女御凞子女王

思ひやる心はそらにあるものをなどか雲ゐるに逢ひ見ざるらむ

麗景殿女御參りて後雨降り侍りける日梅壺の女御に　後朱雀院御歌

春雨のふりしくころはあを柳のいとみだれつつ人ぞこひしき

御返し　女御藤原生子

青柳のいとみだれたるこの頃はひとすぢにしも思ひよられじ

又つかはしける　後朱雀院御歌

右大將道綱母

吹く風につけても問はむささがにの通ひし道は空にたゆとも

后の宮久しく里におはしける頃つかはしける　天暦御歌

葛の葉にあらぬ我が身も秋風のふくにつけつつうらみつる哉

ひさしくまゐらざりける人に　延喜御歌

霜さやぐ野邊の草葉にあらねどもなどか人目のかれ增るらむ

御かへし　讀人しらず

淺茅生ふる野べやかるらむ山賤(やまがつ)の垣ほの草はいろもかはらず

春になりてと奏し侍りけるがさもなかりければ

内よりいまだ年もかへらぬにやとの給はせたり

ける御返事を楓の紅葉につけて　女御徽子女王

霞むらむ程をもしらずしぐれつつ過ぎにし秋の紅葉をぞ見る

別れては昨日けふこそ隔てつれ千世しも經たる心地のみする

かへし　　　　　　　　　　　　　惠子女王

昨日ともけふとも知らず今はとてわかれしほどの心まどひに

入道攝政久しくまうで來ざりける頃鬢かきて出でけるゆするつきの水入れながらはべりけるを見て　　　　　　　　　　　　　右大將道綱母

絶えぬるか影だに見えば問ふべきを形見の水は水草ゐにけり

内に久しく參り給はざりける頃五月五日後朱雀院の御返事に　　　　　　　　　　　　　陽明門院

かたがたに引別れつつ菖蒲草あらぬねをやはかけむと思ひし

題しらず　　　　　　　　　　　　　伊勢

言の葉のうつろふだにも有るものをいとど時雨の降り増るらむ

新古今和歌集　卷第十四

戀歌四

中將に侍りける時女につかはしける　清愼公

よひよひに君を哀とおもひつつ人にはいはで音をのみぞなく

かへし　讀人しらず

君だにもおもひ出でける宵々を待つはいかなる心地かはする

少將滋幹につかはしける

戀しさに死ぬる命を思ひ出でて問ふひとあらばなしと答へよ

恨むる事侍りて更にまうで來じと誓ひごとして

二日ばかり有りてつかはしける　謙德公

戀ひ死なむ命は猶も惜しきかな同じ世にあるかひはなけれど

西行法師

あはれとて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬ歎きを

身をしれば人のとがとも思はぬに恨み顏にも濡るるそでかな

女に遣しける

皇太后宮大夫俊成

よしさらば後の世とだに賴めおけ辛さに堪へぬ身ともこそなれ

かへし

藤原定家朝臣母

たのめ置かむたださばかりを契にて浮世の中の夢になしてよ

たく覺えければ遣しける　左衞門督家通

つらしとは思ふものからふし柴のしばしもこりぬ心なりけり

賴むる事侍りける女わづらふこと侍りけるをおこたりて久我内大臣の許につかはしける　讀人しらず

賴めこし言の葉ばかり留め置きて淺茅が露と消えなましかば

かへし　久我内大臣

哀にもたれかは露を思はまし消えのこるべきわが身ならねば

題しらず　小侍從

つらきをも恨みぬわれに習ふなよ憂身を知らぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

何か厭ふよもながらへじさのみやは憂きに堪へたる命なるべき

刑部卿賴輔

かけて思ふ人もなけれど夕されば面かげ絶えぬ玉かつらかな

宮仕しける女をかたらひ侍りけるにやんごとなき男の入りたちていふけしきを見て恨みけるを

女あらがひければよみ侍りける　平定文

いつはりをただすの森の木綿襷かけつつちかへわれを思はば

人に遣しける　鳥羽院御歌

いかばかり嬉しからまし諸共に戀ひらるる身も苦しかりせば

かた思ひの心を　入道前關白太政大臣

我ばかりつらきを忍ぶ人やあるといま世にあらば思ひあはせよ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に契戀の心を　前大僧正慈圓

ただ頼めたとへば人のいつはりをかさねてこそは又も恨みめ

女を恨みて今はまからじと申して後なほ忘れが

足曳の山のかげ草結びおきて戀ひやわたらむ逢ふよしをなみ
延喜御歌

東路にかるてふ萱のみだれつつ束のまもなく戀ひやわたらむ
權中納言敦忠

むすび置きし袂だに見ぬはな薄かるともかれじ君しとかずば
百首の歌の中に
源重之

霜のうへに今朝ふる雪の寒ければ重ねて人をつらしとぞ思ふ
題しらず
安法法師女

ひとりふす荒れたる宿の床の上にあはれ幾夜の寢覺しつらむ
源重之

山城のよどの若菰(わかごも)かりに來てそでぬれぬとはかこたざらなむ
貫之

衣手に山おろし吹きて寒き夜を君きまさずはひとりかもねむ

左大將朝光久しう音づれ侍らで旅なる所に來逢ひて枕のなければ草を結びてしたるに　　馬内侍

逢ふことはこれや限のたびならむ草のまくらも霜がれにけり

天暦の御時間遠にあれやと侍りければ　　女御徽子女王

なれゆくは浮世なればや須磨のあまの鹽燒衣まどほなるらむ

逢ひて後あひがたき女に　　坂上是則

霧ふかきあきの野なかの忘水たえまがちなる頃にもあるかな

三條院みこの宮と申しける時久しう問はせ給はざりければ　　安法法師女

世のつねの秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし

題しらず　　中納言家持

頼めおく人もながらの山にだに小夜ふけぬればまつ風のこゑ
藤原秀能

今來むとたのめしことをわすれずばこの夕暮の月やまつらむ
藤原秀能

待戀といへる心を

きみ待つと閨へも入らぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月
式子内親王

戀の歌とてよめる

頼めぬに君くやとまつ宵の間の更けゆかで唯明けなましかば
西行法師

かへるさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月
定家朝臣

題しらず

君こむといひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつつぞふる
讀人しらず

人麿

あぢきなくつらき嵐のこゑもうしなど夕暮に待ちならひけむ

戀の歌とて　太上天皇

頼めずば人をまつちの山なりと寢なましものをいざよひの月

水無瀬にて戀十五首の歌合に夕戀といへる心を　攝政太政大臣

なにゆゑと思ひもいれぬ夕だにまち出でしものを山の端の月

寄風戀　宮内卿

聞くやいかに上の空なる風だにもまつに音する習ひありとは

題しらず　西行法師

人は來で風のけしきも更けぬるに哀にかりのおとづれて行く

八條院高倉

いかがふく身にしむ色のかはるかなたのむる暮の松風のこゑ

鴨長明

にはに生ふる夕かげ草のした露やくれを待つ間の涙なるらむ

題しらず　小侍従

待つよひに更けゆく鐘の聲きけばあかぬわかれの鳥は物かは

藤原知家

これもまた長きわかれになりやせむ暮を待つべき命ならねど

西行法師

有明はおもひ出あれやよこ雲のただよはれつるしののめの空

清原元輔

大井川ゐせきの水のわくらばにけふは頼めし暮にやはあらぬ

今日と契りける人のあるかと問ひ侍りければ　讀人しらず

夕暮に命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし

西行法師人々に百首の歌よませ侍りけるに　定家朝臣

面影のわすらるまじきわかれかななごりを人の月にとどめて

後朝戀の心を　　攝政太政大臣

またも來む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春のあけぼの

女の許にまかりてここち例ならず侍りければ歸りてつかはしける　　賀茂成助

誰行きて君につげましみち芝の露もろともに消えなましかば

女の許に物をだにいはむとてまかりけるに空しくかへりて朝に　　左大將朝光

消えかへりあるかなきかの我が身かな恨みてかへる道芝の露

三條關白の女御入内のあしたに遣しける　　花山院御歌

朝ぼらけおきつる霜の消えかへり暮まつほどの袖を見せばや

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に　　藤原道經

忍びたる所よりかへりてあしたに遣しける　九條入道右大臣

侘びつつもきみが心にかなふとて今朝も袂をほしぞわづらふ

小八條の御息所に遣しける　亭子院御歌

手枕にかせるたもとのつゆけさは明けぬと告ぐる涙なりけり

題しらず　藤原惟成

しばし待てまだ夜はふかし長月の有明のつきは人まどふなり

前栽の露おきたるをなどか見ずなりにしと申しける女に　實方朝臣

おきて見ば袖のみぬれていとどしく草葉の玉の數やまさらむ

二條院の御時曉かへりなむとする戀といふ事を　二條院讃岐

明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の袖をも濡しつる哉

題しらず　西行法師

清愼公

うば玉の夜のころもをたちながらかへる物とは今ぞしりぬる

夏の夜女の許にまかりて侍りけるに人しづまるほど夜いたく更けて逢ひて侍りければよめる

藤原清正

みじか夜ののこりすくなく更けゆくはかねてものうき曉の空

女みこに通ひそめて朝につかはしける

大納言清蔭

明くといへばしづ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

彌生の頃終夜物語して歸り侍りにける人のけさはいとど物思はしきよし申し遣したりけるに

和泉式部

けさはしも歎もすらむいたづらに春の夜ひとよ夢をだに見で

題しらず

赤染衛門

心からしばしとつつむ物からに鴫のはねがきつらき今朝かな

侍りけるに聞きつけざりければ朝に遣しける　太宰帥敦道親王

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな

題しらず　道信朝臣

心にもたらぬ我が身のゆきかへり道の空にて消えぬべきかな

近江更衣に給はせける　延喜御歌

はかなくも明けにける哉朝露のおきての後ぞ消えまさりける

御返し　更衣源周子

朝露のおきつる空も思ほえず消えかへりつるこころまど（ならイ）ひに

題しらず　圓融院御歌

おき添ふる露やいかなる露ならむ今はきえねと思ふわが身を（にイ）

謙德公

思ひ出でて今はけぬべし終夜（よもすがら）おきうかりつるきくの上（うはイ）のつゆ

初會戀の心を　俊頼朝臣

蘆の屋のしづはた帶のかたむすび心やすくもうち解くるかな

題しらず　讀人しらず

かりそめにふしみの野邊の草枕つゆかかりきと人にかたるな

人知れず忍びけることを文などちらすと聞きける人に遣しける　相模

いかにせむ葛のうら吹く秋風に下葉のつゆのかくれなき身を

題しらず　實方朝臣

あけがたきふた見の浦による浪の袖のみぬれておきつしま人

九月十日餘に夜ふけて和泉式部が門をたたかせ　伊勢

逢ふ事のあけぬ夜ながら明けぬれば我こそかへれ心やは行く

實方朝臣

中々に物思ひ初めてねぬる夜ははかなき夢もえやは見えける

忍びたる人と二人ふして　伊勢

ゆめとても人にかたるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず

題しらず　和泉式部

枕だにしらねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜のゆめ

人に物いひはじめて　馬内侍

忘れても人に語るなうたたねの夢見てのちもながかりし夜を（ながからぬイ）

女に遣しける　藤原範永朝臣

つらかりし多くの年はわすられて一夜の夢をあはれとぞ見し

題しらず　高倉院御歌

けさよりはいとど思ひをたきましてなげきこりつむ逢坂の山

昨日まで逢ふにしかへばと思ひしをけふは命の惜くもある哉

百首の歌に　　式子内親王

逢ふ事をけふまつが枝の手向草いく夜しをる袖とかは知る

頭中將に侍りける時五節所のわらはに物申し初めて後尋ねて遣しける　　源正清朝臣

戀ひしさに今日ぞたづぬる奥山のひかげの露に袖はぬれつつ

題しらず　　西行法師

逢ふまでの命もがなと思ひしは悔しかりける我がこころかな

三條院女藏人左近

ひとごころうす花ぞめのかり衣さてだにあらで色やかはらむ

興風

逢ひ見てもかひなかりけりうばたまのはかなき夢におとる現(うつつ)は

新古今和歌集　卷第十三

戀歌三

中關白かよひそめ侍りける頃　儀同三司母

わすれじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな

忍びたる女をかりそめなる所にゐてまかりてかへりて朝につかはしける　謙德公

かぎりなく結びおきける草枕いづこのたびをおもひわすれむ

題しらず　業平朝臣

思ふには忍ぶる事ぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

人の許にまかりそめて朝に遣しける　廉義公

西行法師

何となくさすがに惜しき命かなありへば人やおもひ知るとて

思ひ知る人あり明のよなりせばつきせず身をば恨みざらまし

家に百首の歌合し侍りけるに祈戀といへる心を　攝政太政大臣
いく夜我なみにしをれてきぶね川そでに玉ちる物おもふらむ
定家朝臣
年もへぬいのるちぎりは初瀬山をのへのかねのよその夕ぐれ
かたおもひの心をよめる　皇太后宮大夫俊成
うき身をば我だにいとふいとへただそをだに同じ心と思はむ
題しらず　權中納言長方
戀ひしなむ同じ憂名をいかにして逢ふにかへつと人にいはれむ
殷富門院大輔
あすしらぬ命をぞ思ふおのづからあらば逢ふ世を待つにつけても
八條院高倉
つれもなき人の心はうつ蟬のむなしきこひに身をやかへてむ

わが戀はあふをかぎりのたのみだに行くへもしらぬ空の浮雲　皇太后宮大夫俊成女

水無瀬の戀の十五首の歌合に春戀の心を

おもかげの霞める月ぞやどりける春やむかしの袖のなみだに　定家朝臣

冬戀

とこの霜まくらの氷きえわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに　有家朝臣

攝政太政大臣の家の百首の歌合に曉戀

つれなさのたぐひまではつらからぬ月をもめでじ有明の空

宇治にて夜戀といふ事ををのこどもつかうまつりしに　藤原秀能

袖の上にたれゆゑ月は宿るぞとよそになしても人のとへかし

久戀といへることを　越前

夏引の手びきの糸の年へても絶えぬおもひにむすぼほれつつ

忍びあまり天の河瀬に事よせむせめては秋をわすれだにすな　賀茂重政

遠きさかひを待つ戀といへる心を

頼めてもはるけかるべきかへる山いくへの雲の下に待つらむ　中宮大夫家房

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

逢ふ事はいつといぶきの嶺に生ふるさしも絶えせぬ思なりけり　家隆朝臣

ふじのねの煙も猶ぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり　權中納言俊忠

名立戀といふ心をよみ侍りける

なき名のみたつたの山に立つ雲の行方もしらぬ眺めをぞする　惟明親王

百首の歌の中に戀の心を

逢ふことのむなしき空の浮雲は身を知る雨のたよりなりけり　左衛門督通具

百首の歌の中に　　式子内親王

夢にても見ゆらむものを歎きつつうち寢る宵の袖のけしきは

かたらひ侍りける女の夢に見えて侍りければよみける　　後德大寺左大臣

覺めて後夢なりけりと思ふにもあふは名殘の惜しくやはあらぬ

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

身にそへるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るばかりに

題しらず　　大納言實家

夢の中に逢ふとみえつる寢覺こそつれなきよりも袖はぬれけれ

五十首の歌奉りし時　　前大納言忠良

たのめおきし淺茅がつゆに秋かけて木の葉ふりしく宿の通路

隔河忍戀といふことを　　正三位經家

攝政太政大臣の家の歌合によみ侍りける　寂蓮法師

ありとても逢はぬためしの名取川朽ちだに果てね(ぬイ)瀨々の埋木

千五百番歌合に　攝政太政大臣

なげかずよ今はたおなじ名とり川せぜの埋木朽ちはてぬとも

百首の歌奉りし時　二條院讃岐

涙川たぎつこころのはやき瀨をしがらみかけてせく袖ぞなき

攝政太政大臣百首の歌よませ侍りけるに　高松院右衞門佐

よそながらあやしとだにも思へかし戀せぬ人の袖のいろかは

戀の歌とてよめる　讀人しらず

忍びあまり落つる涙をせき返しおさふる袖ようき名もらすな

入道前關白太政大臣の家の歌合に　道因法師

くれなゐに涙のいろのなり行くを幾しほまでと君にとはばや

白玉かつゆかと問はむ人もがな物おもふ袖をさしてこたへむ

女に遣しける　藤原義孝

いつまでの命もしらぬ世の中につらき歎のやまずもあるかな

崇徳院に百首の歌奉りける時　大炊御門右大臣

我が戀はちぎの片そぎかたくのみ行きあはで年の積りぬる哉

入道前關白の家に百首の歌よみ侍りける時逢はぬ戀といふ心を　藤原基輔朝臣

いつとなく鹽燒くあまの苫庇ひさしくなりぬ逢はぬおもひは

夕戀といふことをよみ侍りける　藤原秀能

藻鹽やくあまの磯屋のゆふ煙たつ名もくるしおもひ絶えなで

海邊戀といふことをよめる　定家朝臣

須磨の蜑の袖に吹きこす鹽風のなるとはすれど手にもたまらず

雨のふる日女に遣しける　皇太后宮大夫俊成
思ひあまりそなたの空を眺むればかすみを分けて春雨ぞふる
水無瀬の戀の十五首の歌合に　攝政太政大臣
山がつの麻のさごろも梭をあらみ逢はで月日やすぎふける庵
欲言出戀といへる心を　藤原忠定
思へどもいはで月日はすぎの門さすがにいかが忍び果つべき
百首の歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成
あふ事はかたのの里のささの庵しのにつゆちる夜半の床かな
入道前關白右大臣にはべりける時百首の歌の中に忍戀
散らすなよ篠のは草のかりにても露かかるべき袖のうへかは
題しらず　藤原元眞

のちの世をなげく淚といひなしてしぼりやせまし墨ぞめの袖

大納言成道ふみ遣しけれどつれなかりける女を

後の世まで恨殘るべきよし申しければ　　讀人しらず

玉章のかよふばかりになぐさめて後の世までのうらみ殘すな

前大納言隆房中將に侍りける時右近馬場のひを

りの日まかれりけるに物見侍りける女車より遣

しける

例あればながめは夫と知りながらおぼつかなきは心なりけり

かへし　　前大納言隆房

いはぬより心や行きてしるべするながむる方を人の問ふまで

千五百番歌合に　　左衞門督通光

ながめわびそれとはなしに物ぞおもふ雲のはたての夕暮の空

うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦のあまの栲縄

和歌所の歌合に依忍增戀といふことを　春宮權大夫公繼

しのばじよ岩間づたひの谷川もせをせくにこそ水まさりけれ

題しらず　信濃

人もまだふみ見ぬ山のいはがくれながるる水を袖にせくかな

西行法師

遙なるいはのはざまにひとり居て人目おもはでもの思はばや

數ならぬ心の咎になしはてじ知らせてこそは身をもうらみめ

水無瀨の戀の十五首の歌合に夏戀を　攝政太政大臣

草ふかき夏野わけ行くさを鹿の音をこそ立てね露ぞこぼるる

入道前關白右大臣に侍りける時百首の歌人々に

よませ侍りけるに忍戀の心を　太宰大貳重家

戀しともいはば心のゆくべきにくるしや人目つつむおもひは

見れど逢はぬ戀といふ心をよみ侍りける　花園左大臣

人知れぬ戀に我が身はしづめどもみるめに浮くは涙なりけり

題しらず　神祇伯顯仲

物おもふといはぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖の雫を

忍戀の心を　清輔朝臣

ひとしれず苦しきものはしのぶ山下はふ葛のうらみなりけり

和歌所の歌合に忍戀の心を　雅經

消えねただしのぶの山の嶺のくもかかる心のあともなきまで

千五百番歌合に　左衛門督通光

かぎりあればしのぶの山の麓にも落葉がうへの露ぞいろづく

二條院讃岐

年を經たる戀といへる心をよみ侍りける　　俊頼朝臣

君戀ふとなるみの浦の濱ひさぎしをれてのみも年をふるかな

忍戀の心を　　前太政大臣

しるらめや木の葉ふりしく谷水のいはまにもらすしたの心を

左大將に侍りける時家に百首の歌合し侍りける
に忍戀の心を　　攝政太政大臣

もらすなよ雲居の嶺のはつしぐれ木の葉は下に色かはるとも

戀歌あまたよみ侍りけるに　　後德大寺左大臣

かくとだに思ふこころをいはせ山下ゆく水のくさがくれつつ

殷富門院大輔

もらさばや思ふこころをさてのみはえぞやましろの井手の柵(しがらみ)

忍戀の心を　　近衞院御歌

新古今和歌集　卷第十二

戀歌二

五十首の歌奉りしに寄雲戀　　皇太后宮大夫俊成女

下もえに思ひ消えなむけぶりだに跡なき雲のはてぞかなしき

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　　藤原定家朝臣

なびかじなあまの藻鹽火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

百首の歌奉りし時戀歌　　攝政太政大臣

戀をのみすまの浦人もしほたれほしあへぬ袖の果をしらばや

戀の歌とてよめる　　二條院讃岐

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへなみの下に朽ちぬる

隱名戀といへる心を　皇太后宮大夫俊成

蜑のかるみるめを波にまがへ(かせイ)つつ名草の濱をたづねわびぬる

題しらず　相模

逢ふまでのみるめ刈るべきかたぞなきまだ浪なれぬ磯の蜑人

業平朝臣

みるめ刈るかたやいづくぞ棹さして我に教へよ蜑のつりぶね

をよみ侍りけるに　　　　　　　　　　　　　　　権中納言師時

追風にやへの汐路を行く舟のほのかにだにも逢ひ見てしがな

百首の歌奉りしに（時イ）　　　　　　　　　　　　摂政太政大臣

楫緒（かぢを）たえ由良のみなとによる舟のたよりも知らぬおきつ汐風

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　式子内親王

しるべせよ跡なき浪に漕ぐ舟の行くへもしらぬ八重のしほ風

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言長方

紀の國やゆらの湊に拾ふてふたまさかにだに逢ひみてしがな

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に　　　　　権中納言師俊

つれもなき人の心のうきにはふあしの下根のねをこそは泣け

和歌所の歌合に忍戀をよめる　　　　　　　　　　摂政太政大臣

難波人いかなる江にか朽ち果てむあふ事なみにみをつくしつつ

須磨の浦に蜑のこりつむ藻鹽木のからくも下に燃え渡るかな

題しらず　源　景明

あるかひもなぎさに寄する白波のまなく物思ふ我身なりけり

貫　之

あしびきの山下たぎつ岩なみのこころくだけて人ぞこひしき

足曳のやましたしげきなつ草のふかくも君をおもふころかな

坂上是則

をじかふす夏野の草の道をなみしげき戀路にまどふころかな

曾根好忠

かやり火のさ夜ふけ方の下こがれ苦しや我が身人しれずのみ

由良のとをわたる舟人かぢを絶えゆくへもしらぬ戀の路かな

鳥羽院の御時うへのをのこども寄風戀と云ふ心

題しらず　藤原元眞

しもこほり心もとけぬ冬の池に夜更けてぞなく鴛のひところ

涙川身もうくばかりながるれど消えぬは人のおもひなりけり

女に遣しける　實方朝臣

いかにせむ久米路の橋の中空に渡しもはてぬ身とやなりなむ

女の杉の實を包みておこせて侍りければ

誰ぞこのみ輪の檜原もしらなくにこころの杉の我をたづぬる　小辨

題しらず

我が戀はいはぬばかりぞ難波なる蘆のしのやの下にこそたけ　伊勢

わが戀は荒磯の海の風をいたみしきりに寄する波のまもなし

人に遣しける　藤原清正

みかりする狩場のをのの楢柴のなれはまさらで戀ぞまされる

讀人しらず

うど濱の疎くのみやは世をばへむ波のよるよる逢ひ見てしがな

東路の道の果なる常陸帶のかごとばかりも逢はむとぞおもふ

濁江のすまむことこそ難からめいかでほのかに影を見てまし

時雨ふる冬の木の葉のかわかずぞ物おもふ人の袖はありける

ありとのみ音に聞きつつ音羽川わたらば袖にかげも見えなむ

水莖のをかの木の葉を吹きかへし誰かは君をこひむと思ひし

わが袖にあと踏みつけよ濱千鳥あふ事かたし見てもしのばむ

女の許よりかへり侍りけるに程もなく雪のいみじう降り侍りければ

中納言兼輔

冬の夜のなみだにこほる我がそでの心とけずも見ゆる君かな

五月雨はそらおぼれする郭公ときに鳴くねはひともとがめず

兵衛佐に侍りける時五月ばかりによそながら物

申しそめてつかはしける　法性寺入道前攝政太政大臣

郭公こゑをばきけど花の枝にまだふみなれぬ物をこそおもへ

かへし　馬内侍

ほととぎす忍ぶるものを柏木のもりても聲のきこえけるかな

郭公のなきけるは聞きつやと申しける人に

心のみ空になりつつほととぎす人だのめなるねこそなかるれ

題しらず　伊勢

みくま野の浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな

難波潟みじかき葦のふしの間もあはで此世をすぐしてよとや

人麿

つらけれど恨みむとはたおもほえずなほ行くさきを頼む心に

かへし　讀人しらず

雨こそは頼まばもらめたのまずば思はぬ人と見てをやみなむ

題しらず　紀貫之

かぜふけばとはに浪こす磯なれや我が衣手のかわくときなき

道信朝臣

須磨の蜑の浪かけ衣外(よそ)にのみきくは我が身になりにけるかな

くすだまを女につかはすとて男にかはりて　三條院女藏人左近

ぬまごとに袖ぞぬれける(ぬイ)あやめ草心に似たるねをもとむ(たづぬイ)とて

五月五日馬内侍に遣しける　前大納言公任

郭公いつかと待ちしあやめ草今日はいかなるねにかなくべき

かへし　馬内侍

水無瀨にてをのこども久戀といふことをよみ侍りしに　太上天皇

思ひつつ經にける年のかひやなきただあらましの夕暮のそら

百首の歌の中に忍戀を　式子内親王

玉の緒よたえなば絶えね長らへば忍ぶる事のよわりもぞする

忘れてはうち歎かるるゆふべかな我のみ知りてすぐる月日を

わがこひはしる人もなしせく床の涙もらすなつげのをまくら

百首の歌よみ侍りける時忍戀　入道前關白太政大臣

忍ぶるに心のひまはなけれどもなほもる物はなみだなりけり

冷泉院みこの宮と申しける時さぶらひける女房を見かはしていひわたり侍りける頃手習しける所にまかりてものに書きつけ侍りける　謙德公

忍草の紅葉したるにつけて女の許に遣しける　　花園左大臣

わが戀もいまは色にや出でなまし軒のしのぶも紅葉しにけり

和歌所の歌合に久忍戀といふことを　　攝政太政大臣

いそのかみふるの神杉ふりぬれど色には出でず露もしぐれも

小野宮の歌合に忍戀の心を　　太上天皇

我がこひは槇のした葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

百首の歌奉りし時よめる　　前大僧正慈圓

わが戀は松をしぐれの染めかねて眞葛がはらに風さわぐなり

家に歌合し侍りけるに夏戀の心を　　攝政太政大臣

空蟬のなく音やよそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふまで

寂蓮法師

おもひあれば袖に螢をつつみてもいはばや物をとふ人はなし

水の上に浮きたる鳥の跡もなくおぼつかなさを思ふころかな

題しらず　曾禰好忠

かた岡の雪間にねざすわか草のほのかに見てし人ぞこひしき

返事せぬ女の許につかはさむとて人のよませ侍りければ二月ばかりによみ侍りける　和泉式部

跡をだに草のはつかに見てしがな結ぶばかりの程ならずとも

題しらず　藤原興風

霜の上に跡ふみつくる濱千鳥ゆくへもなしと音をのみぞなく

中納言家持

秋はぎの枝もとををに置く露の今朝きえぬとも色に出でめや

藤原高光

あき風にみだれてものは思へどもはぎの下葉の色はかはらず

にほふらむかすみのうちの櫻花おもひやりても惜しき春かな

年を經ていひわたり侍りける女のさすがにけぢかくはあらざりけるに春の末つ方いひつかはしける

大中臣能宣朝臣

幾かへり咲きちる花をながめつつ物思ひくらす春に逢ふらむ

題しらず

躬恒

おく山の峯とびこゆる初雁のはつかにだにも見でややみなむ

亭子院御歌

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

正月雨降り風吹きける日女に遣しける

謙德公

はるかぜの吹くにもまさる涙かな我がみなかみも氷とくらし

たびたび返事せぬ女に

文遣しける女に同じつかさのかみなりける人通ふと聞きてつかはしける　藤原義孝

白雲の嶺にしもなどかよふらむおなじみかさの山のふもとを

題しらず　和泉式部

けふも又かくやいぶきのさしも草さらば我のみ燃えや渡らむ

源重之

筑波山は山しげ山しげけれどおもひ入るにはさはらざりけり

また通ふ人ありける女の許につかはしける　大中臣能宣朝臣

われならぬ人にこころをつくば山したに通はむ道だになき

はじめて女に遣しける　大江匡衡朝臣

人知れず思ふこころはあしびきの山下みづの湧きやかへらむ

女を物ごしにほのかに見てつかはしける　清原元輔

あら玉のとしにまかせて見るよりはわれこそ越えめ逢坂の關
堀河關白ふみなど遣して里はいづくぞと問ひ侍りければ　本院侍從
我が宿はそことも何か教ふべきいはでこそ見め尋ねけりやとかへし　忠義公
わがおもひそらの煙となりぬれば雲井ながらもなほ尋ねてむ
題しらず　貫之
しるしなき煙を雲にまがへつつ世をへて富士の山と燃えなむ　清原深養父
煙立つ思ひならねど人しれず侘びてはふじのねをのみぞなく
女に遣しける　藤原惟成
風吹けば室のやしまのゆふけぶり心のそらに立ちにけるかな

もろともに哀といはずば人知れぬとはず語をわれのみやせむ

天暦の御時の歌合に　中納言朝忠

人傳に知らせてしがな隱沼のみこもりにのみ戀ひやわたらむ

はじめて女に遣しける　太宰大貳高遠

みこもりのぬまの岩垣つつめども如何なるひまにぬるる袂ぞ

いかなる折にかありけむ女に　謙徳公

からごろも袖に人目はつつめどもこぼるるものは涙なりけり

左大將朝光五節の舞姫奉りけるかしづきを見て
つかはしける　前大納言公任

天つ空とよのあかりに見し人のなほ面かげのしひてこひしき

つれなく侍りける女に師走のつごもりに遣しけ
る　謙徳公

中將更衣に遣しける　延喜御歌

むらさきの色に心はあらねどもふかくぞ人をおもひそめつる

題しらず　中納言兼輔

みかの原わきてながるる泉河いつ見きとてかこひしかるらむ

平定文の家の歌合に　坂上是則

その原やふせやに生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな

人の文つかはして侍りける返事にそへて女につかはしける　藤原高光

年をへて思ふこころのしるしにぞ空もたよりの風は吹きける

九條右大臣の女に初めてつかはしける　西宮前左大臣

年月は我が身にそひて過ぎぬれど思ふ心の行かずもあるかな

かへし　大納言俊賢母

新古今和歌集　卷第十一

戀歌一

題しらず　　　　讀人しらず

よそにのみ見てや止みなむかつらぎや高間の山のみねの白雲

音にのみありと聞きこしみ吉野の瀧は今日こそ袖に落ちけれ

人麿

足曳の山田もる庵におく鹿火（かび）の下こがれつつ我が戀ふらくは

石上（いそのかみ）ふるのわさ田のほには出でず心のうちに戀ひやわたらむ

女に遣しける　　　　在原業平朝臣

春日野のわかむらさきの摺衣しのぶのみだれかぎり知られず

92 東の方にまかりけるによみ侍りける　西行法師

年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜のなか山

93 旅の歌とて

おもひおく人の心にしたはれて露わくる袖のかへりぬるかな

94 熊野へまかり侍りしに旅の心を　太上天皇

見るままに山風あらくしぐるめり都もいまは夜さむなるらむ

86 旅ねするゆめぢはゆるせ宇都の山關とは聞かず守る人もなし

詩を歌に合せ侍りしに山路秋行といへる心を　藤原定家朝臣

87 みやこにもいまや衣をうつの山ゆふしもはらふ蔦のしたみち

鴨長明

88 袖にしも月かかれとは契りおかず涙はしるや宇都のやまごえ

前大僧正慈圓

89 立田やま秋行くひとのそでを見よ木々の梢はしぐれざりけり

百首の歌奉りし時旅の歌

90 さとり行くまことの道に入りぬれば戀しかるべき故郷もなし

初瀬に詣でてかへさに飛鳥川のほとりに宿りて

侍りける夜よみ侍りける　素覺法師

91 ふるさとへ歸らむことはあすか川渡らぬさきに淵瀬たがふな

81 82 83 84 85

世のなかはうきふししげし篠原や旅にしあれはいも夢に見ゆ

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

おほつかな都にすまぬみやこ鳥こととふ人にいかがこたへし

天王寺へ参り侍りけるに俄に雨降りければ江口に宿をかりけるにかし侍らざりければよみ侍りける　西行法師

世の中を厭ふまでこそかたからめ假のやどりををしむ君かな

かへし　遊女妙

世をいとふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりしに　藤原定家朝臣

袖にふけさぞな旅寢の夢も見じおもふかたよりかよふうら風

家隆朝臣

80・　79　78　77　76　75

ふるさとにたのめし人も末の松まつらむ袖になみや越すらむ

入道前關白太政大臣

歌合し侍りける時旅の心をよめる

日をへつつ都しのぶの浦さびて波よりほかのおとづれもなし

藤原顯仲朝臣

堀河院の御時百首の歌奉りける時旅の歌

さすらふる我が身にしあれば象潟(きさがた)や蜑の苫屋に數多たびねぬ

皇太后宮大夫俊成

入道前關白の家の百首の歌に旅の心を

難波人あし火たくやに宿かりてすずろに袖のしほたるるかな

僧正雅縁

題しらず

また越えむ人もとまらばあはれ知れわがをりしける嶺の椎柴

前右大將頼朝

道すがら富士の煙もわかざりき晴るる間もなき空のけしきに

皇太后宮大夫俊成

述懷百首の歌よみ侍りけるに旅の歌

69 枕とていづれの草にちぎるらむ行くをかぎりの野べの夕ぐれ

東の方へまかりける道にてよみ侍りける　民部卿成範

70 道のべの草の青葉に駒とめてなほふるさとをかへり見るかな

長月の頃初瀬に詣でける道にてよみ侍りける　禪性法師

71 初瀬山ゆふこえ暮れて宿とへば三輪の檜はらにあき風ぞ吹く

旅の歌とてよめる　藤原秀能

72 さらぬだに秋の旅寢はかなしきに松に吹くなり床のやまかぜ

攝政太政大臣の家の歌合に秋旅といふことを　藤原定家朝臣

73 忘れなむまつとな告げそなかなかにいなばの山の峯のあき風

百首の歌奉りし時旅の歌　藤原家隆朝臣

74 ちぎらねど一夜はすぎぬ清見がた波にわかるるあかつきの空

千五百番歌合に

63 いたづらに立つや淺間の夕けぶり里とひかぬるをちこちの山

宜秋門院丹後

64 都をばあまつ空とも聞かざりきなにながむらむ雲のはたてを

藤原秀能

65 草枕ゆふべのそらを人とはばなきても告げよはつかりのこゑ

旅の心を

有家朝臣

66 ふしわびぬ篠の小笹のかりまくらはかなの露や一よばかりに

石清水の歌合に旅宿嵐といふことを

67 岩が根のとこにあらしをかたしきて獨やねなむ小夜のなか山

旅の歌とて

藤原業清

68 たれとなき宿の夕をちぎりにてかはるあるじを幾夜とふらむ

羇中夕といふことを

鴨長明

57 いづくにか今宵はやどをかり衣ひもゆふぐれの嶺のあらしに

旅の歌とてよめる

58 旅人のそで吹きかへすあきかぜに夕日さびしき山のかけはし　藤原家隆朝臣

59 故鄕に聞きしあらしのこゑも似ずわすれね人をさやのなか山　藤原雅經

60 白雲のいくへの峯をこえぬらむ馴れぬあらしに袖をまかせて　源家長

和歌所の歌合に羇中暮といふことを

61 けふは叉しらぬ野原に行きくれぬいづれの山か月は出づらむ　皇太后宮大夫俊成女

62 故鄕も秋はゆふべをかたみとて風のみおくる小野のしのはら　雅經朝臣

いそ馴れで心もとけぬ菰まくらあらくなかけそ水のしらなみ

百首の歌奉りしに　式子内親王

ゆくすゑは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕むすばむ

まつが根のをしまが磯のさ夜枕いたくなぬれそあまの袖かは

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

かくてしもあかせばいく夜過ぎぬらむ山路の苔のつゆの筵に

旅にてよみ侍りける　權僧正永緣

しら雲のかかる旅寢もならはぬに深き山路に日は暮れにけり

暮望行客といへる心を　大納言經信

夕日さすあさぢが原のたび人はあはれいづくに宿をかるらむ

攝政太政大臣の家の歌合に羈中晩嵐といふことをよめる　藤原定家朝臣

和歌所の月の十首の歌合の次に月前旅といへる
心を人々つかうまつりしに　攝政太政大臣

忘れじとちぎりて出でしおもかげは見ゆらむものを故郷の月

旅の歌とてよみ侍りける　前大僧正慈圓

あづまぢの夜半のながめを語らなむみやこの山にかかる月影

海邊重夜といへる事（心イ）をよみ侍りし　越前

いく夜かは月を哀とながめきて波にをりしく伊勢のはまをぎ

百首の歌奉りしとき　宜秋門院丹後

しらさりし八十瀬の波をわけ過ぎて片しくものは伊勢の濱荻

題しらず　前中納言匡房

風さむみ伊勢のはまをぎわけ行けば衣かりがね浪に鳴くなり

權中納言定頼

こと問へよおもひおきつの濱千鳥なくなく出でし跡の月かげ

藤原家隆朝臣

旅の歌とてよめる

野邊の露うらわの浪をかこちても行くへも知らぬ袖の月かげ

攝政太政大臣

もろともに出でし空こそわすられねみやこの山のあり明の月

題しらず

西行法師

都にて月をあはれとおもひしは數にもあらぬすさびなりけり

五十首の歌奉りし時

家隆朝臣

月見ばとちぎりて出でしふるさとの人もや今宵袖ぬらすらむ

明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月のすゑのしらくも

藤原雅經

故郷のけふの面かげさそひ來と月にぞちぎる小夜のなかやま

34 35 36 37 38

旅宿雪といへる心をよみ侍りける　修理大夫顯季

松が根に尾花かりしき夜もすがらかたしく袖に雪はふりつつ

みちのくにに侍りける頃八月十五夜に京を思ひ出でて大宮の女房の許に遣しける　橘爲仲朝臣

みし人もとふの浦風おとせぬにつれなく澄めるあきの夜の月

せきとの院といふ所にて羇中見月といふ心を　大江嘉言

草枕ほどぞ經にけるみやこ出でていく夜か旅の月にねぬらむ

守覺法親王家に五十首の歌よませ侍りけるに旅の歌　皇太后宮大夫俊成

なつがりの蘆のかりねもあはれなり玉江の月のあけがたの空

立ちかへり又も來てみむ松島やをしまのとまや波にあらすな　藤原定家朝臣

28 29 30 31 32 33

人のたびて侍りければよみ侍りける　赤染衛門

ありし世のたびは旅ともあらざりきひとり露けきくさ枕かな

堀河院の百首の歌に　權中納言國信

山路にてそぼちにけりなしらつゆの曉おきの木々のしづくに

大納言師頼

くさまくら旅寢の人はこころせよ有明の月もかたぶきにけり

水邊旅宿といへる心をよめる　源師賢朝臣

いそなれぬ心ぞ堪へぬたびねする蘆のまろ屋にかかるしら浪

田上(たなかみ)にてよみ侍りける　大納言經信

たびねする蘆のまろやの寒ければ爪木こりつむ舟いそぐなり

題しらず

み山路に今朝やいでつる旅人のかさしろたへに雪つもりつつ

天王寺に參りけるに難波の浦にとまりてよみ侍りける　　肥後

24 小夜ふけてあしのすゑこす浦風にあはれうちそふ波の音かな

旅の歌とてよみ侍りける　　大納言經信

25 たびねして曉がたの鹿の音にいなばおしなみあきかぜぞ吹く

惠慶法師

26 わぎも子がたびねの衣うすきほどよきて吹かなむ夜半の山風

後冷泉院の御時うへのをのこども旅の歌よみ侍りけるに　　左近中將隆綱

27 葦の葉をかりふくしづの山里にころもかたしき旅寢をぞする

賴み侍りける人におくれて後初瀨にまうでて夜とまりたりける所に草をむすびて枕にせよとて

旅ごろもたちゆく浪路とほければいさしら雲の程もしられず

しきづの浦にまかりて遊びけるに舟にとまりてよみ侍りける　藤原實方朝臣

舟ながらこよひばかりは旅寢せむしきづの波に夢はさむとも

いそのへちのかたに修行し侍りけるにひとり具したりける同行を尋ねうしなひてもとの岩屋のかたへかへるとてあま人の見えけるに修行者見えばこれをとらせよとてよみ侍りける　大僧正行尊

わがごとくわれを尋ねばあま小舟人もなぎさの跡とこたへよ

湖の舟にて夕立のしぬべきよし申しけるを聞きてよみ侍りける　紫式部

かきくもりゆふたつ浪のあらければ浮きたる舟ぞしづ心なき

神風の伊勢のはま荻をりふせて旅寢やすらむあらきはまべに

亭子院御ぐしおろして山々寺々に修行し給ひけるころ御供に侍りて和泉の國日根といふ所にて人々歌よみ侍りけるによめる　橘良利

故郷のたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたと問はねば

信濃のみさかのかたかきたる繪に園原といふ所に旅人宿りて立ちあかしたる所を　藤原輔尹朝臣

たちながら今宵は明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり

題しらず　御形宣旨

都にて越路のそらをながめつつ雲井といひしほどに來にけり

入唐し侍りける時いつほどか歸るべきと人のとひ侍りければ　法橋奝然

延喜の御時屏風の歌　紀　貫之

くさまくらゆふ風さむくなりにけり衣うつなる宿やからまし

題しらず　壬生忠岑

白雲のたなびき渡るあしびきの山のかけはし今日や越えなむ

伊勢より人に遣しける　女御徽子女王

東路やさやのなか山さやかにも見えぬ雲居に世をやつくさむ

人をなほうらみつべしや都鳥ありやとだにも問ふを聞かねば

題しらず　菅原輔昭

まだしらぬ故郷人は今日までに來むと頼めしわれを待つらむ

讀人しらず

しながどり猪名野をゆけばありま山夕霧たちぬ宿はなくして

あまざかるひなの長路を漕ぎくれば明石のとより大和島みゆ

篠の葉はみ山もそよに亂るなりわれは妹思ふわかれ來ぬれば

師の任はてて筑紫より上り侍りけるに　大納言旅人

ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし

題しらず　讀人しらず

あさ霧にぬれにし衣ほさずしてひとりや君がやま路こゆらむ

東の方にまかりけるに淺間の嶽に煙のたつを見てよめる　在原業平朝臣

しなのなる淺間のたけに立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ

駿河の國宇都の山にあへる人につけて京へつかはしける

駿河なる宇都の山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

新古今和歌集　巻第十

羇旅歌

和銅三年三月藤原の宮より奈良の宮に遷らせ給うける時　　元明天皇御歌

とぶ鳥の飛鳥の里をおきていなば君が邊(あたり)は見えずかもあらむ

天平十二年十月伊勢國に行幸し給ひける時　　聖武天皇御歌

いもに戀ひわかの松原見わたせば汐干のかたにたづ鳴き渡る

唐(もろこし)にてよみ侍りける　　山上憶良

いざこどもはや日の本へ大伴のみつのはま松まち戀ひぬらむ

題しらず　　人麿

38 別路は雲ゐのよそになりぬともそなたの風のたよりすぐすな

人の國へまかりける人にかり衣つかはすとてよめる

藤原顯綱朝臣

39 色ふかく染めたる旅のかり衣かへらぬまでのかたみとも見よ

33 34 35 36 37

題しらず　　皇太后宮大夫俊成

かりそめの旅のわかれとしのぶれど老は涙もえこそとどめね

祝部成仲

別れにし人はまたもやみわの山すぎにしかたを今になさばや

藤原定家朝臣

忘るなよやどる袂はかはるともかたみにしぼる夜半のつき影

都の外へまかりける人によみておくりける　　惟明親王

なごりおもふ袂にかねて知られけり別るる旅のゆくすゑの露

筑紫へまかりける女に月出だしたる扇をつかはすとて　　讀人しらず

都をばこころの空に出でぬとも月見むたびにおもひおこせよ

遠き國へまかりける人に遣しける　　大藏卿行宗

たれとしも知らぬわかれのかなしきは松浦の沖をいづる船人

登蓮法師筑紫へまかりけるに　俊惠法師

はるばると君がわくべき白波をあやしやとまる袖にかけつる

みちのくにへまかりける人に餞し侍りけるに　西行法師

君いなば月待つとてもながめやらむあづまのかたの夕暮の空

遠き所に修行せむとて出で立ちけるに人々別を

しみてよみ侍りける

頼めおかむ君も心やなぐさむと歸らむことはいつとなくとも

さりともとなほ逢ふことを頼むかな死出の山路をこえぬ別は

遠き所へまかりける時師光餞しはべりけるによ

める　道因法師

歸り來む程を契らむと思へども老いぬる身こそ定めがたけれ

22 23 24 25 26

よし申していつ上るべしともいはず侍りければ　藤原基俊

かへり來む程思ふにも武隈のまつわが身こそいたく老いぬれ

修行に出で侍りけるによめる　大僧正行尊

思へども定なき世のはかなさにいつを待てともえこそ頼めね

俄に都をはなれて遠くまかりけるに女につかはしける　讀人しらず

ちぎり置くことこそ更になかりしかかねて思ひし別ならねば

別の心をよめる　俊惠法師

かりそめの別とけふを思へども今やまことの旅にもあるらむ

登蓮法師

歸りこむほどをや人に契らまし忍ばれぬべきわが身なりせば

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　藤原隆信朝臣

よみ侍りける　中納言隆家

別路はいつもなげきの絶えせぬにいとどかなしき秋の夕ぐれ

かへし　藤原實方朝臣

とどまらむ事は心にかなへども如何にかせまし秋のさそふを

七月ばかり美作へくだるとて都の人につかはしける　前中納言匡房

都をばあきとともにぞ立ち初めし淀の河ぎりいく夜へだてつ

みこの宮と申しける時太宰大貳實政學士にて侍りける甲斐守にて下り侍りけるに餞たまはすとて　後三條院御歌

思ひ出でば同じ空とは月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで

みちのくにの守もとよりの朝臣久しくあひみぬ

17 16 15 14 13

神無月まれの御幸にさそはれて今日別れなばいつか逢ひみむ

題しらず　　大江千里

わかれての後も逢ひみむと思へども是を何れの時とかはしる

成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍りける

もろこしも天の下にぞあるときく照る日の本を忘れざらなむ

修行に出で立つとて人の許につかはしける　　道命法師

別路はこれやかぎりの旅ならむ更にいくべきここちこそせね

老いたる親の七月七日筑紫へ下りけるに遙には

なれぬる事を思ひて八日の曉追ひて舟にのる所

につかはしける　　加賀左衞門

あまの河そらに聞えし舟出にはわれぞまさりて今朝は悲しき

實方朝臣みちのくにへ下り侍りけるに餞すとて

ころも川みなれしひとの別にはたもとまでこそ浪はたちけれ

みちのくにの介にてまかりける時範永朝臣の許につかはしける　高階經重朝臣

ゆく末にあふくま河のなかりせばいかにかせまし今日の別を

かへし　藤原範長朝臣

君に又あふくま河をまつべきにのこりすくなきわれぞ悲しき

太宰帥隆家くだりけるに扇給ふとて　枇杷皇太后宮

涼しさはいきのまつ原まさるとも添ふる扇のかぜなわすれそ

亭子院宮の瀧御覽じにおはしましける御ともに素性法師めし具せられてまゐりけるを住吉のこほりにていとま給はせて大和につかはしけるによみはべりける　一條右大臣

秋霧のたつ旅ごろも置きてみよ露ばかりなるかたみなりとも

みちのくにに下り侍りける人に　　貫之

見てだにもあかぬこころを玉鉾の道のおくまで人の行くらむ

逢坂の關近きわたりに住み侍りけるに遠き所に（ろとてイ）

まかりける人に餞し侍りて　　中納言兼輔

逢坂のせきに我が宿なかりせばわかるる人はたのまざらまし

寂昭上人入唐し侍りけるに裝束おくりけるに立ちけるをしらで追ひて遣しける　　讀人しらず

きならせと思ひしものを旅衣たつ日も知らずなりにけるかな

かへし　　寂昭法師（上人イ）

これやさは雲のはたてに織ると聞くたつことしらぬ天の羽衣

題しらず　　源重之

新古今和歌集 卷第九

離別歌

みちのくにに下り侍りける人に裝束おくるとてよみ侍りける　紀貫之

玉鉾のみちの山風さむからばかたみがてらに著なむとぞ思ふ

題しらず　伊勢

忘れなむ世にも越路のかへる山いつはた人に逢はむとすらむ

あさからず契りける人の行き別れ侍りけるに　紫式部

きたへゆく雁の翅にことづてよ雲のうはがきかき絕えずして

るなかへまかりける人に旅衣つかはすとて　大中臣能宣朝臣

りて限に侍りければ公忠朝臣につかはしける　藤原季縄

悔しくぞ後に逢はむと契りける今日を限りといはましものを

母の女御かくれ侍りて七月七日よみ侍りける　中務卿具平親王

墨染の袖はそらにもかさなくにしぼりもあへず露ぞこぼるる

うせにける人のふみの物の中なるを見出でてそのゆかりなる人の許につかはしける　紫式部

暮れぬまの身をば思はで人の世の哀を知るぞかつははかなき

あるはなくなきは數そふ世の中にあはれ何れの日まで歎かむ

在原業平朝臣

白玉かなにぞと人の問ひしとき露とこたへてけなましものを

更衣の服にて參れりけるを見給ひて

延喜御歌

年ふればかくもありけり墨染のこは思ふてふそれかあらぬか

おもひにて人の家に宿れりけるをその家に忘草の多く侍りければあるじに遣しける

中納言兼輔

なき人をしのびかねては忘草おほかる宿にやどりをぞする

病にしづみて久しく籠りゐて侍りけるがたまたまよろしうなりて內にまゐりて右大辨公忠藏人に侍りけるに逢ひて又あさてばかり參るべきよし申してまかり出でにけるままにやまひ重くな

しつかはしける　　　　権中納言通俊

とへかしなかたしく藤の衣手になみだのかかる秋のねざめを

堀河院かくれ給ひて後よめる　　　　権中納言國信

君なくてよるかたもなき青柳のいとどうき世ぞ思ひみだるる

通ひける女山里にてはかなくなりにければつれづれとこもりゐて侍りけるがあからさまに京へまかりて曉歸るに鳥なきぬと人々いそがし侍りければ　　　　左京大夫顯輔

いつのまに身を山がつになしはてて都を旅とおもふなるらむ

奈良の帝をさめ奉りけるを見て　　　　人麿

久方のあめにしをるる君ゆゑに月日もしらで戀ひわたるらむ（かなイ）

題しらず　　　　小野小町

ければかへるとてかの堂の障子にかきつけ侍りける　　右大將忠經

86 たれもみな涙の雨にせきかねぬ空もいかがはつれなかるべき

なくなりたる人の數をそとばにかきて歌よみ侍りけるに　　法橋行遍

87 見し人は世にもなぎさの藻鹽草かき置くたびに袖ぞしをるる

子の身まかりにける次の年の夏かの家にまかりたりけるに花橘の薫りければよめる　　祝部成仲

88 あらざらむ後忍べとや袖の香を花たちばなにとどめ置きけむ

能因法師身まかりて後よみ侍りける　　藤原兼房朝臣

89 在りし世に暫しも見ではなかりしを哀とばかりいひて止ぬる

妻なくなりて又の年の秋の頃周防内侍が許へ申

82 83 84 85

なげくこと侍りける人問はずと恨み侍りければ

哀とも心におもふほどばかりいはれぬべくは問ひこそはせめ

入道左大臣

無常の心を

つくづくと思へばかなしいつまでか人の哀をよそに聞くべき

土御門内大臣

左近中將通宗が墓所にまかりてよみ侍りける

後れゐて見るぞ悲しきはかなさをうき身の跡になに頼みけむ

覺性法親王かくれ侍りて周忌のはてに墓所にまかりてよみ侍りける

前大僧正慈圓

そこはかと思ひ續けて來てみれば今年の今日も袖はぬれけり

母のために粟田口の家にて佛供養し侍りける時はらから皆まうできあひて古きおもかげなど更にしのび侍りける折しも雨かきくらし降り侍り

いつ歎きいつ思ふべきことなれば後の世しらで人の過ぐらむ

前大僧正慈圓

皆人のしりがほにして知らぬかな必ずしぬるならひありとは

きのふ見し人はいかにと驚けばなほ長き夜の夢にぞありける

蓬生にいつか置くべきつゆの身はけふの夕暮あすのあけぼの

我もいつぞあらましかばと見し人を忍ぶとすればいとど添ひ行く

前參議敎長高野に籠りゐて侍りけるが病かぎりになりぬと聞きて賴輔卿まかりけるほどに身まかりぬと聞きてつかはしける

寂蓮法師

尋ね來ていかにあはれとながむらむあとなき山のみねの白雲

人におくれて歎きける人に遣しける

西行法師

なきあとの面影をのみ身にそへてさこそは人の戀しかるらめ

71 72 73 74 630

ぬやうに侍りけるもいとど昔思ひ出でられて女房に申し侍りける

中院右大臣

有栖川おなじながれはかはらねど見しや昔のかげぞわすれぬ

権中納言通家の母かくれ侍りにける秋攝政太政大臣のもとに遣しける

皇太后宮大夫俊成

限りなきおもひのほどの夢のうちは驚かさじと歎きこしかなかへし

攝政太政大臣

見し夢にやがて紛れぬわが身こそ問はるるけふも先悲しけれ

母のおもひに侍りける頃又なくなりにける人のあたりより問ひ侍りければ遣しける

藤原清輔朝臣

世の中はみしも聞きしもはかなくてむなしき空の煙なりけり

無常の心を

西行法師

あはれ人けふの命を知らませばなにはのあしに契らざらまし

題しらず　大江匡衡朝臣

夜もすがら昔のことを見つるかな語るやうつつ有りし世や夢

俊頼朝臣身まかりて後常に見ける鏡を佛に作らせ侍るとてよめる　新少將

うつりけむ昔の影やのこるとて見るに思ひのますかがみかな

通ひける女のはかなくなり侍りにける頃書きおきたるふみども經の料紙になさむとて取りいでて見はべりけるに　按察使公通

かきとむる言の葉のみぞ水莖の流れてとまるかたみなりけり

禎子内親王かくれ給ひて後悰子内親王かはり居侍りぬと聞きてまかりて見ければ何事もかはら

るを見て　　　　律師慶暹

亡き人の跡をだにとて來て見ればあらぬ里にもなりにける哉

世のはかなき事を歎く頃みちのくにに名ある所

所かきたる繪を見侍りて

見し人のけぶりになりし夕より名もむつましきしほがまの浦

後朱雀院かくれ給ひて後源三位が許へ遣しける　　辨乳母

あはれ君いかなる野邊の烟にてむなしき空のくもとなりけむ

かへし　　　　源三位

おもへ君もえし烟にまがひなで立ちおくれたる春のかすみを

大江嘉言對馬守になりて下るとて難波堀江のあ

しのうらばにとよみて下り侍りにける程に國に

てなくなりにけると聞きて　　　　能因法師

815

玉の緒の長きためしにひく人も消ゆれば露にことならぬかな

小式部内侍身まかりて後常にもちて侍りける手箱を誦經にせさすとてよみ侍りける　和泉式部

こひわぶと聞きにだにきけ鐘の音に打忘らるる時のまぞなき

上東門院の小少將身まかりて後常にうちとけてかき遣しける文の物の中にはべりけるを見出でて加賀少納言が許につかはしける　紫式部

誰か世に長らへて見む書きとめし跡は消えせぬ形見なれども

かへし　加賀少納言

なき人をしのぶる事もいつまでぞ今日の哀はあすのわが身を

僧正明尊かくれて後久しくなりて房なども岩倉に取り渡して草生ひ茂りてことざまになりにけ

58 57 56 55 54

810

ものをのみ思ひ寝覺のまくらには涙かからぬあかつきぞなき

一條院かくれ給ひにければその御事をのみ戀ひ

歎き給ひて夢にほのかに見え給ひければ　上東門院

逢ふ事も今はなきねの夢ならでいつかは君をまたは見るべき

後朱雀院かくれ給ひて上東門院白川に籠り給ひ

にけるを聞きて　女御藤原生子

うしとては出でにし家を出でぬなりなど故鄕に我が歸りけむ

をさなかりける子の身まかりにけるに　源道濟

はかなしと言ふにもいとど涙のみかかるこの世を賴みける哉

後一條院の中宮かくれ給ひて後人の夢に

故鄕にゆく人もがな告げやらむしらぬ山路にひとりまどふと

小野宮右大臣身まかりぬと聞きてよめる　權大納言長家

てすさびのはかなき跡と見しかども長き形見になりにける哉

齋宮女御の許にて先帝の書かせ給へりけるさうしを見侍りて　馬内侍

尋ねても跡はかくてもみづぐきのゆくへも知らぬ昔なりけりかへし　女御徽子女王

いにしへのなきに流るる水ぐきは跡こそ袖のうらによりけれ

恒德公かくれて後女の許に月あかき夜忍びてまかりてよみ侍りける　藤原道信朝臣

ほしもあへぬ衣の闇にくらされて月ともいはず迷ひぬるかな

入道攝政のために萬燈會行はれ侍りけるに　東三條院

水底にちぢの光はうつれどもむかしの影は見えずぞありける

公忠朝臣身まかりにける頃よみ侍りける　源信明朝臣

へぬれて時雨のなど申し遣して次の年の神無月
無常の歌あまたよみてつかはし侍りし中に　太上天皇
おもひいづるをりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘れがたみに
かへし　前大僧正慈圓
思ひ出づるをりたく柴ときくからにみだれ知られぬ夕煙かな
雨中無常といふことを　太上天皇
なき人のかたみの雲やしぐるらむゆふべの雨に色は見えねど
枇杷皇太后宮かくれて後十月ばかり彼の宮の人
人の中に誰ともなくてさし置かせける　相模
神無月しぐるるころもいかなれや空に過ぎにし秋のみやびと
右大將通房身まかりて後手習ひすさび侍りける
扇を見出してよみ侍りける　土御門右大臣女

えければ　久我太政大臣

ものおもへば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに

藤原定通身まかりて後月あかき夜人の夢に殿上になむ侍るとてよみける歌

ふるさとを別れし秋をかぞふれば八年になりぬありあけの月

源爲義朝臣身まかりにける又の年月をみて　能因法師

命あればことしの秋も月は見つわかれし人にあふ夜なきかな

世の中はかなく人々多くなくなり侍りける頃中將宣方朝臣身まかりて十月ばかり白川の家にまかりけるに紅葉の一葉殘れるを見つけて

けふ來ずば見でややままし山里の紅葉も人もつねならぬ世に

十月ばかり水無瀨に侍りし頃前大僧正慈圓の許

節もの悲しく覺え侍りければよめる　西行法師

朽ちもせぬその名ばかりを止めおきて枯野の薄形見にぞみる

同行なりける人うち續きはかなくなりにければ
思ひ出でてよめる　大僧正慈圓

故郷を戀ふるなみだやひとり行（程イ）くともなき山の道しばのつゆ

母のおもひに侍りける秋法輪寺に籠りて嵐のい
たく吹きければ　皇太后宮大夫俊成

憂世には今はあらしの山風にこれやなれ行くはじめなるらむ

定家朝臣の母身まかりて後秋の頃墓所近き堂に
とまりてよみ侍りける

まれにくる夜半も悲しき松風をたえずや苔のしたに聞くらむ

堀河院かくれ給ひて後神無月風の音あはれに聞

内大臣中將に侍りける時遣しける　殷富門院大輔

秋ふかき寢覺にいかが思ひ出づるはかなく見えし春の夜の夢

かへし　土御門内大臣

見しゆめを忘るる時はなけれども秋のねざめはげにぞ悲しき

忍びて物申しける女身まかりて後その家にとまりてよみ侍りける　大納言實家

なれし秋のふけし夜床はそれながら心のそこの夢ぞかなしき

みちのくにへまかりける野中に目に立つ樣なる塚の侍りけるを問はせ侍りければこれなむ中將の墓と申すと答へければ中將とはいづれの人ぞととひ侍りければ實方朝臣の事となむ申しけるに冬の事にて霜枯の薄ほのぼの見えわたりて折

30 31 32 33

國のもとに申し遣しける　　後徳大寺左大臣

悲しきは秋のさが野のきりぎりすなほ故郷に音をやなくらむ

母の身まかりにけるを嵯峨のほとりにをさめける夜よみける　　皇太后宮大夫俊成女

今はさはうき世のさがの野邊をこそ露消えはてし跡と忍ばめ

母身まかりにける秋野分しける日もと住み侍りける所にまかりて　　藤原定家朝臣

玉ゆらの露もなみだもとどまらずなき人こふる宿のあきかぜ

父秀宗身まかりての秋寄風懷舊といふことをよみ侍りける　　藤原秀能

つゆをだにいまはかたみの藤衣あだにも袖を吹くあらしかな

久我内大臣春の頃うせて侍りける年の秋土御門

置きそふる露とともには消えもせで涙にのみもうき沈むかな

廉義公の母なくなりて後女郎花を見て　清愼公

女郎花みるにこころはなぐさまでいとどむかしの秋ぞ戀しき

彈正尹爲尊親王におくれて歎き侍りける頃　和泉式部

ねざめする身を吹きとほす風の音を昔は袖のよそに聞きけむ

從一位源師子かくれ侍りて宇治より新少將が許につかはしける　知足院入道前關白太政大臣

袖ぬらす萩のうは葉のつゆばかりむかし忘れぬ蟲の音ぞする

法輪寺に詣ではべるとて嵯峨野に大納言忠家が墓の侍りけるもとにまかりてよみ侍りける　權中納言俊忠

さらでだに露けき嵯峨の野邊に來て昔の跡にしをれぬるかな

公時卿の母身まかりて歎き侍りける頃大納言實

のみ茂りて侍りけるに七月七日わらはべの露とりはべりけるを見て
周防内侍

浅茅原はかなくおきし草のうへの露をかたみと思ひかけきや

一品資子内親王にあひて昔の事ども申しいだしてよみ侍りける
女御徽子女王

袖にさへ秋のゆふべは知られけり消えし浅茅が露をかけつつ

例ならぬ事重くなりて御ぐしおろし給ひける日上東門院中宮と申しける時遣しける
一條院御歌

秋風の露のやどりに君を置きてちりを出でぬる事ぞかなしき

秋の頃幼き子におくれたる人に
大貳三位

わかれけむ名殘の袖もかわかぬにおきや添ふらむ秋のゆふ露かべし
讀人しらず

17　18　19　20

すみ侍りける女なくなりにける頃藤原爲頼朝臣の妻身まかりにけるに遣しける　小野宮右大臣

よそなれど同じ心ぞかよふべきたれも思ひのひとつならねば

かへし　藤原爲頼朝臣

ひとりにもあらぬ思ひはなき人も旅のそらにや悲しかるらむ

小式部内侍露おきたる萩織りたる唐衣をきて侍りけるを身まかりて後上東門院より尋ねさせ給ひたるに奉るとて　和泉式部

775

おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何に喩へむ

御かへし　上東門院

思ひきやはかなく置きし袖の上の露を形見にかけむものとは

白河院の御時中宮おはしまさで後その御方は草

かたみとて見れば歎のふかみ草なになかなかの匂ひなるらむ

稚き子の亡せにけるが植ゑおきたりける菖蒲を見てよみ侍りける

高陽院木綿四手

菖蒲草たれしのべとか植ゑおきてよもぎが下の露ときえけむ

歎くこと侍りける五月五日人の許へ申しつかはしける

上西門院兵衛

けふくれどあやめもしらぬ袂かな昔を戀ふるねのみかかりて

近衛院かくれ給ひにければ世をそむきて後五月五日皇嘉門院に奉られける

九條院

菖蒲草ひきたがへたる袂にはむかしを戀ふるねぞかかりける

御かへし

皇嘉門院

さもこそはおなじ袂の色ならめ變らぬねをもかけてけるかな

公守朝臣の母身まかりて後の春法金剛院の花を見て　　　後德大寺左大臣

765
花見てはいとど家路ぞ急がれぬ待つらむと思ふ人しなければ

定家朝臣母のおもひにはべりける春の暮に遣しける　　　攝政太政大臣

春霞かすみし空のなごりさへ今日をかぎりのわかれなりけり

前大納言光頼春身まかりけるを桂なる所にてとかくして歸り侍りけるに　　　前左兵衛督惟方

たちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふはるのあけぼの

六條攝政かくれ侍りて後植ゑおき侍りける牡丹の咲きて侍りけるを折りて女房の許より遣して侍りければ　　　太宰大貳重家

しける　　　實方朝臣

墨染のころもうき世の花ざかりをり忘れても折りてけるかな

かへし　　道信朝臣

あかざりし花をや春も戀ひつらむありし昔をおもひ出でつつ

彌生の頃人に後れて歎きける人の許に遣しける　　成尋法師

花櫻まださかりにて散りにけむなげきのもとを思ひこそやれ

人の櫻を植ゑ置きてその年の四月なくなりにけ
る又の年初めて花咲きたるを見て　　大江嘉言

花みむとうゑけむ人もなきやどの櫻は去年（こぞ）のはるぞ咲かまし

年頃すみ侍りける女の身まかりにける四十九日
はててなほ山里に籠り居てよみ侍りける　　左京大夫顯輔

たれもみな花の都にちりはててひとりしぐるる秋のやまざと

新古今和歌集　巻第八

哀傷歌

題しらず　　僧正遍昭

757 末の露もとのしづくや世の中のおくれ先立つためしなるらむ

小野小町

あはれなり我が身の果や淺緑つひには野邊のかすみと思へば

醍醐のみかどかくれ給ひて後彌生のつごもりに三條右大臣に遣しける　　中納言兼輔

櫻散る春の末にはなりにけりあま間も知らぬながめせしまに

正暦二年諒闇の春櫻の枝につけて道信朝臣に遣

50

756

建久九年の大嘗會主基の屛風に松井　　　　權中納言資實

常磐なる松井のみづをむすぶ手の雫ごとにぞ千代は見えける

よめる　宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月を見てあきらけき世をそらに知るかな

平治元年の大嘗會主基方の辰日參入音聲生野を

よめる　刑部卿範兼

大江山こえていく野の末とほみ道ある世にも逢ひにける哉

仁安元年の大嘗會悠紀歌奉りけるに稻春歌　皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたの稻をかけ積みて道ある御世の初にぞつく

仁安元年の大嘗會主基方の稻春歌丹波國長田村

をよめる　權中納言兼光

神代より今日のためとや八束穗（やつかほ）に長田の稻のしなひそめけむ

元暦元年の大嘗會悠紀歌青羽山　式部大輔光範

755
立ちよればすずしかりけり水鳥の青羽の山の松のゆふかぜ

ける
かすが山みやこの南しかぞおもふ北の藤なみはるに逢へとは　攝政太政大臣
天暦の御時の大嘗會主基備中國中山　讀人しらず
常磐なる吉備の中山おしなべて千年をまつのふかきいろかな
長和五年の大嘗會悠紀方の風俗歌近江國朝日郷祭　主輔親
あかねさす朝日の郷のひかげ草豐のあかりのかざしなるべし
永承元年の大嘗會悠紀方の屏風近江國守山をよめる　式部大輔資業
すべらぎを常磐かきはにもるやまの山人ならし山かづらせり
寛治二年の大嘗會の屏風に鷹の尾山をよめる　前中納言匡房
750
とやかへる鷹の尾山のたまつばき霜をば經とも色はかはらじ
久壽二年の大嘗會悠紀方の屏風に近江國鏡山を

もしほ草かくともつきじ君が代のかずによみおく和歌の浦浪

建久七年入道前關白太政大臣宇治にて人々に歌
よませ侍りけるに　前大納言隆房

嬉しさやかたしく袖につつむらむ今日待ちえたる宇治の橋姫

嘉應元年入道前關白太政大臣宇治にて河水久澄
といふ事を人々によませ侍りけるに　藤原清輔朝臣

年へたる宇治の橋もりこと問はむ幾代になりぬ水のみなかみ

日吉の禰宜成仲七十の賀し侍りけるに遣しける

ななそぢにみつの濱松おいぬれど千代ののこりは猶ぞ遙けき

百首の歌よみ侍りけるに　後徳大寺左大臣

八百日(やほか)ゆくはまの眞砂を君が代のかずに取らなむ沖つ島もり

家に歌合し侍りけるに春の祝の心をよみはべり

30 31 32 33 34

敷島ややまとしまねも神代より君がためとやかため置きけむ

千五百番歌合に

ぬれてほす玉ぐしの葉の露霜にあま照るひかり幾世へぬらむ

祝の心をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

君が代は千代ともささじあまの戸やいづる月日の限なければ

千五百番歌合に　　藤原定家朝臣

我が道をまもらば君をまもるらむよはひはゆづれ住よしの松

八月十五夜和歌所の歌合に月多秋友といふこと

をよみ侍りし　　寂蓮法師

740たかさごのまつも昔になりぬべしなほゆくすゑは秋の夜の月

和歌所の開闔になりて初めて參りし日奏しはべ

りし　　源家長

26 二條院の御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるに　刑部卿範兼

君が世に逢へるはたれも嬉しきを花は色にも出でにけるかな

おなじ御時南殿の花の盛に歌よめと仰せられければ　三河内侍

27 身にかへて花も惜まじ君が代に見るべき春のかぎりなければ

百首の歌奉りし時　式子内親王

28 あめのしためぐむ草木のめもはるに限りもしらぬ御世の末々

京極殿にて初めて人々歌つかうまつりしに松有春色といふ事をよみ侍りし　攝政太政大臣

29 735 おしなべて木のめもはるの淺緑まつにぞ千世の色はこもれる

百首の歌奉りし時

萬代をまつの尾山のかげしげみ君をぞいのるときはかきはに

後冷泉院をさなくおはしましける時卯杖の松を

人の子に給はせけるによみ侍りける　大貳三位

あひおひのをしほの山の小松原いまより千代の蔭をまたなむ

永保四年内裏の子日に　大納言經信

子日する御垣のうちの小松原千代をばほかのものとやは見る

權中納言通俊

ねの日する野邊の小松を移しうゑて年のを長く君ぞひくべき

承曆二年内裏の歌合に祝の心をよみ侍りける　前中納言匡房

君が代はひさしかるべしわたらひや五十鈴の川の流たえせで

題しらず　讀人しらず

ときはなる松にかかれる苔なれば年のを長きしるべとぞ思ふ

かりける夜大二條關白中將に侍りける時若き人
人さそひ出でて池の舟にのせて中島の松蔭さし
まはすほどをかしく見え侍りければ　紫式部
くもりなく千年にすめる水の面にやどれる月の影ものどけし
永承四年内裏の歌合に池の水といふ心を　伊勢大輔
池水の世々に久しくすみぬればそこの玉藻もひかり見えけり
堀河院の大嘗會の御禊に日頃雨ふりてその日に
なりて空はれて侍りければ紀伊典侍に申しける　六條右大臣
君が代の千年のかずもかくれなく曇らぬ空のひかりにぞ見る
天喜四年后の宮の歌合に祝の心をよみ侍りける　前大納言隆國
725
すみの江に生ひそふ松の枝ごとに君が千とせの數ぞこもれる
寛治八年關白太政大臣の高陽院の歌合に祝の心を　康資王母

千年ふるをのへの松は秋かぜのこゑこそかはれ色はかはらず
藤原興風

やまがはの菊のした水いかなればながれて人の老をせくらむ
延喜の御時屏風の歌に
貫之

いのりつつなほながつきの菊の花いづれの秋か植ゑてみざらむ
文治六年女御入内の屏風の歌
皇太后宮大夫俊成

山人の折る袖にほふきくの露うちはらふにも千代はへぬべし
貞信公の家の屏風に
元輔

神無月もみぢもしらぬ常磐木によろづ代かかれ峯のしらくも
題しらず
伊勢

やま風はふけど吹かねどしら波のよする岩ねは久しかりけり
後一條院生れさせ給へりける九月つきくまもな

亭子院の六十の御賀の屛風に若菜摘める所をよみ侍りける

若菜おふる野邊といふ野邊を君が爲萬代しめて摘まむとぞ思ふ

延喜の御時屛風の歌

ゆふだすき千年をかけて足曳の山あゐの色はかはらざりけり　土御門右大臣

祐子内親王の家にて櫻を

君が世にあふべき春のおほければ散るとも櫻あくまでぞ見む　伊勢

七條の后の宮の五十の賀の屛風に

住の江のはまの眞砂をふむたづは久しき跡をとむるなりけり　貫之

延喜の御時屛風の歌

715 としごとに生ひそふ竹のよよをへて變らぬ色を誰とかはみむ　躬恒

題しらず

新古今和歌集 卷第七

賀歌

みつぎ物ゆるされて國富めるを御覽じて　仁德天皇御歌

707. 高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり

題しらず　讀人しらず

はつはるの初子のけふのたま帚手にとるからにゆらぐ玉の緒

子日をよめる　藤原淸正

子日してしめつる野邊の姬小松ひかでや千世の蔭をまたまし

題しらず　紀貫之

710. 君が世の年のかずをばしろたへの濱のまさごと誰かしきけむ

706

けふ毎に今日や限とをしめどもまたも今年に逢ひにけるかな

152 153 154 155

年の暮に身の老いぬることを歎きてよみはべりける

和泉式部

数ふれば年の殘りもなかりけり老いぬるばかり悲しきはなし

入道前關白百首の歌よませ侍りける時歳暮の心をよみてつかはしける

後徳大寺左大臣

いはばしる初瀬の川の浪まくらはやくも年のくれにけるかな

土御門内大臣の家にて海邊歳暮といへる心をよめる

藤原有家朝臣

行く年ををしまの海士のぬれ衣かさねて袖になみやかくらむ

寂蓮法師

705

老の浪越えける身こそあはれなれ今年もいまはすゑのまつ山

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

百首の歌奉りし時　　小侍従

思ひやれ八十の年のくれなればいかばかりかはものは悲しき

題しらず　　西行法師

昔おもふ庭にうき木をつみ置きてみし世にもにぬ年の暮かな

攝政太政大臣

いそのかみふる野の小笹霜をへてひとよばかりに殘る年かな

前大僧正慈圓

年のあけて憂世の夢のさむべくばくるともけふは厭はざらまし

權律師隆聖

朝ごとのあか井の水に年くれて我が世のほどのくまれぬる哉

百首の歌奉りし時　　入道左大臣

いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそに聞きし春かは

百首の歌奉りし時　式子内親王

690
日かずふるゆきげにまさる炭竈のけぶりもさびし大原のさと

歳暮に人に遣しける　西行法師

おのづからいはぬを慕ふ人やあると休らふ程に年の暮れぬる

年の暮によみ侍りける　上西門院兵衛

歸りては身にそふ物と知りながら暮れ行く年をなに慕ふらむ

皇太后宮大夫俊成女

へだてゆくよよの面影かきくらし雪とふりぬる年のくれかな

大納言隆季

あたらしき年や我が身にとめくらむ隙ゆく駒に道をまかせて

俊成卿の家に十首歌よみ侍りけるに歳暮の心を　俊惠法師

695
なげきつつ今年も暮れぬ露の命生けるばかりを思ひ出にして

134 135 136 137 138 139

千五百番歌合に　右衛門督通具

草も木もふりまがへたる雪もよに春待つ梅のはなの香ぞする

百首歌めしたる時　崇徳院御歌

685

み狩するかた野のみのに降る霰あなかままだき鳥もこそたて

内大臣に侍りける時家の歌合に　法性寺入道前關白太政大臣

みかりすと鳥立の原をあさりつつ交野の野邊に今日も暮しつ

京極關白前太政大臣の高陽院歌合に　前中納言匡房

御狩野はかつふる雪にうづもれて鳥立も見えず草がくれつつ

鷹狩の心をよみ侍りける　左近中將公衡

かりくらしかた野の眞柴をりしきて淀の川瀬の月を見るかな

埋火をよみ侍りける　權僧正永緣

なかなかに消えはきえなで埋火のいきてかひなき世にもある哉

ゆき降れば嶺のまさか木うづもれて月にみがける天のかぐ山

題しらず　小侍從

かきくもり天ぎる雪のふる里をつもらぬさきに問ふ人もがな

前大僧正慈圓

庭の雪に我が跡つけて出でつるをとはれにけりと人やみるらむ

ながむればわが山の端に雪白しみやこの人よあはれとも見よ

曾禰好忠

冬草のかれにし人のいまさらに雪ふみわけて見えむものかは

雪の朝大原にてよみ侍りける　寂然（蓮イ）法師

たづね來てみちわけわぶる人もあらじ幾重もつもれ庭の白雪

百首の歌の中に　太上天皇

このごろは花も紅葉も枝になししばしな消えそ松のしらゆき

ことをよませ侍りけるに

まつ人のふもとの道は絶えぬらむ軒端の杉にゆきおもるなり

おなじ家にて所の名を探りて冬の歌よませ侍り
けるに伏見の里の雪を　藤原有家朝臣

夢かよふみちさへ絶えぬくれ竹のふしみの里の雪のしたをれ

家に百首の歌よませ侍りけるに　入道前關白太政大臣

ふる雪にたく藻の煙かきたえてさびしくもあるか鹽竈のうら

題しらず　赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

延喜の御時歌奉れと仰せられければ　紀貫之

雪のみやふりぬとは思ふ山里にわれもおほくの年ぞつもれる

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

明けやらぬ寢覺の床にきこゆなりまがきの竹の雪のしたをれ

うへのをのこども曉望山雪といへる心をつかうまつりけるに

高倉院御歌

音羽山さやかに見する白雪をあけぬと告ぐるとりのこゑかな

紅葉の散れりける上に初雪の降りて侍りけるを見て上東門院に侍りける女房に遣しける

藤原家經朝臣

山ざとは道もや見えずなりぬらむ紅葉とともに雪の降りぬる

野亭雪をよみ侍りける

藤原國房

寂しさをいかにせよとて岡邊なる楢の葉しだり雪のふるらむ

百首の歌奉りし時

藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ

攝政太政大臣大納言に侍りける時山家雪といふ

百首の歌に　　式子内親王

さむしろの夜半の衣手さえさえてはつ雪しろしをかのべの松

入道前關白右大臣に侍りける時家の歌合に雪を
よめる　　寂蓮法師

降りそむる今朝だに人の待たれつるみやまの里の雪の夕ぐれ

雪のあした後德大寺左大臣の許につかはしける　　皇太后宮大夫俊成

けふはもし君もや問ふとながむればまだ跡もなき庭の雪かな

かへし　　後德大寺左大臣

今ぞきく心はあともなかりけり雪かきわけておもひやれども

題しらず　　前大納言公任

しらやまに年ふる雪やつもるらむ夜半にかたしく袂さゆなり

夜深聞雪といふことを　　刑部卿範兼

法性寺入道前關白太政大臣

さざ浪や志賀の唐崎かぜさえて比良の高嶺にあられ降るなり

人麿

矢田の野に淺茅いろづく荒乳(あらち)やま嶺の泡雪さむくぞあるらし

雪のあした基俊が許へ申し遣し侍る　　瞻西上人

つねよりも篠屋の軒ぞうづもるる今日はみやこに初雪や降る

かへし　　藤原基俊

降る雪にまことにしのやいかならむけふは都に跡だにもなし

冬の歌あまたよみ侍りけるに　　權中納言長方

はつ雪のふるの神杉うづもれてしめ結ふ野邊は冬ごもりけり

思ふこと侍りける頃初雪ふり侍りける日　　紫式部

ふればかくうさのみまさる世を知らであれたる庭に積る初雪

おなじ所　　權大納言通光

浦人のひもゆふぐれになるみがたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内の屏風に　　正三位季經

風さゆるとしまが磯のむら千鳥立ち居は浪のこころなりけり

五十首の歌奉りし時　　藤原雅經

はかなしやさても幾夜かゆくみづに數かきわぶるをしの獨寐

堀河院に百首の歌奉りけるに　　河内

水鳥のかもの浮寢のうきながら浪のまくらにいく夜へぬらむ

題しらず　　湯原王

吉野なるなつみのかはの川よどに鴨ぞ鳴くなる山かげにして

能因法師

ねやのうへに片枝さしおほひそともなる葉廣柏に霰ふるなり

題しらず　重之

しらなみに羽うちかはし濱千鳥かなしきものは夜のひとこゑ

後德大寺左大臣

夕なぎにとわたる千鳥浪まより見ゆるこじまの雲に消えぬる

堀河院に百首の歌奉りけるに　祐子内親王家紀伊

うら風に吹上の濱のはまちどり浪たちくらし夜はに鳴くなり

五十首の歌奉りし時　攝政太政大臣

月ぞすむたれかはここにきの國や吹上の千鳥ひとりなくなり（らむイ）

千五百番歌合に　正三位季能

さよ千鳥こゑこそ近くなるみがたかたぶく月に汐やみつらむ

最勝四天王院の障子に鳴海の浦かきたる所　藤原秀能

風吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな

百首の歌の中に　式子内親王

見るままに冬は來にけり鴨のゐる入江のみぎは薄こほりつつ

攝政太政大臣の家の歌合に湖上冬月　藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池の氷にすむ月のやがてそでにもうつりぬるかな

題しらず　山邊赤人

うば玉の夜の更けゆけば楸おふる淸きかはらに千鳥なくなり

佐保のかはらに千鳥の鳴きけるをよみ侍りける　伊勢大輔

行く先は小夜ふけぬれど千鳥鳴くさほの河原は過ぎうかりけり

みちのくににまかりける時よみ侍りける　能因法師

夕されば汐風こしてみちのくの野田のたまがは千鳥なくなり

かつ氷りかつはくだくる山川の岩間にむせぶあかつきのこゑ

攝政太政大臣

消えかへり岩間にまよふ水の泡のしばしやどかるうす氷かな

五十首の歌奉りし時

まくらにも袖にも涙つららゐてむすばぬ夢を問ふあらしかな

百首の歌奉りし時

みなかみやたえだえこほる岩間より清瀧川にのこるしらなみ

最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所

太上天皇

かたしきの袖の氷もむすぼほれとけて寢ぬ夜の夢ぞみじかき

前大僧正慈圓

橋姫のかたしき衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの

あじろ木にいさよふ浪の音ふけてひとりや寢ぬる宇治の橋姫

625 津の國の難波のはるはゆめなれや蘆の枯葉にかぜわたるなり

崇德院に十首の歌奉りける時　大納言成通

冬ふかくなりにけらしな難波江の青葉まじらぬ葦のむらだち

題しらず　西行法師

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵をならべむ冬の山里

あづまに侍りける時都の人に遣しける　康資王母

あづま路のみちの冬草しげり合ひてあとだに見えぬ忘水かな

冬の歌とてよみ侍りける　守覺法親王

むかし思ふさ夜のねざめの床さえて涙もこほる袖のうへかな

百首の歌奉りし時

630 立ちぬるる山のしづくも音たえて槇の下葉にたるひしにけり

題しらず　皇太后宮大夫俊成

草のうへにここら玉ゐし白露をした葉のしもとむすぶ冬かな

中納言家持

かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける

うへのをのこども菊合し侍りけるついでに

延喜御歌

しぐれつつ枯れゆく野邊の花なれど霜のまがきに匂ふ色かな

延喜十四年倚侍藤原滿子に菊の宴給はせける時

中納言兼輔

菊のはな手折りては見じ初霜のおきながらこそ色まさりけれ

同じ御時大井川に行幸侍りける日

坂上是則

かげさへに今はと菊のうつろふは浪のそこにも霜やおくらむ

題しらず

和泉式部

野邊みれば尾花がもとの思ひ草枯れゆく冬になりぞしにける（にけるかなイ）

西行法師

63 64 65 66 67 68

さ夜ふけて聲さへさむき葦鶴(あしたづ)はいくへの霜か置きまさるらむ

冬の歌の中に　　太上天皇

ふゆの夜のながきをおくる袖ぬれぬ曉がたのよものあらしに

百首の歌奉りし時　　攝政太政大臣

615
笹の葉はみやまもさやにうちそよぎこほれる霜をふく嵐かな

崇德院の御時百首の歌奉りけるに　　藤原淸輔朝臣

君來ずばひとりや寢なむ笹の葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を

題しらず　　皇太后宮大夫俊成女

しもがれはそことも見えぬ草の原たれにとはまし秋の名殘を

百首の歌の中に　　前大僧正慈圓

霜さゆる山田のくろのむらすすき刈る人なしに殘るころかな

題しらず　　曾根好忠

冬がれの杜の朽葉の霜のうへに落ちたる月のかげのさむけさ

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

さえわびてさむるまくらに影見れば霜ふかき夜のあり明の月　右衛門督通具

霜むすぶ袖のかたしきうちとけてねぬ夜の月の影ぞさむけき

五十首の歌奉りし時　藤原雅經

610
影とめし露のやどりをおもひ出でて霜にあととふ淺茅生の月

橋上霜といへることをよみ侍りける　法印幸淸

かたしきの袖をや霜にかさぬらむ月に夜がるる宇治のはし姫

題しらず　源重之

夏刈の荻のふる枝は枯れにけり群れ居し鳥は空にやあるらむ

藤原道信朝臣

51 露霜の夜半におきゐてふゆの夜の月見るほどに袖はこほりぬ
前大僧正慈圓

52 もみぢ葉はおのが染めたる色ぞかし外(よそ)げに置けるけさの霜哉
西行法師

五十首の歌奉りしに

53 小倉山ふもとのさとに木の葉ちれば梢にはるる月を見るかな
藤原雅經

54 秋の色をはらひはててや久方の月のかつらに木がらしのかぜ
式子内親王

題しらず

605

55 風さむみ木の葉はれゆく夜な夜なにのこるくまなき庭の月影
殷富門院大輔

56 我が門のかり田のおもにふす鴫の床あらはなる冬の夜のつき
藤原清輔朝臣

45 46 47 48 49 50

595

ながめつついくたび袖にくもるらむ時雨に更くるあり明の月

題しらず　源泰光

定めなくしぐるる空のむら雲にいくたびおなじ月をまつらむ

うきィ

千五百番歌合に　源具親

今よりは木の葉がくれもなけれども時雨にのこるむら雲の月

題しらず

はれ曇るかげを都にさき立ててしぐると告ぐるやまの端の月

五十首の歌奉りし時　寂蓮法師

たえだえに里わく月の光かなしぐれをおくる夜半のむらくも

雨後冬月といふ心を　良暹法師

600

今はとて寝なましものをしぐれつる空とも見えずすめる月哉

題しらず　曾根好忠

39 まきのやに時雨の音のかはるかな紅葉やふかくちり積るらむ

千五百番歌合に冬の歌　二條院讃岐

40 590 世にふるは苦しきものを槇の屋にやすくもすぐる初時雨かな

題しらず　源信明朝臣

41 ほのぼのと有明のつきの月影に紅葉ふきおろす山おろしの風

中務卿具平親王

42 もみぢ葉を何惜みけむ木の間よりもりくる月は今宵こそ見れ

宜秋門院丹後

43 吹きはらふ嵐ののちの高峯より木の葉くもらで月や出づらむ

春日社の歌合に曉月といふことを　右衛門督通具

44 霜こほる袖にもかげはのこりけり露よりなれしありあけの月

和歌所にて六首の歌奉りしに冬月　藤原家隆朝臣

38 37 36 35 34 33

世の中に猶もふるかなしぐれつつ雲間の月のいでやと思へばどィ

百首の歌奉りしに　二條院讃岐

折こそあれながめにかかる浮雲の袖も一つにうちしぐれつつ

題しらず　西行法師

585
あきしのやとやまの里やしぐるらむ伊駒の嶽に雲のかかれる

道因法師

はれ曇り時雨は定なきものをふりはてぬるは我が身なりけり

千五百番歌合に冬の歌　源具親

今はまた散らでもまがふ時雨かなひとりふりゆくにはの松風

題しらず　俊惠法師

みよし野の山かきくもりゆき降れば麓の里はうちしぐれつつ

百首の歌奉りし時　入道左大臣

27 しぐれのあめ染めかねてけり山城のときはの杜の槇の下葉は

題しらず　清原元輔

28 冬を淺みまだき時雨と思ひしをたへざりけりな老のなみだも

鳥羽殿にて旅宿時雨といふことを　後白河院御歌

29 まばらなるしばのいほりに旅寢して時雨にぬるるさ夜衣かな

時雨を　前大僧正慈圓

580

30 やよ時雨もの思ふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染めまし

冬の歌の中に　太上天皇

31 深みどりあらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉

題しらず　人麿

32 しぐれの雨まなくし降れば槇の葉も爭ひかねて色づきにけり

和泉式部

21 22 23 24 25 26

神無月きぎの木の葉はちりはててにはにぞ風の音はきこゆる　清輔朝臣

山家時雨といへる心を

柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるる山邊なるらむ　藤原隆信朝臣

くもはれて後もしぐるる柴の戸や山かぜはらふ松のしたつゆ

寛平の御時后の宮の歌合に

神無月しぐれ降るらし佐保山のまさきのかづら色まさりゆく　讀人しらず

題しらず

575
木がらしの音にしぐれを聞きわかで紅葉にぬるる袂とぞ見る　中務卿具平親王

時雨ふるおとはすれども呉竹のなどよとともに色もかはらぬ　中納言兼輔

十月ばかり常磐の杜を過ぐとて

565 冬の來て山もあらはに木の葉降りのこる松さへ嶺にさびしき
五十首の歌奉りし時　宮内卿
からにしき秋のかたみやたつた山散りあへぬ枝に嵐ふくなり
頼輔卿の家の歌合に落葉の心を　藤原資隆朝臣
時雨かと聞けば木の葉のふるものをそれにもぬるるわが袂哉
題しらず　法眼慶算
ときしもあれ冬は葉守のかみな月まばらになりぬもりの柏木
津守國基
いつの間に空のけしきのかはるらむはげしきけさの木枯の風
西行法師
570 月を待つたかねの雲ははれにけりこころあるべき初時雨かな
前大僧正覺忠

木の葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらでゆく嵐かな

右衛門督通具

木の葉散る時雨やまがふ我が袖にもろき涙のいろと見るまで

藤原雅經

移りゆく雲にあらしの聲すなり散るかまさきのかつらぎの山

七條院大納言

初時雨しのぶの山のもみぢ葉を嵐吹けとは染めずやあるらむ

信濃

しぐれつつ袖もほしあへず足曳の山の木の葉にあらし吹く頃

藤原秀能

山里のかぜすさまじき夕暮に木の葉みだれてものぞかなしき

祝部成茂

りて紅葉浮水といへる心をよみ侍りける　藤原資宗朝臣

いかだしよ待てこと問はむ水上はいかばかり吹くやまの嵐ぞ　大納言經信

555
散りかかる紅葉ながれぬ大井川いづれるせきの水のしがらみ

大井川にまかりて落葉滿水といへる心をよみ侍りける　藤原家經朝臣

高瀨舟しぶくばかりにもみぢ葉の流れてくだる大井がはかな

深山落葉といへる心を　源俊頼朝臣

日暮るればあふ人もなしまさき散るみねの嵐の音ばかりして

題しらず　藤原淸輔朝臣

おのづから音するものは庭のおもに木の葉吹きまく谷の夕風

春日社の歌合に落葉といふことをよみて奉りし　前大僧正慈圓

新古今和歌集　巻第六

冬歌

千五百番歌合に初冬の心をよめる　　皇太后宮大夫俊成

551 おきあかす秋のわかれの袖の露しもこそむすべ冬や來ぬらむ

天暦の御時神無月といふ事を上におきて歌つかうまつりけるに。　　藤原高光

神無月かぜに紅葉の散る時はそこはかとなくものぞかなしき

題しらず　　源重之

名取川やなせの浪もさわぐなり紅葉やいとどよりてせくらむ

後冷泉院の御時うへのをのこども大井川にまか

114

閏九月盡の心を　　　　　　　　　　　　前太政大臣

550 なべて世のをしさにそへて惜むかな秋より後の秋のかぎりを

家に百首の歌合し侍りける時　攝政太政大臣

立田姫いまはのころの秋風にしぐれをいそぐひとのそでかな

千五百番歌合に　權中納言兼宗

545
行く秋のかたみなるべき紅葉もあすは時雨と降りやまがはむ

紅葉見にまかりてよみ侍りける　前大納言公任

うちむれてちる紅葉をたづぬれば山路よりこそ秋はゆきけれ

津の國に侍りける頃道濟が許に遣しける　能因法師

夏草のかりそめにとてこしかども難波の浦にあきぞ暮れぬる

暮の秋思ふこと侍りける頃

かくしつつ暮れぬる秋と老ぬればしかすがになほ物ぞ悲しき

五十首の歌よませ侍りけるに　守覺法親王

身にかへていざさは秋を惜み見むさらでももろきつゆの命を

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に　前參議親隆

鶉なくかた野にたてる櫨紅葉ちらぬばかりにあきかぜぞ吹く

百首の歌奉りし時　二條院讃岐

ちりかかる紅葉の色はふかけれど渡ればにごるやまがはの水

題しらず　柿本人麿

飛鳥川もみぢ葉ながるかつらぎのやまの秋風吹きぞしぬらし

権中納言長方

あすかがは瀬々に波よるくれなゐや葛城やまの木がらしの風

長月の頃水無瀬に日頃侍りけるに嵐の山のもみぢ泪にたぐふよし申し遣して侍りける人のかへりごとに　権中納言公經

もみぢ葉をさこそ嵐のはらふらめこの山もとも雨と降るなり

る　　　　　　　　　　　　　　　　　源俊頼朝臣

故郷はちるもみぢ葉にうづもれてのきのしのぶに秋風ぞふく

百首の歌奉りし秋の歌　　　　　　式子内親王

きりの葉もふみわけ難くなりにけり必ず人を待つとなけれど

題しらず　　　　　　　　　　　　曾禰好忠

人はこず風に木の葉は散りはてて夜な夜な蟲は聲よわるなり

守覺法親王五十首の歌よみ侍りけるに　春宮權大夫公繼

もみぢ葉のいろにまかせて常磐木も風にうつろふ秋の山かな

千五百番歌合に　　　　　　　　　藤原家隆朝臣

露しぐれもる山かげのした紅葉ぬるとも折らむ秋のかたみに

題しらず　　　　　　　　　　　　西行法師

松にはふまさ木のかづら散りにけり外山の秋は風すさぶらむ

大井川にまかりて紅葉見侍りけるに　藤原輔尹朝臣

思ふことなくてぞ見ましもみぢ葉を嵐の山のふもとならずば

題しらず　曾禰好忠

入日さす佐保のやまべの柞原(ははそはら)くもらぬあめと木の葉ふりつつ

百首の歌奉りし時　宮内卿

たつたがは嵐や峯によわるらむわたらぬ水もにしき絶えけり

左大將に侍りける時家に百首の歌合し侍りけるに柞をよみ侍りける　攝政太政大臣

ははそ原しづくも色やかはるらむ杜のしたぐさ秋ふけにけり

藤原定家朝臣

時わかぬ波さへいろにいづみ川ははその杜にあらし吹くらし

障子の繪にあれたる宿に紅葉散りたる所をよめ

86 87 88 89 90 91

鵲のくものかけはし秋くれて夜半にはしもや冴えわたるらむ　中務卿具平親王

櫻のもみぢ始めたるを見て

いつのまに紅葉しぬらむ山ざくらきのふか花の散るを惜みし　高倉院御歌

紅葉透霧といふことを

薄霧の立ちまふやまの紅葉はさやかならねどそれと見えけり　八條院高倉

秋の歌とてよめる

525

神なびの三室のこずゑいかならむなべての山も時雨するころ　太上天皇

最勝四天王院の障子に鈴鹿川かきたる所

すずか河ふかき木の葉に日かずへて山田の原の時雨をぞきく

入道前關白太政大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに紅葉を　皇太后宮大夫俊成

こころとや紅葉はすらむ立田やま松は時雨にぬれぬものかは

秋の歌とて　　太上天皇

秋ふけぬ鳴けやしも夜のきりぎりすややかげさむし蓬生の月

百首歌奉りし時　　攝政太政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜の狹筵(さむしろ)にころもかたしき獨かもねむ

千五百番歌合に　　春宮權大夫公繼

ねざめする長月の夜のとこさむみ今朝ふく風に霜やおくらむ

和歌所にて六首の歌つかうまつりし時秋の歌　　前大僧正慈圓

秋ふかき淡路の島のありあけにかたぶく月をおくるうらかぜ

暮秋の心を

ながつきもいく有明になりぬらむ淺茅の月のいとどさびゆく

攝政太政大臣に侍りける時百首の歌よませ
侍りけるに　　寂蓮法師

74 510 秋風にしをるる野邊の花よりも蟲の音いたくかれにけるかな

題しらず　大江嘉言

75 ねざめするそでさへさむく秋の夜の嵐ふくなりまつ蟲のこゑ

千五百番歌合に　前大僧正慈圓

76 秋をへてあはれもつゆもふかくさの里とふものは鶉なりけり

左衞門督通光

77 入日さすふもとの尾花うちなびき誰あき風にうづら鳴くらむ

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

78 あだにちる露のまくらにふしわびて鶉なくなりとこの山かぜ

千五百番歌合に

79 515 とふ人もあらし吹きそふ秋は來て木の葉に埋む宿のみちしば

80 色かはる露をば袖に置きまよひうらがれてゆく野邊の秋かな

78　72　71　70　69

505

皇太后宮大夫俊成女

吹きまよふ雲ゐをわたる初雁のつばさにならすよものあき風

詩に合せし歌の中に山路秋行といへることを　藤原家隆朝臣

秋風の袖に吹きまくみねの雲をつばさにかけて雁もなくなり

五十首の歌奉りし時菊籬月といへる心を　宮内卿

霜をまつまがきの菊の宵の間に置きまがふいろは山の端の月

鳥羽院の御時内裏より菊を召しけるに奉るとて

結びつけ侍りける　花園左大臣室

ここのへにうつろひぬとも菊の花もとのまがきを思ひ忘るな

権中納言定頼

今よりはまた咲く花もなきものをいたくな置きそ菊の上の露

中務卿具平親王

枯れ行く野邊のきりぎりすを

62 63 64 65 66 67 68

秋風に山とび越ゆるかりがねのいや遠ざかりくもがくれつつ

凡河内躬恒

初雁の羽かぜ涼しくなるなべにたれか旅寝のころもかへさぬ

讀人しらず

500

かりがねは風にきほひて過ぐれども我が待つ人の言傳もなし

西行法師

横雲のかぜにわかるるしののめに山飛びこゆるはつ雁のこゑ

しらくもを翼にかけてゆくかりの門田のおもの友したふなる

五十首の歌奉りし時月前聞雁といふことを

前大僧正慈圓

大江山かたぶく月のかげさえて鳥羽田のおもに落つる雁がね

題しらず

朝(イ俊)惠法師

むらくもや雁の羽風にはれぬらむ聲きく空にすめるつきかげ

61 60 59 58 57 56

秋の歌とて　太上天皇

淋しさはみ山のあきのあさぐもり霧にしをるる槇のしたつゆ

河霧といふことを　左衛門督通光

あけぼのや河瀬のなみのたかせ舟くだすか人の袖のあきぎり

堀河院の御時百首の歌奉りけるに霧をよめる　權大納言公實

ふもとをば宇治の川霧たちこめて雲居に見ゆる朝日やまかな

題しらず　曾禰好忠

495
山里に霧のまがきのへだてずばをちかた人のそでも見てまし

清原深養父

なく雁の音をのみぞきく小倉やま霧たちはるる時しなければ

人麿

かきほなる荻の葉そよぎ秋風の吹くなるなべに雁ぞなくなる

秋はつるさ夜ふけがたの月見れば袖ものこらず露ぞおきける

百首の歌奉りし時　藤原定家朝臣

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に露おきまがふとこの月かげ

攝政太政大臣大將に侍りけるとき月の歌五十首

よませ侍りけるに　寂蓮法師

人目見し野邊のけしきはうらがれて露のよすがに宿る月かな

月の歌とてよみ侍りける　大納言經信

あきの夜は衣さむしろ重ねても月のひかりにしくものぞなき

九月朔日がたに　花山院御歌

秋の夜ははや長月になりにけりことわりなりや寢覺せらるる

五十首の歌奉りし時　寂蓮法師

むらさめの露もまだひぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋のゆふぐれ

45 46 47 48 49

擣衣をよみ侍りける　大納言經信

ふる鄕にころもうつとは行く雁や旅の空にもなきて告ぐらむ

中納言兼輔の家の屏風の歌　貫之

雁なきてふく風さむみから衣きみ待ちがてに打たぬ夜ぞなき

擣衣の心を　藤原雅經

みよし野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒くころもうつなり

式子内親王

千度うつきぬたの音に夢さめてものおもふ袖の露ぞくだくる

百首の歌奉りし時

485
更けにけり山の端ちかく月さえてとをちの里にころもうつ聲

九月十三夜月くまなく侍りけるを眺めあかして

よみける　道信朝臣

475
秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさごろも　前大僧正慈圓

衣打つ音はまくらにすがはらやふしみの夢をいくよのこしつ
千五百番歌合に秋の歌　權中納言公經

ころもうつみ山のいほのしばしばも知らぬ夢路にむすぶ手枕
和歌所の歌合に月のもとに衣をうつといふことを　攝政太政大臣

里は荒れて月やあらぬとうらみてもたれ淺茅生に衣うつらむ　宮內卿

まどろまでながめよとてのすさびかな麻のさ衣月にうつこゑ
千五百番歌合に　藤原定家朝臣

480
秋とだにわすれむとおもふ月影をさもあやにくに打つ衣かな

百首の歌奉りし時　寂蓮法師

もの思ふそでより露やならひけむ秋風ふけばたへぬものとは

秋の歌の中に　太上天皇

露は袖に物思ふ頃はさぞなおくかならず秋のならひならねど

野原より露のゆかりをたづね來て我がころもでに秋風ぞ吹く

題しらず　西行法師

きりぎりす夜寒に秋のなるままによわるか聲の遠ざかり行く

守覺法親王の家の五十首の歌の中に　藤原家隆朝臣

蟲の音もながき夜あかぬ故郷になほおもひ添ふ秋かぜぞふく

百首の歌の中に　式子內親王

あともなき庭の淺茅にむすぼほれ露のそこなる松むしのこゑ

題しらず　藤原輔尹朝臣

人麿

あきされば おく白露に わが宿の 淺茅がうは葉 いろづきにけり

天暦御歌

おほつかな野にも山にも白露のなにごとをかは思ひおくらむ

後冷泉院みこの宮と申しける時尋野花といへる心を

堀河右大臣

露しげみ野邊をわけつつから衣ぬれてぞかへる花のしづくに

閑庭露滋といふことを

藤原基俊

庭の面にしげる蓬にことよせてこころのままに置ける露かな

白河院にて野草露滋といへる心ををのこどもつかうまつりけるに

贈左大臣長實

秋の野の草葉おしなみ置く露にぬれてや人のたづね行くらむ

21 457 今よりは秋風さむくなりぬべしいかでかひとり長き夜をねむ　人麿

22 458 秋されば雁のはかぜ（つばさイ）に霜ふりてさむき夜な夜な時雨さへ降る

23 459 さを鹿のつまとふ山の岡べなるわさ田はからじ霜はおくとも　貫之

24 460 かりてほす山田の稲は袖ひぢてうゑし早苗と見えずもある哉　贈太政大臣

25 草葉にはたまと見えつつわび人の袖のなみだの秋のしらつゆ　中納言家持

26 わがやどの尾花がすゑの白露のおきし日よりぞあき風も吹く　恵慶法師

27 秋といへばちぎり置きてや結ぶらむ淺茅が原の今朝のしら露

祐子内親王の家の歌合の後鹿の歌よみはべりけるに　　權大納言長家

452 過ぎて行く秋の形見にさを鹿の己が鳴く音も惜しくやあるらむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　　前大僧正慈圓

453 わきてなど庵もるそでのしをるらむ稲葉にかぎる秋の風かは

題しらず　　讀人しらず

454 あき田もるかり庵つくり我がをれば衣手さむし露ぞおきける　　前中納言匡房

455 秋くれば朝けの風の手をさむみ山田の引板をまかせてぞ聞く　　善滋爲政朝臣

456 ほととぎすなく五月雨にうゑし田を雁がね寒み秋ぞくれぬる　　中納言家持

446 夜もすがらつまこふ鹿のなくなべに小萩が原の露ぞこぼるる

題しらず　源道濟

447 寢覺して久しくなりぬ秋の夜は明けやしぬらむ鹿ぞ鳴くなる

西行法師

448 小山田の庵ちかく鳴くしかの音におどろかされて驚かすかな

白河院鳥羽におはしましけるに田家秋興といへることを人々よみ侍りけるに

中宮大夫師忠

449 やまざとの稻葉のかぜに寢覺して夜ぶかく鹿の聲をきくかな

郁芳門院の前栽合（せんざいあはせ）によみ侍りける

藤原顯綱朝臣

450 獨寢やいとどさびしきさを鹿のあさふす小野のくずのうら風

題しらず

俊惠法師

451 立田山こずゑまばらになるままに深くも鹿のそよぐなるかな

440
あらし吹く眞葛が原になく鹿はうらみてのみや妻をこふらむ

前中納言匡房

441
妻戀ふるしかのたちどをたづぬれば狹山がすそに秋風ぞふく

百首の歌奉りし時秋の歌

惟明親王

442
み山邊の松のこずゑをわたるなりあらしにやどすさを鹿の聲

晩聞鹿といふ事をよみ侍りし

土御門内大臣

443
我ならぬ人もあはれやまさるらむ鹿なく山のあきのゆふぐれ

百首の歌よみ侍りけるに

攝政太政大臣

444
たぐへくる松の嵐やたゆむらむをのへにかへるさをしかの聲

千五百番歌合に

前大僧正慈圓

445
なく鹿の聲に目ざめてしのぶかな見はてぬ夢の秋のおもひを

家に歌合し侍りけるに鹿をよめる

權中納言俊忠

新古今和歌集　卷第五

秋歌下

和歌所にてをのこども歌よみ侍りしに夕鹿といふことを

藤原家隆朝臣

437 したもみぢかつちる山のゆふ時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ

百首の歌奉りし時

入道左大臣

438 山おろしに鹿の音高くきこゆなり尾上の月にさ夜や更けぬる

寂蓮法師

439 野分せし小野の草ぶしあれはててみ山にふかきさをしかの聲

題しらず

俊惠法師

151
435 大方のあきのねざめのつゆけくばまた誰が袖にあり明のつき

152
五十首の歌奉りし時　藤原雅經

436 はらひかねさこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに

145 429 あくがれてねぬ夜の塵のつもるまで月に拂はぬ床のさむしろ
大中臣定雅

崇德院の御時百首の歌めしけるに
146 430 秋の田のかりねの床のいなむしろ月やどれともしける露かな
左京大夫顯輔

147 431 あきの田に庵さす賤の苫をあらみ月とともにやもり明すらむ
百首の歌奉りし時秋の歌に
式子内親王

148 432 秋の色はまがきにうとくなり行けど手枕なるる閨のつきかげ
秋の歌の中に
太上天皇

149 433 あきの露や袂にいたくむすぶらむ長き夜あかずやどる月かな
千五百番歌合に
左衞門督通光

150 434 さらにまた暮をたのめと明けにけり月はつれなき秋の夜の空
經房卿の家の歌合に曉月の心をよめる
二條院讃岐

140 424 題しらず　右衛門督通具
秋の夜はやどかる月も露ながらそでに吹きこす荻のうはかぜ

141 425 源家長
あきの月しのにやどかるかげたけて小笹が原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月といふことを　前太政大臣
142 426 風わたる山田のいほをもる月や穂浪にむすぶこほりなるらむ

和歌所の歌合に田家月を　前大僧正慈圓
143 427 雁の來るふしみの小田に夢さめて寢ぬ夜の庵に月を見るかな

皇太后宮大夫俊成女
144 428 稲葉ふく風にまかせてすむ庵は月ぞまことにもりあかしける

題しらず

五十首の歌奉りし時　攝政太政大臣

418 雲はみなはらひはてたる秋かぜを松にのこして月を見るかな

家に月五十首の歌よませ侍りける時

419 月だにもなぐさめがたき秋の夜のこころも知らぬ松の風かな　藤原定家朝臣

420 さむしろや待つ夜のあきの風更けて月をかたしく宇治の橋姫

題しらず　右大將忠經

421 秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つにふけぬるあり明の月

五十首の歌奉りけるに野徑月　攝政太政大臣

422 ゆくすゑは空もひとつの武藏野に草の原より出づるつきかげ

雨後月　宮内卿

423 月をなほ待つらむものかむら雨の晴れゆく雲の末のさとびと

411 月影のすみわたるかな天の原くも吹きはらふ夜半のあらしに

題しらず　　　　　　　　　　　　左衛門督通光

412 たつた山夜はにあらしの松ふけば雲にはうとき峯のつきかげ

崇德院に百首の歌奉りけるに　　　左京大夫顯輔

413 秋風にたなびく雲のたえ間よりもれ出づる月の影のさやけさ

題しらず　　　　　　　　　　　　道因法師

414 山の端に雲のよこぎる宵の間は出でても月ぞなほ待たれける

　　　　　　　　　　　　　　　　殷富門院大輔

415 ながめつつ思ふにぬるるたもとかな幾世かは見む秋の夜の月

　　　　　　　　　　　　　　　　式子内親王

416 宵の間にさてもねぬべき月ならば山の端ちかきものは思はじ

417 ふくるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月

405 いづくにか今宵の月のくもるべき小倉の山も名をやかふらむ

源　道濟

406 心こそあくがれにけれ秋の夜のよぶかき月をひとり見しより

上東門院小少將

407 かはらじな知るもしらぬも秋の夜の月まつほどの心ばかりは

和泉式部

408 頼めたる人はなけれど秋の夜は月見て寢べきここちこそせね

月を見て遣しける　藤原範永朝臣

409 みる人の袖をぞしぼるあきの夜は月にいかなる影かそふらむ

かへし　相模

410 身に添へるかげとこそ見れ秋の月袖にうつらぬ折しなければ

永承四年内裏の歌合に　大納言經信

115 399 心ある雄島のあまのたもとかな月やどれとはぬれぬものから

宜秋門院丹後

116 400 わすれじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむつきは見るとも

鴨長明

117 401 松島やしほくむあまの秋の袖月はものおもふならひのみかは

題しらず

七條院大納言

118 402 こと問はむ野島が崎のあまごろも浪と月とにいかがしをるる

和歌所の歌合に海邊月を

藤原家隆朝臣

119 403 秋の夜の月やをしまのあまの原あけがたちかき沖のつりぶね

題しらず

前大僧正慈圓

120 404 うき身にはながむるかひもなかりけり心に曇るあきの夜の月

大江千里

394 ときしもあれふる里人は音もせでみやまの月に秋かぜぞ吹く

八月十五夜和歌所の歌合に深山月といふことを

395 深からぬ外山のいほの寢覺だにさぞな木の間の月はさびしき　寂蓮法師

月前松風

396 月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくしてあきかぜぞふく　鴨長明

397 ながむればちぢにもの思ふ月にまた我が身ひとつの嶺の松風　藤原秀能

山月といふことをよみ侍りける

398 あしびきの山路の苔の露のうへにねざめ夜深き月を見るかな　宮内卿

八月十五夜和歌所の歌合に海邊秋月といふことを

和歌所の歌合に湖邊月といふことを　藤原家隆朝臣

鳰の海や月のひかりのうつろへばなみの花にも秋は見えけり

百首の歌奉りし時秋の歌の中に　前大僧正慈圓

ふけ行かばけぶりもあらじ鹽竈のうらみなはてそ秋の夜の月

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

ことわりの秋にはあへぬなみだかな月の桂もかはるひかりに

藤原家隆朝臣

眺めつつ思ふもさびしひさかたの月のみやこのあけがたの空

五十首の歌奉りしとき月前草花　攝政太政大臣

故鄕のもとあらの小萩さきしより夜な夜な庭の月ぞうつらふ

建仁元年三月歌合に山家秋月といふことをよみ侍りし

99
383 しきしまやたかまど山の雲間よりひかりさしそふ弓張のつき

題しらず　堀河右大臣

100
384 人よりも心のかぎりながめつる月はたれともわかじものゆゑ

橘爲仲朝臣

101
385 あやなくも曇らぬ宵をいとふかなしのぶの里のあきの夜の月

法性寺入道前關白太政大臣

102
386 風吹けばたまちる萩のした露にはかなくやどる野邊の月かな

從三位頼政

103
387 こよひたれ篶(すゞ)吹く風を身にしめて吉野のたけの月を見るらむ

法性寺入道前關白太政大臣の家に月の歌あまたよみ侍りけるに

太宰大貳重家

104
388 月見ればこひぞあへぬ山高みいづれのとしの雪にかあるらむ

93 377 かぜわたる淺茅がすゑの露にだにやどりもはてぬよひの稻妻

左衞門督通光

水無瀨にて十首の歌奉りし時

94 378 武藏野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ

前大僧正慈圓

百首の歌奉りし時月の歌に

95 379 いつまでか涙くもらで月は見し秋待ちえてもあきぞこひしき

式子内親王

96 380 ながめわびぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらむ

圓融院御歌

題しらず

97 381 月影のはつ秋風とふき行けばこころづくしに物をこそおもへ

三條院御歌

98 382 あしびきの山のあなたに住む人はまたでや秋の月を見るらむ

堀河院御歌

雲間微月といふことを

371 あき風のよもに吹き來る音羽山なにの草木かのどけかるべき

相模

372 あかつきの露もなみだもとどまらで恨むる風の聲ぞのこれる

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に野風を　藤原基俊

373 高圓（たかまど）の野路のしの原末さわぎそそやこがらし今日吹きぬなり

千五百番歌合に　右衞門督通具

374 ふか草の里の月影さびしさもすみこしままの野邊のあきかぜ

五十首の歌奉りし時杜間月といふことを　皇太后宮大夫俊成女

375 大荒木のもりの木の間をもりかねて人だのめなる秋の夜の月

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　藤原家隆朝臣

376 ありあけの月まつ宿の袖のうへに人だのめなる宵のいなづま

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　藤原有家朝臣

365 思ふことさしてそれとはなきものを秋のゆふべを心にぞとふ

鴨長明

366 秋風のいたり至らぬ袖はあらじただわれからの露のゆふぐれ

西行法師

367 覺束な秋はいかなるゆゑのあればすずろに物の悲しかるらむ

式子内親王

368 それながら昔にもあらぬ秋かぜにいとどながめをしづの苧環(をだまき)

題しらず

藤原長能

369 蜩のなくゆふぐれぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども

和泉式部

370 秋來ればときはの山の松風もうつるばかりに身にぞしみける

曾禰好忠

をのこども詩を作りて歌に合せ侍りしに山路秋
行といふことを　前大僧正慈圓

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲のゆふぐれのそら

題しらず　寂蓮法師

淋しさはその色としもなかりけり槇たつ山のあきのゆふぐれ

西行法師

こころなき身にもあはれはしられけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

西行法師すすめて百首の歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやのあきのゆふ暮

五十首の歌奉りし時　藤原雅經

たへてやは思ひありともいかがせむ葎のやどの秋のゆふぐれ

秋の歌とてよみ侍りける　宮内卿

69 353 みのほどをおもひつづくる夕暮の荻のうは葉に風わたるなり

秋の歌よみ侍りけるに　源重之女

70 354 秋はただ物をこそおもへ露かかる荻のうへ吹く風につけても

堀河院に百首の歌奉りける時　藤原基俊

71 355 あき風のややはだ寒くふくなべに荻のうは葉の音ぞかなしき

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

72 356 荻の葉にふけば嵐のあきなるを待ちける夜半のさをしかの聲

73 357 おしなべて思ひしことのかずかずになほ色まさる秋の夕ぐれ

題しらず

74 358 暮れかかるむなしき空の秋を見ておぼえずたまる袖の露かな

家に百首の歌合し侍りけるに

75 359 物思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋のゆふぐれ

63 347 小倉やまふもとの野邊の花すすきほのかに見ゆるあきの夕暮　女御徽子女王

百首の歌に

64 348 ほのかにもかぜは吹かなむ花薄むすぼほれつつ露にぬるとも　式子内親王

65 349 花薄まだ露ふかし穗に出でてながめじとおもふ秋のさかりを

攝政太政大臣の家に百首の歌よませ侍りけるに　八條院六條

66 350 野邊ごとにおとづれわたるあき風をあだにもなびく花薄かな

和歌所の歌合に朝草花といふことを　左衞門督通光

67 351 あけぬとて野邊より山にいる鹿のあと吹きおくるはぎの下風

題しらず　前大僧正慈圓

68 352 身にとまるおもひを荻の上葉にてこのごろ悲しゆふぐれの空

崇德院の御時百首の歌めしけるに荻を　大藏卿行宗

57 341 いとかくや袖はしをれし野邊に出でて昔も秋の花は見しかど

筑紫に侍りける時秋野を見てよみ侍りける　大納言經信

58 342 花見にと人やりならぬ野邊に來て心のかぎりつくしつるかな

題しらず　曾禰好忠

59 343 おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなる朝顔の花

貫之

60 344 山賤(やまがつ)のかきほにさける朝顔はしののめならで逢ふよしもなし

坂上是則

61 345 うらがるる淺茅がはらの苅萱(かるかや)のみだれて物をおもふころかな

人麿

62 346 さをしかのいる野のすすきはつ尾花いつしか妹(いも)が手枕にせむ

讀人しらず

小野小町

336 誰をかもまつちの山のをみなへし秋とちぎれる人ぞあるらし

藤原元眞

337 をみなへし野邊のふるさと思ひ出でて宿りし蟲の聲や戀しき

千五百番歌合に　左近中將良平

338 夕さればたまちる野邊の女郎花まくらさだめぬ秋かぜぞふく

蘭をよめる　公猷法師

339 ふぢばかまぬしは誰ともしら露のこぼれて匂ふ野邊の秋かぜ

崇德院に百首の歌奉りし時　藤原清輔朝臣

340 薄霧のまがきの花の朝しめり秋はゆふべとたれかいひけむ

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

權僧正永縁

330 秋萩ををらではすぎじつきぐさの花ずりごろも露にぬるとも

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　顯昭法師

331 萩がはな眞袖にかけて高圓(たかまど)のをのへのみやに領巾(ひれ)ふるやたれ

題しらず　祐子内親王家紀伊

332 おくつゆのしづごころなく秋風にみだれてさける眞野の萩原

人麿

333 秋萩のさきちる野邊の夕露にぬれつつ來ませ夜はふけぬとも

中納言家持

334 さを鹿のあさ立つ小野(野邊イ)のあき萩にたまと見るまでおける白露

凡河内躬恒

335 秋の野をわけゆく露にうつりつつ我が衣手ははなの香ぞする

待賢門院堀河

324 七夕のあふ瀬たえせぬ天の河いかなるあきかわたりそめけむ

女御徽子女王

325 わくらばに天の川浪よるながら明くる空にはまかせずもがな

大中臣能宣朝臣

326 いとどしく思ひけぬべし棚機のわかれのそでに置けるしら露

中納言兼輔の家の屏風に　紀貫之

327 棚機はいまやわかるるあまのがは河霧たちてちどり鳴くなり

堀河院の御時百首の歌の中に萩をよみ侍りける　前中納言匡房

328 河水にしかのしがらみかけてけり浮きてながれぬ秋萩のはな

題しらず　従三位頼政

329 かりごろも我とはすらじ露しげき野原の萩のはなにまかせて

34 35 36 37 38 39

七夕の歌とてよみ侍りける　　太宰大貳高遠

318 棚機のあまの羽ごろもうちかさね寢るよすずしき秋風ぞふく

小辨

319 たなばたの衣のつまはこころして吹きなかへしそ秋のはつ風

皇太后宮大夫俊成

320 たなばたのとわたる舟のかぢの葉にいく秋かきつ露の玉づさ

百首の歌の中に　　式子内親王

321 ながむれば衣手すずしひさかたのあまの河原の秋のゆふぐれ

家に百首の歌よみ侍りける時　　入道前關白太政大臣

322 いかばかり身にしみぬらむ棚機のつま待つよひの天の川かぜ

七夕のこころを　　權中納言公經

323 星合のゆふべすずしきあまの河もみぢの橋をわたるあきかぜ

312 吹きむすぶ風はむかしの秋ながらありしにも似ぬ袖の露かな

延喜の御時月次の屛風に　紀貫之

313 大空をわれもながめてひこ星の妻まつ夜さへひとりかもねむ

題しらず　山邊赤人

314 このゆふべ降り來る雨はひこぼしのと渡る舟の櫂のしづくか

宇治前關白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍りける　權大納言長家

315 としを經てすむべき宿の池水は星合のかげもおもなれやせむ

花山院の御時七夕の歌つかうまつりけるに　藤原長能

316 そでひぢて我が手にむすぶ水の面に天つ星合の空をみるかな

七月七日たなばた祭する所にてよみける　祭主輔親

317 雲間より星合のそらを見わたせばしづごころなき天の川なみ

題を探りこれかれ歌よみたるに信太の杜の秋風

をよめる　藤原經衡

307 日をへつつ音こそまされいづみなるしのだの杜の千枝の秋風

百首の歌に　式子内親王

308 うたたねの朝けの袖にかはるなりならす扇のあきのはつかぜ

題しらず　相模

309 手もたゆくならすあふぎのおき所わするばかりに秋風ぞふく

大貳三位

310 秋風は吹きむすべどもしら露のみだれて置かぬ草の葉ぞなき

曾禰好忠

311 あさぼらけ荻の上葉の露見ればややはださむし秋のはつかぜ

小野小町

水澁つき植ゑし山田に引板はへてまた袖ぬらす秋は來にけり

中納言中將に侍りける時家に山家早秋といへる

心をよませ侍りけるに　法成寺入道前關白太政大臣

朝霧やたつたの山のさとならで秋來にけりとたれか知らまし

題しらず　中務卿具平親王

夕暮は荻吹くかぜのおとまさるいまはたいかに寢覺せられむ

後德大寺左大臣

ゆふされば荻の葉むけを吹く風にことぞともなく涙落ちけり

崇德院に百首の歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

をぎの葉も契ありてや秋風のおとづれそむるつまとなるらむ

題しらず　七條院權大夫

秋來ぬと松ふく風もしらせけりかならず荻のうは葉ならねど

源具親

295 敷妙のまくらのうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋のはつかぜ

顯昭法師

296 水莖の岡のくず葉もいろづきて今朝うらがなしあきのはつ風

越前

297 あきはただこころよりおく夕露を袖のほかとも思ひけるかな

五十首の歌奉りし時秋の歌

藤原雅經

298 昨日まではよそにしのびし下荻のすゑ葉の露にあきかぜぞ吹く

題しらず

西行法師

299 おしなべて物を思はぬ人にさへこころをつくる秋のはつかぜ

300 あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野のはら

崇德院に百首の歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成

百首の歌よみける中に　藤原家隆朝臣

289 きのふだにとはむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり

最勝四天王院の障子に高砂かきたる所　藤原秀能

290 吹く風の色こそ見えねたかさごのをのへの松に秋は來にけり

百首の歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

291 ふしみ山松のかげより見わたせば明くる田の面に秋風ぞふく

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　藤原家隆朝臣

292 明けぬるか衣手さむしすがはらや伏見のさとの秋のはつかぜ

千五百番歌合に　攝政太政大臣

293 深草の露のよすがをちぎりにてさとをばかれず秋は來にけり

右衞門督通具

294 おはれ又いかにしのばむ袖の露のはらの風にあきは來にけり

新古今和歌集　卷第四

秋歌上

題しらず　　　　中納言家持

285 神なびの三室のやまの葛かづらうら吹きかへす秋は來にけり

百首の歌に初秋の心を　　　　崇徳院御歌

286 いつしかと荻の葉むけの片よりにそそや秋とぞ風もきこゆる

藤原季通朝臣

287 此の寝ぬる夜の間に秋は來にけらし朝けの風の昨日にも似ぬ

文治六年女御入内の屏風に　　　　後徳大寺左大臣

288 いつも聞く麓の里とおもへども昨日にかはる山おろしのかぜ

284. みそぎする河の瀬見ればから衣ひもゆふぐれに波ぞ立ちける

278 くもまよふ夕に秋をこめながら風もほに出でぬ荻のうへかな

太神宮に奉りし夏の歌の中に　太上天皇

279 やまざとのみねのあま雲とだえしてゆふべ涼しきまきの下露

文治六年女御入内の屏風に　入道前關白太政大臣

280 岩井くむあたりの小笹玉こえてかつがつむすぶ秋のゆふつゆ

千五百番歌合に　宮内卿

281 かたえさす麻生(をふ)の浦梨(うらなし)初秋になりもならずもかぜぞ身にしむ

百首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

282 なつ衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更けぬらむゆきあひの空

延喜の御時月次の屏風に　壬生忠岑

283 夏はつるあふぎと秋の白露といづれかまづ(さきにイ)は置かむとすらむ

貫之

五十の首歌奉りし時　攝政太政大臣

螢とぶ野澤にしげるあしの根のよなよなしたにかよふあき風

刑部卿賴輔歌合しはべりけるに納涼をよみ侍りける　俊惠法師

楸（ひさぎ）おふるかた山かげにしのびつつ吹きけるものを秋のはつ風

瞿麥露滋といふことを　高倉院御歌

しら露の玉もて結へるませのうちにひかりさへそふ床夏の花

夕顏をよめる　前太政大臣

白露のなさけ置きけることの葉やほのぼの見えし夕顏のはな

百首の歌よみ侍りける中に　式子内親王

黄昏（たそがれ）の軒端の荻にともすればほにいでぬ秋ぞしたにことふ

夏の歌とてよみ侍りける　前大僧正慈圓

93 94 95 96 97 98

夏月をよめる　　従三位頼政

267 庭のおもはまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

百首の歌の中に　　式子内親王

268 ゆふだちの雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの聲

千五百番歌合に　　前大納言忠良

269 夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの聲

百首の歌奉りし時　　攝政太政大臣

270 秋ちかきけしきのもりに鳴く蟬のなみだの露や下葉そむらむ

二條院讃岐

271 なく蟬のこゑもすずしき夕ぐれに秋をかけたるもりのした露

螢の飛びのぼるを見てよみ侍りける　　壬生忠見

272 いづちとかよるは螢の上るらむ行きがたしらぬ草のまくらに

攝政太政大臣の家にて詩歌を合せけるに水邊自

秋涼といふことをよみ侍りける　有家朝臣

261 涼しさは秋やかへりてはつせ河ふるかはの邊の杉のしたかげ

題しらず　西行法師

262 道の邊に淸水ながるる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ

263 よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇るゆふだちの空

崇德院に百首の歌奉りける時　藤原淸輔朝臣

264 おのづから涼しくもあるか夏衣日もゆふぐれの雨のなごりに

千五百番歌合に　權中納言公經

265 露すがる庭の玉ざさうちなびきひとむら過ぎぬゆふだちの雲

雲隔遠望といへる心をよみ侍りける　源俊賴朝臣

266 十市には夕だちすらしひさかたのあまのかぐ山雲がくれ行く

いさり火のむかしの光ほの見えて葦屋の里に飛ぶほたるかな

式子内親王

窓ちかき竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたたねの夢

鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つかうまつりしに

春宮權大夫公繼

まど近きいささむら竹かぜ吹けば秋におどろく夏の夜のゆめ

五十首の歌奉りしとき

前大僧正慈圓

むすぶ手にかげみだれ行く山の井のあかでも月の傾きにけり

最勝四天王院の障子に淸見關かきたる所

權大納言通光

淸見潟つきはつれなき天の戸をまたでもしらむ浪のうへかな

家の百首の歌合に

攝政太政大臣

かさねても涼しかりけり夏衣うすきたもとにやどるつきかげ

惠慶法師

250 わが宿のそともに立てる楢の葉の茂みにすずむ夏は來にけり

攝政太政大臣の家の百首の歌合に鵜河をよみ侍りける

前大僧正慈圓

251 鵜かひ舟あはれとぞ見るもののふのやそうぢ川の夕闇のそら

寂蓮法師

252 うかひぶね高瀬さしこすほどなれやむすぼほれゆく篝火の影

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

253 大井川かがりさし行くうかひ舟いく瀬に夏の夜をあかすらむ

藤原定家朝臣

254 久方の中なる河の鵜かひぶねいかにちぎりてやみを待つらむ

百首の歌奉りし時

攝政太政大臣

郭公はなたちばなの香をとめて鳴くはむかしの人やこひしき
皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたたねは夢もむかしのそでの香ぞする
藤原家隆朝臣

ことしよりはな咲き初むる橘のいかでむかしの香に匂ふらむ
守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時
藤原定家朝臣

夕暮はいづれの雲のなごりとて花たちばなにかぜの吹くらむ
堀河院の御時后の宮にて閏五月郭公といふ心を
をのこどもつかうまつりけるに
權中納言國信

郭公さつきみなづきわきかねてやすらふこゑぞ空にきこゆる
題しらず
白河院御歌

庭のおもは月もらぬまでなりにけり梢に夏のかげしげりつつ

題しらず　皇太后宮大夫俊成

238 たれかまた花橘におもひ出でむわれもむかしの人となりなば

右衛門督通具

239 行くすゑを誰しのべとて夕風にちぎりか置かむ宿のたちばな

百首の歌奉りし時夏の歌　式子内親王

240 かへり來ぬ昔をいまとおもひねの夢のまくらに匂ふたちばな

前大納言忠良

241 橘のはな散るのきのしのぶ草むかしをかけてつゆぞこぼるる

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

242 さつきやみみじかき夜半のうたたねに花橘のそでにすずしき

題しらず　讀人しらず

243 たづぬべき人はのきばの故郷にそれかとかをる庭のたちばな

五月雨の心を　　藤原定家朝臣

232 玉鉾のみち行く人のことづても絶えてほどふる五月雨のそら

荒木田氏良

233 さみだれの雲のたえまをながめつつ窓より西に月を待つかな

百首の歌奉りし時　　前大納言忠良

234 あふちさく外面（そとも）の木かげ露おちて五月雨はるる風わたるなり

五十首の歌奉りし時　　藤原定家朝臣

235 さみだれの月はつれなきみやまよりひとりも出づる郭公かな

太神宮に奉りし夏の歌の中に　　太上天皇

236 郭公くもゐのよそに過ぎぬなり晴れぬおもひのさみだれの頃

建仁元年三月歌合に雨後郭公といへる心を　　二條院讃岐

237 さみだれのくもまの月のはれゆくをしばし待ちける郭公かな

釋阿に九十の賀給はせ侍りし時屏風に五月雨　攝政太政大臣

226 小山田にひくしめ繩のうちはへて朽ちやしぬらむ五月雨の頃

題しらず　伊勢大輔

227 いかばかり田子の裳裾もそほつらむ雲間も見えぬ頃の五月雨

大納言經信

228 みしまえの入江の眞菰雨ふればいとどしをれて苅る人もなし

前中納言匡房

229 眞菰かる淀のさは水ふかけれどそこまで月のかげはすみけり

雨中木繁といふ心を　藤原基俊

230 玉がしはしげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

百首の歌よませ侍りけるに　入道前關白太政大臣

231 さみだれはをふの河原の眞菰ぐさからでや浪の下に朽ちなむ

述懐によせて百首の歌よみ侍りける時　　皇太后宮大夫俊成

221 今日はまた菖蒲の根さへかけ添へてみだれぞまさる袖の白玉

五月五日藥玉つかはし侍りける人に　　大納言經信

222 あかなくにちりにし花のいろいろはのこりにけりな君が袂に

局ならびに住み侍りける頃五月六日もろともにながめあかしてあしたに長き根をつつみて紫式部に遣しける　　上東門院小少將

223 なべて世のうきに流るる菖蒲草けふ迄かかる根はいかが見る

かへし　　紫式部

224 何事とあやめはわかで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせね

山畦早苗といへる心を　　大納言經信

225 早苗とる山田のかけひもりにけり引くしめ縄に露ぞこぼるる

百首の歌奉りしに　式子内親王

41 215 聲はして雲路にむせぶほととぎす淚やそそぐよひのむらさめ

千五百番歌合に　權中納言公經

42 216 ほととぎす猶うとまれぬ心かななが鳴くさとのよその夕ぐれ

題しらず　西行法師

43 217 聞かずともここをせにせむ郭公やまだの原のすぎのむらだち

44 218 郭公ふかきみねより出でにけり外山のすそにこゑの落ち來る

山家曉郭公といへる心を　後德大寺左大臣

45 219 小笹ふくしづのまろやのかりの戶をあけがたになく郭公かな

五首の歌人々によませ侍りける時夏の歌とてよみ侍りける　攝政太政大臣

46 220 うちしめり菖蒲ぞかをるほととぎすなくや五月の雨の夕ぐれ

209 ありあけのつれなく見えし月は出でぬ山郭公まつ夜ながらに

後德大寺左大臣の家に十首の歌よみ侍りけるによみて遣しける

皇太后宮大夫俊成

210 我が心いかにせよとてほととぎす雲間の月のかげになくらむ

郭公の心をよみ侍りける

前太政大臣

211 郭公なきているさの山の端はつきゆゑよりもうらめしきかな

權中納言親宗

212 ありあけの月は待たぬに出でぬれどなほやまふかき郭公かな

杜間郭公といふことを

藤原保季朝臣

213 過ぎにけり信太（しのだ）のもりの郭公たえぬしづくをそでにのこして

題しらず

藤原家隆朝臣

214 いかにせむ來ぬ夜あまたの郭公またじとおもへば村雨のそら

29 30 31 32 33 34

203 きかでただ寝なましものを郭公なかなかなりや夜半のひと聲

紫式部

204 誰が里もとひもやくるとほととぎす心の限りまちぞわびまし

まつぞわびしきィ

寛治八年前太政大臣の高陽院の歌合に郭公を　周防内侍

205 夜をかさね待ちかね山の郭公くもゐのよそにひとこゑぞ聞く

海邊郭公といふことをよみ侍りける　按察使公通

206 ふた聲ときかずば出でじ郭公いくよあかしのとまりなりとも

百首の歌奉りし時夏の歌の中に　民部卿範光

207 郭公なほひとこゑは思ひ出でよおいその森の夜半のむかしを

郭公をよめる　八條院高倉

208 一聲はおもひぞあへぬほととぎすたそがれ時の雲のまよひに

千五百番歌合に　攝政太政大臣

197 ふた聲と鳴きつときかば郭公ころもかたしきうたたねはせむ

待客聞郭公といへる心を　白河院御歌

198 郭公まだうちとけぬしのびねは來ぬ人を待つわれのみぞ聞く

題しらず　花園左大臣

199 聞きてしもなほぞねられぬ郭公まちし夜頃のこころならひに

神たちにて郭公を聞きて　前中納言匡房

200 卯の花の垣ねならねどほととぎす月のかつらの蔭になくなり

入道前關白右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りける時ほととぎすの歌　皇太后宮大夫俊成

201 むかし思ふ草の庵のよるの雨になみだなそへそ山ほととぎす

題しらず　相模

202 雨そそぐはな橘にかぜすぎてやまほととぎすくもに鳴くなり

けるあけぼの片岡の木梢をかしくみえ侍りければ　紫式部

191 郭公こゑ待つほどはかた岡のもりのしづくに立ちやぬれまし

賀茂に籠りたりける曉郭公のなきければ　辨乳母

192 ほととぎす深山出づなる初聲をいづれの里のたれか聞くらむ

題しらず　讀人しらず

193 五月山卯の花月夜ほととぎす聞けどもあかずまた啼かむかも

194 おのが妻こひつつ鳴くや五月やみ神南備山のやまほととぎす　中納言家持

195 郭公ひとこゑ鳴きていぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる　大中臣能宣朝臣

196 郭公なきつつ出づるあし引のやまとなでしこ咲きにけらしも　大納言經信

崇德院に百首の歌奉りける時夏の歌　待賢門院安藝

185 櫻あさのをふの下草しげれたゞあかで別れしはなの名なれば

題しらず　曾禰好忠

186 花ちりし庭の木の間も茂りあひてあま照る月の影ぞまれなる

187 かりに來と恨みし人の絕えにしを草葉につけてしのぶ頃かな　藤原元眞

188 夏草はしげりにけりなたまぼこのみち行く人も結ぶばかりに　延喜御歌

189 なつぐさはしげりにけりと郭公などわが宿にひとこゑもせぬ　人麿

190 鳴く聲をえやはしのばぬほとゝぎす初卯の花の蔭にかくれて

賀茂に詣で侍りけるに人の郭公なかなむと申し

夏の初の歌とてよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成女

179 をりふしもうつればかへつ世の中の人のこころの花染のそで

卯花如月といへる心をよませ給ひける　白河院御歌

180 卯の花のむらむら咲ける垣根をば雲間の月のかげかとぞ見る

題しらず　太宰大貳重家

181 卯の花の咲きぬるときは白妙の波もて結へるかきねとぞ見る

齋院に侍りけるとき神館(かんたち)にて　式子内親王

182 忘れめやあふひを草にひき結びかりねの野邊の露のあけぼの

葵をよめる　小侍從

183 いかなればそのかみ山のあふひ草年は經れども二葉なるらむ

最勝四天王院の障子に淺香の沼かきたる所　藤原雅經

184 野邊はいまだ淺香の沼にかる草のかつみるままに茂る頃かな

新古今和歌集　巻第三

夏　歌

題しらず　　持統天皇御歌

175 春すぎて夏來にけらししろたへのころもほすてふ天のかぐ山

素性法師

176 をしめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

更衣をよみ侍りける　　前大僧正慈圓

177 ちりはてて花の蔭なき木の下にたつことやすき夏ごろもかな

春を送りて昨日の如しといふことを　　源道濟

178 夏衣きていくかになりぬらむのこれる花は今日も散りつつ

題しらず　　皇太后宮大夫俊成女

171 石（いそ）の上（かみ）ふるのわさ田をうちかへし恨みかねたる春のくれかな

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　讀人しらず

172 待てといふに止らぬ物と知りながらしひてぞ惜しき春の別は

山家暮春といへる心を　　宮内卿

173 柴の戸をさすや日かげのなごりなく春暮れかかる山の端の雲

百首の歌奉りし時　　攝政太政大臣

174 あすよりは志賀の花園まれにだに誰かはとはむ春のふるさと

清愼公の家の屛風に　　貫之

165 くれぬとは思ふものから藤の花さけるやどには春ぞひさしき

藤の松に懸れるをよめる

166 みどりなる松に懸れる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける

春のくれがた實方朝臣のもとに遣しける　　藤原道信朝臣

167 ちり殘る花もやあるとうちむれてみ山がくれを尋ねてしがな

修行し侍りける頃春の暮によみける　　大僧正行尊

168 木の下のすみかも今はあれぬべし春し暮れなば誰か訪ひこむ

五十首の歌奉りし時　　寂蓮法師

169 暮れて行くはるのみなとは知らねども霞におつる宇治の柴舟

山家の三月盡をよみ侍りける　　藤原伊綱

170 こぬまでも花ゆゑ人の待たれつる春もくれぬるみ山邊のさと

159 駒とめてなほ水かはむやまぶきの花のつゆそふ井手のたま川

堀河院の御時百首の歌奉りけるに　權中納言國信

160 岩根こすきよたき川のはやければ浪をりかくるきしの山ぶき

題しらず　原見王

161 かはづなくかみなび川に影見えていまか咲くらむ山吹のはな

延喜十三年亭子院の歌合の歌　藤原興風

162 足曳のやまぶきの花ちりにけり井手のかはづは今や鳴くらむ

飛香舍にて藤花の宴侍りけるに　延喜御歌

163 かくてこそ見まくほしけれ萬代をかけてしのべる藤なみの花

天曆四年三月十四日藤壺にわたらせ給ひて花惜ませ給ひけるに　天曆御製

164 圍居して見れどもあかぬ藤浪のたたまく惜しき今日にもある哉

かた枝に殘りて侍りければ　良暹法師

153 尋ねつる花も我が身もおとろへて後の春ともえこそちぎらね

千五百番歌合に　寂蓮法師

154 おもひたつとりは古巢もたのむらむ馴れぬる花のあとの夕暮

155 散りにけり哀れうらみの誰なれば花のあととふ春のやまかぜ

權中納公經

156 はるふかく尋ねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

157 初瀨山うつろふはなに春くれてまがひし雲ぞみねにのこれる

藤原家隆朝臣

158 よしの川きしの山吹さきにけり嶺のさくらは散り果てぬらむ

皇太后宮大夫俊成

148 故郷の花のさかりは過ぎぬれどおもかげ去らぬはるの空かな

百首の歌の中に　　式子内親王

149 花はちりそのいろとなくながむればむなしき空に春雨ぞふる

小野宮のおほきおほいまうちぎみ月輪寺に花見侍りける日よめる　　清原元輔

150 たがためにあすは殘らむ山櫻こぼれてにほへ今日のかたみに

曲水の宴をよめる　　中納言家持

151 から人の舟をうかべて遊ぶてふ今日ぞわがせこ花かつらせよ

紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふことをよみ侍りける　　坂上是則

152 花流す瀬をも見るべき三日月のわれて入りぬる山のをちかた

雲林院の櫻見にまかりけるに皆散りはてて僅に

142 ながむべきのこりの春をかぞふれば花とともにも散る涙かな
花の歌とてよめる　殷富門院大輔
143 花もまたわかれむ春は思ひ出でよ咲き散るたびの心つくしを
千五百番歌合に　左近中將良平
144 ちる花のわすれがたみの峯の雲そをだにのこせはるの山かぜ
落花といふことを　藤原雅經
145 花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春のやま風
題しらず　後白河院御歌
146 をしめども散りはてぬればさくら花今は梢をながむばかりぞ
殘春の心を　攝政太政大臣
147 よし野山はなのふるさとあと絶えてむなしき枝に春風ぞふく
題しらず　大納言經信

ける　　　　式子内親王

137 八重にほふ軒端のさくら移ろひぬ風よりさきにとふ人もがな

かへし　　　　惟明親王

138 つらきかなうつろふまでに八重櫻とへともいはで過ぐる心は

五十首の歌奉りし時　　　　藤原家隆朝臣

139 さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつれなき峯のはるかぜ

題しらず　　　　皇太后宮大夫俊成女

140 恨みずやうき世を花の厭ひつつ誘ふ風あらばと思ひけるをば

後徳大寺左大臣

141 はかなさを外にもいはじ櫻花さきては散りぬあはれ世のなか

入道前關白太政大臣の家に百首の歌よませ侍り
ける時　　　　俊惠法師

34 35 36 37 38

132 散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯のしらくも
最勝四天王院の障子に吉野山かきたる所　太上天皇

133 みよし野のたかねの櫻ちりにけりあらしも白き春のあけぼの
千五百番歌合に　藤原定家朝臣

134 櫻色の庭のはるかぜあともなし問はばぞ人のゆきとだに見む
ひととせ忍びて大内の花見にまかりて侍りしに
庭に散りて侍りし花を硯のふたに入れて攝政の
許に遣し侍りし　太上天皇

135 今日だにも庭を盛とうつる花きえずはありとも雪かとも見よ
かへし　攝政太政大臣

136 さそはれぬ人のためとや殘りけむ明日よりさきの花のしら雪
家の八重櫻を折らせて惟明親王の許につかはし

126　ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ

越前

127　山ざとのにはよりほかの道もがな花ちりぬやと人もこそとへ

五十首の歌奉りし中に湖上花を　宮内卿

128　花さそふ比良の山風ふきにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで（イ見えぬ）

關路花を

129　あふ坂や木ずゑの花を吹くからにあらしぞかすむせきの杉村

百首の歌奉りし時春の歌　二條院讃岐

130　山たかみ峯のあらしにちる花の月にあまぎるあけがたのそら

百首の歌めしたる時春の歌　崇德院御製

131　やま高み岩根の櫻ちるときはあまのはごろも撫づるとぞ見る

春日社の歌合とて人々歌よみ侍りけるに　刑部卿頼輔

22 120 雁がねの歸る羽風やさそふらむ過ぎ行くみねの花ものこらぬ

百首の歌めしし時春の歌　源　具　親

23 121 ときしもあれたのむの雁のわかれさへ花ちる頃のみ吉野の里

見山花といへる心を　大納言經信

24 122 山ふかみ杉のむらだち見えぬまでをのへの風に花の散るかな

堀河院の御時百首の歌奉りけるに花の歌　大納言師賴

25 123 木のもとの苔の緣もみえぬまで八重ちりしける山ざくらかな

花の十首の歌よみ侍りけるに　左京大夫顯輔

26 124 麓までをのへの櫻ちり來ずばたなびくくもと見てや過ぎまし

花落客稀といふことを　刑部卿範兼

27 125 花ちればとふ人稀になりはてていとひし風のおとのみぞする

題しらず　西行法師

攝政太政大臣の家に五首の歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

114 またや見むかた野のみのの櫻がり花の雪ちるはるのあけぼの

花の歌よみ侍りけるに　祝部成仲

115 散り散らずおぼつかなきは春霞たつたの山のさくらなりけり

山里にまかりてよみ侍りける　能因法師

116 山里（寺イ）のはるの夕ぐれ來て見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける

題しらず　惠慶法師

117 櫻ちる春の山邊はうかりけり世をのがれにとこしかひもなく

花見侍りける人にさそはれて讀みける　康資王母

118 やまざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

題しらず　源重之

119 はるさめのそぼ降る空のをやみせずおつる涙に花ぞ散りける

108 わが宿のものなりながら櫻花ちるをばえこそとどめざりけれ　貫之

寛平の御時きさいの宮の歌合に　讀人しらず

109 かすみたつ春の山邊にさくらばなあかず散るとや鶯のなく

題しらず　赤人

110 はるさめはいたくなふりそ櫻花まだ見ぬ人にちらまくも惜し

貫之

111 花の香に衣はふかくなりにけり木のしたかげの風のまにまに

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

112 風かよふ寢ざめの袖の花の香にかをるまくらの春の夜のゆめ

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　藤原家隆朝臣

113 この程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふそでは花の香ぞする

りける　　京極前關白太政大臣

102 しら雲のたなびくやまの八重櫻いづれを花と行きて折らまし

祐子内親王の家にて人々花の歌よみ侍りけるに　權大納言長家

103 花のいろにあまぎる霞立ちまよひ空さへにほふ山ざくらかな

題しらず　山邊赤人

104 百敷のおほみや人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ

在原業平朝臣

105 花にあかぬ歎はいつもせしかども今日の今夜に似る時はなし

凡河内躬恒

106 寢も安くねられざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ

伊勢

107 山ざくら散りてみ雪にまがひなばいづれか花と春に問はなむ

新古今和歌集　巻第二

春歌下

釋阿和歌所にて九十の賀し侍りしをり屏風に山に櫻咲きたる所を

太上天皇

99 櫻咲くとほやま鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に春の歌

皇太后宮大夫俊成

100 いく年のはるに心をつくし來ぬあはれとおもへみよし野の花

百首の歌に

式子内親王

101 はかなくて過ぎにしかたを數ふれば花に物思ふ春ぞへにける

内大臣に侍りける時望山花といへる心をよみ侍

94 尋ね來て花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月

故鄉花といへる心を　前大僧正慈圓

95 ちり散らず人もたづねぬふるさとの露けき花に春かぜぞ吹く

千五百番歌合に　右衞門督通具

96 いそのかみふる野の櫻たが植ゑて春は忘れぬかたみなるらむ

正三位秀能

97 花ぞ見るみちの芝草ふみわけてよし野の宮のはるのあけぼの

藤原有家朝臣

98 朝日影にほへる山のさくらばなつれなく消えぬ雪かとぞ見る

88 石の上ふるきみやこを來てみれば昔かざししはな咲きにけり

源公忠朝臣

89 春にのみ年はあらなむ荒小田をかへすがへすも花を見るべく

八重櫻を折りて人の遣して侍りければ

道命法師

90 白雲のたつたの山の八重ざくらいづれを花とわきて折りけむ

百首の歌奉りし時

藤原定家朝臣

91 しら雲の春はかさねてたつた山をぐらのみねに花にほふらし

題しらず

藤原家衡朝臣

92 吉野山はなやさかりに匂ふらむふるさと去らぬ峯のしらくも

和歌所の歌合に羇旅花といふことを

藤原雅經

93 岩根ふみかさなる山を分けすてて花もいくへのあとのしら雲

五十首の歌奉りし時

百首の歌奉りし時　式子内親王

いま櫻咲きぬと見えてうすぐもり春に霞める世のけしきかな

題しらず　讀人しらず

ふして思ひ起きてながむる春雨にはなの下紐いかに解くらむ

中納言家持

行かむ人こむひとしのべ春がすみたつたの山のはつざくら花

花の歌とてよみ侍りける　西行法師

よしの山去年のしをりの道かへてまだみぬ方の花をたづねむ

和歌所にて歌つかうまつりしに春の歌とてよめる　寂蓮法師

かつらぎや高間のさくら咲きにけり立田のおくにかかる白雲

題しらず　讀人しらず

77荒小田の去年の古根のふるよもぎ今は春べとひこばえにけり
壬生忠見

78やかずとも草は萠えなむ春日野をただ春の日に任せたらなむ
西行法師

79よしの山さくらが枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな
白河院鳥羽におはしましける時人々山家待花と
いへる心をよみ侍りけるに
藤原隆時朝臣

80櫻花さかばまづ見むとおもふまに日かず經にけりはるの山里
亭子院の歌合に
紀貫之

81わが心春の山邊にあくがれてながながし日を今日もくらしつ
攝政太政大臣家の百首の歌合に野遊の心を
藤原家隆朝臣

82おもふどちそこともしらず行き暮れぬ花のやどかせのべの鶯

71 嵐ふく岸のやなぎのいなむしろ織りしく波にまかせてぞ見る

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹といふことを　權中納言公經

72 たか瀬さすむつだのよどの柳原みどりもふかく霞むはるかな

百首の歌よみ侍りける時春の歌とてよめる　殷富門院大輔

73 はるかぜの霞ふき解くたえまより亂れてなびくあを柳のいと

千五百番歌合に春の歌　藤原雅經

74 しら雲のたえまに靡くあをやぎの葛城やまにはる風ぞ吹く

藤原有家朝臣

75 青やぎのいとに玉ぬくしら露のしらず幾世のはるか經ぬらむ

宮内卿

76 薄くこき野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ

題しらず　曾禰好忠

65 水の面にあやおりみだる春雨や山のみどりをなべて染むらむ

百首の歌奉りしとき　攝政太政大臣

66 ときはなる山の岩根にむすこけの染めぬみどりに春雨ぞふる

清輔朝臣の許にて雨中苗代といふことをよめる　勝命法師

67 あめ降れば小田のますらを暇あれや苗代みづを空にまかせて

延喜の御時御屏風に　凡河内躬恒

68 春雨のふりそめしより青柳のいとのみどりぞ色まさりける

題しらず　太宰大貳高遠

69 うちなびき春は來にけり青柳のかげふむみちに人のやすらふ

輔仁親王

70 みよし野のおほ川のべのふる柳かげこそ見えね春めきにけり

百首の歌の中に　崇德院御製

59 聞くひとぞ涙は落つるかへる雁なきて行くなるあけぼのの空

題しらず　讀人しらず

60 故郷にかへるかりがねさ夜更けて雲路にまよふ聲きこゆなり

歸雁を　攝政太政大臣

61 わするなよたのむの澤を立つかりも稻葉の風の秋のゆふぐれ

百首の歌奉りしとき

62 歸る雁いまはのこころありあけに月と花との名こそ惜しけれ

守覺法親王の五十首の歌に　藤原定家朝臣

63 霜まよふそらにしをれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞふる

閑中春雨といふことを　大僧正行慶

64 つくづくと春のながめの淋しきはしのぶにつたふのきの玉水

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた　伊勢

よみ侍りける　大江千里

55 照りもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

祐子内親王藤壺にすみ侍りけるに女房うへ人などさるべきかぎりものがたりして春秋の哀いづれにか心ひくなど爭ひ侍りけるに人々おほく秋に心をよせ侍りければ　菅原孝標女

56 あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月

百首の歌奉りしとき　源具親

57 難波がたかすまぬ浪もかすみけりうつるも曇るおぼろ月夜に

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　寂蓮法師

58 いまはとてたのむの雁もうちわびぬ朧月夜のあけぼののそら

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて遣しける　皇太后宮大夫俊成

二月雪落衣といふことをよみ侍りける　康資王母

50 梅ちらす風もこえてや吹きつらむかをれる雪の袖にみだるる

題しらず　西行法師

51 とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人は折にこそよれ

百首の歌奉りしに春の歌　式子内親王

52 ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅はわれをわするな

土御門内大臣の家に梅香留袖といふことをよみ侍りける　藤原有家朝臣

53 散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖にはる風の吹く

題しらず　八條院高倉

54 獨のみながめて散りぬ梅のはな知るばかりなる人は訪ひこで

文集嘉陵春夜の詩に不明不暗朧々月といへることを

百首の歌奉りしとき　藤原定家朝臣

44 梅の花にほひをうつす袖のうへにのきもる月の影ぞあらそふ　藤原家隆朝臣

45 うめが香にむかしをとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる

千五百番歌合に　右衞門督通具

46 うめの花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはばや　皇太后宮大夫俊成女

47 うめの花あかぬ色香もむかしにて同じかたみの春の夜のつき

梅花にそへて大貳三位につかはしける　權中納言定頼

48 來ぬ人によそへて見つる梅の花散りなむ後のなぐさめぞなき

かへし　大貳三位

49 春ごとに心をしむる花の枝に誰がなほざりのそでか觸れつる

38 はるの夜のゆめのうき橋とだえして峯にわかるる横雲のそら

きさらぎまで梅の花咲き侍らざりける年よみ侍りける　中務

39 知るらめや霞のそらをながめつつ花もにほはぬ春をなげくと

守覺法親王の家の五十首の歌に　藤原定家朝臣

40 おほぞらは梅のにほひに霞みつつ曇りもはてぬ春の夜のつき

題しらず　宇治前關白太政大臣

41 折られけり紅にほふ梅のはな今朝しろたへにゆきは降れれど

垣ねの梅をよみ侍りける　藤原敦家朝臣

42 あるじをば誰ともわかず春はただ垣ねのうめを尋ねてぞ見る

梅花遠薫といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

43 心あらば問はましものを梅が香にたが里よりか匂ひ來つらむ

33 あまのはら富士の煙のはるのいろの霞になびく明ぼののそら

崇徳院に百首の歌奉りけるとき　藤原清輔朝臣

34 あさがすみ深くみゆるや煙たつむろの八島のわたりなるらむ

晩霞といふことをよめる　後徳大寺左大臣

35 なごのうみの霞の間よりながむれば入日をあらふおきつ白浪

をのこども詩を作りて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを　太上天皇

36 見わたせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に春曙といふ心をよみ侍りける　藤原家隆朝臣

37 かすみ立つすゑの松山ほのぼのと浪にはなるるよこぐもの空

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

27 降りつみし高嶺のみゆき解けにけり淸瀧川のみづの白なみ
源　重之

28 梅が枝にものうき程にちるゆきを花ともいはじ春の名だてに
山邊赤人

29 あづさ弓はる山ちかく家居してたえず聞きつるうぐひすの聲
讀人しらず

30 うめが枝に啼きてうつろふ鶯のはねしろ妙にあわゆきぞ降る
百首の歌奉りしとき
惟明親王

31 鶯のなみだのつららうち解けてふるすながらや春を知るらむ
題しらず
志貴皇子

32 岩そゝぐたるひの上の早蕨（さわらび）の萠え出づる春になりにけるかな
百首の歌奉りしとき
前大僧正慈圓

22いづれをか花とはわかむふる郷のかすがの原にまだ消えぬ雪　凡河内躬恒

家の百首の歌合に餘寒の心を

23空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもるはるの夜の月　攝政太政大臣

和歌所にて春山月といふ心をよめる

24やまふかみ猶かげさむし春の月そらかきくもり雪は降りつつ　越前

詩を作らせて歌に合せ侍りしに水鄕春望といふことを

25みしま江や霜もまだひぬ葦の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く　左衞門督通光

26夕月夜しほみちくらし難波江の葦のわか葉に越ゆるしらなみ　藤原秀能

春の歌とて　西行法師

16 さざ浪や志賀の濱松ふりにけり誰が世に曳ける子日なるらむ

　百首の歌奉りしとき　藤原家隆朝臣

17 谷川のうち出づる波も聲立てつうぐひすさそへ春のやまかぜ

　和歌所にて關路鶯といふことを　太上天皇

18 鶯の鳴けどもいまだ降るゆきに杉の葉しろき(しイ)あふさかの山(關イ)

　堀河院に百首の歌奉りける時殘雪の心をよみ侍りける　藤原仲實朝臣

19 はるきては花とも見よとかた岡の松のうは葉にあわ雪ぞふる

　題しらず　中納言家持

20 まきもく(もイ)の檜原のいまだ曇らねば小松が原にあわゆきぞ降る

　讀人しらず

21 いまさらに雪降らめやも陽炎(かげろふ)のもゆる春日となりにしものを

10 春日野の下もえわたる草の上につれなく見ゆる春のあわゆき

題しらず　　山邊赤人

11 あすからは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつつ

天暦の御時屛風の歌　　壬生忠見

12 春日野の草はみどりになりにけり若菜つまむと誰かしめけむ

崇德院に百首の歌奉りける時春の歌　　前參議教長

13 若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野のとぶひの野邊の雪のむらぎえ

延喜の御時屛風に　　紀貫之

14 ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみに摘める若菜なりけり

述懷百首の歌よみ侍りけるに若菜　　皇太后宮大夫俊成

15 澤に生ふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社によみて奉りける子日の歌

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首の
歌よませ侍りけるに立春の心を
皇太后宮大夫俊成

5今日といへば唐(もろこし)までも行く春をみやこにのみと思ひけるかな

題しらず
俊惠法師

6春といへば霞みにけりなきのふまで波間に見えしあはぢ島山

西行法師

7岩間とぢし氷もけさは解けそめて苔のした水みちもとむらむ

讀人しらず

8かぜまぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は來にけり

9時はいま春になりぬとみ雪降るとほき山邊にかすみたなびく

堀河院の御時百首の歌奉りけるに殘の雪の心を
よみ侍りける
權中納言國信

新古今和歌集 卷第一

春歌上

春立つ心をよみ侍りける　　攝政太政大臣

1 み吉野は山もかすみてしら雪のふりにし里にはるは來にけり

春の初のうた　　太上天皇

2 ほのぼのと春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたなびく

百首の歌たてまつりし時春の歌　　式子内親王

3 山ふかみはるともしらぬ松の戸にたえだえかかるゆきの玉水

五十首の歌奉りし時　　宮内卿

4 かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見えね春は來にけり

し。時に元久二年三月廿六日になむしるしをはりぬる。をいやしみ、みみをたふとぶあまり、石の上ふるき跡を恥づといへども、ながれをくみて源をたづぬるゆゑに、とみの緒川の絶えせぬ道をおこしつれば、露霜はあらたまるとも、松吹く風のちりうせず、春秋はめぐるとも、空ゆく月の雲なくして、此の時に逢へらむものはこれを喜び、この道を仰がむものは今を忍ばざらめかも。

移り事隔たりて、今の人知ることかたし。延喜の聖の御代には、四人に勅して、古今集を撰ばしめ、天暦のかしこき帝は、五人におほせて、後撰集を集めしめ給へり。其ののち拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載等の集は、みな一人これをうけ給はれるゆゑに、聞きもらし、見およばざるところもあるべし。よりて古今後撰の跡を改めず、五人の輩を定めて、しるし奉らしむるなり。その上、みづから定めみづからみがけることは、遠くもろこしの文の道をたづぬれば、濱千鳥の跡ありといへども、吾が國やまと言の葉の始りてのち、呉竹の世々に、かかる例なむなかりける。このうち、みづからの歌を載せたること、ふるきたぐひ(あれど、)十首には過ぎざるべし。しかるを、今かれこれえらべるところ、三十首に集れり。これみな、人の目立つべきいろもなく、心とどむべきふしもありがたき故に、かへりていづれとわきがたければ、もりのくちばかずつもり、みぎはの藻屑かき捨てずなりぬることは、道にふけるおもひふかくして、後のあざけりをかへりみざるなるべ

知り、末の露もとの雫によそへて、人の世を悟り、玉鉾の道の邊に別を慕ひ、あまざかる鄙の長路に都をおもひ、たかまの山の雲居のよそなる人を戀ひ、ながらの橋の浪に朽ちぬる名ををしみても、こころうちにうごき、言葉外にあらはれずといふことなし。況んや、住吉の神は、かたそぎの言葉を殘し、傳教大師は、我立つそまの思ひを陳べ給へり。かくの如き、しらぬ昔の人の心をもあらはし、ゆきて見ぬさかひの外の事をも知るはこの道ならし。抑、むかしはいつたびゆづりし跡を尋ねて、天日嗣の位にそなはり、今はやすみしる名をのがれて、はこやの山にすみかをしめたりといへども、すべらぎは怠る道をまもり、星の位はまつりごとをたすけし契をわすれずして、天の下しげきことわざ、雲のうへのいにしへにも變らざりければ、萬の民、春日野の草の靡かぬ方なく、四方の海、秋津島の月しづかに澄みて、和歌の浦の跡をたづね、敷島の道をもてあそびつつ、この集をえらびて、ながき世につたへむとなり。かの萬葉集は歌のみなもとなり。時

おほせて、昔今ときを別たず、高き賤しき人をきらはず、目に見えぬ神佛のことの葉も、烏羽玉の夢に傳へたることまで、廣く求め普く集めしむ。おの〳〵撰びたてまつれるところ、夏引の糸の一筋ならず、夕の雲のおもひ定めがたきゆゑに、みどりのほら花かうばしきあした、玉のみぎり風すずしきゆふべ、難波津のながれをくみて、澄み濁れるを定め、淺香山の跡を尋ねて、深き淺きをわかてり。萬葉集に入れる歌はこれを除かず。古今よりこのかた、七代の集にいれる歌をばこれをのすることなし。但し、詞の園に遊び、筆の海を汲みても、空とぶ鳥の網をもれ、水に住む魚の釣をのがれたるたぐひ、昔もなきにあらざれば、今もまた知らざる所なり。すべてあつめたる歌、二ちぢ二十卷、名づけて新古今和歌集といふ。春霞立田の山にはつはなを忍ぶより、夏は妻戀する神なびの時鳥、秋は風に散る葛城の紅葉、冬は白妙の富士の高嶺に雪つもる年のくれまで、みなをりにふれたるなさけなるべし。しかのみならず、高き屋に遠きを望みて、民の時を

新古今和歌集序

やまと歌は、むかし天地ひらけはじめて、人のしわざいまださだまらざりし時、葦原の中津國のことの葉として、稻田姫素鵞のさとよりぞつたはれりける。しかありしよりこのかた、その道さかりに起り、そのながれ今に絶ゆる事なくして、色にふけり心をのぶるなかだちとし、世ををさめ民をやはらぐる道とせり。かかりければ、代々の帝もこれを捨て給はず。えらび置かれたる集ども、家々のもてあそび物として、言の葉の花、殘れる木のもとかたく、思ひの露、もれたる草がくれもあるべからず。しかはあれども、伊勢の海清き渚の玉は、拾ふとも盡くる事なく、いづみの杣しげき宮木は、引くともたゆべからず。物皆かくの如し。歌の道また同じかるべし。これによりて右衛門督源朝臣道具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中將藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經等に

者不載當代之　御製。自後撰而初加其時之天章。各考一部不滿十篇。而今所入之自詠。已餘三十首。六義若相兼一兩雖可足。依無風骨之絶妙。還有露詞之多加。偏以耽道之思。不顧多情之眼。凡厥取捨者。嘉尙之餘。特運沖襟。伏羲基皇德。而四十萬年。異域自雖觀聖造之書史焉。　神武開帝功而八十二代。當朝未聽叡策之撰集矣。定知天下之都人士女。謳歌斯道之遇逢矣。不獨記仙洞無何之鄕有嘲風哢月之興。亦欲呈皇家元久之歲有溫故知新之心。修撰之趣。不在玆乎。于時聖曆乙丑。王春三月云爾。

品而雲布。綜緝之致。蓋云備矣。伏惟。來自代邸。而踐
天子之位。謝於漢宮。而追汾陽之蹤。
今上陛下之嚴親也。雖無帝道之諮詢。日域　朝廷之本主也。爭不賞我國之習俗。
方今荃宰合體。華夷詠仁。風化之樂萬春。春日野之草悉靡。月宴之契千秋。秋津洲之
塵惟靜。誠膺無爲有截之時。可頤染毫採牋之志。故撰此一集。永欲傳百王。彼上古之
萬葉集者。蓋是倭歌之源也。編次之起。因准之儀。星序惟邈。煙鬱難披。延喜有古今集。
四人含綸命而成之。天曆有後撰集。五人奉絲言而成之。其後有拾遺後拾遺金葉詞
花千載等集。雖出於
聖王數代之勅。殊恨爲撰者一身之最。因玆訪延喜天曆二朝之遺美。定法河渉虛五
輩之英豪。排神仙之居。展刊修之席而已。斯集之爲體也。先抽萬葉集之中。更拾七代
集之外。深索而微長無遺。廣求而片善必擧、但雖張網於山野。微禽自逃。雖連筌於江
湖。小鮮偸漏。誠當視聽之不達。定有篇章之猶遺。今只隨採得。且所勒終也。抑於古今

新古今和歌集序

夫和歌者。群德之祖。百福之宗也。玄象天成。五際六情之義未著。素鵞地靜。三十一字之詠甫興。爾來源流寔繁。長短雖異。或舒下情而達聞。或宣上德而致化。或屬遊宴而書懷。或採艷色而寄言。誠是理世撫民之鴻徽。賞心樂事之龜鑑者也。是以　聖代明時。集而錄之。各窮精微。何以漏脫。然猶崐嶺之玉。採之有餘。鄧林之材。伐之無盡。物既如此。歌亦宜然。仍詔參議右衞門督源朝臣通具大藏卿藤原朝臣有家左近衞權中將藤原朝臣定家前上總介藤原朝臣家隆左近衞權少將藤原朝臣雅經等。不擇貴賤高下。令摭錦句玉章。神明之詞。佛陀之作。爲表希夷雜而同隷。始於曩昔。迄于當時。彼此總編各俾呈進。每至玄圃花芳之朝。璅砌風涼之夕。斟難波津之遺流。尋淺香山之芳躅。式吟式詠。拔犀象之牙角。無黨無偏。採翡翠之羽毛。裁成而得二千首。類聚而爲二十卷。名曰新古今和歌集矣。時令節物之篇。屬四序而星羅。衆作雜詠之什。並群

新葉和歌集目錄

新古今和歌集目錄

する所は、元弘以降に於ける南朝君臣の吟詠に係り、悲壯慷慨の氣詞句の間に流露するもの、往々にして之あり。動もすれば感情文字の遊戲に流れんとする我歌學史上に在りては、特に以て珍とするに足らん。

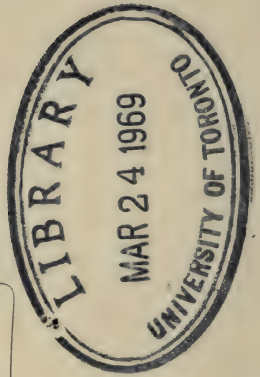
今本書を出版するに當り、新古今集は普通刊本を原として、八代集抄を照合し、尙異本の傍注をも存して研究者の參考に資し、新葉集は嘉永庚戌(三年)の奥書ある板本を原として、村上忠順の頭注本を照合し何れも送假名、假名遣を整へて讀誦に便せり。

明治四十五年六月

校訂者　石川　核

緒言

新古今和歌集二十卷は、後鳥羽院の勅により、藤原定家、藤原家隆、藤原有家、藤原雅經、藤原通具の五人之を撰し、土御門天皇の元久二年を以て成れり。古來古今和歌集と共に勅撰集中の雙璧と稱せらるれども、古今集が內容技巧ともに備はり、殊に自然なる感情の發露を尙べるに反し、新古今集は寧ろ其技巧の方面に多大の發達を遂げ、歌風優婉、詞句の淸新巧緻を極めたり。而して本集が、一方に於て、我が歌學史上一新生面を開けるものとして、後世歌詠の典範と仰がれたると同時に、其技巧過重の結果、詩歌としての內容的生命に遠ざかるの弊を生じたるも亦爭ふべからず。

新葉和歌集二十卷は宗良親王の撰にして、弘和元年後龜山天皇に獻じ、准勅撰の詔を忝うせるもの。八代集以後に於て最も注目に値する撰集の一也。其蒐載

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

新古今和歌集　全

新葉和歌集　全